

と
こ
は
と
の
は

第 33 号
2 0 2 0

常葉大学外国語学部言語文化研究会

表紙の題字は木宮健二理事長



目次（簡略版）

I	巻頭言 ～ひかり輝け、とこはことのは	1
II	外国語学部共通	3
	1. 教員エッセイ	5
	2. 外国語学部コロキウム	22
	3. 外国語学部文化講演会	23
	4. 特別研究の題目	26
	5. 日本語教員養成課程の活動報告	30
	6. 外国語学習支援センターでの TA および peer support	33
	7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ	37
	8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み	50
	9. [共催] 現職教員向け研修会および研究会	58
III	英米語学科	59
	1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest	61
	2. 高校生対話弁論大会	85
	3. 教員採用試験合格者	87
IV	グローバルコミュニケーション学科	99
	1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)	101
	2. 多言語レシテーション大会	102
	3. キャリア開発	124
	4. 臨地実習	129
	5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み	141
V	各言語圏での活動	157
	1. 英語圏 (長期)	159
	2. 英語圏 (短期)	169
	3. スペイン語圏	196
	4. ポルトガル語圏	206
	5. 中国語圏	213
	6. 韓国語圏	222
	7. 上記 5 言語以外の言語圏	241
VI	卒業生	245
	編集後記	250

目 次

I 巻頭言

ひかり輝け、とこはことのは……………	戸田 裕司……………	1
--------------------	------------	---

II 外国語学部共通

1. 教員エッセイ

1-1. ブラジルの自然主義文学……………	江口 佳子……………	5
1-2. 一言哲也先生との思い出……………	小田 寛人……………	9
1-3. 大学と学園全体の国際化を目指して英語で ホームページを立てることから始めよう……………	佐野 富士子……………	13
1-4. 教員学外活動報告……………	佐野 富士子……………	15
1-5. ひとことでは済まない感謝とお礼……………	良知 恵美子……………	18
1-6. 台湾研究に関して感じたミクロとマクロな動向……………	若松 大祐……………	20

2. 外国語学部コロキウム

2018 年度外国語学部コロキウムの実施報告……………		22
-----------------------------	--	----

3. 外国語学部文化講演会

外国語学部文化講演会……………	若松 大祐……………	23
知ることは学ぶこと……………	伊川 亜祐菜……………	24

4. 特別研究の題目

英米語学科特別研究題目一覧……………		26
グローバルコミュニケーション学科特別研究 共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧……………		28

5. 日本語教員養成課程の活動報告

5-1. 日本語教育実習体験記……………	池谷 果琳……………	30
5-2. 日本語実習を終えて……………	松本 奈々……………	31

6. 外国語学習支援センターでの TA および peer support

6-1. 外国語学習支援センター活動報告……………	濱田 真理……………	33
6-2. 葛藤と成長……………	山崎 あゆみ……………	34
6-3. 外国語学習サポートに携わって……………	砂川 哲哉……………	36

7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

7-1. ラーマン大学合唱団との交流……………	清 ルミ……………	37
7-2. 第 2 回マレーシアラーマン大学合唱団静岡演奏会……………	江藤 秀一……………	38
7-3. Welcome to Tokoha University……………	Hideichi, Eto……………	39
7-4. 文化理解とコミュニケーション……………	砂川 哲哉……………	40
7-5. 再びクレイトン大学生がやって来た！……………	一言 哲也……………	42
7-6. 新しい発見の日々……………	大多和 留奈……………	45
7-7. Try することの大切さ……………	東原 嵯枝……………	47

8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み

8-1. 大学の枠を越えた東アジア研究の交流……………	小柳 直人……………	50
-----------------------------	------------	----

8-2. 遅読のすすめ	荻野 俊輔	54
8-3. 植民地から生まれた現代	若松 大祐	55
8-4. Skills Through Experiences	Mai Watanabe	56
9. [共催] 現職教員向け研修会および研究会		
9-1. 英語教育公開研修会	佐野 富士子	58

Ⅲ 英米語学科

1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

1-1. The 2019 Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest	Aya Motozawa	61
1-2. Every Cloud Has A Silver Lining	Yukari Yagi	62
1-3. Gender Discrimination	Kaho Sagawa	64
1-4. No Pain No Gain	Pirote Meichsel Reyes	65
1-5. You Only Live Once	Chihiro Suzuki	67
1-6. My Motto	Tsuyoshi Suzuki	69
1-7. I am trilingual!	Michiko Kurebayashi	70
1-8. Where is your happiness?	Hayata Yuhara	72
1-9. どんなに困難なときにもよいことは必ずある	八木 友香里	74
1-10. 未来を変える	佐川 花歩	75
1-11. No Pain No Gain	Pirote Meichsel Reyes	77
1-12. 自分を変えたスピーチコンテスト	鈴木 千広	79
1-13. 点	鈴木 剛司	81
1-14. 日本語を学んだ私だから言えること	樽林 美智子	82
1-15. 大きな壁を超えて感じたこと	湯原 隼太	84

2. 高校生対話弁論大会

第 36 回静岡県高等学校英語対話弁論大会報告	85
-------------------------	----

3. 教員採用試験合格者

3-1. 教員採用試験合格体験談	大野 俊	87
3-2. 高校教員になるその日	齊藤 詢弥	88
3-3. スタート地点に立って	寺田 愛利	90
3-4. 常葉大学で夢を叶えたこと	野田 巧	92
3-5. 決意	半田 ひな乃	94
3-6. 自分自身と向き合う	山田 裕子	96

Ⅳ グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

2019 年度海外事情談話会	101
----------------	-----

2. 多言語レシテーション大会

2-1. 第 6 回多言語レシテーション大会の報告	若松 大祐	102
---------------------------	-------	-----

2-2. 詩と語学教育—多言語レシテーション大会の特色と強み	江藤 秀一	106
2-3. コミュニケーション・ツールとしての詩文	戸田 裕司	107
2-4. よりよい大会を作り上げるために	横山 結花	108
2-5. 克己復礼	仲宗根 エイミ	109
2-6. 謙虚かつ食欲に	杉山 滉一	112
2-7. 勇気を出すということ	齋藤 芽衣	113
2-8. 後悔するならやってから	望月 咲良	115
2-9. 3度目の正直	伊川 亜祐菜	116
2-10. 一線を超えて得たもの	林 倅多	118
2-11. 継続は力なり	宮本 智華	120
2-12. 中国語への意識の変化	高橋 南海	122
3. キャリア開発		
3-1. キャリアガイダンス 2019 についての一考察	谷口 茂謙	124
4. 臨地実習		
4-1. 臨地実習の概要	戸田 裕司	129
4-2. 臨地実習 B の概要	清 ルミ	130
4-3. ハワイインターンで見たこと感じたこと	青島 朋輝	130
4-4. 2019 年 3 月・中国福建実地研修の概要	戸田 裕司	132
4-5. 中国を肌で感じる	風岡 花菜	135
5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み		
5-1. 歓迎聆聴：2019 年度公開講演を実施して	若松 大祐	141
5-2. お茶で世界と繋がる	望月 結萌	144
5-3. 多文化共生への道	仲宗根 エイミ	145
5-4. やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu 2019」 ボランティア活動報告	増井 実子	151
5-5. 2 回目のはあとふる Yaizu	伊川 亜祐菜	152
5-6. 裏方の美学—はあとふる Yaizu 2019 実行委員に加わって	大石 健太郎	153
V 各言語圏での活動		
1. 英語圏（長期）		
1-1. The importance of studying abroad	Risa Ikeda	159
1-2. 価値観の変化	中島 摩保	161
1-3. Better ways to study English	Saki Mizuno	163
1-4. 覆された私の価値観	森崎 桃香	165
1-5. Changing Me	Kaoru Warashina	167
2. 英語圏（短期）		
2-1. What I felt in UE	Yoshino Ueda	169
2-2. 有限だからこそ気づける当たり前で大切なこと	松本 双葉	172

2-3. 留学という夢	池田 亜未	175
2-4. ターニングポイント	岩田 彩花	177
2-5. 自分を成長させてくれたカナダ短期留学	大塚 瞳	181
2-6. 目標を実現～自分で掴んだカナダ留学～	鹿内 和咲	182
2-7. ハプニングと学び溢れる留学	鈴木 千広	185
2-8. 留学から帰ってきてからが新しいスタート	鈴木 剛司	188
2-9. 留学を通して出会えた仲間達	増田 茜	189
2-10. 挑戦は一生の財産	森田 実奈	191
3. スペイン語圏		
3-1. 2018 年度春期スペイン語学研修	増井 実子	196
3-2. 絵に込められた思い	長田 萌実	196
3-3. スペイン語学研修で使える！ ～スペイン語集～	2018 年度スペイン語学研修チーム	202
4. ポルトガル語圏		
4-1. 2018 年度 ポルトガル語学研修報告	江口 佳子	206
4-2. リスボンと日本の自転車事情を比較	川村 味奈美	206
4-3. 全日本学生ポルトガル語弁論大会について	江口 佳子	210
4-4. 大きな挑戦に飛び込もう！	横山 結花	211
5. 中国語圏		
5-1. 2019 年度の中国語圏での研修の実施報告	若松 大祐	213
5-2. どのように留学先の人と知り合うのか	小柳 直人	214
5-3. 2020 年中華民国総統選挙	杉山 瑞貴	216
5-4. 台湾台中市立忠明高級中学の高校生との交流会	仲宗根 エイミ	220
6. 韓国語圏		
6-1. 2019 年度韓国語学研修	福島 みのり	222
6-2. 韓国で広がる日流ブーム	鈴木 小麦	222
6-3. 日本で内定を求める韓国人大学生が抱いている不満と悩み	松本 彩香	228
6-4. Now or ever	木村 楓野	231
6-5. 日韓関係と地域活性化について学んだ私の訪韓研修体験記	野崎 杏佳	232
6-6. 日韓学生交流会（第 1 部交流会）報告	福島 みのり	233
6-7. 私達が踏み出す民間交流からの第一歩	石貝 真実	235
6-8. 日韓の歴史問題とこれから	長岡 未都	237
6-9. 私たちにできる日韓交流	三田 風紗	239
7. 上記 5 言語以外の言語圏		
7-1. 第 5 回 GC 学科学学生海外活動報告会	江口 佳子	241
7-2. ベトナム日本語ボランティアを経て	武藤 星奈海	242

VI 卒業生

卒業生の声を聞く	若松 大祐	247
一歩踏み出す	渡邊 美路	248
「はじめて」と駆け抜けた大学時代	齋藤 楓佳	249
編集後記		250

I 卷頭言

巻頭言

ひかり輝け、とこはことのは

外国語学部言語文化研究会長 戸田 裕司

冒頭より私事ではあるが、私が常葉学園大学外国語学部に着任したのは 2012 年 4 月のことであった。グローバルコミュニケーション学科(以下、GC 学科)が大幅なカリキュラム改訂を行い、中国語・中国文化の専門科目が置かれることに伴い、担当教員として採用されたのである。1984 年の外国語学部開設以来スペイン語教育の長い伝統があったとはいえ、この年は、ポルトガル語・韓国語・中国語を加えた“外国語学部の多言語化・多文化化”が始まった年であったといえよう。

着任時に手渡された色々な書類・冊子の中に、前月に発行されたばかりの『Albion』第 25 号もあった。ただ、当時の私の受け取り方としては、自分に関係のある雑誌とは感じていなかった。一見して、英米語学科および(GC 学科旧課程の「国際英語専攻」)の雑誌であることがありありと分かったからである¹。

ただ、当時の桑原陽一学部長は『Albion』を学部全体の雑誌へ脱皮させたいとの意思をお持ちであった。翌年刊行された第 26 号に、①戸田裕司「非『外国語学部的』な語学教員」・②増井実子「スペイン語教員という素人観察者による台北視察報告記」・③谷誠司「韓国視察レポート」が掲載されているのも、学部の多言語化へ対応した誌面を作ろうとの桑原先生のご意向に沿ったものであった。

①は私の着任挨拶のような駄文であるが、いま改めて見ると、当時の私が自分に執筆を命じられた意味を必ずしも理解していなかったことが分かる。②・③は GC 学科新課程に対応した新たな海外語学研修先を決めるために行った、台北視察とソウル視察の実施報告である。桑原先生は、彼お好みの偽悪的な言い回しで、

¹ スペイン語学科(および GC 学科スペイン・ラテン・アメリカ専攻)で発行されていた『Retama』をも含む、外国語学部の雑誌刊行の沿革については、本誌第 32 号(2019 年 3 月)に掲載されている若松大祐「『とこはことのは』を開く」に具体的に述べられているので、ここでは繰り返さない。

「大学の金で海外に行った人間は『Albion』に書け」などとおっしゃっていたが、その意図していたところは明らかであろう。

その後、年を追って『Albion』の記事は、言語面でも、地域面でも、多彩の度を加えてきており、今や外国語学部教育活動と学生の活躍を総括する雑誌にまで成長している。その発展の道のりの中で、『Albion』という、あまりに英国的な誌名に違和感が感じられるようになったことも、理の当然と言えよう。

2018 年 4 月の草薙キャンパス開学・外国語学部の草薙移転直前に刊行された本誌が、『とこはことのは』と改題されたことは、外国語学部が、英語・スペイン語の伝統と実績にばかりに頼るのではなく、多言語化・多文化化した地域社会の中で、より存在感のある教学を追求しはじめたことの現れであったとも言えよう。

多言語化・多文化化の中で、学生が英語・英米文化を学ぶ意義も学部開設時点とは変わってきているように思う。草薙移転＝『とこはことのは』への誌名変更の前後する時期に、オセアニア地域研究を専攻する一言哲也先生が、外国語学部の舵取りの任に当たったことは、象徴的・運命的なことであったように私には思われてならない。英語を学ぶ重要性は昔も今も変わらない。むしろ、その重要性を増している。しかし、「本場の英語」・「本当の英語」を学ぶことに加えて、イギリスやアメリカ合衆国以外での英語や英語文化の在り方、多民族化している地域社会での英語の役割など、英語と英語を教えることの可能性にはかつてとは違った面白みがある。

その面白い時期に一言先生がご定年を迎えることは残念でならないが、先生が教育の中で追求されていた、環太平洋における英語・英語圏文化を考える、グローバルな地域社会を学び・発信するという実践が、とこはの卒業生たちが言語や異文化理解を通じて、地域社会でひかり輝く道筋であることは、間違いのないであろう。一言先生には、本当は気が進まぬままに長年担っておいでであったであろう責任を軽やかに投げ捨てて、ご自身が楽しいと感ずることだけ、かかわっていただけだと思っている。

Ⅱ 外国語学部共通

1. 教員エッセイ

ブラジルの自然主義文学

江口 佳子

世界的観光地として知られるリオデジャネイロは、1863 年から 1960 年までブラジルの首都であった。ナポレオン戦争によるリスボン陥落直前に、ポルトガル王家は 1808 年に植民地ブラジルのリオデジャネイロへ移った。リオデジャネイロの都市整備は急速に行われ、16 世紀にポルトガルがブラジルを植民地化して以来、初めて、国立銀行、国立図書館、王立印刷所等が設立される。そして、1888 年に奴隷制度が廃止され、1889 年にポルトガル王家のペドロ二世の統治による帝政が終焉して、共和政となる。第一共和政時代（1889 年～1930 年）に欧米諸国を模した近代化を推し進めるが、それを可能にしたのは、19 世紀末から 20 世紀初めに、隆盛したコーヒー産業によるブラジルの経済発展であった。

ブラジル文学は 1822 年の独立以降のロマン主義期（1838 年～1881 年）から始まるが（2017 年度『とこはことのは』の拙稿「イラセマは飛んだ」を参照）、この期の作品は、ブラジルの政治的・文化的に独立を模索するものであり、旧大陸にはない、社会の新しさ、自然美を称賛する作品が書かれていた。しかし、19 世紀末になると、社会の現実に目が向けられるようになる。フランスで、作家エミール・ゾラ（1840-1902）が、決定論や進化論などの近代科学を人間行動の根拠とし、資本主義の弊害を非難する作品を書いて、社会を観察する「自然主義文学」を提唱した。ブラジルは文化的にフランスの影響を強く受けていたため、自然主義文学の理念がすぐに入ってきた。

アルイージオ・アゼヴェード（Aluísio Azevedo, 1857-1914）はゾラの影響を強く受け、ブラジルの帝政時代から共和政時代への転換期に批判的な眼差しで作品を書いた作家である。デビュー作の *Mulato*（『ムラート』、1881 年）はブラジル文学の最初の自然主義文学と評されている。ムラートは白人と黒人の混血であるが、この作品では、進化論のブラジル社会への浸透が人種差別を引き起こし、人種が社会的地位を規定していることを批判的に描いている。アゼヴェードはこの小説を出身地のサン・ルイス（ブラジル北東部のマラニョン州の州都）で発表

したが、保守的な地域であったため、文壇で受け入れられず、その後、リオデジャネイロへ移り、小説を書いたり、政治新聞で挿絵を描いたりした。

アゼヴェードの作品で『ムラート』とともに評価されている作品が *Cortiço* (『長屋』、1890) である。ポルトガル語 “cortiço” (コルチッソ) は「貧困層の集合住宅」を意味するが、このタイトルが示すように、この作品では、“個人” よりも“集団”の描写に焦点が当てられている。

〔引用 1〕

Eram cinco horas da manhã e o cortiço acordava, abrindo não os olhos, mas a sua infinidade de portas e janelas alinhadas. […]

Entretanto, das portas surgiam cabeças congestionadas de sono; ouviam-se amplos bocejos, fortes como o marulhar das ondas; pigarreava-se grosso por toda a parte; começavam as xícaras a tilintar; o cheiro quente de café aquecia, suplantando todos os outros; trocavam-se de janela para janela as primeiras palavras, os bons-dias ; reatavam-se conversas interrompidas à noite. (p.35)

朝の 5 時に、長屋は目ではなく、無数に並んだドアや窓を開けて、目覚めた。
〔…〕

すると、ドアというドアから、眠気で充血した目をした頭が現れた。長い欠伸が聞こえてきたが、波が轟くような激しさで、また、あらゆるところで、ひどい痰を吐く音がしていた。そして、カップのカチャカチャする音が始まり、コーヒーの香りがすべてのものに勝るほど熱気を帯びていた。窓から窓へ、おはよう、という最初の言葉が交わされた。夜に中断していたおしゃべりの再開であった。

長屋の早朝の様子である。長屋は擬人化され、有機体のように生き生きとしている。リオデジャネイロの中心街から少し離れた周辺地域にある長屋の住民には、工場労働者（主に混血、黒人、ブラジルに到着したばかりのイタリアやポルトガルからの移民）、食堂の店員、洗濯女、売春婦、マランドロ（定職をもたずに、周囲の恩恵で暮らす人）、カポエイリスタ（武芸のカポエイラをする人）等がいる。奴隷制度廃止で行き場を失い、北東部を始めとする各地域から押し寄せてきた黒

II. 1. 教員エッセイ

人、農業移民としてきたが、農村を去り、工場労働や商売に従事する外国人移民、地方から上京した貧困層等が集まってくるのだ。

〔引用 2〕

Durante dois anos o cortiço prosperou de dia para dia, ganhando força, socando-se de gente. E ao lado o Miranda assustava-se inquieto com aquela exuberância brutal de vida, aterrado defronte daquela floresta implacável que lhe crescia junto da casa, por debaixo das janelas, e cujas raízes, piores e mais grossas do que serpentes, minavam por toda a parte, ameaçando rebentar o chão em torno dela, rachando o solo e abalando tudo. (p.27)

2 年の間に、長屋は活力を得て、人々は殴り合いながら、日に日に増大した。側で見ていたミランダは、そうした生命の粗暴な繁茂に動揺し、手の施しようもない原生林を前にして土に埋められたように、慄いていた。その原生林は、彼の家の近くで成長し、窓の下から、質は悪いが、蛇よりも太い根を張り巡らせ、あらゆる場所に穴を掘り、彼の家の周りの地面を壊し、土地に裂け目を入れ、すべてを揺り動かしていた。

〔引用 2〕はミランダという織物商の娘と結婚した富裕層の視点である。ポルトガルからの移民であるが、ブルジョア階級に上昇して、男爵の称号を獲得することができた。長屋の所有者は、物語の主人公であるジョアン・ホマン (João Romão) である。ジョアンは一文無しのポルトガル人移民であったが、一財を成す野望を抱いていた。初めに、ベルトレーザ (Bertoleza) という逃亡奴隷の黒人女性の金を使って安食堂を経営する。ベルトレーザは奴隷主からの解放を手助けしてやるというジョアンの言葉を信じ、全ての貯金をジョアンに渡す。彼女自身も、白人のジョアンとの婚姻は社会的に昇格できるチャンスだと考えていた。しかし、ジョアンはその金を、彼女を奴隷から解放させるためには使わず、自らの商売に投資する。ベルトレーザを彼の食堂で労働力として搾取する。ジョアンは、ブルジョア階級のミランダをライバル視している。彼は食堂の利益で「長屋」を建て、労働者の家族を安い価格で住まわせる。当初は 3 軒であった貸家は増え続け、しまいには 100 軒近くなる。物語の最後では、長屋は貧困層のためではない中流層のための貸家となる。ジョアンは家主となってミランダの娘との結婚が

許され、子爵の称号まで得る。失望したベルトレーザは、食堂の包丁を使って自死してしまう。

他の登場人物には、移民したばかりの若いポルトガル人夫婦がいる。その夫ジェロニモ (Jerônimo) は、ファド (ポルトガルの伝統的な民謡) や料理にサウダージ (saudade: 郷愁) を持ち続ける誠実で働き者であった。しかし、しだいにブラジルの風習や文化に慣れて、不真面目となり、墮落していく。そして、官能的でミステリアスなムラータ (混血女性) で、洗濯女のヒータ (Rita) に恋をして、駆け落ちをしてしまう。ヒータの夫であったフィルモ (Firmo) は乱暴なカポエイリスタであったが、妻を奪われた復讐に、チンピラ仲間と一緒に長屋に火を放ったために、ジョアンは甚大な被害を受ける。

長屋の住民は互いに助けあいながら日常生活を送り、時には一致団結して工場主や家主に抵抗をする。その一方で、密集した居住地域の貧困が、住民に動物のような本能的で粗野な行動をとらせ、対立、欺瞞、暴力を常態化させる。

『長屋』は、19 世紀末のブラジルで支配者層と被支配者層がどのように形成されたのかを描いている。奴隷制度が廃止し、帝政から共和政へと移行したが、元奴隷や貧困層に対する支援はなく、低賃金の工場労働、日雇いの重労働、非正規の仕事で最低限の生活を送っていた。一方で、支配者層は弱者の労働力を搾取することで、金と権力を手に入れ、社会的ステータスを確立する。アゼヴェードは、奴隷を自由にするだけではブラジルを近代化することはできない、支配者層が不公正を変革しなくては、植民地以来の不平等な社会が継続すると考えていた。

『長屋』には、現代社会のリオデジャネイロのファヴェーラ (貧困地区) が都市の急速な近代化と共に形成された様子が描かれている。百年以上も前のアゼヴェードの作品は、現代の社会問題を捉え、弱者に密着した作家の眼差しが、社会的矛盾を問題提起しており、今なお精彩を放っている。

本作品を最後にアルイージオ・アゼヴェードは経済的な理由から文筆活動を断念し、外交官として、スペイン、イギリス、イタリア、アルゼンチンの他に、日本にも赴任した。

Aluísio Azevedo. *O Cortiço*, São Paulo, Saraiva, 2008

一言哲也先生との思い出

短期大学部 副学長 小田 寛人

『『とこはことのは』に、今年度をもってご退職される一言哲也先生との思い出のエッセイを』というお話を聞き、外国語学部の特任ではないが寄稿させていただくことになった。私と一言先生との付き合いは約30年にもなるが、ちょうど平成の時代と重なり、また私の教員人生の年月とも重なっている。その間、先生から多くのことを学び、思い出となるエピソードは語りつくせないほどあるが、そのいくつかを紹介させていただき、長年お世話になった一言先生への感謝の辞とさせていたきたい。

まず、一言先生と最初に出会ったのは、私が大学を卒業し、静岡県立高校の英語教諭として赴任した1988年（昭和63年）の春、新任教員の「初任者研修」の場であったと記憶している。英語の新米教師が集められた研修会場で、県教育委員会の指導主事であった一言先生にそこで初めてお会いした。先生はおそらく30代前半であったかと思うが、「若くして指導主事になられてすごい方かな」と思いながら、最初の挨拶を聞くことになった。挨拶のはじまりは、（後に何度も耳にすることになるのだが）「私は一言と申します。嘘のようですが本当なんです。『一言』と書いて『ひとこと』と申します。では一言より一言挨拶を…」というものであった。私に限らず、誰もが一瞬で先生のお名前を覚えたことであろう。当時の私にとって指導主事の先生というのは「雲の上の人」のような存在であったが、ハキハキした口調でわかりやすくお話される先生の姿に、何となく自分に似た面を感じ、親近感を抱いたことを覚えている。

同じ年の夏、春野町の「山の村」に全新任教員を集め行われた宿泊研修のことも紹介しておきたい。新任教員が何組かの集団に分かれ、指導主事1名が各組の担任としてつき3日間過ごした研修であったが、最後に各組が自由に何かしらのパフォーマンスを披露することになっていた。面白おかしくいろんなパフォーマンスが演じられる中、上半身裸（男性教員のみ）、短パン、素足という姿で日体大で有名な「エッサッサ」を演じる組があった。そのパフォーマンスは見事であったが、その中に、新任教員と同じ格好で「エッサッサ」を演じている

一言先生の姿を発見し、ビックリするとともに感銘を受けたことを覚えている。指導主事までが一緒になって演じている組はそこだけであり、自ら最前列で「エッサッサ」を演じるとは…。何も言葉で語らないが、指導者自ら率先して行うことの大切さを身をもって教えてくれているようであった。私の高校教師時代に一言先生と直接お会いしたのはほんの数回しかなかったが、教師のあるべき姿、お手本とすべき姿として、その時の先生の姿が私の脳裏に焼き付いたのは確かである。

その後私は、大学院進学を志し、公立高校教員を3年で辞職。常葉大学外国語学部の助手をさせていただきながら母校の大学院に無事合格。休職して2年間大学院で学び、修了後は常葉大学へ戻ってくる予定であったが、いろんな経緯で常葉短大英文科に赴任することとなった。1994年(平成6年)の早春のことである。就任前、まだ東京にいた私の下に、常葉短大から授業シラバスや使用教科書など教務関係の電話連絡があった。電話先の声は聞き覚えのある声。「一言です」—それだけですぐに一言先生のお顔が浮かんだ。「あれ?」と思ったが、先生の方から簡潔に身の上を説明され、「そういうことなんだよ、よろしくね。」と言われた。先生は、私と研修でお会いした翌年、県教育委員会指導主事という立場を離れ、公立高校教員も辞し、海外で数年間日本語教師の仕事をされ、そして日本に戻り常葉短大英文科の専任教員になられていた。私自身も公立高校教員という安定を思い切って捨てたが、一言先生は私以上に捨てるものも大きかったであろうし、「自分のやりたいことのためとはいえ、よくぞ思い切られたな～」と思ったものであった。

その後私は、一言先生と常葉短大英文科教員として共に働くことになるのだが、当時の英文科は菊川校舎にあり、学生も多く活気に満ちていた。専任教員も12名程おり、老若男女のバランスもとれていた。一言先生は、その中で中堅どころのリーダーといったところで、教務課長補佐も兼務され、お忙しい中、授業も研究も、学生指導も、あらゆる仕事を完璧にこなされていた。まさに私にとっては近くにいるお手本の先輩教師であった。英文科がちょうど姉妹校提携先を探していた時期であり、後に、ニュージーランドのウェリントン・ポリテクニクと姉妹校提携が結ばれるが、その立役者はオセアニアに詳しい一言先生であったのは言うまでもない。そんな中、赴任2年目の私が、一言先生とともにニュージーランドへの海外研修に学生を引率することになった。事前指導から事後指導まで一言

Ⅱ. 1. 教員エッセイ

先生が主となって進めていただけたが、ある程度やって見せてくれてから、「今回は小田先生がやってみて」という形で振られることも多かった。私は先生の真似をしつつ、時にそれを自分流にアレンジして実践することで次第に自信をつけていくことができた。近くにいることで一言先生の卓越した指導力、職務遂行能力がどのように発揮されるのかを学ぶことができたことは、私の教員人生における大きな財産となっている。海外においては、一言先生の堪能な英語力が発揮されるのを目の当たりにしたものであった。海外研修最終日のフェアウェルパーティーで引率教員がお礼のスピーチをするのであるが、緊張してしまって2日程前から英語原稿を作り、それをひたすら暗記して臨む私に対し、先生はホテルのメモ帳に話したい内容のキーワードだけ書いて、その場の雰囲気を感じながら即興でスピーチされていたのを見たときは、「さすが、すごいな～。私のスピーチが先でよかった」と思ったものであった。

英文科に入り5年もすると、短大英文科の募集に厳しい風が吹き始め、「今後の英文科をどうしようか」と、科内会議を何度も延長し、菊川の民宿を借りてまで夜通し話し合ったことは今でも忘れない。一言先生は当時英文科主任を務めていたが、科長・主任を中心に英文科が一枚岩になっていた瞬間であった。その話し合いの中から、静岡校舎への移転、「幼児英語」「観光ビジネス」といった新しいコース等の発想が生まれ、2000年（平成12年）に実現。前年度の2.1倍の入学者を確保するというV字回復ぶりを見せた。新コースにおいては、私が「幼児英語コース」を担当し、幼稚園訪問、幼稚園免許の取得など英文科の授業に新たな試みを加えていった。同様に、一言先生は「観光ビジネスコース」を担当され、JAL研修やホテル研修など新たな試みを加えていった。どちらも本来の専門とは違うコース分野を担当したわけで、最初は試行錯誤を繰り返すしかなかったが、1年1年形が整っていくことが面白く、互いに競い合うように、情熱をもってコースの充実を図っていった。一言先生と私で協力して各コースのために動くこともあり、全国英語教育学会で「幼児英語コース」の実践報告を共同発表で行ったり、キャビンアテンダント経験者を専任教員に迎えようと、一緒にJAL本社へ出向いたりもした。発表や交渉がうまくいき、帰りの新幹線で乾杯したことをよく覚えている。2004年（平成16年）から一言先生が英文科長、私が英文科主任として、他科からも良いコンビと評されていたが、ひたすら英文科のことを考え働いてい

た。懐かしい思い出がいろいろとある。

時は過ぎ、2008 年（平成 20 年）の夏に、文部科学省から私のところに教科書調査官にならないかという誘いがあった。長年頑張ってきた英文科、常葉短大、お世話になった常葉学園を去りたくはなかったが、せっかくの要請であり、中央官庁で自分の力を試してみたい、という気持ちも大きく、どうしようかと迷っていた。誰にも相談できずにいたが、同じような経験をし、ともに切磋琢磨してきた一言先生にだけは思い切って相談をしてみた。遅い時間だったと思うが私の研究室でじっくり話を聞いていただけた。そして、「小田さんなら戻ってきたければまた戻ってこられるであろうし、その気があるなら出てみたら。」と背中を押していただいた。おかげで、迷う自分に踏ん切りをつけることができた。先生のお言葉には今でも感謝しかない。

その 6 年後に私は再び常葉短大に戻ってきたが、同時に一言先生は短大を出られ大学の外国語学部に移られてしまった。短大の学生部長としての仕事について、前任者の一言先生からもっと近くでアドバイスをいただきたかったが、今思えば、一言先生が外国語学部にいらっしゃることで、その後の短大英文科と大学外国語学部との交流がスムーズに進むこととなったといえる。先生も私も、何の因果か、教務課長補佐、英文科主任、英文科長、学生部長という同じ役職（と、それに腰痛）を経験してきた。考えてみると、常に先生が私の前を歩いてくださり、先生が切り開いていかれた道を私は楽に歩ませていただいたという感じである。移られた外国語学部では、わずか数年の在職で学科長、学部長を歴任し、学部の先生方から大きな信頼を得ていることから、今さら私の口から先生の素晴らしさは「言わずもがな」である。一言先生は控えめなところがあり、よくこのような感謝の辞を書いたりすると、「恥ずかしいから、やめて！」とおっしゃるかもしれないが、最後に、あえてもう「一言」だけ、お礼を言わせていただきたい。

一言先生、先生から学んだ指導にける情熱をいつまでも失わないように頑張ります。さまざまな面で大変お世話になり、誠にありがとうございました。

大学と学園全体の国際化を目指して 英語でホームページを立てることから始めよう

佐野 富士子

世の中の国際化が急速に進み、市民レベルでの異文化交流も盛んになった今日この頃でさえ、静岡にいと居心地の良さにどっぷりつかってしまい、外へ出向く気力を失ってしまいがちです。しかし、海外の著名な学者による講演会につられて大都会東京へ出かけてみると、学問情報の進化に驚くとともに、町中でも目まぐるしく情報が変化しており、最新の文化に目を見開かれ、様々な外国語が耳に飛び込んできて、国際都市 Tokyo のパワーに圧倒されそうになります。

国際化、グローバル化と呼ばれ、英語も世界共通語 (Lingua Franca) として認識されている今、地方都市にある大学も国際化に迫られているように思います。本大学でも英米語学科の学生を短期、長期留学に送り出したり、クレイトン大学の学生さんの訪問を受けたり、衛星中継を通してオーストラリアの大学の授業を週1回受けたりと、国際交流は様々に行われていますが、さらに、もう一歩も二歩も海外交流を進める時代になっているように思います。20年後、30年後に様々な国からの学生さんを受け入れることができるよう、今から、大学の国際化を進めておく必要があろうかと思えます。

そのためには、まずは英語で大学のホームページを立て、常葉大学の存在を外の人に知ってもらうことです。静岡県最大の私立大学であること、学科が19もある総合大学であること、幼稚園から大学院まで揃っていることなどをアピールして、海外からの研究者や学生さんに来ていただく前に、まずはこちらが何者であるのかを英語で発信する必要があります。世界のどこからでも常葉大学のホームページに英語でアクセスできるようにしておく必要があります。Wikipediaでもいいので、少しずつでもいいので、英語で大学の紹介を始めると国際化が進むのではないのでしょうか。

次に、海外から著名人を招聘して常葉大学で公開講演会を開催することです。講演会開催情報を広く発信することで、著名人の高度な専門性ととともに、常葉の先取的な姿勢も県内外へ広く知らしめることができます。常葉はあの分野に力を

入れている、との認識を世間に広く持ってもらうことができ、入試にも良い影響を及ぼします。高名な研究者による特別授業を1日でも2日でも行えば、東京へ行かなくとも静岡で東京と同じレベルの教育を受けることができる根拠の一つになります。

さらに、もしできるなら、総合学園の強みを生かして、海外の大学で英語の教員免許取得を目指している大学生、大学院生の教育実習を受け入れてはどうでしょうか。日本での滞在先の確保、世話係の教員の確保などの新たな業務も発生しますが、実習生が英語圏の母語話者だった場合、日本人生徒が受ける恩恵は想像以上のものがあるに違いありません。まず生の英語によるインプットが格段に増えます。年齢の近い人と英語で話すことの楽しみを経験させ、授業のたびに、例えば、カナダ人実習生と英語で話す活動を行うとしたら、常葉の中学生、高校生の英語勉強熱に火が付くことでしょう。知っている英語を使って話してみたら通じた、という楽しく嬉しい経験を積ませることが、自信をつけさせることになり、その後の英語学習を継続する動機づけとなり、結果は後からついてくることでしょう。大学だけではなく、中学高校も国際化しているという情報発信は、常葉の将来的発展につながるでしょう。高校のネイティブの先生に、または日本人の英語の先生にも協力していただいて、英語圏からの実習生の指導にあたるということで、お互いの学びや気づきがあるはずで、先生がたのいろいろな意味での国際交流が広がります。

以上、2040年問題を憂いつつ、常葉の発展の道を考えている今日この頃ですが、草薙移転効果の次に何をするかを考える時期になったと思った次第です。

教員学外活動報告

佐野 富士子

静岡にいと高名な研究者の講演会が開催されないので、東京へ何回も足を運ぶことになる。2019 年度の最大の収穫は、応用言語学、第二言語習得論で世界一の大研究者であり、ニュージーランドの王立協会のフェローでもあるロッド・エリス豪カーティン大学教授の公開講演会に参加して得た最新情報である。2019 年 12 月 6 日に都内の大学で開催された講演の内容は以下のとおりである。

テーマは Teacher Preparation for Task-Based Language Teaching で、まさに時宜を得たテーマであった。タスクを中心とした外国語指導 (TBLT) は効果大であることは研究者の間では広く認められているものの、教育実践者の間にはまだ浸透していない。その実態を引き起こしている理由を明らかにし、教師教育の必要性を指摘したものであった。

エリス先生によると、タスクを取り入れた授業を実践するにあたって、障壁となるのが以下の 4 点であるという。

1. 構造上の問題—クラスサイズ、伝統的なシラバス、言語形式中心のテストなど
2. 言語指導に対するビリーフや態度の問題
3. 従来型の外国語指導法と TBLT とのアプローチの違い
4. TBLT に対する未知と誤解から生じる TBLT 取り入れが難しいのではないかという先入観

世界中の教育実践者から発せられた質問や疑問にきちんと耳を傾けて取りまとめたものであろう現場感覚を大切にするエリス先生の姿勢が色濃く出た指摘である。上記 4 点の中でも真の課題は教師教育であることについては、他の研究者、例えばロング (2016) も同様の主張であること、教師教育プログラムを分析する研究もまだ進んでいないとの指摘がファン・デン・ブランデン (2016) から出ているとの説明があった。

しかしエリス先生の前任校のオークランド大学では、タスクのデザインから、タスクを使った指導の評価まで TBLT を取り入れるための授業が行われている

という。さらにニュージーランド文部省の後援で1年間の教師教育プログラムが実施されているという。また、ケンブリッジ大学ではファン・デン・ブランデンが現職教師を対象に TBLT 教育を行っていて、見習うべきモデルであると推奨されていた。

エリス先生はさらに、アールム (2015) やアールム (2016) を引用しながら、TBLT を成功させるにはいくつか重要な方策があり、中でも以下は重要であるとの解説された。

- 1) TBLT を取り入れようとしている教師がもっているビリーフを評価する
- 2) Task と exercise の違いを明確にする
- 3) Task を中心としたシラバスと教材を提供する
- 4) 理論とリサーチが実践的な問題と直結していることを確実に示す
- 5) 学習者にとって適切なタスクを選択するためには、タスクの複雑さには十分に注意を払う
- 6) 英語の到達度がまだ低い学習者、入門期にいる学習者向けにはインプットを中心としたタスクを提供する
- 7) 教師が直面する問題を注視する

日頃大学で英語科教育を担当している身としては、どれも深く納得するものであった。

さらに教師教育プログラムに求めるものとして、TBLT の理念と齟齬がないこと、教師はタスクをデザインできるようになることが挙げられた。また、TBLT の取り入れを実行したら、それをコーチしてくれる立場の人も必要で、学校長による学校としてのサポートも必要であり、コーチあるいはトレーナーと学校長からの継続的なサポートが必要であるという。TBLT が何であるかが未知な学校にまで TBLT を浸透させるには、多くの人たちの大きな努力と協力が必要ということになる。

さらにエリス先生は授業で使うタスクを適正に選択する際の視点として、

- a. 実社会でのタスクと教育的タスク
- b. インプット中心のタスクとアウトプット中心のタスク
- c. 3つのタイプのギャップ:インフォメーション・ギャップ、オピニオン・ギャップ、リーズニング・ギャップ

II. 1. 教員エッセイ

- d. タスクの成果としての自由な形の成果物と予め求められていた形の成果物
- e. 教師や学習者が創作したタスク
- f. タスクのデザイン
- g. ある特別な目的で、または一般的な目的で使用するタスク
- h. 学習者の能力に合わせてタスクを選択して連続させる方法を
を列挙され、教師としてはどれも入念に検討すべき項目ばかりであった。

さらにエリス 先生はとても具体的な指導例を紹介された。生徒それぞれにアメリカを代表する 3 つのアイコンの写真を持ってこさせ、それをグループで話し合わせ、グループ構成員が合意した 3 点を選ぶというタスクである。3 タイプのギャップが見事に組み合わせられたタスクである。

タスクを取り入れた授業をすると、学習者は文法の誤りをおかすものであるが、そのような場合は言語形式に焦点を置くこと (focus-on-form/FonF) が必須であることを改めて強調された。前もって問題点を予想して行う FonF、生徒の誤りを受けて行う FonF の両方を適宜使うとよい。

最後にタスクを繰り返すことの重要性を強調された。タスクを取り入れた指導のサイクルとしては、「言語形式の指導を少し→タスク→言語形式上の問題発生→言語形式に関する指導」と続き、タスクを繰り返して行う指導を始めるには、「タスク→問題発生→フォームに焦点を置いた指導→タスクの繰り返し」のサイクルであるとの結論であった。わずか 2 時間であったが、実りの多い講演会であった。このような公益性の高い講演会を静岡でも、願うことなら常葉大学で開催されることを強く願うばかりである。

ひとことでは済まない感謝とお礼

英米語学科長 良知 恵美子

一言先生と初めてお会いしたのは、私が常葉学園に職を得た年の翌年であった。振り返るともう 30 年余りも経つのかと、ありきたりな言葉だが時の経つのは本当に早いものである。こんな言い方をしてはちょっと失礼と思いつつも、あえて言わせていただければ、一言先生は私にとっては特別な同僚であり、同志であり、また上司である。

常葉学園短期大学時代は、先生の職務遂行能力のすばらしさにいつも驚かされた。仕事はいつも丁寧で、その言葉の端々から誠実さが感じられた。「New Zealand の高等教育機関で日本語教師をされていた」という一言先生の略歴に、私が当時日本語教育を少しばかりかじっていたことや、同じ出身高校の先輩であることが分かり、なんとも言えない親近感を覚えたのを記憶している。先生は常葉短大に赴任してからあれよあれよという間に、教務課長補佐から教務委員長になり、そして英語英文科の主任へといわゆる出世コースを駆け上がっていった。その仕事ぶりからすると、誰も文句はつけようがなかった。そのころ学科の定員を充足させることが年々困難な状況にあり、学科長や当時主任を務められていた一言先生はさぞやご苦労がおおかったと推測される。困難な状況にあるとき、人々は一致団結するものだが、当時の英語英文科の先生方は、難破しそうな船に乗り合わせた運命共同体のような感覚で仕事をしていた。一つの目標に向かって全員が心を一つにしていた。当時の学科長奥村先生の元、一言先生は主任を務めておられ、菊川から静岡校舎への移転を無事成功させた。学科会議では遅くまで皆で語り合い、時には常葉の浜名湖保養所に泊まり込んで白熱した議論を行った。一言先生はいつもその輪の中心で舵取りをされていたのである。所属する学科の将来は先が見えずに不安であったことは確かだが、主任である一言先生の舵取りにはまったく不安を感じることなく、学科所属の先生方がみな知恵を絞って静岡移転に向けて団結していた。

無事静岡への移転を済ませてから数年後、私は常葉学園大学外国語学部へ移転することとなった。私は大学で自分の居場所を作ることに懸命であったが、一言

II. 1. 教員エッセイ

先生がその後短期大学で学生部長という重責を担われていることを耳にした。誠実な仕事ぶりを知っていたので、ますます短期大学では「なくてはならない存在」となられているのだと思ったものである。一言先生とまた同じ職場で仕事することなど、その当時は予想もしていなかったが、学部長を務められていた桑原先生が亡くなるという思いもよらぬ事態を受けて、私と一言先生はまた再会することとなった。そのころ私は瀬名校舎の外国語学習支援センター長を務めていたが、学科長会で「短大から一言先生が移転してこられる」ことを知った。懐かしい気持ちとちょっと複雑な気持ちであったが、実際に先生にお会いして、年齢を重ねてますます、そのやさしさには磨きがかかっていたし、仕事に対する誠実で真摯な態度は以前とまったく変わっていなかった。どんな仕事もいい加減にせず、まさに誠心誠意努められる姿を拝見し、「さすがだな」と思ったことを覚えている。

一言先生は常葉大学に移転して翌年、英米語学科の学科長となった。会議の準備、会議前の周到な根回し、気持ちよく仕事ができる環境づくり、そして面倒な仕事は率先して自分で引き受けるという「一言スタイル」はそのままであった。さらに翌年、先生が外国語学部長になられ、私が学科長の職を担うことになり、その時初めて長い間に亘って管理職を務めてこられた一言先生のご苦勞を肌身で感じるようになった。学科会議前の資料の準備、そして議論が集中しそうな議案には事前に先生方にご意見を伺っておくなど、学科長としての仕事の段取りを、一言先生の仕事ぶりから学ぶことができた。また、時折降ってわいたように起こる難題を解決するために、頻繁に一言研究室を訪問し、先生のアドバイスを受けた。一言先生と話しているとなぜか困難な問題を解決できそうな気になってくるから不思議であった。学部長を退任される昨年まで、私は一言先生に依存してばかりであったが、3年間先生を学部長として仕事できたことを本当にありがたく思っている。

これまで、相談したい案件が生じると、一言研究室のドアをノックしたり、週末にはイライラする気持ちを先生にメールで聞いていただいたりしたことが度々あった。3月には退職され新年度からは非常勤として大学に来てくださるようだが、4月からは先生がお見えになったところを見計らって、非常勤講師室にお邪魔し、お話しできるのを楽しみにしている。

一言先生、本当に長い間学科のため学部のためにありがとうございました。

台湾研究に関して感じたミクロとマクロな動向

若松 大祐

2019 年は 3 月、6 月、8 月、9 月、12 月に台湾へ渡った。いずれも 1 週間前後の滞在であった。台湾研究に関して 9 月には中国陝西省漢中市にも赴いている。本稿では、私が 2019 年の取り組みを通じて感じた大小二つの動向を書き留めておこう。

まずは、マクロな動向から述べよう。2019 年 9 月 21 日（土）－ 22 日（日）に、台湾歴史人物与兩岸関係國際學術研討会が、陝西理工大学明德楼で開催された。この国際会議は、中国社会科学院近代史研究所台湾史研究中心が隔年で開催するものであり、社会科学院は毎回、中国全国のいずれかの大学と共同で会議を開催し、会場校が事務を担うというスタイルのようである。今回が 10 回目の開催に当たるようなので、2000 年ごろから始まったと聞いた。

会議の目的は、台湾海峡兩岸の平和的な発展を學術の面から促進するところにある。台湾史研究の學問的成果を中国において蓄積し、國際的な台湾史研究の中での中国の存在感を強めたいという意図もあるようだ。今回は、96 名の発表者があり、71 本の発表があった。うち 20 名ほどは台湾からの、2 名が日本からの、1 名が韓国からの発表者であった。正直なところ、発表内容は玉石混交である。中国においては台湾関係の図書が入手しづらく、またインターネット接続に制限がある。また、専門用語に独特の表現がある。例えば、米華相互防衛条約（Sino-American Mutual Defense Treaty）は、台湾での中国語原文は「中美共同防衛条約」である。これを中国では「美台共同防衛条約」と呼ぶようで、さらに特定の文字に対して「」（かぎかっこ）を付すこともあるから、私は混乱するばかりであった。とはいえ、隔年で毎回 100 名近い参加者があり、70 本の研究発表があるのだから、大まかに見積もってこの 20 年でのべ 800 名から 1000 名が参加し、500 本から 800 本の研究成果が中国で蓄積されていると言える。とりわけ、中国の一部としての台湾や、台湾人における中国意識という議題は、「中国の特色ある台湾研究」であろう。この種の議論は、この 20 年ほど台湾の学界ではほとんど議論されなくなったからである。

II. 1. 教員エッセイ

次に、ミクロな動向にも目を向けよう。2019 年 12 月 24 日（火）に高雄で、25 日（水）に台南で軍人を祀る 3 つ廟宇を参観した。特に下記 (2) 保安堂では、突然参観したにも関わらず、廟宇の管理者の人々から歓待を受け、ありがたい限りであった

- (1) 高雄旗津海洋公園の實踐新村蔣公感恩堂
(住所) 高雄市旗津区北汕里中洲三路 333 巷 7 号
- (2) 高雄鳳山の紅毛港保安堂
(住所) 高雄市鳳山区南成里国慶七街 132 号
- (3) 台南の鎮安堂飛虎將軍廟
(住所) 台南市安南区大安街 730-1 號

上記(1)は蔣介石を、(2)は蓬 38 号艦という駆逐艦の艦長以下 145 名の乗組員全員を、(3)は杉浦茂峰をそれぞれ祀る。いずれも当地の住民の自発的な祭祀である。(蔣介石を祀ったのは、大陳島からの移民のようである。)こうした台湾住民にとっての外来者が神様としてまつられている現象については、すでに三尾裕子や林美容といった研究者が調査し、日本語や中国語で研究成果が出始めている。それだけでなく、メディアや好事家がインターネットで「神様になった蔣介石」や「神様になった日本人」をたくさん紹介している。

中でも保安堂による蓬 38 号艦の慰霊は 2018 年に（改めて）始まり、今後、日台の官民を巻き込んでの事業になりそうな雰囲気であり、しばらく目が離せそうにない。

2. 外国語学部コロキウム

2018 年度外国語学部コロキウムの実施報告

外国語学部言語文化研究会の主催するコロキウム（Colloquium）は、外国語学部教員が自身の教育研究活動の一端を発表して、外国語学部教員同士で関心を共有し、今後の外国語学部の教学へ活用しようと目指すことを目的とする。参加者については主に外国語学部教員を想定しつつ、大学ホームページなどを使って学内外からの参加を広く呼びかけている。2019 年度は開催時間を確保できず、残念ながら以下の 1 回のみの開催となり、例年のように前後期にそれぞれ 1 回ずつ開催できなかった。

（若松大祐）

第 1 回

日時：2020 年 2 月 19 日（水）10 時 45 分から 12 時 15 分まで

会場：静岡草薙キャンパス A304 講義室

講師：良知恵美子（英米語学科）

題目：学内共同研究「多文化ファシリテーター育成の基礎的研究」成果報告

3. 外国語学部文化講演会

外国語学部文化講演会

若松 大祐

常葉大学外国語学部言語文化研究会では、毎年、文化講演会を開催している。目的は、外国文化について参加者が理解を深めるところにある。2019年度は北朝鮮に関する講演であり、英米語学科とグローバルコミュニケーション学科での学修内容を横断するため、外国語学部文化講演会にふさわしい内容であった。講師の鐸木昌之氏は、北朝鮮の動向を分析しながら、現在のアジア太平洋で大きな構造変動の起こりうる可能性について指摘する。そして、我々がそうした変動に直面しても生き抜けるように、外国語や教養を身に着けて有用な情報を獲得して運用するよう訴えた。

講演会は、1年生の「人間力セミナー」の授業時間に同一内容で2回開催し、合計約200名の参加者があった。公開講演会に位置付けたため、外国語学部から2年生が2人、4年生が2人、教育学部から教員が1名、水落キャンパス健康科学部から学生が5名と教員が1名参加している。さらに、学外から2名の参加者があり、うち1名は東京からの参加者であった。

日時：2019年10月8日（火）15時00分-16時30分（英米語学科向け）

10月9日（水）13時15分-14時45分（GC学科向け）

会場：静岡草薙キャンパス C310 教室

講師：鐸木昌之（特定非営利法人地域開発協議会代表理事、赤穂観光大使）

題目：北朝鮮はどんな国？：政治・外交・経済・文化

要旨：初心者にもわかるよう、北朝鮮、特に金正恩について紹介します。それを踏まえ、現代アジア太平洋におけるアメリカ、中国、日本などの諸国との関係の中で、北朝鮮の持つ意味について論じます。講師は、『北朝鮮 首領制の形成と変容——金日成、金正日から金正恩へ』（東京：明石書店、2014年）の著者であり、太永浩『北朝鮮外交秘録：三階書記室の暗号』（東京：文藝春秋、2019年）の監訳者です。

知ることは学ぶこと

18122005 伊川 亜祐菜

2019 年 10 月 8 日、外国語学部の文化講演会に参加し、鐸木昌之先生の「北朝鮮はどんな国？－政治・外交・経済・文化：『三階書記室の暗号』¹を通して見る北朝鮮」を聴講した。本稿では文化講演会を通して感じたことや学んだことを 3 つ書きたい。

まず 1 つ目は北朝鮮についてである。私自身はもともと韓国や北朝鮮に興味を持っていた。だが、北朝鮮について知っていることは実のところほとんど何もなかった。しかも、北朝鮮という国家に対して、ニュースやワイドショーの影響を受けて「独裁的な国」や「恐い国」というイメージを固定的に抱いていたのである。しかし、講演を聞き、北朝鮮は私が抱いていたようなイメージの国ではないと知った。そのように考えたのは、独裁政権が崩れるかもしれないという話題に基づく。

具体的に言えば、かつては最高指導者の意見に人民がただただ従うという仕組みが北朝鮮の中に出来上がっていた。それは、人民が何も考えないようにするため、為政者がメディアを独占し情報統制を行ったり、人民による対外的な交渉や接触を統制したり、服や食料などの生活必需品を配給制にして、為政者が人民に恩恵の付与をすることによって実現していた。だが、時代が変わり、北朝鮮の人民の中にも海外の情報が少しずつ流入するようになる。それは、従来は存在しなかった市場というものが人民の中に誕生したからであった。市場が発生したために、人民の間で中国製のスマホが流通し、韓国やアメリカといった西側諸国のドラマや映画などが入った USB メモリが飛び交うようになった。人民は情報を得ることで自ら考えることを始めるだろう。そうなれば、独裁者による洗脳は解かれてしまう。このような話題を聞き、北朝鮮に住む人民たちは、私が考えてたよ

¹ 太永浩 (著)、鐸木昌之 (監訳)、李柳貞、黒河星子 (訳)『北朝鮮外交秘録：三階書記室の暗号』(東京：文藝春秋、2019 年)。元北朝鮮外交官による暴露本。2018 年に韓国で、2019 年 6 月に日本で発売された。韓国では発売後、3 週間で 10 万部を超える異例のベストセラーになった。

II. 3. 外国語学部文化講演会

りもずっと私たちと同じような環境や考え方に近づきつつあるのだとを知り、強い衝撃を受けた。

次に2つ目は講師の先生を迎える準備だ。今回、鐸木先生をお迎えするにあたって講演会を統括する若松先生から3つアドバイスを受けた。まず、今回の講演に関わる『三階書記室の記号』という書籍を読むこと、次に質問を用意すること、最後に名刺を作ることの3つだ。周知の通り、質問することは発表者に対し、自身が興味を持って発表を聞いていたことを表すことであり、敬意を示すことでもある。確かにただ講演を聞き、疑問に思ったことを質問してもよいだろう。だが、私は今回、事前に書籍を読み、講演に関する内容をいくらか予習し、質問を想定した上で講演を聞き、実際に質問をした。そのために議論は尽きず、講演義の終了後も、講師の鐸木先生と個別に質疑応答が続き、講演では聞くことができなかった話題まで聞くことができた。

最後に3つ目は自分の知識の不足である。鐸木先生の話聞き質問する中で、何度も自分の知識不足を感じた。そして、私は韓国にばかり目を向けていたために、自らが持つ情報や知識に偏りがあることに気づく。この気づきには鐸木先生の印象的な次の主張がきっかけとなった。すなわち、東アジアは1つ1つの国が孤立して存在しているのではなく、全て連携している。だから朝鮮半島の情勢が動けば、中国の情勢も変わる。そうなれば日本の情勢も少なからず変化することは当たり前のことである、と。したがって、1つの国を見る時、その国ばかり見るのではなく、その国を取り巻く周囲の国の動きも一緒に知ること、その国のことをより一層理解することができる。それは、国のことだけでなく、他の何か1つの物事を見る時にも、様々な視点に立って見ることでその物事について深く理解できるのだと考えた。

総じて、今回学んだことを今後に活かしたい。講師を迎えた経験を、今後開催される講演会でより良く活用していく。そして、講演を通して痛感した知識不足を補うべく、視野を広く持ちアンテナを大きく張っていきたい。ここに大学で学ぶ意義があるだろう。

4. 特別研究の題目

英米語学科特別研究

小池理恵研究室

齊藤 詢弥 共生か複合かー日本の移民受容ー

佐野富士子研究室

半田 ひな乃 中学校英語学習における task repetition の効果について

山田 裕子 中学生が英語につまずく要因調査

渡邊 稀美乃 社会人のニーズ分析による中等教育への task 導入効果

柴田里実研究室

石川 ジュンヤ Does Cultural Frame Switching Occur among ESL Learners?

海野 史央 外国語学習におけるつまずきのプロセス：オートエスノグラフィ分析を通して

梶田 隼大 ESL 学習者のためのアクティビティは日本人中学生にとって有効なのか：新学習指導要領からの分析

桑山 美柚 日本人英語学習者の性格因子と L2 スピーキングの関係ーコロンビア・メキシコと比較してー

鈴木 麻友 英語多読を通じた多様性教育の提案

寺田 愛利 なぜ英語の読解力が足りないのかー9年間の英語学習を振り返ってー

成道 小夏 小学校英語教育における英語絵本の多様な読み聞かせ方法の提案

望月 幸子 付随的語彙学習における題材に対する興味関心の影響

谷誠司研究室

上條 翼 介護分野における日本語教育：一般販売されている日本語教科書の教科書分析

Ⅱ. 4. 特別研究の題目

戸田勉研究室

- | | |
|-------|--|
| 笠井ありさ | ピーターパンと妖精の関係 |
| 河村 実和 | Conan Doyle の <i>The Hound of the Baskervilles</i> における物語の構成技術 |
| 星野 真知 | カズオ・イシグロの <i>A Pale View of Hills</i> における不確かな語り手 |

山田昌史研究室

- | | |
|-------|-----------------------|
| 榊原 未菜 | 翻訳における日英差：注意表記にみられる特徴 |
| 和田 莉奈 | 絵本にみられる日英翻訳の違い |

良知恵美子研究室

- | | |
|--------|--|
| 江間 祐佳 | バイモーダル・バイリンガリズムにおけるマイノリティ言語の扱いについての一考察 |
| 河原崎 和輝 | 大学生が持つ学習観は生涯学習への継続に関与しているか |
| 佐藤 淳紀 | 小学校英語に対する保護者の肯定的イメージに関する一考察－保護者への調査分析から－ |
| 徳原 有紀 | 日本人児童に読書習慣を身に着けさせるために学校図書館、公立図書館が行っている取り組み |
| 増田 行馬 | 日本人气質は外国語学習の Speaking Skill 向上にどの程度影響するのか |
| 松山 あかり | 高等教育レベルにおける異文化理解教育の必要性 |
| 宮崎 美里 | The Social Discrepancies Experienced Among Cross-Cultural Kids |
| 渡邊 優衣 | 日本の教育にサービslラーニングを定着させるための提案 |

グローバルコミュニケーション学科特別研究

共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧

スペイン・ラテンアメリカ特別研究

担当 増井 実子

《共同翻訳文献》

原 題 : Agustí Alcoberro, Historia de Cataluña en 100 episodios clave, Lectio Ediciones, 2016 Capítulos 51-71

邦題 : アグスティー・アルクベール著『100のエピソードで読むカタルーニャの歴史』レクティオ社 2016年 第51章～第71章

《サブ・レポート題目一覧》

加藤 未奈 「アントニ・ガウディの建築思想－サグラダファミリアを中心に」

嶋本 妃那 「フェルナンド七世とその時代」

中村 和正 「黒い絵から見る近代美術の祖、ゴヤ」

林田 りゅうじ 「政治とフラメンコ－ 20世紀を中心に」

韓国特別研究

担当 福島 みのり

《共同翻訳文献》

原題 : 강일권, 권석정, 차우진, 정덕현, 모신정 (2018) 『대중문화 트렌드 2018』마리북스

邦題 : カン・イルゴン, ギョン・ソクジョン, チャ・ウジン, チョン・ドッキョン, モ・シンジョン著 (2018) 『大衆文化トレンド 2018』マリブックス

《サブ・レポート題目一覧》

佐藤 文香 「ネット社会における日韓市民の繋がり～マスメディア・SNSを中心に～」

Ⅱ. 4. 特別研究の題目

- 沼澤 真夜 「日韓関係と大衆文化の関連性～インタビューを中心に～」
山本 彩乃 「K-pop とジャニーズを掛け持つファン～アイドルブームに伴ったファンの変化～」

ブラジル特別研究

担当 江口 佳子

《共同翻訳文献》

原題：Chico Buarque e Paulo Pontes, *Gota D'água*, Civilização Brasileira, 1975

《サブ・レポート題目一覧》

- 今泉 礼慈 「コーヒーが歴史に及ぼす影響についての考察」
亀井 李佳 「ブラジル人にとってのサンバカーニバルとは何か」
古川 舞 「渡り鳥と日系ブラジル人—映画「孤独なツバメたち デカセギの子どもに生まれて」の考察—」

中国特別研究

担当 戸田 裕司

《共同翻訳文献》

原題：那志良《典守故宫国宝七十年》（紫禁城出版社，2004 年）

《サブ・レポート題目一覧》

- 石川 安理 「台湾人意識の形成—台湾の統治の歴史と現状—」
仲宗根 エイミ 「華僑の歴史と暮らし—歴史から読み解く華僑の存在と異国での活躍と発展—」
星野 康平 「中国経済からみる中国人の行動様式」
水野 綾乃 「私たちと風水—想像よりも身近な風水の追求—」
森谷 みなみ 「日本語学習大国となった中国—学習者の現状と日中の教材比較から読み解く課題と展望—」

5. 日本語教員養成課程の活動報告

日本語教育実習体験記

17121007 池谷 果琳

私は教育実習が初めてで、教案を作成するのも初めてだったので不安でした。色々な質問や場面を想定して、生徒がどこでどういう反応するのかを考えました。しかし、実際に授業をしてみないとわからなかったことがたくさんあり、色々な気づきがありました。

まず、私がこの教育実習全体のラストだったので何か思い出になるものをプレゼントしたいと思い、授業内でワークをしながら静岡らしさやボランティアで参加して下さった感謝を込めて1つの色紙を作り、プレゼントすることにしました。しかし実際にやってみると、貼る、切る、塗る、描くなど簡単な行為しかなかったのですが、思った以上に作業に時間がかかり、後半の進行がスムーズに進みませんでした。山仲先生がおっしゃるには、年賀状を書かせるのにも45～50分かかったらしく、授業内で教えながらワークをするというのは向いていないことがわかりました。

また、パワーポイントは当日の機械トラブルで手間取る可能性があるので使いませんでした。しかし母語が違う人に日本語を教えるにはイラストはマストなので、自分たちで全て手作りし、準備にとっても時間がかかりました。1つの授業をつくるのにこんなに時間がかかるとは思わず、驚きと苦労があったのを覚えています。

そして、教案上ではなるべく生徒が発言できる、先生があまり言わない授業を心がけました。日本人は授業中発言する人が少ないので、今回の授業でも反応がくるのか心配でしたが、生徒たちはとても授業に積極的で、導入や口慣らしなどはスムーズに進めることができました。なによりやる気を感じることができたのが嬉しかったです。しかし、6人目だったので最後の方は生徒たちの疲れや飽きが見えました。普段は45分授業ですが、今回は90分授業で倍なので飽きられないように体を動かすなど興味を引くような授業を考えたかったです。

また今回は全て暗記して臨みました。しかし、それではロボットが授業してい

のと同じです。想定外の発言や行動が絶対にくるので、その場に応じて台詞や内容を変える応用力をつけたいと思いました。

そして、今回質問がくることはありませんでしたが、「飲んだところ」「行ったところ」など、過去形にするとき動詞によって「ん」や「っ」などに変化することを説明するのが難しかったです。

今回の授業で得たことを活かし、よりよい授業作りに努めていきます。

日本語実習を終えて

1712119 松本 奈々

私が実習前に目標にしたことは“とにかく楽しい授業をしよう”ということです。もちろんまだ私自身は学生という立場で先生ではないので教案がなかなか思い浮かばず、これで正しいのか不安になりながらもとても苦労しました。そんな時、視点を変えて、もし私が生徒だったらどんな授業が受けたいか自問自答し考えました。すると、重かった気持ちがスッと軽くなり、様々なアイデアが浮かんできました。山仲先生に何度も相談し、苦労しながらも楽しんで教案作りに取り組むことができるようになりました。

実習前に事前に日本語学校に見学に行かせていただきました。そこでは、先生に演技力やいかに生徒に発言させるかなどが求められていることを体感的に学ばせていただきました。実習前日、最終確認でチームのみんなとお互いの授業を受けてアドバイスをしました。みんなで気持ちを一つに頑張ろうと心に決めました。

そして、緊張して迎えた実習当日、いざ生徒の前に立って実践してみると生徒の反応の勢いに最初は戸惑い、圧倒されながらも生徒の反応にとっても助けられました。日本語学校でのこととチームで最終確認したことを活かして、生徒の前で演技をし、実際にモノを持ってきて授業をみんなで楽しむことができたのではないかなと思いました。私自身サプライズが好きなので、最後に授業の復習を込めながらもクリスマスがもうすぐだったのでサプライズをしました。

実習が終わった後、生徒の何人かが「先生の授業、とても面白かったです」や

「きっと先生になったら良い先生になると思います」と言ってくれました。きっと気を利かせてそう言ってくれたのかなとは思いますが、それでもやはり今まで頑張って準備してきて本当に良かったなと心から思いました。生徒の中には日本語技能検定 N2 を取得してこの大学に入りたいと日本語の勉強を一生懸命取り組んでいる子もいて、とても良い刺激になりました。教える側も教わる側もとても良い関係だなと感じました。また、教案を作るとはとても労力のいることですが、それでも楽しみながら作ることができるのは自分の好きなように授業を通して表現できるからなのではないかと気づき、貴重な体験ができました。

6. 外国語学習支援センターでの TA および peer support

外国語学習支援センター活動報告

濱田 真理

外国語学習支援センター（通称 FLSSC・フルスク）は、草薙キャンパスへ移転して今年で2年目となり、様々な面で変わりつつある。グローバルコミュニケーション学科からも、韓国語・中国語・スペイン / ポルトガル語の TA(ティーチングアシスタント) が加わり、5 言語体制となった。今年課題となったのは、キャンパスの学生数に対する FLSSC 利用者数の低さだ。そこで、FLSSC をまずたくさん学生の学生に知ってもらうため、新たなイベントの企画を行った。以下では、今年の FLSSC の様子を、各イベントを通して振り返りたいと思う。

【FLSSC年間企画】

4 月	新入生ガイダンス
6 月	クレイトン大学日本語研修生受入（スタディパディ）
7 月	韓国語イベント、中国イベント、英検2次対策
10月	日中青年代表交流（県）、ハロウィンイベント、英検2次対策
11月	スペインイベント
12月	中国イベント、クリスマスイベント

4 月の新入生ガイダンスでは、全新生の前で FLSSC の紹介をした。4 年 TA が FLSSC 紹介文を考え、FLSSC が全学部へ開かれていること、様々な言語学習をサポートできること、留学のサポートがあることを話してくれた。新しい学生が足を運んでくれる、よいきっかけとなった。

クレイトン大学からの日本語研修生を受け入れした際には、FLSSC は交流の中心の場となった。スタディパディの学生とクレイトン学生と一緒に学び、英語でゲームをし、興味のある学生と一緒に話したりする場となり、とても明るい、がやがやとした雰囲気となった。

韓国イベントでは、TA が韓国を紹介するパワーポイントをつくり、これから韓国へ旅行したい学生をターゲットに韓国の魅力を語った。韓国の地理・食文化・公共交通機関について、実際の写真を通して学ぶことができた。

今年度には、留学経験のある中国語 TA と有志の中国人留学生によって、2 回の中国語イベントが行われた。実際に中国へ滞在していた学生たちから、中国の七夕などの行事の話や、中国の食文化が紹介されて、とても深い内容のイベントとなった。2 回目のイベントでは旧正月や祝い事の時に食べる月餅を試食し、日本にいながら五感で中国を味わうことができた。

11 月にはスペインイベントが行われ、増井先生のご紹介で、外国語学部卒業生の望月氏をゲストスピーカーとしてお招きし、メキシコで働く様子について聞くことができた。望月氏のご経験を通して、大学で学んだことが将来の海外での仕事に生かされていることに感銘を受けたと述べた学生は少なくなかった。海外で働くというあこがれを、現実的なものとして見つめる、貴重な時間となった。

今年も TA 全員で、ハロウィンとクリスマスイベントを実施した。今年は、どちらのイベントでも TA が英語でミニレクチャーを作成し、オリジナリティにあふれる内容となった。ゲームの時間には、ワードビンゴやワードゲームで盛り上がり、英語や英語圏の文化に少しでも触れる時間となっただろう。

上記のようなイベントだけでなく、英検 1 次・2 次対策、TOEIC 対策、キロス先生・レイング先生による会話練習のクラスが開かれて、プログラムが豊富な一年となった。様々な変化がある中、このようにたくさんのイベントができたことは、TA の多大な努力と、学生・教職員の方々の支えがあったからだ。「まずはやってみよう」という言葉からはじまった今年度の FLSSC だが、これほどまでに言語にふれる機会をつくることができたのは大きな成長だったと思う。将来に向けて、質より量とならぬよう、目の前の学生一人一人を忘れず、学生と共に成長するセンターとなればと思う。たくさんの学生が元気をもらい、ここから頑張れるようなセンターに一步ずつ進んでいければと願うばかりだ。

葛藤と成長

17121137 山崎 あゆみ

私は 3 年生に進級してから、外国語学習支援センターで TA (ティーチングアシスタント) を務めている。1 年生の頃から TA の先輩に多読でアドバイスを受

II. 6. 外国語学習支援センターでの TA および peer support

けたり、学習面でサポートを受けたりなど、大変お世話になった。3年生になり今度は自分がサポートする側へと変わり、葛藤した面と共に成長した面もあった。

まず、TAという役割は責任ある仕事だと感じている。本当に私がTAをやっているのか葛藤したことが何回かあった。なぜなら、私よりも英語力がある人や有能な人は、他にもいるからである。スピーチコンテストの出場者や外部での活動で活躍している仲間を見ると、私はまだまだだなと感じることがあった。友人に悩みを打ち明けると「人には得手不得手があるから良いんだよ」と優しい言葉をかけてもらった。その言葉を胸に、自分は自分でいいのだと思いながらも、比べてはくじけるという連鎖があった。自分の得手を活かすことができたのは、英検トリビアの作成だった。私はスピーチやプレゼンテーションが苦手だが、文を書いたりすることは好きだ。既にあったものを参考にして作成したものではあるが、英検トリビアを受ける学生が、私が作ったもので頑張る姿を思い浮かべると、とてつもない嬉しさを感じた。

私は前述したように、よく人と比較してしまうことがよくある。もちろんそのせいで落ち込むこともあるが、比べることで、刺激を受け、負けない気持ちで自分も頑張ることができる。その気持ちへ切り替えるまでには、少し時間がかかるし簡単なことではない。しかし、頑張っている人のおかげで私は頑張る力をたくさんもらった。その中には、友人だけではなく、外国語学習支援センターを利用している学生もいる。空きコマに、英会話を練習しにくる学生や、検定本を借りに来る学生を見ると、「私も頑張ろう」という気持ちを強く持つことができた。本来ならば、私がサポートしなければならないのに、周りの学生の頑張る姿を見て逆にサポートされていた。

外国語学習支援センターは、学習をサポートするところではあるが、お互いに切磋琢磨できる場所である。今後も、TAとして自分の得手は活かし、不得手には挑戦をしていきたい。そして、一緒に学習を頑張ろうという気持ちで役割を担いたい。

外国語学習サポートに携わって

17121076 砂川 哲哉

私は 2019 年 4 月から、外国語学習支援センター (FLSSC) で、ティーチング・アシスタント (TA) を務めています。外国語学部に入學後、英語の多読や留学準備をきっかけに外国語学習支援センターを利用するようになり、特に留學前の 2 年生の前期は、センター職員の濱田さんや TA の先輩方に変な世話になりました。そして周りの多くの方々の支援のお陰で、アメリカでの 7 ヶ月間にわたる長期留學を無事に終えることができました。TA の先輩方への憧れと、留學を通してより一層好きになった英語の楽しさを他の学生と共有したいという思いから、FLSSC に携わりたいと思うようになりました。

1 年間の TA の仕事から、多くのことを学びました。TA になる前は大学生活の中で、授業を受ける、イベントに参加する等、施設を利用するだけでしたが、イベントを主催して参加者を募ったり、センターの利用者の対応をしたりする立場になることで、自分のコミュニティの内側の関係だけではなく、外側の人たちとも関わりを持つようになりました。中にはとてもアクティブで色々な経験をしている人や、勉強熱心な人もいて、先輩後輩関係なく尊敬できる人に出会えることがとても楽しいです。また、私は好きな外国語を学んでいるので、英語を自分の専門にできるようになりたいと思っています。しかし、日々の TA の仕事をしていて落ち込むこともあります。特に学生と英会話をしたりしているときには自分の英語力、会話力の低さを目の当たりにします。英語を専門にするには、まだまだ力不足の部分があると自覚していて、留學までしたのにこの程度かと自分の努力不足を反省することもあります。自分の英語力を高めるためにも、TA を通して学ぶ姿勢を忘れずにいられることはとても有り難いです。

瀬名校舎から草薙校舎に移転し、FLSSC の体制も少し変わったことで、以前の FLSSC と比べる声が度々聞こえますが、新しい試みをする良い機会だと捉えています。このようなセンターが大学にあることは有意義です。今後も大学を卒業するまで TA を続けたいです。自分の得意なことを活かし、外国語を楽しく学べる場所作りと学生のサポートを、できる範囲で精一杯努力したいと思います。

7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

ラーマン大学合唱団との交流

清 ルミ

5月17日(金)、マレーシアのラーマン大学 (Universiti Tunku Abdul Rahman、通称 UTAR) の合唱団が静岡草薙キャンパスを訪れ、本学学生と終日交流を深めました。

ラーマン大学合唱団は、5月16日(木)に静岡音楽館 AOI で常葉高校コーラス部とジョイントコンサートを開くなど数



か所で演奏会を開催することを目的に来日しました。静岡での滞在期間中、県国際交流協会の国際交流活動の助成も得て、本学学生との交流プログラムが企画されました。朝、JR 草薙駅改札で本学学生手作りの横断幕と千羽鶴のレイでまずは出迎え。午前中は学生が事前に歓迎デコレーションを施した教室で「中国語・英語での初級日本語学習支援」。続いて「英語でそれぞれの生活・悩みの語り合い」。ランチタイムは学食に場所を移し食事交流会とラーマン大学合唱団の合唱鑑賞。午後は本学提供のバス2台に別れて乗り込み、市内視察へ。日本平でお茶摘み体験をした後、久能山東照宮を拝観し、1159段の階段を下りて三保の松原へ。両校の学生たちは互いの異文化に触れながら交流を楽しみ、日本・マレーシア両国の友好を深めることができました。



本企画は外国語学部清ルミと若松大祐による指導と地域貢献課のサポートの下、自発的に集まった学生有志によって企画運営が行われました。日本語を教えるための事前講習会参加から教具の作成、もてなしのための設営準備、市内観光のアポ取

り等、参加した学生は交流以前にそれぞれ大変な労力を費やしました。2名の学生コーディネーターは卓越した指導力と細やかな目配りで学生を指揮してくれました。4名の学生英語通訳はガイド用の英文作成に四苦八苦し、当日は質問攻めに英語で応じるなど精一杯の健闘をしてくれました。学生たちの成長ぶりを誇らしく思えた一日でした。



(歓迎のあいさつ)

第2回マレーシアラーマン大学合唱団静岡演奏会

常葉大学長 江藤 秀一



ラーマン大学合唱団の皆様、ようこそ静岡へお越しくださいました。また、常葉大学附属中学高校音楽部との合同演奏会並びに本学草薙キャンパスでの学生との交流会の機会を設けてくださいます。誠にありがとうございます。常葉大学草薙キャンパスでは外国語学部教員によるラー

マン大学の学生さんと本学学生との共同授業をはじめ、お昼休みには学生食堂にて本学学生との交流会及びミニコンサートが企画されております。午後は日本平にてお茶摘み体験、久能山東照宮見学、世界文化遺産である三保の松原から富士山を眺望していただきます。このミニツアーも本学学生が同行し交流を深めることになっております。今回の本学訪問がマレーシアおよび日本の国際貢献になりますことを願っております。

Welcome to Tokoha University

ETO Hideichi, the President of Tokoha University

Good afternoon, everyone. I'm ETO Hideichi, president of Tokoha University. I'm glad to make a welcoming speech to the students of the choir and Mr. Moroe, their director at Rahman University in Malaysia. First, thanks to all the students who are joining today's gathering as well as those who organised today's programme, especially Mr. Yasuike, chair of the executive committee of the Rahman University concert in Shizuoka, and Mr. Oishi, chief of the Centre for Regional Contribution at Tokoha University, who first accepted the proposal from Mr. Yasuike and helped to organise today's programme. Thanks, too, to Professors Sei and Wakamatsu at Tokoha University who are carrying out today's programme with Tokoha's students. I also thank the students from Rahaman University who gave a nice concert last night with our Tokoha junior and senior high school students. Some of you have probably read the article about it in the *Shizuoka Shimbun*. They sang Studio Ghibli's famous songs such as *Tonarino Totoro* and *Mononokehime* in the Japanese language. I enjoyed and admired their lively and sweet singing voices very much. I'm sure you'll also enjoy their singing in the mini-concert soon after my speech.

This lunch time gathering is not long enough to talk and exchange opinions with each other, but I hope all of you here in this cafeteria will enjoy this gathering, the mini-concert and a short trip to Nihonndaira this afternoon. I also hope this opportunity will be the first step to foster a further relationship between Rahman University and Tokoha University in the future. Lastly, to the students at Rohman University, please enjoy the rest of your schedule in Japan and have a safe journey back to your country. Thank you very much.

文化理解とコミュニケーション

17121076 砂川 哲哉

私は2019年5月に行われたマレーシアのラーマン大学合唱団のみなさんとの交流会に参加し、そこで日本語教室とバスツアーに参加しました。特にバスツアーでは半日かけて日本平で茶摘みを行い、久能山東照宮や三保の松原を巡ります。私はボランティアのバスガイドとして目的地につくまでの間、街を案内する任務を担いました。当日はバスガイドだけではなく、日本語教室の進行、交流会のサポート、ツアー先での同行も行い、とても充実した一日になりました。



そもそもこのボランティアを引き受けようと思ったきっかけは、今回コーディネーターを勤めた友人の小柳さんの誘いでした。私はアメリカ留学をしたときに当地の学生から歓待を受けました。すごく助かったという経験があり、自分も日本に帰り、留学生と関わる機会があったら、同じように接したいと考えていました。英語を必要とするボランティアは積極的にして、勉強したいとも思っていたので、このボランティアの話は、まさに絶好の機会だと感じました。

このボランティアの任務を受けてから、他のボランティアの学生数名と協力してツアーのための案内原稿を作ります。学生コーディネーターが作成した日本語の原稿をもとに、皆で英語（マレーシアの公用語は英語のため）に翻訳していきます。

実際に参加してみると、準備に想定していたよりも多くの時間を要しましたし、当日に動いてみないとわからないこともたくさんあり、想像以上に大変でした。ガイド原稿の準備段階では、英語を使って地元の紹介をすることの難しさを実感します。これに加え、そもそも自分自身が地元の文化について全く知らなかったのだと痛感します。実際にラーマン大学合唱団の学生と観光地を周っているとき

II. 7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

には、様々な質問が飛び交い、自分の国のことなのに説明できないことが山程あることに気付かされました。英語によるガイド中に言葉がうまく出てこなくて、ラーマンの学生が聞いていて分かりづらかったことも度々あったと思います。ガイドとして完璧には仕事をこなせなかったでしょう。しかし、自分なりに試行錯誤しながら当日の仕事をやりきったことで、自分の自信になりました。そしてなにより、合唱団の皆さんには今回のイベントをととても楽しんでいただけたようで、最後にはたくさんの感謝の言葉をいただき、とても嬉しく思っています。

今回のボランティアを通して、国際交流において大切なことは相手の文化を受け入れて理解するだけではなく、自分たちの文化を相手に知ってもらうためにも、自分の国や地元のことを理解しておかなければならないのだと気づきました。言葉と文化がセットになってこそ、本当のコミュニケーションができるのでしょう。また、多くの人と交流することの楽しさも再認識したので、今後もこのような活動には積極的に参加したいと考えています。



再びクレイトン大学生がやって来た！ — インバウンドな国際交流・2年目の記録 —

英米語学科（受入れ担当教員） 一言 哲也

昨年に引き続き、2019年6月17日（月）から7月14日（日）まで、本学の提携校・米国クレイトン大学（ネブラスカ州オマハ市）の日本語日本文化研修が本学草薙キャンパスを中心に行われた。今年は昨年より3名多い9名の学生が、昨年と同じ2名の引率教員と共に参加した。この間、クレイトン大学の学生たちは、本学の外国語学部などの学生宅や静岡市国際交流協会から紹介された家庭にホームステイをした。

まずは受け入れ態勢を整えるため、ホストファミリーの募集を4月から本格的に開始したが、昨年と同様、なかなか必要なホスト家庭がすぐに集まらなかった。上記交流協会のお力添えもあり、ようやく何とか数が揃ったのは



静岡のお茶文化「抹茶ジェラート」

6月も上旬。クレイトン大学からは、個々の参加学生の「ホスト家庭希望条件」を提示されていたが、特に難しかったのは、食物動物アレルギー・禁煙・いわゆる「ビーガン」への対応や通学方法など、諸条件をパズルのように解きながら進めたホスト家庭とのマッチングであった。4週間の研修中、クレイトン大学の各学生が2週間ずつ2家庭に滞在することを原則に、最終的には、11名の本学学生（英米語学科生7名・GC学科生2名・教育学部生2名）と英米語学科教員1名の家庭および国際交流協会推薦の4家庭に受け入れていただくことになった。今後の研修受入れでは、恐らく、このホスト家庭募集が最大のネックになるものと思われる。学生や先生方の協力、そして静岡市国際交



学習補助の学生と（FLSSCにて）

流協会との連携が何よりも不可欠である。

また、草薙キャンパスにおける平日の授業日には、午後の時間を利用して「学習補助学生」(Study buddies)を今年も採用した。週に延べ約30人の学生が小集団に分かれ、クレイトン大学生2～3名と1つのグループになり、ほぼ毎日、午前中の日本語授業の復習や課題を手伝ったり学内外の生活の面倒を見たりする役割である。中には、ホストファミリーの学生も含め、静岡市街だけでなく東京まで一緒に出かけたグループもあったようである。学習補助に関しては、午前中のクレイトン大学日本語クラスに本学の補助学生も参加した上で復習や課題のお手伝いが出来るようになると、「学習補助」がより効果的になるのではないか。ただし、これには本学の補助学生が受講する授業や時間割を調整するという難題も含まれるため、具体的な制度化には解決すべき点が多い。

さて、4週間の研修プログラムについては、これも昨年と同様、基本的に平日午前中はクレイトン大学から引率してきた先生方による初級日本語クラスと個々の課題に基づく日本研究クラスが組まれた。実はこの研修は、クレイトン大学の夏期休業中に集中開講される「全学部共通教養科目」で、色々な学部の学生が参加している。従って、東京に現地集合するまでは、ほとんどの学生がほぼ初対面という状況である。しかし今年の9名も、お互いに仲がよく、品の良い落ち着いた真面目な感じの学生たちという印象を持った。

さらに研修中の平日午後には、学内外でいろいろな活動も計画された。昨年と同様、学外の企画については静岡市国際交流協会や静岡市教育委員会にご手配をいただき、学内においては学生課や英米語学科の協力を得て、以下のような訪問・見学・交流が実施された。ただし今年の反省として、学外企画をやや「欲張った」感もあり、引率教員も「ちょっと忙し過ぎたか、、、」という反省をしていた。むしろ、第2週目土曜の近隣観光地への日帰りバス旅行を今年は止めたが、これが返って休養日となり、結果的に良かったとも言える。



静岡市長への表敬訪問

【静岡市関係の主な活動】

●清水桜ヶ丘高校および静岡市立高校への訪問

●静岡市長への表敬訪問および市議会議場の
見学 ●「お茶プラザ」見学および静岡茶の試
飲体験



静岡市立高校への訪問

【学内での活動や交流】

●学長への表敬訪問 ●草薙キャンパス「健笑庵」での茶道部による茶会や箏曲
部による琴の演奏体験 ●英米語学科2年生の授業「アメリカ文化論 A」への
参加と受講学生との交流 ●英米語学科1年生の授業「教養セミナー」での引率
教員による講演

【クレイトン大学独自の旅行・見学】

●広島方面への1泊旅行(第1週目の週末) ●京都方
面への1泊旅行(第3週目の週末) ●「駿府匠宿」で
の陶器作り体験(完成した器は後日アメリカに送られた)



京都への旅行

研修最終週の金曜7月12日には、夕方から学生食堂「グ
ラン・テーブル」でさよならパーティーが開催された。
今年の参加者は、クレイトン大学の学生と引率教員・ホ
ストファミリーの学生やご家族・学習補助学生・静岡市

関係の方々・本学教職員など約70名。今年は早くから学生たちに呼び掛けたこ
ともあり、参加者が昨年を上回った。この頃になると、両大学の学生たちはすっ
かり「顔なじみ」になり、昨年同様、盛況のうちに会が進んだ。途中で、日本語
クラスで練習したという「今日の日はさようなら」を全員で歌ったが、日本人学
生の多くがこの歌を知らないことに驚き、意外なところで世代の差を感じさせら
れた。最後に披露されたクレイトン大学生による日本語の「たどたどしい」お礼
のスピーチに多くの参加者が感心し、今回の研修に関わった外国語学部生たちは、
語学力向上への意欲をあらためて確認している様子であった。

研修中の授業後や休み時間には、FLSSC や学食が今年も両大学の学生にとっ

Ⅱ. 7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

て meeting place の機能を果たし、自然な交流の場になっていた。キャンパス内に日常的に外国人学生がいるという「インバウンドな国際交流」が、短期間かつ小規模ではあったが、今回も実現できた。しかし、再びやって来たクレイトン大学の研修で、幾つかの課題や改善すべき点も具体的に見えてきた。来年度の受入れに向け、三度、多くの学生や教職員の方々からご理解とご助力がいただければ幸いである。



♪今日の日はさようなら♪ (さよならパーティーにて)

新しい発見の日々

～クレイトン大学生との4週間～

18121021 大多和 留奈

今年の研修には9名のクレイトン大学生が参加しましたが、私の家庭では Ashley Edmondson さんを4週間受け入れました。

ホームステイが始まると、まず歓迎会として焼肉パーティーをしました。4週間の間には、英語に興味のある父の友人家族との交流会とディナーをしたり、三保の松原や浅間大社など歴史的な観光地への観光、カラオケやゲームセンターなどのサブカルチャーに触れる経験、他のクレイトン大学生と常葉大学の学生での東京観光、外国語学習支援センターでのスタディーバディとしての交流、誕生日が近かった



Ashley さんと兄の誕生日会、浴衣を着ての七夕祭り散策、留学生のリクエストでお箸の専門店や中華料理のレストランに行ったり、日本語学習や日本語の課題を一緒にやるなど、沢山の体験を共有しました。この中でも印象的だった出来事

がいくつかあり、その中から3つ紹介します。

1つ目は発音です。アメリカ英語の発音には「フラップT」というものがあります。これは単語中のtの発音が特定の条件のとき歯茎はじき音 /t/ に変化することを言います。私は、この現象は会話速度が早いとき起こるものだと思っていましたが、留学生にゆっくり話してもらおうと、ゆっくり話していてもフラップTの現象は起こっていました。私は音声学に興味があるので、リアルな対話を長期間経験することで、今まで知ることのなかった発音の仕組みを、身をもって知ることができ勉強になりました。

2つ目は「〇〇主義」という自分なりの主義や主張を、それぞれの学生が持っていることです。クレイトン大学の学生は皆、政治的な意見や自身の食の主義、ジェンダーの考え方など、なにかしらの具体的な意見を持っていました。日本の学生が具体的な意見を持っていないという訳ではありませんが、彼らは確立した意見を持ち、しかも、それを他人に発信していくことが得意だと感じました。彼らは信念のようなものを何か一つは持っているため、日本の学生にはないようなアイデンティティが感じられ、彼らと話していると感化されました。そう言えば、今回来日した9人の中にも、いわゆる「ビーガン」という食習慣を持つ学生が3人いました。自身の健康だけでなく環境への配慮にも、実際に行動しながら自己主張しているようでした。

3つ目は自分の血統について詳しく知っているということです。日本では体型や顔つきが周りの日本人と少し違うだけで「どこの国のハーフ？クォーター？」などと質問する姿をよく目にします。しかし、顔つきが日本人と少し違うからといってハーフやクォーターとは限らないため、日本では「クォーターみたいなもの」と適当に答える人が少なくないように感じます。ところがクレイトン大学の学生は、自分の血統について「何%はロシア、何%はフランス」など、比率まで



清水の七夕祭り散策（左から、大多和・Ashleyさん・Jessicaさん・彼女のホストをした英米語学科の河野さん）

II. 7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

詳しく知っていました。何気ない些細なことかもしれませんが、私にも周りにいわゆるハーフやクォーターの友人がいますが、クレイトン大学の学生たちが%単位で血統を知っているという事実には大変に驚きました。Ashley さんにも、中国系・フランス系などの血が混ざっているそうです。私たち日本人の多くが持たない、移民の国ならではの「常識」です。

今回ホストファミリー受入れ体験を通して、以上のような発見を得られたことは、私のこれからの英語学習に良い影響を与えてくれると思います。また、4週間という期間を通して、学習面での刺激だけでなく、彼らと共に過ごすことによって自分の生活が行動的になり、多くの人と良い関係を築くことができ、私もとても楽しい時間を過ごさせてもらいました。家庭の事情もあるとは思いますが、もっと多くの学生にホストファミリーという経験をしてもらい、日本にいらながらも、外国人との交流を深め新しい発見に繋げて欲しいと思いました。

Try することの大切さ

～そして、共生に必要なふれあい～

19121077 東原 嵯枝

大学生になり1年目の夏、私はクレイトン大学から訪れた Taylor さんという女子留学生と2週間を共に過ごしました。私の家庭に来たのは、「禁煙」・「小さい子供がいない」等という彼女のリクエストとマッチングされた結果でした。彼女が日本での短期研修に参加するは2回目だそうです。日本語の学習暦のある私より少し年上の「しっかりした感じ」の学生でした。

ホームステイ初日、私は「自分の英語力を伸ばす良い機会だ」、という期待を胸に初対面をしました。そして、いざ会話をしようと思ったのですが、



一緒に海鮮を食べました

なかなか英語が思い浮かばないのです。自分の語彙力やコミュニケーション能力の不足に不甲斐なさを感じた初日でした。そして、挫折感で始まったその日から、これを機に自分を変えるため、自ら質問をしてみたり話しかけてみようと思いました。

登下校を共にしたので、その日の出来事を聞いたり、私が日本語を教えたりしました。家に帰ってからは、私が英語の課題でわからないところがあると、彼女は、夜遅くまで教えてくれました。やがて徐々にコミュニケーションが取れるようになっていました。ある日、一緒に温泉に行ったのですが、日本の温泉を見てとても驚いていました。異なる入浴文化に直面し、彼女は慣れていないせいか、温泉への入り方を知らず戸惑っていて、たくさんの見ず知らずの人と一緒に湯船に浸かることにやや抵抗を感じていました。しかし、初めての泥パックを経験して、とても喜んでいました。

別の日には、たこ焼きパーティーをしました。どっちが上手にできるか競うほど盛り上がるのが出来ました。食生活においても、たくさんの違いを感じました。彼女が住む地域は内陸部のため、新鮮な魚介類を口にすることがあまりないそうで、海鮮を食べた時は、とても美味しい、と嬉しそうに食べていました。日本のお菓子が大好きで、よく甘いものを一緒に食べました。今回来日した学生の中にはベジタリアン（いわゆる「ビーガン」）である、という人もいましたが、Taylorさんは、なんでも美味しそうに食べていました。このように、衣食住の異文化体験を共有することが、今後、日本だけに限らず、世界中で人々が共生していく時代には、とても大切なのではないかと感じました。

授業のある普段の学校生活の中では、私の友達と何人かのクレイトン大留学生と一緒に昼ご飯を食べました。いろいろな話題について話しましたが、アメリカの学生たちは、政治に関心があり、自分の意見を持っていました。その点、日本の学生たちはあまり政治に関心のない傾向があります。ここは、見習う点なのではないかと感じました。他にも、将来どのような職につきたいのか等のお話をし、お互いへの理解を深めていきました。みんなで精一杯の英語力を使って会話をしたことは忘れません。

Taylorさんの滞在中、たくさん国際交流をすることが出来ました。私には姉がいなかったので、いつの間にか彼女が姉のような存在になっていて、気づけば

II. 7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

英語で会話している時間が楽しい時間となっていました。そしてお別れの日、さよならパーティーが大学の学食で開催され、留学生が日本語で感謝の手紙を読んでいる姿を見て感動しました。

今回のホストファミリー体験を通して Taylorさんと寝食を共にしながら生活し、色々な日本文化の体験を共有することが出来ました。今後、日本では地域における日常的なグローバル化、つまり、「グローカル化」が進むと思います。異なる文化の人々が共生していく上で、個人レベルでの直接的なふれあいが、非常に重要なのではないかと考えます。

さらに、私がホストファミリーになるという経験を経て、英語が思うように喋れない、という大きな障害にぶつかりましたが、その障害を乗り越えるためには、Tryすることが大切だということも改めて実感しました。完璧な英語を話す必要はない、コミュニケーションを取ろうとする気持ちが必要です。この経験を忘れずに、何事にもTryする気持ちを持って、残りの大学生活や英語の勉強に、日々精進していきたいと思っています。



さよならパーティーで
(左から) 私・Taylorさん・私の母

8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み

大学の枠を越えた東アジア研究の交流

外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年 小柳 直人

6月8日(土)－9日(日)の2日間にわたり、南山大学と中部大学で開催された五大学合同ゼミナールに、本学外国語学部若松大祐准教授の引率のもと、本学外国語学部から4名の学生が参加しました。

大学	引率教員	学生
中部大学 国際関係学部	大澤 肇	8名
常葉大学 外国語学部	若松 大祐	4名
名古屋大学 文学部	土屋 洋	3名
南山大学 外国語学部	宮原 佳昭	3名
立命館大学 文学部	宮内 肇	10名

このゼミナールの主旨は、東アジアについて関心のある学生が自らの関心をより深め、同時に新たな分野への関心を持つように試みるところにあります。そのために、参加者は自らが持つ疑問の解明に接近すべく、関係する書籍を取り上げて得られた答案を発表します。また、他の参加者の発表を聴いて質問し、議論を展開します。本学から参加した4名はそれぞれ、下記の書籍に即して発表を行いました。

学生	取り上げた書籍
佐藤文香 (4年)	プラトン(藤沢令夫訳)『国家』岩波文庫、2008年。
風岡花菜 (3年)	貴志俊彦『東アジア流行歌アワー ― 越境する音交錯する音楽人』岩波現代全書、2013年。
小柳直人 (3年)	朝元照雄『台湾企業の発展戦略 ― ケーススタディと勝利の方程式』勁草書房、2016年。
原田佳奈 (3年)	森本喜久男『カンボジアに村を作った日本人』白水社、2015年。

II. 8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み

<他大学の学生が取り上げた書籍>

初山明『漢帝国と辺境社会 — 長城の風景』中公新書、1999 年。

毛里和子『日中関係 — 戦後から新時代へ』岩波新書、2006 年。

廣瀬陽子『ロシアと中国 — 反米の戦略』ちくま新書、2018 年。

田中史生『渡来人と帰化人』角川選書、2019 年。

石毛直道、黄慧性『韓国の食』平凡社ライブラリー、2005 年。

園田茂人『不平等国家中国 — 自己否定した社会主義のゆくえ』中公新書、2008 年。

丹羽宇一郎『中国の大問題』PHP 新書、2014 年。

青樹明子『中国人の頭の中』新潮新書、2015 年。

大島正二『漢字と中国人 — 文化史をよみとく』岩波新書、2003 年。

小野秀樹『中国人のころ — 「ことば」からみる思考と感覚』集英社新書、2018 年。

西本紫乃『モノ言う中国人』集英社新書、2011 年。

岡部佳子『中国人観光客の財布を開く 80 の方法』新潮新書、2017 年。

丸川知雄『現代中国の産業 — 勃興する中国企業の強さと脆さ』中公新書、2007 年。

[1 日目] 6 月 8 日 (土)	10 : 00 – 10 : 30	アイスブレイク
	10 : 30 – 18 : 00	発表
	19 : 00 – 21 : 00	懇親会
[2 日目] 6 月 9 日 (日)	9 : 30 – 11 : 00	発表
	11 : 30 – 18 : 00	フィールドワーク
	18 : 00 – 20 : 00	懇親会

1 日目の発表は、南山大学にて行われました。まずアイスブレイクを行い、そして発表に入ります。他大学の学生が持つ自身の興味関心に対する熱意にやや圧倒されつつも、本学の学生も堂々と発表を行っていきます。また、自発的な質問も大いに飛び交い、活発な議論の場となりました。

〈外国語学部英米語学科 3 年 原田佳奈〉

私は、「持続的な支援とは何か」というタイトルで発表しました。もともと東南アジアの発展途上国を対象とした国際支援に興味があります。そこで、実際にカンボジアに渡って支援を行った日本人の執筆した本を、取り上げました。自身の関心のある研究課題を大勢の前で発表する機会はそれまで無かったため、とても貴重な体験となりました。今回は東アジアについて専門的に学んでいる学生が多く参加していたので、私にも新たに勉強してみたいテーマができました。

夜は名古屋市内の飲食店にて、懇親会を行いました。発表を振り返ったり、2日目のフィールドワークについて打ち合わせをしたり、さらには参加者の出身地や所属大学などを話題にして盛り上がり、親睦が深まります。

〈外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年 佐藤文香〉

懇親会で他大学の学生と話してみると、互いの大学生活や地元の話題で盛り上がり、すぐに打ち解けることができました。翌日のフィールドワークの打ち合わせもかねて連絡先を交換したり、フィールドの候補を挙げながら、フィールドワークで同行するメンバーの趣向を知ることができました。こうして、翌日のフィールドワークがとても楽しみになっていきます。

2日目の発表は、中部大学にて行われました。前夜の懇親会があったため、発表がより和やかな雰囲気が進みます。また、単に個別の発表に対して質疑応答があるのでなく、複数の発表を横断しての質疑応答が展開され、議論がさらに深まりました。午後には、5つのグループに分かれて名古屋市内でフィールドワークを実施します。各グループがそれぞれテーマを定め、テーマに沿った場所へ足を運びました。

〈外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年 風岡花菜〉

私たちのグループは「名古屋を知る」というテーマを立てて、矢場とん、大須、名古屋城に行きました。私たちのグループには愛知県出身者がいなかった

Ⅱ. 8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み

ため、比較的に王道ともいえる観光地を巡って、食、歴史、買い物を楽しみました。名古屋城では忍者と一緒に写真を撮ったり、本丸御殿を見学したりしました。また、地元の方から周辺のお話を聞くこともでき、名古屋を満喫しながら、グループのメンバーの親睦を深めることができました。

夜にはフィールドワークの成果発表も兼ねての懇親会がありました。成果発表によれば、同じ名古屋市内であるにも関わらず、各グループはそれぞれ異なったテーマで様々な場所を訪れ、多様な体験をしています。最後は南山大学と中部大学の学生と先生に名古屋駅の新幹線改札口までお見送りいただき、2日間の活動が終わりました。

本学から参加した4名の学生にとって、このたびの合同ゼミナールは、自らの研究関心を授業や学内で完結してしまうのではなく、学外へ発信するという貴重な経験となりました。同時に、他大学の学生の発表を聞いたり対面で交流することで、自分自身に新たな興味関心が生まれる機会ともなりました。さらには、レジュメの作り方や発表の仕方といった実務を学ぶこともできました。今回の合同ゼミナールをきっかけにして、今後は自らの学びを学内外を問わず、大いに展開していきたいと思っています。

〈外国語学部グローバルコミュニケーション学科准教授 若松大祐〉

他大学からの参加者はすべて、1年間から2年間にわたって特定の教員の指導を定期的に受けるゼミに所属しています。これに対し、本学からの参加者はこのたびの合同ゼミのために即席で組織されました。したがって、本学の学生はあくまでも課外活動として、しかも1ヶ月という短期間で、今回の合同ゼミのための発表を準備しています。合同ゼミの当日、本学学生は堂々と発表しており、また挙手してたびたび質問しており、引率教員として頼もしく感じました。このたびの経験が今後に活きるにちがいありません。情報を集めるには、図書館へ通うことが必須です。

遅読のすすめ

19122023 荻野 俊輔

みなさんは遅読を知っているだろうか。遅読とは一般に、ゆっくり理解しながら読むことである。しかし今回はそれに加えて、一つの本を区切りながら読むという意味にしよう。この遅読は、私が 2019 年度前期の授業で身に着けた読み方である。なんのことはない、授業で一時限ずつ教科書を区切って読むのと同じ読み方だ。

遅読は、一回に読む量が少ない。そのために集中力を切らしにくく、何度も読み返しやすく、内容もまとめやすい。

「世界の宗教と民族」(担当教員：若松大祐)という授業では、脇本平也『宗教学入門』〔講談社学術文庫〕(東京：講談社、1997 年)という学術書を扱った。この本では宗教学の立場から宗教について書かれている。宗教学の立場とは、宗教について、客観性を重視すること、人間の営みの一局面としてのみとらえること、様々な宗教を比較しその特徴をとらえること。以上三つの観点から宗教をとらえようとする立場である。この立場に立って、『宗教学入門』では宗教を構成要素に分けて説明している。

大学生になりたてだった私は、大学生らしい勉強ができると喜び勇み、勢い本を読んだものの、すぐに放り投げた。どうしてこんな本が理解できるだろうか。最後まで読んで残ったのは、疲労と疑問だった。

その後、授業が始まると予習が必要になった。範囲は 20 ページほどに限られていたので、その日の内に電車で読むことが続いた。授業では本文について何かしらの感想を発表しなければならなかったのが、繰り返して読んだ。そうしていくうちに、一度読んで分からなかったはずの内容が次第に分かるようになってきたので驚いた。読み方に何の違いがあったのか。

そこで私が気づいたのは、本によって読み方を変えるべきだという単純なことだった。私は、これまでどんな本も物語を読むように話の展開で読んできたが、今回の学術書に関してはそうではいけない。一文ずつ丁寧に読み進めないと、文意を取り損ねる。そして丁寧に読むには、例えば章ごとのように区切って、ゆっ

くり理解しながら読む必要があるのだった。

遅読のもっとも難しいところは、何度も読み直し始めなければならないことだ。何事も始めるのが最も大変である。その点、授業という強制力ありがたい。後期になりやっかいな「世界の宗教と民族」という授業はなくなったものの、これからも学術書に親しみ、遅読に勤しんでいきたい。

植民地から生まれた現代

若松 大祐

常葉大学が2019年度に静岡市生涯学習センターと共催講座を開催するにあたり、外国語学部は「植民地から生まれた現代」と題して、三回の公開講演を実施した。毎回10名強の参加者があり、意欲的な参加や積極的な発言のために、外国語学部教員は講師としてやりがいを大いに感じた。

共通テーマ：植民地から生まれた現代～韓国・台湾・ブラジルの新しい見方～

場所：薬科生涯学習センター（〒421-1217 静岡市葵区羽鳥本町5番9号）

主旨：韓国・台湾・ブラジル、静岡に住む私たちにとっては、旅行・インバウンドやコミュニティで接することが多い。三つの地域に共通する「植民地」という経験を手がかりに、ひとと文化の特色を考えてみる。

(1) 11月16日(土) 14:00～15:30

講師：若松大祐、外国語学部グローバルコミュニケーション学科・准教授

題目：植民地経験と切り離せない台湾の近代

概要：まずはそもそも植民地とは何か、近代（≒現代）とは何かと改めて問う。

その答案から、台湾の過去、現在、未来を概括的に眺めてみたい。＜参考文献＞『台湾を知るための60章』（明石書店、2016）。

(2) 11月30日(土) 14:00～15:30

講師：江口佳子、外国語学部グローバルコミュニケーション学科・准教授

題目：ブラジルと日本、異文化社会で生きること

概要：現在、日本に暮らすブラジル人の多くは、ブラジルで日系社会を築いた日本人移民の子孫です。本講座では、移民文学に描かれた、異文化社会を生きた日本人の姿を手掛かりに、共生社会について考えます。

(3) 12月7日(土) 14:00～15:30

講師：福島みのり、外国語学部グローバルコミュニケーション学科・准教授

題目：文化と政治からみる韓国社会

概要：日韓関係が史上最悪と言われる一方で韓流ブームの真っ只中にある日本。では、韓国はどうなのでしょう。本講座では、日韓の歴史を踏まえ、文化と政治の視点から韓国社会を読み解いていきます。

Skills Through Experiences

17121142 Mai Watanabe

By learning English, people can improve various skills related to writing, reading, grammar, and so on. There are 3 skills that I gained thanks to a lot of experiences: listening skill, speaking skill and vocabulary skill.

First is my listening skill. I began to improve my listening skill when I was 7 years old. I started going to English conversation school at that time. That was a small class with 1 native teacher (He is from California) and 1 Japanese teacher. Even though it was a small class, I used to listen to Western music and listen to my teacher's own songs with my friends. The teachers made us take dictation to improve our listening skills. The effect became clear when I passed the Eiken pre2 exam when I was a sophomore at junior high school. I think that I have become accustomed to English because I've listened a lot since I was at this classroom.

Second is my speaking skill. I began to improve my speaking skill when I was 17 years old. I went to Australia to study abroad from August to

Ⅱ. 8. (学部共通) 学内外での教職員や学生の取り組み

November in the same year. I stayed with the Isla family. They are from the Philippines. Therefore, I encountered not only English, but also Filipino every day. I didn't know Filipino, so when they spoke Filipino, I could only just nod or make an agreeable response at first.

However, when it was about a week after that, I thought that it would be no good, so I started to speak positively with some gestures. Then, it became possible to be able to organize in my head what I wanted to talk about it, and I thought that my speaking skill grew sharply.

Last is my vocabulary skill. I began to improve my vocabulary skill at the same time as my speaking skill. Before I went to study abroad, I was trained by vocabulary tests at 8 o'clock every morning at high school. However, that was not enough at all. I was carrying around the word book that I used regularly even while studying abroad, and I asked my host mother to test me daily. I continued this style for about 3 months every day, so when I finished studying abroad, I was full of a sense of accomplishment.

In conclusion, I acquired such skills through my great experiences. These experiences have really helped me. Also, I could encounter my precious teachers and host family. Therefore, I would like to cherish my English skills for my future.

9. [共催] 現職教員向け研修会および研究会

英語教育公開研修会

佐野 富士子

大学の地域貢献のひとつとして、本学卒業生への情報発信の場として、2016年度から英語教育公開研修会をスタートさせ、今年(2019年度)で4年目になりました。本年度開催の背景には流暢さと即興性を求める時代の流れがあります。本年度の公開研修会も大学英語教育学会の JACET SLA 研究会との共催で開催しました。

[研修のねらい]

中学生、高校生、大学生が将来、グローバルな場で英語を使うことができるよう、世界共通語である英語を使う力を育成する言語活動について、実践的なアイデアの紹介とその背景にある理論を解説し、参加者に言語活動を体験していただきました。

[内容]

日時：2019年10月5日(土) 15:00-17:00

会場：常葉大学(草薙キャンパス) A棟 306教室

参加費：無料

プログラム：

- (1) 「即興性につなげる言語活動」 鈴木洋介(元大井川中学校教諭)
- (2) 「流暢性を育成する言語活動」 甲斐順(神奈川県立柏陽高等学校統括教諭)
- (3) 「主体的・対話的で深い学びを促す言語活動」 佐野富士子(常葉大学外国語学部教授)

当日は県の東部や西部からも参加者があり、今後もシリーズで開催してほしいとの要望ができました。

Ⅲ 英米語学科

1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

The 2019 Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest

Aya Motozawa

The annual Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest was held in Kusanagi Campus on 3rd December 2019. This contest honors the memory of Catherine Sasaki. She taught at Tokoha for many as a member of the English department until she suddenly passed away from cancer in 1997. According to Zushi sensei, the only teacher who directly knew and worked with her, Catherine was a third-generation Japanese-American teacher and always serious about cross-cultural issues. She was also an energetic, positive, and devoted teacher in the early stage of the English department, when studying abroad programs (such as long-term abroad programs, summer and spring seminar) started. One of her biggest effort was to reform this speech contest from the former too-rigid style into today's less formal type of event.

In addition to remembering Catherine Sasaki, this year's contest honored two other professors from the Faculty of Foreign Studies: Professor Yoichi Kuwahara and Professor Tomoko Inoue. They both passed away from cancer (Professor Kuwahara five years ago and Professor Inoue one year ago).

A total of 19 speakers participated in this year's contest: 10 students into Division 1 for 1st and 2nd year students, and 9 students into Division 2 for 3rd and 4th students. The judges were Mr. Kevin Demme and Mr. Peter Hourdequin from the U.S., and Mr. Robert McLaughlin from Canada. Ms. Mari Hamada from Foreign Language Study Support Center (FLSSC) and 9 student volunteers also assisted this year's contest. In this contest, speakers

have a choice of two topics to make their speeches. This year's themes were:

(1) What are some ways to learn English that have worked well for you, and why?

(2) What is your motto (what are some words or ideas that you live by)?

Here are the winning speeches from each Division.

【入賞者のスピーチ原稿】

《Division I》 優勝

Every Cloud Has A Silver Lining

19121104 Yukari Yagi

I still remember when I first moved to Japan from the Philippines. I didn't have friends. I didn't have anyone to talk to. I couldn't talk to anyone. I was alone and I blamed myself for it. I thought maybe they don't want to be friends with me because of how I looked. Or maybe because I was a foreigner who couldn't even speak their language, even if I don't look like it. Or maybe because I was me. I ran to my teachers for help but they just basically ignored me. I looked like a normal Japanese girl and everyone assumed I can speak Japanese which is far from the truth. I tried explaining it but they never really listened. They didn't care so much because I don't look like a foreigner. I wasn't anyone special. They might have thought I was just making excuses not to study. I didn't do so well in school and I fell behind in class. Not because I'm not studying enough but it's because I couldn't understand what anyone was saying. I needed help but they just told me to study more. However, if I made a mistake in class they would make fun of me. It was never in a joking way but in a way I was treated as if I was stupid. Not only my classmates but my teachers as well. I started to question my worth. I hated myself and I became a totally different person. I was so excited about knowing the Japanese side of me but I lost my identity

III. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

instead. I fell into this pit of loneliness and sadness, but I'm still thankful this happened to me.

I was alone but I had more time for myself. I started to draw and paint. I listened to music. I enjoyed singing and writing songs. I studied English by myself. I read so many books and I even wrote poems. I realized that being alone wasn't quite bad after all. I was alone but I was having so much fun. I was happy with myself by myself and I didn't feel so lonely anymore. I had deep thoughts and think about who I am, what I like, what I want to do. By being alone, I found myself. I used to hate the fact that I was half Japanese and half Pilipino but now I know I have the best of both worlds. After being bullied, I should want to go back to the Philippines but I've come to love Japan instead. Everything is so beautiful here. Not only the culture but the people as well. I looked at everything from a different perspective. I know the importance of education because I did badly in school. Since I know how it feels to be alone, I valued my friends and I valued my family more. I valued myself more. I learned to be more compassionate because I know how it feels to be hurt. I learned to be content with myself because I didn't like myself. Now I don't need validation from anyone but myself. I learned that being somebody I'm not just for someone to stay won't make me happy. I learned to love myself because someone else hated me.

My motto in life is simple and short. "Every cloud has a silver lining." Even with the darkest cloud, light will still somehow shine through. It means that even in the worst possible situations, like being bullied or being alone, there's a good aspect to it. It's in the matter of our perspectives and how we change. My life became so much better because I looked for the silver lining. I hope you do too.

《Division 1》 2 位

Gender Discrimination

18121037 Kaho Sagawa

“You don’t need to go to university because you are a girl.” Do you think that is old fashioned? Many of you may think “Yes, it is old fashioned.” But this is what my mother told me two years ago. Gender discrimination is deeply rooted in my family. “I don’t want to be tied by gender.” This is my motto.” So today I would like to tell you about my motto. Why I don’t want to be tied by gender and I have it in my mind.

When I was a junior high school student, I liked to study English. So I wanted to study English in high school. When I was third grade in junior high school, my mother said to me “You should go to commercial high school and you don’t have to go to university after that because you are a girl.” I was surprised and speechless. Of course I didn’t want to go to commercial high school. So I didn’t listen to her and I studied very hard. I got a scholarship at then and went to high school I can study English despite my mother’s objections. In high school, I belonged to the English Speaking Club. And I went to America during the summer vacation. Then I thought I wanted to get a job related to English. So I said to my mother. “I want to go to university.” However, my mother said to me. “What will you do in university? Even though you graduate and get a job, when you marry, you will retire.” I cried that night. My mother always told my brother “You should study in college.” However, my mother thinks I don’t need to go to university only because I am a girl. That time I was going through a rebellious age. So my mother’s opinion made me think that I want to go to university even more. Again I didn’t listen to her. I decided to go to university and majored in English and communication.

This experience made me think about gender discrimination. After

III. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

entering university, I wanted to think about it more deeply. I joined a meeting where we can talk about gender and I also sent my opinion about gender to a newspaper. Through such various experience, I realized discrimination is not only against woman but also against man or sexual minority in the world. And I learn the current situation of gender discrimination. The situation is more serious than I thought. I despaired that. That time I asked my father. “What should we do to get rid of gender discrimination in the world?” My father said to me. “You are the one who is the most tied by your gender. It is important to get rid of gender discrimination. But the most important thing is being yourself.” The word made me realized. Gender equality does not mean that we don’t suffer from gender. Gender equality means that we can choose our own life without being influenced by our gender.

“Do not be tied by gender.” That is very difficult. However, you can change your life if you take an action. When I was a high school student, I wanted to change my life and took an action. So now I am here. I hope this speech will be a good opportunity for you to think about your life and your gender.

《Division 1》3位

No Pain No Gain

19121079 Pirote Meichsel Reyes

Learning Japanese was the most difficult and challenging thing I have ever done. It was hard in many ways but mostly because I had to study all by myself. My mom is always been very supportive especially during hard times but learning Japanese a lot faster was always depended on whether I push myself to the extent of my ability. I thought that learning the

language in a slow manner is perfectly fine and understandable specially on my case since I wasn't born here in Japan, additionally, in my own immature understanding, I really thought that everybody will cut me a lot of slack and casually enjoying my childhood by playing and goofing around is excusable.

I thought wrong, because when my mother found out that I wasn't taking the study seriously, I had to take extra classes and put some additional hours in Kumon to study the 3 sets of Japanese writing. All those times I convinced myself that everything was easy and I can master Japanese language in such short time. But it turned out it is all the opposite of everything which means that I really have to work at the best of my ability.

After a few months, my listening skills are getting better and there was the pain starts. I finally understand what my classmates are bad-mouthing about and found out that most of them referred to me. There were a couple of times that I cried in the bathroom and tried very hard to conceal my feelings. It's all very painful and I really thought that it was the most depressing moment of my life but it was not even close to what happened to me a few days after, I was bullied... This is where my mom intervened. She talked to my adviser and settle things out, after helping me with the issues at school; we also had this closed door meeting two or three times a week. She also said that this is just the tip of what I will experience living here in Japan, dealing with people and adjusting to everyday life. There will be pain and difficulties during the process but my mom says she will be my guide and mentor along the way.

Following my mother's advice, gradually, I can be able to cope up with even the most difficult situations during my Junior and Senior HS year.

I'm just glad that I found the bright side in every bad situation I had and that is what kept me going.

Finally, I've learned that there will always be pain, struggles, hardships and obstacles in our life, but we will also gain and learn something at the

end of the day, meaning you have to do something to be able to gain something, hence, my motto, no pain, no gain.

I am actually really grateful that I had those experiences because if it were not for them I would not be the person that I am now today.

That's all, thank you.

《Division 2》優勝

You Only Live Once

17121073 Chihiro Suzuki

“You only live once.” I’ve heard of this saying in many situations, but I had never cared about it before. However, a person I met in Canada changed my perspective. Now, not only this saying resonates in my heart, and it also always leads me to a better way to live. Therefore, I decided to take part in this contest, because “you only live once”.

When I was a high school student, suddenly my world completely changed. At that time, I had a lot of problems related to study, family and my club activity. I was troubled every day, but I didn’t talk to anybody about these problems. One day, a big incident happened. I lost hearing ability in my left ear. I went to a hospital, but the doctor said my hearing ability would never come back again. Furthermore, she didn’t know why it happened, and whether I could keep hearing in my right ear or not. At that moment, my mind went blank. I didn’t want to believe what she said. Why did it happen? Why me? I asked myself again and again, and I cried every day and every night. I thought I’m not normal and people would feel I’m strange, so I didn’t want anybody to know about my hearing problem, and I hid it from people around me. Of course, it wasn’t easy to get used to listening with only my right ear. Naturally, some of my friends started to

ask me “are you listening?” “Why do you always ask again?” Those questions tortured me. I thought of myself as the most miserable person in the world, and I gradually lost my confidence.

Then there came a turning point. Last year, I went to Canada for study abroad, and I had a home-stay there. My host family was actually only a host mother. It was just me and her, so I decided to tell her about my secret. I said “I can’t hear from the left side, because I lost my hearing”. She wasn’t surprised at all, so I continued “I don’t want anyone to know about it, so could you please keep it secret?” At that moment, her face got clouded, and she said “it’s okay, but I don’t recommend your way of life”. I didn’t understand why she said that, so I asked her what she meant. Then she said “if I were you, I wouldn’t hide it and I would accept all of myself”. Then she continued “you can walk on your runway at your own speed. You don’t need to compare yourself with other people. You only live once. You should enjoy your life. Then and only then, you will be full of smiles and happiness”. Her words made me think that I had to change myself, and accept who I am, so I decided to share my problem with my close friends. After that, their attitude toward me changed. For example, when I walk with my friends, they naturally walk on my right, and when I sit in the train, they give a left side seat to me. As a result, communication with them has become much more smooth.

At first, it took a while to accept my problem. I felt a cold attitude from people around me. However, I realized that being a deaf in one ear gave me many good things. I can feel people’s kindness. Her words changed my way of thinking. “You only live once”. Thanks to her I became stronger. Now, I can say I am the happiest person in the world, and I am proud of myself.

《Division 2》2位

My Motto

17121074 Tsuyoshi Suzuki

‘Stay hungry and stay foolish’. These are the words that were said by Steve Jobs in 2005 at the graduation ceremony of Stanford University. Actually, these words are really famous, and a lot of people have been inspired by them. Before I talk about how I live by this motto, let me explain his life briefly. Now, he is well-known as one of the most successful people in the world. As you may know, he used to work as CEO of Apple, and he pioneered personal computers. At that time, his invention sold like hotcakes and Apple became a symbol of the Silicon Valley. However, life is like an endless series of climbing mountains with only brief breaks, and it was time for him to return to climb up a steep hill. His company’s business slumped, and he was in danger of getting fired. Unfortunately, he was finally kicked out of his position. Even after he got fired by his own company, he never gave up. What he did was he started his own company from scratch, and then he could return to his position at Apple. At almost the same time, he found out he had cancer. These stories are just part of his life, but we can easily understand that his life sometimes had rough sailing.

At the Stanford graduation ceremony, he mentioned three things; his life, love, and his death. He concluded his speech by saying, “Stay hungry and stay foolish.” It doesn’t mean we need to always feel hunger, or we are supposed to act stupidly. He meant that even if we face big difficulties in our lives, we must not run away from them. Just see what we can do. Before I heard these words, I always looked away from my weaknesses and tended to stick to things where I could feel comfortable. I mean I didn’t like to try something new and hated changing. Especially, when I used English and had a conversation with others, I was always afraid of making a mistake. Every

time I tried to use new vocabularies or phrases, ‘the grammar teacher in my head’ was always bothering me. As a result, I just spent a boring and monotonous life. However, I believe everyone has a turning point in their life and knowing these words was the moment my life changed completely. After I watched his speech on YouTube, I was really overwhelmed, and I tried to read his feelings and think about them very carefully. Here’s what I caught from his speech. Life is moving. Life is always moving whether we like it or not. Sometimes it is happy. Sometimes it is sad. Sometimes it is surprising. And sometimes it is painful, but the pain is good for us. We need to keep growing because we are learning. Make mistakes and learn from them. Don’t let them stop you. When we feel hurt from making mistakes, learn from the hurt and it gives us a chance to be better than we used to be. With this motto, I’m here. I’m giving a speech in public with my heart. This is how life is moving and how I am living by these words. And last but not least, I would like to leave a message for everyone, ‘Stay hungry and stay foolish.

《Division 2》3 位

I am trilingual!

17121050 Michiko Kurebayashi

Hello. I am Michiko Kurebayashi. Thank you for coming today. If you ask me, “What are some ways to learn foreign languages that have worked well for you?” I can tell you many good ways to learn Japanese because that is my second language and my first language is Chinese. If you hear me speak Japanese, you would never know that I didn’t speak Japanese until I was eight years old. But my Japanese is perfect. I believe the process of learning a language is always the same. Therefore, I would like to share three good ways to learn a foreign language. Asking questions, putting

III. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

yourself into a challenging situation and speaking up.

First, you should always ask for help. My basic study style is asking someone whenever I cannot understand. I do not think it is embarrassing to ask a question. But I think many people are afraid of asking a question because they don't want to be considered foolish or stupid by other people. Even if they cannot understand something, they may pretend they do understand. For me asking questions is a matter of survival: to live or not to live. When I came to Japan, I could not understand Japanese at all. However, I had to live in the environment that surrounded me with the language I never knew. If I had not asked a question, I could not have survived. This experience taught me I should always ask questions. As soon as I entered this university, I felt in danger because I was placed in the lowest class, so I started to look for people who are good at English and decided to ask for help. I said, "Can you help me with my English? I wonder if you can be my English teacher." Many people have been helping me since then.

My next piece of advice is "put yourself into a challenging situation." I don't get motivated without challenging tasks. I can never study voluntarily, so I always set many challenging goals for myself. Joining the teacher's license course is one example. In order to get into the course, I had to meet many criteria. It was very hard for me who was not good at English. So, I studied very hard. This speech contest is another example. I spent hours writing this speech. A final example is my teaching at a cram school. I teach junior high and high school students. I have to study so hard to teach them. I improve my English skills together with my junior high school students although I can never say that to their parents.

And last but not least, "you should speak up." I really like to speak with other people. It is one way for me to keep my Chinese speaking skills in Japan. Unfortunately, my brother has already forgot most of his Chinese because he does not speak at all. Sometimes I cannot really understand why many people do not want to speak the language they want to acquire. Maybe

they are afraid of making mistakes. In my opinion, if you do not try to speak, you cannot notice what you don't know.

I really did not like English before I entered this university because there weren't very many people to ask questions to, I did not feel so much value in studying English, and I did not have any opportunities to speak English. However, since I started to apply these ways to learn English, my English skills got a lot better. Luckily, some of my friends are very good at encouraging me. They often cheer me up saying "Your English skill is really getting better compared with when you entered this university!" I am really happy to hear those words.

I want to keep studying English, and in the near future I would like to puff out my chest and say "I am trilingual!"

《Kuwahara • Inoue Award》

Where is your happiness?

18121120 Hayata Yuhara

Are you happy? When do you feel your happiness?

My motto is happiness is not having what you want, it is appreciating you have known.

One month ago, I had a huge accident. While I was riding a bike down a mountain road, I slipped and was seriously injured. I was taken to the hospital, and I found that I had broken my face and my collarbone. Of course, I had to have a surgery. I was told that there would be risks that my face and my left hand might be paralyzed. I was really scared, but at the same time I was quite optimistic, and I felt somewhere in my heart that the surgery would succeed. However, after the surgery, the risks the doctor told me really happened. I couldn't move my hand. I feared that I would not be

III. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

able to do anything by myself like getting up, washing my body, or even just holding a pen. I was very stressed. I was mad at the situation, and I took my stress out on my family. And actually, I wanted to die.

However, I had a lot of people who supported me, my family, friends, and teachers. My mother has a job, but she came to the hospital almost every day, and she helped me with everything which I couldn't do by myself. Also, my friends came over after school and on weekends. I was very happy whenever I saw them, and many people sent me lots of words which encouraged me. I can never thank them enough. Moreover, my advisor, Ms. Shibata took care of me and she really worried about my recovery like my mother.

Through this experience, I noticed one thing. That is, I am really blessed with people around me. Before this accident, actually, I didn't express my appreciation enough to the people and things around me. I thought it was natural to have my friends and my family, and I took everything for granted, but these are not natural. I couldn't get over this accident if people such as my family, friends, and teachers weren't there. And now I am alive, and I can do many things, which is amazing. I learned I should thank not only people around me but also my life.

Now , I would like to be thankful for what I have. And I want to help people as I was given lots of love from my family, friends and teachers. How about looking for happiness around you?

Thank you very much for listening.

【入賞者のスピーチの感想】

《Division 1》 優勝

どんなに困難なときにもよいことは必ずある

19121104 八木 友香里

私は人前で話すのは苦手で、自分からスピーチコンテストへの出場を決めたのは、1年前の私からすると考えられないことでした。しかし、大学に入学したら私は何か新しいことに挑戦すると決めていたので、2019年12月3日のスピーチコンテストに参加しました。

毎年、Catherine Sasaki Memorial Speech Contest には二つのテーマがあり、今年のテーマは “What are some ways to learn English that have worked well for you, and why?” または、 “What is your motto (what are some words or ideas that you live by)?” でした。そして、私は二つ目のテーマを選ぶことにしました。スピーチコンテストで一番辛いのは人前で話すことではなく原稿作成をすることです。悩んだ末に結局私は、全く違う三つのスピーチ原稿を書いてしまいました。このように悩んだ末に私が選んだモットーは “every cloud has a silver lining” で、日本語の直訳は「すべての雲には銀の裏地がある。」ですが、本来の意味は「どんなに困難なときにもよいことは必ずある」という訳になります。

外国語学部の学生ならば、第二言語としての英語を学んでいて、私のスピーチを理解してくれると思い、私はフィリピンから日本に引っ越して来たときの話をしようと思いました。そして、それは、多くの人にとって何らかの助けになると考えました。少しパーソナルな話で、できるだけ自分のことばで書きたかったので、原稿を先生方にチェックしてもらうことは、敢えてしませんでした。準備する時間はほとんど原稿を完成することに取られてしまい、練習する時間は限られていました。三日間しか練習できず、全然暗記ができなかった私は、入賞することはあり得ないと感じていました。しかし、驚くことに私は1位になりました。私の同級生や先輩たちのスピーチを聞いてみると、スクリプトをまったく見ないで完璧なスピーチをした出場者もいて、自分のスピーチと比べると、本当に素晴

らしいと思いました。そして、私はといえば、暗記が不十分だったので、スクリプトをちらちらと見てしまい、しかももっと大きい声でマイクを近づけて話せばよかったなどと反省するばかりでした。しかし、Rob 先生から話を聞くと、「何も見ないで、緊張のあまり肝心のスピーチを忘れてしまうよりは、スクリプトを手元に置いて、言いたいことをちゃんと伝えればいい。」とアドバイスを受けました。これはまさに私がスピーチから学ぶべきことでした。悪いところばかりを探すのではなく良かったところを探すことの方が大事なのだと。審査員からもらったコメントを見ると、私の話すペース、イントネーション、文体の使い方などが高く評価されていて、オーディエンスと視線を合わせていた点も大変良かったことが分かりました。何よりもスピーチの構成と内容がよくて、パワフルなメッセージだったと言われました。自力で作ったスピーチはこんなに褒められて、幸せな気分です。不安や悩みだらけの中で、参加してよかったと思います。

この文章を読んでいる人の中には、来年度のスピーチコンテストに参加しようかどうか迷っている人もいると思います。原稿を完成するために悩んで苦勞し、多くの時間を費やすのは本当に大変で、しかも本番で大勢の人前で発表するのは本当に緊張します。それでも、私は頑張り、最後までやり遂げることができました。達成感を味わい、自分の成長も確認できました。このような経験は今しかできないと分かりました。ですから、どうぞあなたもこのチャンスを見逃さないでください。

私の練習を聞いてくれた友達、先生たち、そして応援してくれた同級生や先輩たち、すべての人たちに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

《Division 1》2位

未来を変える

18121037 佐川 花歩

私にとってスピーチコンテストへの参加とは大きな経験を得られたということだけでなく、自分の未来や周りの人間の未来まで変えるほどの大きな出来事でした。

た。

「女の子なんだから大学になんて行かなくていいよ。」というセリフから私のスピーチは始まります。いつの時代の話だと思われるかもしれませんが、これは私が2年前に実際に言われた言葉です。そしてきっとこの言葉を言われたのは日本全国で私だけではないでしょう。“性的平等”が様々なところで言われていますが、実際私たちが学んだり体験したりする機会はそう多くありません。だからこそ、自分自身の体験やジェンダーが抱える問題について知ってもらいたいと考え、スピーチコンテストへの参加を決めました。

スピーチコンテストへ参加するにあたり、2つのことを意識しました。1つ目は聴衆に「考えて」もらうことです。私が提示した問いに対して聞いている人全員が自分のことのように考えてほしいという思いが強くありました。その為メッセージ性が強く、聞く人が心を打たれるような原稿を目指しました。何度も書いては作り直し、最終的に出来上がったのは本番の1週間前でした。根気強く付き合って下さった柴田先生には感謝の気持ちでいっぱいです。また友人の力を借り、実際スピーチを聞いて思ったことを素直に伝えてほしいと頼みました。友人の反応を見ながら、「このセリフはもっとインパクトのあるものにしよう！」など、より伝わりやすい原稿を作り上げました。

2つ目は一切原稿を見ないということです。スピーチコンテストへの参加を決めた日から毎日TEDトークの動画を見ていました。そこで気付いたのはスピーカーが原稿を見ているか見ていないかで大きく印象が変わってしまうということです。もちろん原稿を暗記している方が自信があるように見え、話の説得力も増します。したがって私も一切原稿を見ずにスピーチを行うことに決めました。本番は思っているよりも緊張せず、リラックスした状態で臨むことが出来ました。受賞者発表で自分の名前が呼ばれたときの方が緊張して足が震えていたほどです。多くの素晴らしいスピーカーの中で2位に選んでいただき、本当に光栄に思います。

最後に、私は自分の経験やこのスピーチを通して、ジェンダー研究を行う学生プロジェクトの設立を決めました。設立したことでグループのメンバーがジェンダーに対して興味を持ってくれたり、活動を通して多くの方に知ってもらったりすることは必ず“性的平等”の実現につながっていきます。冒頭でも言った通り、

このスピーチコンテストへの参加は未来を変える為の第一歩になりました。みなさんにとっても私のスピーチが何かを考えたり、変えたりする一歩になることを願っています。

《Division 1》3 位

No Pain No Gain

19121079 Pirote Meichsel Reyes

今回のスピーチコンテストでは、二つのテーマのうちの「自分の Motto について」の方を選びました。私は “No Pain No Gain” という Motto を紹介しました。日本語に訳すと「痛みなくして得るものなし」になります。正直、最初はすごく迷っていました。いろいろな Motto やことわざを知っていて、自分の今までの人生の中でそれらの言葉に助けられたことも多かったので、選ぶのに苦労しました。でもよく考えてみたら、一番人生に影響を与えてくれたのは、この “No Pain No Gain” です。

このキャサリン・ササキスピーチコンテストは、私にとって、初めての経験でした。中学と高校の時にはたくさんのチャンスがありましたが、自分は日本語の勉強に集中すべきで、そちらの方を先にやらなければならないと思っていたので、スピーチコンテストに参加するチャンスを逃してしまいました。そのため、今回のスピーチコンテストに使うスクリプトの書き方やスピーチをするときの発表の仕方などに、十分な知識を持っていませんでした。したがって、ゼロから始まらなければなりません。スピーチコンテストに申し込んでから、約3カ月の準備期間が与えられました。しかし、同時に、その時は他の教材のレポートとプレゼンテーションの課題がたくさんあったため、「英語だからなんとかできるでしょう。」と思い、少し調子によって、軽く考えていました。時間に十分な余裕があったのですが、気がつけばあっという間に本番の1カ月前くらいになってしまいました。準備を始めようと思ったのですが、先延ばしにしてしまって、結局2週間前くらいに準備をし始めました。思った以上に、準備時間がかかりました。課題

もやり終えた後に、すぐに再び新しい課題が出されていた状況だったので、すごく焦りました。私は、通学するのに、渋滞がなくても約3時間かかるので、往復では約6時間かかります。アルバイトも1週間に2回やっているので、平日は本当に忙しいです。このことを自分が最初から理解しているにもかかわらず、スピーチの準備を後回しにしてしまいました。今思うと、それが私の大きな間違いでした。

本番の2週間前になっても、紹介したいMottoがまだ決まっていませんでした。Mottoを1度決めて、スクリプトを何回か考え直しても全然書き進めなかったもので、スムーズに書けるようになるまでMottoを変え続けました。1週間前になって書き、やっとMottoが決まりました。スクリプトは2日間で終えようとしたのですが、時間が足りなくて間に合わなかったので、結局本番の3日前にやっと終わらせることができました。結果、スクリプトを覚えるのにあと3日間しかありませんでした。時間が足りるかどうかとても心配になりました。自分の心の中では、もう諦めようとしてしまいましたが、ここまでやり終えたので、結果に関係なく最後まで頑張ろうと思いながら、本番を向かえました。

思った通り、他の参加者のスピーチが素晴らしかったです。スピーチの内容とプレゼンテーションの仕方がとても良くて、一人一人の独特さがよくわかりました。アイコンタクトと笑顔もしっかりとできていて、気持ちの入っているスピーチでした。「さすが先輩たちだな。」と思いました。一方、自分の発表には納得していませんでした。正直、本番より練習した時の方が良かったと自分は思いました。笑顔をあまり作れなかったことと気持ちがあまり入っていなかったことが一番良くなかったと思います。緊張はもちろんしていたので、それも一つの理由にはなと思いますが、一番の理由はやっぱり練習不足です。自分の足りなかったところを考えながら、表彰式を迎えました。自分の番が来る前は、すごく緊張していたのですが、他の参加者のスピーチを聞いた後はもう自分にはチャンスがないと思っていたので、表彰がもらえることに期待していませんでした。

しかし、驚いたことに3位をもらいました。予想外でした。驚きすぎて、名前を呼ばれたときに、3秒くらい経ってから反応して席から立ち上がったくらいでした。初めてのスピーチコンテストの参加でしたが、表彰とトロフィーをもらうことができたので、すごく嬉しかったです。感謝でいっぱいでした。準備の開始

時間が遅かったり、練習が足りなかったりしたような後悔はありましたが、最後まで諦めずに頑張れたので、努力した結果は出たと思います。人生で初めての挑戦でしたが、いろいろと体験できたことは悪くなかったかなと思います。今回のスピーチコンテストの反省を踏まえて、来年も参加して頑張りたいと思います。

スピーチコンテストを準備した最初の日から振り返ってみると、まさに“*No Pain No Gain*”でした。この *Motto* は本当に自分が今回経験したこと、そのものだったと気がつきました。自分がまだ小さかったときはもちろん、今日でもこの *Motto* に助けられているので、将来においても、この *Motto* を忘れずに、肝に銘じていきたいと思います。人生はこれからなので、たくさんの苦難や辛いことを経験すると思いますが、この *Motto* が私の頭と心に残っていれば、どんなことでも乗り越えることができると信じます。

《Division 2》優勝

自分を変えたスピーチコンテスト

17121073 鈴木 千広

初めに、お忙しい中ご指導を下さった柴田先生、一番近くで私の頑張りを見守ってくれた家族、応援してくれた友人に、この場をお借りして感謝します。

今回のスピーチテストでこのような結果を頂くことができたのは、本当に嬉しかったです。しかし私はこの経験を通して、結果以上の素晴らしいものに気付くことができたと感じています。それは友人の温かさです。ある友人は、私の為にお守りを作ってくれました。またある友人は、就活で忙しい中、私の為に学校へ来て励ましてくれました。普段の学校生活では、友人の存在が当たり前になり、私は何気なく彼女達と過ごしていました。けれど、そんな生活の中でも、友人は私の頑張りを見ていてくれました。自分の努力を認め、支えてくれた友人の応援は、本当に温かく自信へと繋がりました。スピーチを終えた今、私はこんなにも素敵な友人に囲まれていたのだと改めて実感しています。彼女達は、自慢の友人だと胸を張って言うことが出来るし、間違いなく私の財産です。

またこの経験により、私は自分自身が大きく変化したと思います。その理由は、スピーチコンテストをやり抜いたという自信がついたからです。大学で、部活動やサークルに所属していない私は、何かに熱中することや、人前に出る機会が無く、どこか自分に自信がありませんでした。しかし、カナダで出会ったマザーの言葉 “You only live once.” を受け、「せっかく大学へ入学したのに、このまま何もせず卒業していいのか」「このまま学校生活が終わって、後悔しないか」と思うようになり、全力でこのコンテストに挑みました。何かに必死になることが久しぶりだった私にとって、スピーチの準備を共にして下さった先生と何度も文章を改善することや、練習をする毎日がとても充実していました。時に悩むことや弱音を吐いてしまうこともあったけれど、こうした経験は、いつの間にか私の自信へ繋がりました。

更に、私にとって自分の欠点と向き合うことは簡単ではありませんでした。しかし、その欠点を受け入れ、前向きな行動を起こし続けると、自分自身により変化が起きました。これからも “You only live once.” をモットーに、どんな時も「私は今世界一幸せで、自分自身に満足している」と言うことが出来るように、夢に向かって自分の道を自分のペースで歩いていこうと思います。今度は、自分の行動で周りの人々を励ますことが出来るように、そして支えることが出来るように、周りの人々へ感謝を忘れず生活していきます。

最後に、私はこのスピーチコンテストを通して、自分の手で自身を成長させること、ありのままの自分を受け入れること、自分を変えることが出来たと思います。しかしこの大きな変化は、私の力だけで得たものではないと感じています。改めて、ご多忙にも関わらず何度もスピーチを添削して下さいました柴田先生、私を支えてくれた友人、温かい優しさで包み込んでくれた家族に感謝します。ありがとうございました。

《Division 2》2位

点

17121074 鈴木 剛司

「かっよかった」、「感動した」、「俺も頑張ろうって思えた」、これらの言葉はスピーチを終えた後に友達が私にかけてくれたものです。スピーチコンテストを初めて見たときからいつか自分もあの舞台に立って誰かの心に響くようなスピーチをしたいという思いを抱いていました。三年生の大学生活の中でいろんな経験を積みその中で何回も挫折を経験し、時には英語を勉強する意味を見いだせなくなることもあり、決して楽な道ではありませんでした。そして自分の現時点での実力を披露するという意味で迎えた今回のスピーチコンテスト。スティーブジョブズの“Stay hungry and stay foolish.”という言葉とともにスピーチに挑み、2位に入賞することができました。聴衆としてではなく出演者として壇上に立った時の息の詰まる緊張感、自分の気持ちを皆さんに伝えられている高揚感は今でも鮮明に思い出すことができます。

このスピーチを書き上げる際、彼のスピーチを何回も見返してこの言葉に込められた意味はどのようなものなのか、くみ取る努力をしました。しかしスピーチの中で言っていた「人生とは、点をつなげること。」という文章がどういうものなのか理解しがたいものでした。ただスピーチを終えて冒頭で述べたように友達から声をかけられたときに「点をつなぐ」ということの意味をはっきりと理解しました。私たちが受けている授業、勉強はすべて自分の人生に「点」を打つ作業であるということ。そしてそれはいずれ必ず自分のためになる、それらの点の一つの線につなぐことができるということ。具体例を挙げると、私のモットーである“Stay hungry and stay foolish.”は二年生の時に取っていたキャリア開発論で見つけた言葉です。もし私がこの授業をとらず、この時間を空きコマにしていたなら、この言葉は私のモットーにならなかったかもしれません。よく考えてみれば、このスピーチを作るための文章構成力は writing のクラスから、人を引き付けるプレゼンの仕方は presentation のクラスから、自分の英語力は留学または oral の授業で培ったもの。つまり自分を変えるきっかけというのはどこにあ

るかわからないということ。今は一つの点を打っているだけで何を目標しているのか理解できない時もあるかもしれません。学習に関しても、何を目的として勉強しているのかわからなくなることもあるかもしれません。ただ今自分がやっていることは自分の力になります。努力は絶対に嘘をつきません、保証します。なぜなら私は実際にここまでたどり着くことができたからです。才能や経験は関係ありません。英語が苦手でも、勉強が嫌いでもどうか何事もあきらめず自分が今やっていることを信じてやり抜いてみてください。いつか必ずその「点」は何かに結び付いて私たちを大きく成長させてくれるはずです。このスピーチコンテストでスピーチできたことを誇りに思います。ありがとうございました。

《Division 2》3 位

日本語を学んだ私だから言えること

1712121050 榎林 美智子

キャサリンササキメモリアルスピーチコンテストに参加し、3 位に入賞できたことは自分ひとりの力では不可能なことでした。いつも応援、励ましさらに支えてくださった周囲の方たちがいたからこそ入賞することができました。スピーチコンテストでは、当日はもちろん、スピーチを書き上げる過程で、自分の外国語学習を客観的に見るという機会をいただきました。

英米語学科に入学しましたが、正直な気持ちとして、私は、英語が全く得意ではなく、寧ろ嫌いでした。例えば、be 動詞と一般動詞の違いすら分からずに大学生になり、入学当初から、何度も英語学習に躓いたことを覚えています。そんな私でしたが、今年のスピーチコンテストでは桑原賞をいただき、今年は 3 位入賞という自分でも信じられないほどの結果を収めることが出来ました。入学当初の私からは想像もできません。あれほど英語が苦手だったにもかかわらず、何度も躓き、それでもめげることなくここまで成長することができたのは間違いなく周りの友達や入学した時からずっと見捨てることなく親身になって面倒を見てくださった柴田先生のおかげだと思います。

今回のスピーチをでは、二つの与えられたテーマのうち、「自分にとってうまく言った英語学習法」を私は選択しました。スピーチの原稿を書き上げる過程で、自分の英語学習に何が役に立ったのかを思い返したときに、一番初めに思い出したことは自分の過去の経験でした。私は周囲の友人とは異なり、母語が中国語です。8歳の時に来日し、日本の小学校に入学しました。来日時は、全く日本語が出来ない中で、日本語を習得しました。日本語習得の際には、「分からないことは恥ずかしがらずに素直に人に聞くこと」、「間違いを恐れずに話す努力をすること」などを実践していました。そして、当時の日本語学習と、現在の英語学習を比較すると、私自身、無意識のうちに日本語学習の際に習得したスキルを英語学習に生かしていたことに気が付きました。外国語習得の際に必要なプロセスとは、日本語であっても英語であっても、あらゆる言語の学びにおいて、ほとんど同じではないかと思いました。

また私は昔から自分を追い詰めないで勉強ができないタイプの人間であることにも気づきました。常に自分にタスクを課し、行動に移す努力をしてきたことに気づいたのです。今回のスピーチコンテストも、まさに自分を追い込むタスクだったのです。人前でスピーチをすることはとても緊張するうえに準備に膨大な時間を費やします。しかしながら、通常の大学生活の中では、大勢の人の前で自分の考えをスピーチとして伝える機会はほとんどありません。人前で話すこと、そしてその困難なタスクを英語でこなすということは、自分を追い詰めるための最高の機会であると考え、スピーチコンテストに参加することを決意したのです。スピーチを終えた後、多くの友人や先生方、さらには審査員の先生方に、とても良いスピーチだったと声をかけていただいた時は、それまでの準備の大変さを忘れるほどの達成感でいっぱいでした。

スピーチを通して、自分の日本語学習を改めて振り返り、さらには英語学習についても成長を実感することが出来ました。また自分と同じように英語が得意ではなく困っている人に少しでも自分のスピーチが響いたら良いなと思います。スピーチの最後の言葉で表現したように、いつか胸を張って「自分はトリリンガルです」といえる日が来るように、中国語のレベルを保ち、日本語力を磨き、英語学習に努めていきたいです。

《Kuwahara・Inoue Award》

大きな壁を超えて感じたこと

18121120 湯原 隼太

まず初めに今回のスピーチコンテストに当たって、私を助けてくれた先生、友人、環境に感謝したいと思います。また、素晴らしい特別賞を受賞できたことをとても光栄に思います。私は今回のスピーチコンテストには特別な感情がありません。

1つ目は、前回のスピーチコンテストで感じたものです。私は一年生の時にスピーチコンテストに出るか迷い、最終的には出場しないという選択をしました。しかしその舞台で、当時の私の先輩や、同年代の素晴らしいスピーチを見て、私はやりたいと思った時に、リスクを恐れたためにやらなかったことを後悔しました。それなので、今回のスピーチコンテストは去年のうちから実はある先生には「私は出ます。」と伝えて、実現することができました。2つの選択肢があったら、難しい選択肢を選ぶことは、自分を成長させてくれるものだと感じました。実際に出場したスピーチコンテストは見ている側とは比べ物にならない緊張感に気持ちが潰されそうでしたが、頑張った本番や、当日までの日々はとても貴重な時間となりました。

2つ目は、昨年10月に私は事故にあってしまい、手術と1ヶ月間の入院生活をしたときに感じたことです。スピーチコンテストの応募を病院のベッドでして、外出届を出して、学校に行き、スピーチコンテストの準備を始めました。ある先生からは今回はやめて、次回頑張れば良いと言っていましたでしたが、どうしても私は今回のスピーチコンテストに出て、去年とは違う、困難な時でも頑張るという思いを証明したくて、出場させていただきました。辛い部分もありましたが、スピーチコンテストが終わったときの達成感はとても、幸せなものでした。

今回のスピーチコンテストで、私は少しでも様々な面でステップアップをできたと思います。今しかできないこと、自分にしかできないことを探して、全力でやっていきたいと思います。また、今身近にある、環境、人に感謝をしながら充実した日々を送れるようこれからも努力していきます。

2. 高校生対話弁論大会

第 36 回静岡県高等学校英語対話弁論大会報告

第 36 回静岡県高等学校英語対話弁論大会が、11 月 23 日（土曜日）に草薙キャンパスで開催されました。

本学外国語学部主催、静岡県教育委員会後援の大会は、二人一組での対話形式で行うのが特徴で、出場生徒たちは日常生活における問題意識を反映したオリジナルのスキットを、身振り手振りを交えながら披露し会場を沸かせました。

令和元年は県内 14 校から 19 組 38 人が出場し、英語圏滞在歴 10 カ月未満の生徒による「A 組」で静岡県立静岡城北高等学校、海外での滞在経験の長さは問わない「B 組」で静岡県立浜松北高等学校のペアが優勝しました。結果は以下の通りです。

【結果】

A 組（3 分）：英語圏の滞在経験がない、もしくは通算 10 ヶ月以下

第 1 位 静岡城北高校 有川さん、吉田さん A Midnight Revelation!

第 2 位 星陵高校 稲葉さん、小野田さん Japan has too much chill.

第 3 位 静岡城北高校 柴山さん、森さん Nervous, Fun, Difficult, Precious

B 組（5 分）：海外での滞在経験の長さは問わない

第 1 位 浜松北高校 杉本さん、高部さん Our English

第 2 位 静岡サレジオ高校 増田さん、和田さん The dreams

第 3 位 常葉大学附属菊川高校 鈴木さん、海野さん We are all the same

また、本学科の学生ボランティアが大会を運営し、英米語学科の学びがわかるワークショップで、高校生たちの注目を集めていました。



【モデルスキットの練習風景】



【モデルスキットメンバー・MC・学部長通訳の学生たち】

3. 教員採用試験合格者

教員採用試験合格体験談

16121016 大野 俊

教員採用試験について、いつ頃から勉強を始めたのか、どのように勉強していたのか、面接や模擬授業の対策はどうしていたのか、一次試験・二次試験における大切なことについて話したいと思います。私は試験の一年ほど前から参考書や問題集を準備していましたが、それを使い始めたのは三年の冬あたりからでした。五月には教育実習があったのでその前までに決めた範囲を終わらせ、実習後には最後の確認ができるようにしていました。実習中はなかなか勉強できる時間が取れないので、実習の前までにできる限り勉強しておく心がだいぶ楽になります。なので、早めに勉強を始めるか、遅くなってしまっても後々辛くならないように計画を立てて頑張ってください。

次に、どのように勉強していたかについて話したいと思います。多くの人は受験する自治体の問題出題傾向を調べ、出題率の多い範囲を勉強していると思いますが、私は、ほぼすべての範囲に目を通し、いきなり傾向が変わりどこの範囲から出題されても少しでも点が取れるように勉強していました。時間はかかってしましますが、一日に何ページ進めるのかやどれだけ問題を解くのか自分の目標を持って取り組んでいきましょう。参考書、問題集は二周以上できるようにして知識を定着させていました。どのような環境が自分にとって一番最適な勉強環境なのかを知ることも大事な勉強法の一つとも言えると考えているので、友達と一緒にやるほうが集中できるのか、一人の方が集中できるのか、それらもしっかりと選んでいけるとよいと思います。

面接・模擬授業の対策については、支援センターの先生方が練習の機会を設けてくれるので、それをしっかりと利用し場慣れをしておくことが一番の対策だと思います。多くの先生と練習をしてどのような状況でも自分の考えをはっきりと言えるようにしておきましょう。

最後に、私にとって大切だったことを二つ話したいと思います。私の経験の中で一つ目に大切だったことは息抜きです。そして、受験生に伝えたいことは「息

抜きに全力を尽くせ」です。長時間勉強しても集中力が低いと体力だけが消耗し、やる気、時間を無駄にしまいます。そこで、短時間でも集中して勉強し、集中力が途切れた時にはほとんど好きなことをして息抜きをし、また短時間集中して勉強する。これの繰り返しをすることで、私は教員採用試験への高い意識を保ったまま目標に近づくことができました。私は、親友とボウリングへ授業終わりに定期的に行くことが一番の息抜きでした。二つ目に伝えたいことは、「誰にも負けないと思えるものを持つこと」です。私は、英語教師としての知識をつけることを第一に考えました。英語が話せる、得意だという人は日本に数多くいます。その中で、英語を教える職業を選んだからにはその特別な知識を正しくしっかりとつけることが必要不可欠であり、英語力だけで満足するのではなく授業力・教師力を誰よりもつける努力をすることで自分なりの自信をつけていきました。このように、何か一つでも負けないと思えるものを持つことで、必ずその力が教員採用試験の面接や模擬授業、様々な場面で大きな自信となります。緊張をネガティブなものと考えずに、笑顔を忘れないで頑張ってください。

高校教員になるその日

16121045 齊藤 詢弥

1. 受験状況、結果

高校外国語（英語）を受験、結果は合格

2. 教職を目指したきっかけ

中学校時の担任の姿にあこがれを抱き、自分もこの先生みたいに誰かを支援、指導できる人間になりたいと思い、教員を志すことを決意しました。

高校を選択した理由は、カナダでの7ヶ月間を通じて知った英語を勉強することの楽しさと辛さを、生徒たちに教えていきたいと感じ、また高校というより専門的な場所で指導することにより、生徒とともに自分自身をより成長させることができると感じたからです。

3. 学習について

①期間 2019年2月中旬～2019年8月18日迄

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

毎日勉強したわけではなく、自分の気分が乗っているときに勉強していました。

②使用したテキスト

教職教養⇒『教職ランナー』『教職教養 30 日完成』

一般教養⇒『これだけ覚える 教員採用試験一般教養』

専門教養⇒『英検一級 での順パス単』

③内容

『教職教養 30 日完成』で自分が理解できていない部分を確認しました。このテキストは綺麗に纏まっているので、最初に覚えていく段階ではかなりおすすめです。ですが、この一冊でカバーできるほど教職教養は甘くないので、理解が浅い部分や、わかりにくい部分は『教職ランナー』で逐一確認して覚えました。僕は厚みのあるテキストから始めると勉強が嫌になるタイプだったので、まずは浅く学習してから、だんだんと知識を深めていくようにしました。おかげで継続して勉強をすることができたのだと思います。そして『教職教養 30 日完成』は仕上げにも使用できます。教採の前に自分がどれだけ理解できているかを確認するのにも向いているので、ぜひ試してみてください。

4. 後輩に向けて

①役立つ情報

★面接カード

高校の教員採用試験は中学校とは違い、事前に「面接カード」を教育委員会に送らなくてはなりません。なので、僕は面接の練習の前に「面接カード」を何度も教職支援センターの先生方に推敲していただきました。これが一番時間を要すると思うので、早めに対策した方がいいです。

★挨拶の練習

挨拶の練習は少し練習しただけではうまくできないと思います。日頃から気持ちのいい挨拶をするように心がけることで、本番でも自然にすることができるようになります。試してみてください。

★情報収集は大切

面接でもよく「最近気になる教育関連のニュースはありましたか？」と聞かれます。その際にスラスラと自分の考えが言えるようになるために、常に教育

に関して関心を持つことは大切です。また、面接に向けてだけではなく、試験の内容などを友人や先生方と共有することで、自分に足りていなかった知識を習得できることがあります。そういった面でも「情報」に気を配るといいと思います。

5. メッセージ

ここまで色々と話してきましたが、もし僕の方法が自分に合わないと思ったらすぐやめたほうがいいと思います。あくまで、僕の体験記は一例です。皆さんのことは皆さん自身が一番わかっていると思うので、自分に合う勉強法をしっかりと探してください。よく「努力は人を裏切らない」等と聞くかと思いますが、努力の方法が合っていなかったら余裕で裏切ります。我武者羅にやればなんとかなるわけではありません。自分が最高のパフォーマンスをできるように、自分に一番合った勉強法、学習を探して努力することが僕は大切だと思います。ただ、一つ言えるのは、何処かで必ず息抜きを入れる必要があるということです。我々は常に走り続けることが出来るわけではありません。無理をし続けていると何処かで必ず挫けてしまい、立ち直ることができなくなってしまうと思います。たまには歩いたり、立ち止まったりしてもいいと僕は思います。自分の息抜きになるような物を見つけておくといいと思います！

教採に向けて勉強するのは不安との戦いでもあります。先の見えない雲の中で必死にもがいて進まなくてはなりません。しかし雲の先にはいつだって青空があります。その苦しみをどうか乗り越えてください。これを読んでいる皆さんがどうかうまくいきますように。

～ *There is always light behind the clouds.* ～

スタート地点に立って

16121077 寺田 愛利

2019 年 10 月 1 日は、静岡市教員採用試験の合格発表の日であった。私は、自分の心臓の鼓動が猛スピードで動く音を聞きながら、手を震わせながら携帯で結

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

果発表を見た事を今でも鮮明に覚えている。そして、しっかりと私の目に写る受験番号を見て、心の中で「よっしゃ！」と叫ぶと同時にこれまで応援して下さいました先生方や友人の顔が一気に頭の中に浮かんできた。私は、静岡市の中学校英語教員としてスタートをする切符を手に入れた。私が、この切符を手に入れるまでの道のりとこれからの抱負について皆さんに伝えようと思う。

私が中学校の英語教員になりたいと思ったきっかけは、中学校1年生の時に英語を教えて下さっていた先生との出会いである。私は、中学校1年生の初めの英語の授業についていくことができなかった。しかし、当時の英語の先生が私に合った説明をして下さり、私ができるまで励まし指導をして下さった。そのことがきっかけで、英語ができなかった私でも英語が理解できるという喜びを味わうことができた。また、先生が最後まで私ができると信じて支援して下さいましたことがとても嬉しく、私の自信に繋がった。私も、この先生のように生徒に合った教え方をし、常に温かく見守るとともに、生徒が自信を持てるように支援できる教員になりたいと思ったため英語教員を目指すようになった。

私は、中学生の時に会った英語の先生がきっかけで英語教員を目指すようになってからは、英語力向上を目指すとともにボランティア活動にも積極的に取り組んだ。私は、中学校、高校、大学の英語の授業を1つ1つ大切にに取り組んだ。高校2年生の時にはイギリス研修に行き、英語力の向上を試みた。私は、現地で自分の英語が上達していく面を実感したり、思うように英語が話せない自分に出会い苦しんだり貴重な経験をした。また、大学2年生の時にはカナダへ留学してさらに英語力の向上を試みた。高校2年生の時に行ったイギリス研修で強く感じた悔しさをバネに毎日ひたむきに英語と向き合い、帰国後には自分の英語力に自信が持てるほどになっていた。また、ボランティア活動では中学校の時に地域ゴミ拾いボランティアに参加し、高校生の時には児童養護施設のボランティアに毎年参加した。また、大学3年生の時には学習支援ボランティアにも参加し、中学校から大学まで教員になるために必要だと思ったことをボランティアを通して経験してきた。私は、中学校から大学までの間に英語教員になるために英語力を上げることと教員として必要な土台作りのためにボランティア活動をして教員になる準備をしてきた。

大学3年生の春休みから、教員採用試験の願書の書き方指導や面接指導が始

まった。私は英語教員になるための準備はしてきたものの、どの校種と地域で英語教員になりたいかということは正直意識をしていなかった。この時に、教員を目指す周りの人たちは受験する自治体も決まっている人たちが多く、私だけ何だか取り残されているように感じた。そして、私はどこで英語教員として英語を教えたいかと考えた。私は中学校3年生の時に志望した高校を英語に力を入れている私学を選んで入学したため、小中までは公立学校であったものの私学の魅力にも惹かれていた。私学は、公立学校と比べて自由に教育ができることや勤務の面を見ても惹かれるところが多かった。しかし、ある時に教職支援センターの先生に「なぜ、あなたは英語教員になりたいの？」と聞かれた時に、私は中学校の時に会った英語の先生を思い出した。同時に、私が静岡市内中学校に通っていなかったらその英語の先生にも出会えていなかったことや、静岡市の中学校が私に英語教員になりたいという夢を与えてくれたということに気がついた。その時、私は英語教員になりたいという夢を与えてくれた原点である静岡市で英語教員になりたいと強く思った。

私は教員採用試験で静岡市の中学校で英語教員になりたいという強い思いを面接官に伝えた結果、静岡市の中学校英語教員としての切符を手に入れたのだ。新たなスタート地点に立ち、手に入れたこの切符を大切にしながら教員生活を送っていききたい。私はこれから出会う生徒を常に温かく見守るとともに、生徒が中学校3年間で大きく成長できるように全力で手助けをしていきたいと思う。

常葉大学で夢を叶えたこと

16121087 野田 巧

私は常葉大学にて中学生の頃からの夢であった「中学校の英語教師になること」を実現させることができました。振り返ってみると教員採用試験の勉強だけをして合格したわけではなく、様々なことを乗り越えて叶ったことが、大学生活4年間の中で最も大きな出来事だったと私は思います。今回私は自分がこの4年間教員採用試験に臨んだ姿勢を書こうと決めました。

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

1. 英語の教員には何が求められるのか

最初は英語の教員＝英語が出来る人という単純なことだと考えていました。しかし、英語科教育法の授業を受けたり教育実習を経験したりする内に「生徒に英語の楽しさを伝えられる人」、「生徒に英語を学びたいという姿勢を育てる人」といった考えになりました。もちろん高い英語力も求められますが、生徒の立場や目線で授業を考えることも求められると学びました。

2. どのように教員採用試験の勉強をしたのか

私は周りと比べると教員採用試験の勉強を始めたのはとても遅かったと思います。私は他の人と比べると留学経験がなく、英検1級や TOEIC、TOEFL で高い点数を持っていない点になるポイントはありませんでした。しかし、それでも諦めず受験する自治体の問題の傾向を把握し、YouTube で試験の対策の動画を利用したり、友達とわからない所を教えあったりして合格することが出来ました。また、一次試験では一般教養、教職教養、専門科目から膨大な量を勉強しなければいけませんが、「今日はこの範囲をやる!」といった毎日小さな目標を立てていくと勉強に対する意欲も変わると思います。二次試験では個人面接と集団討論がありどちらも練習をして臨むことが大切です。特に二次試験ではその人の人間性も見られるので教科書通りの回答ではなく、自分自身が経験したことを絡めて面接官に伝えることが重要です。

3. どのような英語の教員になりたいのか

私は英語がペラペラではありません。しかし、私は「生徒に英語が楽しいと思わせることの出来る教員になる」という目標を持っています。そしてもう一つ、「生徒に手を差し伸べられる教員になる」という目標があります。なぜこのような目標が必要であるのかというと、私は合格する事をゴールにしたくないという気持ちがありました。私自身教員になって初めてそこがスタート地点になると考えています。またこのような目標が二次試験でとても役に立つのでこれから教員採用試験の勉強をする人にはぜひ合格の後の目標も持ってほしいと思います。

4. ひと休みも重要

私は教員採用試験に合格するためには「息抜き」も必要だと思います。私自身勉強後に友達とボウリングに行ったりといった息抜きをしていました。そこで友達と語ったりして勉強の疲れを取って次の日も勉強出来たのだと思います。時には運動したり、美味しいものを食べたりしてリフレッシュすることも大切です。

最後に、私はこの4年間で様々なことを学びました。部活で部長を務め責任感と友達との信頼、一人暮らしで家族の大切さを学びました。困った時には適切なアドバイスを先生方からいただきました。一つ一つは関係の無いことのように見えますが、どれも自分の貴重な糧となり、その経験を活かして教員として一歩ずつ進んでいこうと思います。

決意

16121091 半田 ひな乃

私は今年の四月から中学校の英語教員になります。中学生の頃に出会った英語の先生に憧れ、その先生のようになりたと思うようになってから8年以上が経ち、大学生になった今、自分が本当に英語の先生になれたという事実 zu 大きな喜びを感じています。ここでは、私が中学校英語教員を目指すきっかけとなったことから、教員採用試験に合格するまでの道のりを記させていただきたいと思います。

私が中学生の頃に出会った英語の先生は、いつも元気ではきはきした、一緒にいるとこちらまで自然と元気で笑顔になってしまうような、明るい雰囲気をもった方でした。また、母のようなやさしさ、温かさのある先生で、多くの生徒から慕われていました。そんな先生の授業をいつもわくわくしながら受けていたし、わからないところを聞くとすぐに答えてくれる、豊富な知識を持った先生の姿は私の目にとってもかっこよく映っていました。中学三年間英語を見ていただいており、関わりが増えていくにつれ、先生に対する憧れ、尊敬の念がどんどん強くなっていきました。そして、中学校を卒業するころには「学校の先生になりたい。この先生みたいな、英語を上手に教えられる先生になりたい」と強く思うようになって

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

ていました。

高校でも英語の勉強に力を入れ、教員免許が取得できるこの常葉大学に入学してからは、大学二年次に行ったカナダでの7か月間の留学を経て、教員採用試験に向けてさまざまな経験、準備をしてきました。その中で一番記憶に残っているのは母校での教育実習です。

教育実習は、想像以上に大変でした。授業準備や部活指導の手伝い、その日学んだことを忘れないように些細なことでもすべて書いておこうと、毎日必死になって書いた日誌。睡眠時間が十分に取れない日もありました。授業が上手くいかなかったり、生徒にわからないという顔をされてしまった時、その授業で教えたかったことと違うことが生徒に伝わってしまっていた時はとても落ち込んだし、どうしたら生徒に英語が楽しいと思ってもらえるのだろうかとたくさん悩みました。

実習の中盤、教科担当の先生に部活指導に行くよう言われた時、授業準備をしたいからという自分本位の理由で部活指導に途中から行ったことがありました。次の日その先生から、「自分がどうかという理由で生徒のことを蔑ろにするなら、学校の先生になるのやめたほうがいいよ。そんなんじゃ学校の先生やっていけないと思う。」というご指導をいただきました。自分のことを最優先にし、生徒のことを一番に考えられなかった自分に自ら意識の甘さを感じました。そして、教師になる責任の重大さ、どれだけの大きさの覚悟が必要だったのかを再び認識しました。

さまざまな学び、葛藤があった教育実習でしたが、私が教育実習を成し遂げ、教師になるという夢を持続けることができたのは、笑顔で「先生！」と言って走ってきてくれたり、話しかけに来てくれたりする生徒、わからないところがあったら質問に来てくれる、悩み事を相談しにきてくれる、私を頼りにしてくれている生徒の存在でした。

私が教師になる夢を叶えられたのは、常葉大学の教職に携わる先生方をはじめ、教育実習を受け入れてくださった学校の先生方、生徒の皆さん、家族や友人の協力や支えのおかげです。四月からは、そういった方々への感謝の気持ちを忘れず、何事にも全力で取り組む、生徒から頼りにしてもらえるようなそんな英語の先生になりたいです。

自分自身と向き合う

16121120 山田 裕子

4年生になって以来、大学生として4年間学問を続けてきた中で、自分は何を頑張って、どんな成長をしたんだろうか、そんな疑問を自分自身に問いかける時が多くなった。いくつか思い浮かぶものはあるが、その中の1つとして教員採用試験が印象深く残っている。採用試験の経験を通して、自分自身について考え、向き合う時間を持つことができたと思う。

採用試験受験にあたっては、準備が長期に渡ったため、気持ちから入ろうと精神的な部分に注意を払う努力をした。まず気を引き締めることから始まった。私は、計画を綿密に立ててその通りにきちんとこなすことがあまり得意ではない。そういった短所を知っていたが、この試験は普段の定期試験等とはわけが違い、筆記や面接、実技と準備しなければならないものが多いうえ、筆記においても出題範囲が広いので時間の取り方が非常に重要であった。そこで私は時間を多めに取り、試験日から逆算して計画を立てることにした。また、試験に合格することを目標とするのではなく、実際に教師になった時のことを考えて計画、準備するように努めた。面接練習を開始した当初は、合格するためにはどうするべきかという目先だけの目的にとらわれ、本来自分の持つ意見や考えから少し離れていた。しかし練習を続ける中で、試験のために考えた意見では、将来教壇に立った時に役に立つのだろうかという疑問を抱き、何のために自分が教師を目指しているのかが分からなくなった。そこで、教師になったと考えて1つ1つ意見を慎重に持つようになった。そして、自分に合った準備の仕方を見つけることの大切さを学んだ。試験勉強を早くから始めた人、多くのテキストを用いて毎日図書館で勉強している人、面接練習に熱心に通っている人等、一所懸命努力している人を多く見た。奮い立たされる一方、焦りを感じることも多くあった。しかし、一番大切なのは自分に合った学習方法を見つけることではないかと最終的に考えた。皆がしているから、ではなく、自分に不足していることは何で、それを補完するために必要なことは何であるのか、その答えを導くことが大切であると考えている。これは教員採用試験だけでなく、今後も自分にとって大切な考え方の1つになると感じた。

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

次に、採用試験のために具体的な勉強の仕方考えた。まず一次試験では、4年生になる前の春休みから筆記の勉強と面接練習を並行した。筆記は、対策の本や問題集を購入し、復習と演習を同時進行した。範囲が広いため、暗記ではなく内容を理解するように努めた。また、飽きないような工夫も勉強を続ける中で見つけながら当日に向けて学習を進めた。面接では、教職支援センターで毎回予約をし、週に1度程度支援員の方々と面接練習を春休みから試験直前まで続けた。内容は、初めは願書の書き方から実際の面接の模擬練習へと、試験に間に合うようにまんべんなく練習した。多くの見方、捉え方があるため、考えが固執しないようできるだけ多くの支援員の先生方と練習するようにした。その他、支援員の先生方による実技試験の練習、週に1度の教採学習会に参加した。このように継続的に学習をし、当日を迎えた。緊張はしたが、これまでの自分を信じたおかげで無事に一次合格をした。二次試験に向けては、一次試験合格発表後から集団討論と個人面接の練習に参加した。集団討論の練習は、教職支援センターが実施してくれる練習会に参加した。扱われるテーマや討論のメンバー、指導して下さる先生が変わるので毎回参加した。実際の流れだけでなく空気感もある程度知ることができるため、当日の安心感につながった。個人面接は、一次試験と同様に試験直前まで継続した。一次試験で慣れてくるので練習回数は様子を見ながら、その分多くの質問に対する答えを持つように自分の時間をうまく作る努力をした。二次試験は、一次試験よりも緊張し、終わった後の達成感も少なかった。しかし、自分の思いは伝えられたので後悔はなかった。合格発表当日は非常に緊張したが、幸い合格することができた。しかし、あくまでもスタートラインに立っただけであり、本当の努力はここからであることを今も教壇に立った後も忘れてはいけない。

最後に、この試験に向けて勉強を始めた当初から、合格に至るまで些細なことで一喜一憂することもあったが、学ぶことの多い時間であった。焦っても落ち着くこと、取り繕わずに正直に話すこと、世間にもっと目を向けること等、当たり前のことでありながら今までできていなかったものが多かったということにも気がついた。そして、最も自分にとっての大きな収穫は、自分の強み、弱みを改めて理解しようとしたことである。自分自身と向き合う時間を多く取ることができたため、自分が何をを目指すのか、今後の指標を見つけることができたのではない

かと思う。今回の経験を忘れずに、これからも自問自答しながら学び続ける教師を目指し続けたい。

IV グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

2019 年度海外事情談話会

グローバルコミュニケーション学科では有志の教員を中心にして、毎月、海外事情談話会の開催を目指している。いわばグローバルコミュニケーション学科のコロキウムである。そもそもは、学内共同研究「外国語学部グローバルコミュニケーション学科の教学内容の向上のための比較地域研究」(平成 27 (2015)-29 (2017) 年度) の一環として、2017 年度より始まった。目的は、学科教員が近年の出張内容を報告し、自身の関心を参加者と共有するところにある。

2017 年度は 5 回、2018 年度は 3 回の開催が実現できたのに対し、2019 年度は 1 回の開催にとどまった。2019 年度は学内での事務会議の実施時間のために、毎月の学科会議の終了後に開催するというスタイルが維持できなくなったのである。2020 年度は、より多く開催できるように尽力したい。(若松大祐)

第 1 回

日時：2019 年 6 月 5 日 (水) 17 時 00 分から 18 時 00 分まで

会場：静岡草薙キャンパス A520 室

講師：若松大祐 (グローバルコミュニケーション学科准教授)

題目：80 年前の記録はいずこへ：木宮泰彦が見た朝鮮、満洲、中国

要旨：木宮泰彦は 1940 年夏に中国での臨地調査に際し、日記を残している。彼には日記をつける習慣があった。特に中国渡航に際しての 1 ヶ月にわたる日記は、我々が近代日中関係史への理解を深めるために有用な史料となりそうである。この 1 か月間の日記は、すでに『木宮泰彦：その生涯と業績』(静岡：創立者生誕一〇〇年記念委員会、1987) に収録されている。しかし、残念ながら、原本に基づき校訂が必要な状態にある。なお、本報告は、2019 年 3 月に浙江大学で開催した「木宮泰彦与中日文化交流国際学術座談会」の参加報告である。

2. 多言語レシテーション大会

第 6 回多言語レシテーション大会の報告

若松 大祐

「多言語レシテーション (暗唱・朗誦) 大会」が、2019 年 12 月 14 日 (土) に本学静岡草薙キャンパスの C201 教室で開催されました。目的は、古今東西の詩歌を詠みあげて、その詩歌を生み出したその時その場所を、今ここ静岡に再現することにあります。大会で登場した詩歌はいずれも、それぞれの言語が持つ時間の長さや空間の広がりなどを私たちに伝えてきたことでしょう。

この大会は、常葉大学外国語学部創設 30 周年を記念して 2014 年に始まり、今年で第 6 回を迎えました。学部創設以来の伝統と定評ある英語やスペイン語の教育だけでなく、中国語、韓国語、ブラジル・ポルトガル語の教育をも加えた外国語学部でのグローバルな学びを、参加者が互いに励み共に楽しむことのできるイベントとして企画し、毎年 12 月に実施されています。

第 6 回大会にはブラジル・ポルトガル語、韓国語、スペイン語、中国語の四言語をあわせ、のべ 71 名 (Level I が 47 名、Level II が 24 名) の出場があり、うち 11 名はグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムである二言語学習を反映して、二言語のレシテーションに挑戦しています。また、参加者の内訳を見ると、外国語学部グローバルコミュニケーションの学生のみならず、英米語学科の学生 (1 名) や法学部の学生 (1 名)、さらには静岡県内の高校生 (17 名) の参加もありました。特に高校生の参加者数は、これまでの最多です。

常葉大学に集い外国語を学ぶ若者たちの熱演に対し、審査員が暗唱力、発音、表現力を審査し、会場からは大きな拍手が送られました。

2 年連続で二言語入賞者の 1 位に輝いた仲宗根エイミさんはじめ、入賞者や出場者の文章を、本誌に収録しました。それぞれの挑戦の軌跡が記録されています。

< 次第 >

1. 開会式 13:00 ~ 13:15

あいさつ 外国語学部長 戸田 裕司

IV. 2. 多言語レシテーション大会

審査員の紹介

ブラジル・ポルトガル語：アリッセ・堀内（常葉大学非常勤講師）、江口
佳子（常葉大学教員）

韓国語：金 美連（常葉大学非常勤講師）、福島 みのり（常葉大学教員）

スペイン語：イグナシオ・キロス（常葉大学非常勤講師）、増井 実子（常
葉大学教員）

中国語：盧 思（画家・京劇俳優）、戸田 裕司（常葉大学教員）

出場者の紹介

2. レシテーション 13:15 ～ 15:30

13:15 ～ 14:15 ブラジル・ポルトガル語（レベル I、レベル II）、韓国語（レ
ベル I、レベル II）

（休憩 10 分）

14:25 ～ 15:25 スペイン語（レベル I、レベル II）、中国語（レベル I、レ
ベル II）

（休憩 10 分）

3. コミュニケーションタイム 15:35 ～ 16:35

K-pop サークルによるダンス、実行委員によるクイズ大会、GC 学科 4 年
生による発表

（休憩 10 分）

4. 表彰式および審査員講評 16:45 ～ 17:05

5. 閉会式 17:05 ～ 17:15

あいさつ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科長 増井 実子

あいさつ 実行委員長 栗原 良明（グローバルコミュニケーション学科 3 年）

<入賞者一覧>

ブラジル・ポルトガル語レベル I 課題：Carlos Drummon de Andrade “No
meio do caminho”

1 位 齋藤 芽衣 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

2 位 赤堀 虹花 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

3 位 野澤 歩未 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

ブラジル・ポルトガル語レベルⅡ 課題：Olavo Bilac “Via Láctea”

- 1 位 仲宗根 エイミ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年
- 2 位 松下 香凜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 3 位 大塚 彩乃 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年

韓国語レベルⅠ 課題：김광섭 「저녁에」

- 1 位 望月 咲良 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 2 位 渡邊 瞳 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 3 位 成岡 奈菜花 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

韓国語レベルⅡ 課題：김춘수 「꽃」

- 1 位 伊川 亜祐菜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 2 位 今関 彩乃 法学部法律学科 2 年
- 3 位 杉山 慎之佑 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

スペイン語レベルⅠ 課題：Federico García Lorca “MEMENTO”

- 1 位 松下 香凜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 2 位 榎谷 安唯 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 3 位 高野 イザベラ 静岡県立吉原高等学校 1 年

スペイン語レベルⅡ 課題：Rafael Alberti “CREEMOS”

- 1 位 杉山 滉一 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 2 位 亀井 直樹 外国語学部英米語学科 2 年
- 3 位 嶋本 妃那 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4 年

中国語レベルⅠ 課題：鲁迅《故乡》结尾

- 1 位 高仲 純怜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 2 位 菊池 実乃梨 静岡県立静岡城北高等学校 2 年
- 3 位 村田 楓佳 静岡県立静岡城北高等学校 2 年

IV. 2. 多言語レシテーション大会

中国語レベルⅡ 課題：辛弃疾《青玉案 元夕》

- 1 位 仲宗根 エイミ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科4年
- 2 位 林 倖多 外国語学部グローバルコミュニケーション学科2年
- 3 位 宮本 智華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年

二言語入賞者：二言語を学ぶというグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムの特徴を踏まえ、二言語の暗唱にチャレンジした学生の中から、合計得点の高い順に入賞者を決定しました。

- 1 位 仲宗根 エイミ ブラジル・ポルトガル語Ⅱ＋中国語Ⅱ
- 2 位 松下 香凜 ブラジル・ポルトガル語Ⅱ＋スペイン語Ⅰ
- 3 位 杉山 滉一 スペイン語レベルⅡ＋中国語レベルⅡ

審査員奨励賞：高校生を対象とした賞です。

- 1 位 1言語(葡) 岩崎 星來 静岡県立吉原高等学校1年
- 2 位 1言語(西) 小川 愛理 静岡県立吉原高等学校2年
- 3 位 1言語(中) 村松 月菜 静岡県立静岡城北高等学校2年

< 学生実行委員 >

[実行委員長] 栗原良明

[実行委員] 小野寺悠夏、横山結花、片岡史織、木村楓野、杉山慎之佑、西川莞人、
藤波啓佑

[ボランティア]

(3年) 宮本智華

(2年) 岩本愛美、久野翔太郎、小林瑞歩、鈴木渉矢、久門千夏、細越響、宮原
優芽

(1年) 大石健太郎、花園亜由弓、平田奈々香、吉田彩綾、渡邊友香

(以上、本学外国語学部グローバルコミュニケーション学科生)

< 教職員 >

江口佳子(総務、会計)、谷誠司(審査)、戸田裕司、福島みのり(学生補助)、福

富敦子、増井実子 (高校)、三村友美 (総務、会計)、若松大祐 (編集)

< 公式サイト >

<https://sites.google.com/site/tokoharecitation>

常葉大学多言語レシテーション

パンフレット巻頭言より再録

詩と語学教育—多言語レシテーション大会の特色と強み

常葉大学長 江藤 秀一

イギリスのスコットランドの作家にロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson) がいます。『宝島』(Treasure Island) や『ジキル博士とハイド氏』(The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde) といった小説でよく知られていますが、スティーヴンソンは子供のための詩も書いています。その一つに「雨」(Rain) という短い詩があります。

The rain is raining all around,
It falls on field and tree,
It rains on the umbrellas here,
And on the ships at sea.

この詩は短くて、用いられている語彙も文法も易しくて日本語に訳す必要もない作品です。しかし、この詩は技法的にはとても凝っていて、英語の特徴を学ぶにはとてもよい教材となります。まずは、「弱・強」という英語の基本的なリズムでできております。つまり、the, is, ing, a の語は弱く読み、rain, fall, all, round を強く読むというリズムになっています。「強弱」の節が 1 行目と 3 行目に 4 つあり、2 行目と 4 行目には 3 つという規則正しい運びとなっていますので、心地よいリズム感を生み出しています。その 2 行目と 4 行目の文末は tree と sea

IV. 2. 多言語レシテーション大会

で「i:」(イー)のように同じ音で終わっています。脚韻(rhyme)と呼ばれるものです。さらに、1行目のrain is rainingのrの音とfalls on filedのfの音が同じ音になっております。このように単語の最初の文字の子音を重ねたものを頭韻(alliteration)と呼びます。脚韻や頭韻を用いることで、詩に特有のリズムや調子を与えることになります。頭韻は古い時代からの英語の特徴で、Coca-Colaというおなじみの商品名、Donald DuckにMicky Mouseといったディズニーのキャラクター名、as busy as bee(とても忙しい)といった英語の慣用句など、日常的にたくさん用いられています。最近の学校における英語教育は実用面が強調され過ぎているせいか、詩を学ぶ機会はめっきり減りましたが、詩は英語のリズムや特徴を知らずしらずのうちに学べるきわめて効果的な題材です。

本学の多言語レシテーション大会の課題文は古今東西の詩歌であり、そこがこの大会の最大の特徴であり、強みであります。参加される方々は課題文の暗唱を通してそれぞれの言語のリズムを体得されると同時に、短い言葉に凝縮された詩の持つ深い意味を折に触れて考えることになるとと思います。本大会が実用的な言語学習では学ぶことのできない貴重な学びの機会となることを願っています。

コミュニケーション・ツールとしての詩文

外国語学部長 戸田 裕司

レシテーション大会の課題文は、古今の詩歌あるいはそれに準じる名文から選定されている。このような方針は、外国語学部あるいはグローバルコミュニケーション学科が学生の情操教育の一環として決めたものと理解されがちである。しかし、私見ではあるが、詩歌の朗読(レシテーション)は極めて実用的なコミュニケーション・ツールである。

詩文の鑑賞・講読というものは、外国語学習のシステムの中ではかなり高度な段階に位置づけられる。古典的な作品あるいは作者のものであればなおさらである。だが、日常生活の中で、私たちは古今の詩歌・名文を非常にお気楽に使うことが多い。例えば春先のちょっとした会話で「春はあけぼのだね」、といった風に。「春はあけぼの」などと言ってみたりする人が、みんな清少納言や『枕草子』

に精通しているわけではない。また、原典の文脈に即して「正しく」使っているとも限らない。往々にして、“あそび”的にことば尻のみ引用してみたり、場合によっては音声のテンポの良さだけで使ってみたりすることも多いのではないだろうか。

このような詩文の使い方は軽薄である、と昔は思っていた。だが、これが国民的教養というものかも知れない、と今は考えている。かりに少し軽薄であったとしても、ありふれたフレーズ・言い回しを共有していることは、その民族や国家の一体感を支える文化的基盤であろう。

「郵便局はどこですか？」を通じさせることがやっとの外国人であったとしても、ちょっとした詩文・古典のフレーズを知っているだけで、一瞬にして「こいつは本当は素養のある人間だ」と評価されるのである。この効果は時として劇的でさえある。

『古今和歌集』の序文(仮名序)にも「猛き武士(もののふ)の心をも慰むるは歌なり」と言う。今日あなたが朗読した詩文は、明日見知らぬ外国人の心の鎧を解く呪文となるのである。…ほら、素養がありそうに見えるでしょ？

学生実行委員より

よりよい大会を作り上げるために

GC 学科 3 年 横山 結花

2019 年 12 月 14 日、第 6 回目となる多言語レシテーション大会が開催された。私は今回、大会実行委員を担当した。振り返れば 1 年次には出場者として、2 年次にはボランティアの一員として、3 年間このレシテーション大会に携わり、強い関心を寄せ続けてきた。3 年間にいくつかの立場を経験したために気づいた課題点を改善し、よりよい大会を作り上げていこうと意気込み、大会へと臨んだ。今大会では、交流タイムの内容の充実を図った。レシテーション大会では、出場者がたった 1 人で舞台に立ち、堂々と発表する。その姿はとても格好いい。出場者がどのように練習してきたのか。そもそも普段、どのように外国語を学習しているのか。とても気になるところである。外国語を学ぶ大学生の一人として、私

IV. 2. 多言語レシテーション大会

はよりよく学習するために、他人の外国語学習の経験談を直接聞きたいと感じていた。そこで、今年は新たに交流タイムを使い、GC 学科で四言語を学んできた諸先輩による体験談の発表を導入したのである。レシテーション大会の聴衆は主に高校生や GC 学科の 1 年生 2 年生である。今後さらに外国語を学習していく上で、先輩からのアドバイスは役立つだろう。先輩方の協力があり、交流タイムは非常に有意義な時間となった。大会アンケートにも、上級生による経験談の発表を「今後も取り入れてほしい」というコメントが多数あった。この新しい企画は、大会参加者の今後の外国語学習によい刺激を与えることが出来たにちがいない。

今後レシテーション大会に携わる人々には、自らが感じたアイデアを発表し、よりよい大会に創り上げてほしい。第 6 回多言語レシテーション大会に携わった全ての人々に、心より御礼申し上げる。

入賞者より

二言語入賞 1 位

(ブラジル・ポルトガル語レベルⅡ 1 位 + 中国語レベルⅡ 1 位)

克己復礼

16122043 仲宗根 エイミ

「克己復礼」とは、私情や私欲に打ち勝ち、礼儀に適った行いをするを意味する。厳密には、「克」を「責める」と読む場合と、「勝つ」と読む場合があるようだ。

「顔淵問仁、子曰、克己復禮爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲仁由己、而由人乎哉」

(顔淵、仁を問う。子の曰わく、己れを^せめて礼に^{かえ}復るを仁と爲す。一日己れを^きめて礼に復れば、天下仁に^き歸す。仁を爲すこと己れに^よ由る。而して人に由らんや。)

(顔淵が仁のことをおたずねした。先生はいわれた、「わが身をつつしんで礼〔の規範〕にたちもどるのが仁ということだ。一日でも身をつつしんで礼に

たちもどれば、世界じゅうが仁になつくようになる。仁を行うのは自分しだいだ。どうして人だのみできょうか。」)

『論語』 顔淵第十二

金谷治 (訳注)『論語』(東京：岩波書店、1963)、pp.156-157。

レシテーション大会について投稿するにあたり、相応しいタイトルをずっと考えていた。初めは、「自分に勝つこと」というタイトルにする。しかし、「自分に勝つこと」だけでなく、「己との戦いに勝ち、どのような態度で振る舞うのか」が最も大切なことであると気付いた。「我が身を慎んで、礼に立ち返ることが仁なのである」と『論語』が言うように、優勝したからといって傲慢な態度を取るのではなく、この大会に携わった全ての方々に感謝の気持ちを伝えることが大切である。四年間の感謝の気持ちを本稿に記そう。

レシテーション大会に出場し続け、あっという間に四年の年月が流れた。毎年レシテーション大会が近づく度、私の心は闘争心で燃えていた。「去年の自分よりも上に、去年の自分を超えるのだ」と意気込んでいた。今年は、私にとって四年間の集大成を見せる年であった。過去の自己を超え、自己に勝つためにどうすれば良いのか。私は作戦を練った。

まず、ひたすら詩を覚えることに専念した。ただ、昨年と唯一異なる点として、家に誰もいない時、腹の底から大きな声を出すことに集中し、自分自身を鼓舞した。詩を間違え、行き詰った際には、ダンスの振り付けを覚えるかのようにもう一度、頭からやり直し、口が覚えるまで反復練習を行った。

次に、詩に抑揚をつけることに集中した。去年のレシテーション大会では、詩に抑揚が足りず、スピードが一定であった。今年は、観客席に強いインパクトを残すため、感情が高ぶる場面では、早口にしてみたり、そうでない時は、遅く言ってみたりと緩急がはっきり分かるように練習し、自分に欠けていた表現力に磨きをかけた。時には、鏡の前で自身の口の形を研究し、より正しい発音が出せるように来る日も来る日も練習を重ね、上達していった。

最後に、実際にネイティブの先生に発音を見てもらい、自身の弱点を教えてもらった。弱点を克服するため、先生の真似を繰り返し行い、少しでも同じ発音に

IV. 2. 多言語レシテーション大会

近づけるように努力した。余裕のある素振りを見せていた私に先生は即座に気が付き、こう言った。「出来たからと言って油断しては駄目、昨年の自分を超えなさい、そして自分との戦いに勝つのだ」と。先生のこの一言が私の胸に突き刺さり、私の心は再び沸々と燃え始めていった。この時点で残り一週間あり、レシテーション大会当日までにどこまで伸ばせるかは自分との戦いとなった。

そして、四年間の集大成を見せる日がやってきた。不思議なことに毎年出場している大会であるのに、私の心はプレッシャーに押しつぶされそうになった。「私ならできる、今までだってやってきた」と言い聞かせ、堂々と舞台に出て行った。舞台上では、これまでにない新たな自分を見せることができ、最高の集大成となった。決して自分の力だけでなく、この大会に携わってくれた先生方や学生、保護者など、沢山の方々の支えがあり、レシテーション大会は成り立っている。優勝できたからといって、「私が優勝したのだ」と過度に自己主張せず、初心に返り、これからも変わらず努力し続けていきたい。そして、感謝の気持ちを忘れずにいろいろなことに挑戦していきたい。

レシテーション大会に「正解」も「間違い」も存在しない。正解があるとするのならば、その答えは自分自身しか知り得ないものである。四年間で私が導き出した答えは、「前年度の自分を超え、己との闘いに勝つこと、そして、自分の力だけを過信せず、支えてくれる人がいるからこの大会は成り立っている」という感謝の気持ちを忘れないことである。レシテーション大会を通じ、私は、己と戦い続ければ、人間は成長するのだということを学んだ。来年からは就職という新たな「舞台」に立つ。周りと比較せず、いかに過去の自分と向き合い、勝つことができるのかを考え、大きな目標を持ち続けたい。そして、支えてくれる周りの人には、日頃から感謝の気持ちを言葉に表し、これからも変わらず謙虚でありたいと考える。

自分を強くしてくれたレシテーション大会には、敬意を払うと共に感謝し、これからも常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科を代表するような素晴らしい大会になってほしい。

末筆ながら、私は『とこはことのは』に三年連続で文章を投稿したことになる。過去の文章を見比べながら、改めて自分の成長を振り返った。投稿すると、「記憶」

と「記録」に残る。だから、いつでも過去の自分と向き合えるのである。皆さんも、ぜひ自分の想いを文章にしてみませんか。

二言語入賞 3 位

(スペイン語レベルⅡ 1 位)

謙虚かつ貪欲に

18122053 杉山 滉一

成功するためには、何が必要なのか？最も重要なのは挑戦すること、そして努力することだと思う。なぜなら挑戦しなければ何も始まらないし、相応の努力をしなければ、成功は得られない。しかし、多くの努力を積み重ね、挑戦をしても失敗することはある。そこで大切なのは、“謙虚さ”と“貪欲さ”だ。

私は二言語学習でスペイン語と中国語を勉強している。今回のレシテーション大会では、その成果を確認するために出場した。結果はスペイン語が1位となるも、中国語では入賞することができなかった。なぜスペイン語では結果を出せて、中国語では出せなかったのか。私は主にスペイン語を学習している。そのため、大会以前の学習習熟度の差が結果につながったのかもしれない。だが、この結果は、中国語の取り組みに、謙虚さと貪欲さが欠けていたことがもたらした。本稿では貪欲さと謙虚さについてそれぞれ述べてい。

まずは、謙虚さについて述べてく。私には他人の良いところを学ぼうとする姿勢がなかった。例えば、授業内で、レシテーション大会の出場者が練習兼ねて詩歌を披露する機会があった。同じ部門で出場する友人も発表したものの、私は友人から何かを吸収しようとはしなかった。というのも、自分の発音が正しいと思っていたからだ。確かに、私は事前に何度も課題文の音声を聞き、通学中には電車の中でも詩歌を頭に染み込ませ、戸田先生にも発音について指導を受けてきた。しかし、自負心の強さのあまり他人から少しでも良いところを学ぼうとしなかったのは、何もプラスにはならない。

次に、貪欲さについて述べていく。私は中国語の詩歌の練習をしているときは、自分の納得のいく発音に満足したところで終了してしまい、練習を終えてしまっ

ていた。対照的に、スペイン語の場合は、何度も練習を繰り返し、ミスがなくとも満足がいかなかった。この違いがこの度の結果につながったのだ。

この二つの原因があり、中国語の詩歌の練習に謙虚さと貪欲さが足りなかったことを改めて実感し、二つの外国語を同時に、しかもバランスよくレベルを向上していくのは難しいことだと知った。もちろんどちらかの言語を極めることが悪いことではない。だが、メインの言語ではない方をどう効率よく伸ばすかが、二言語学習において重要である。そして、成功を得るためには、常にどのような人々からも学びとうという謙虚さと、慢心せずに邁進しようとする貪欲さが必要なのである。これからも謙虚かつ貪欲に学んでいきたい。

ブラジル・ポルトガル語レベルⅠ 1位

勇気を出すということ

19122040 齋藤 芽衣

このたび、私は多言語レシテーション大会に出場し、幸いなことにポルトガル語レベルⅠ部門で優勝できた。出場に際し、とても参考になったのが本書『ここはことのは』である。前年度に入賞した、特に優勝した先輩がどのように準備して練習し、賞を勝ち取ることができたのか。優勝への軌跡を具体的に綴った文章があったから、私は必死に練習に励むことができた。そこで私は、自分が行った練習方法を綴ろうと思う。しかし、誰にでも当てはまる練習方法でもなければ、もしかしたら中には合わないという人もいるかもしれない。

私が行った練習にはマンツーマンの練習と個人での練習がある。まず、マンツーマンの練習は主に2つである。1つは江口先生とであり、もう1つはFLSSCでポルトガル語のTAである林田さんとである。マンツーマンの練習は、主に自分では気がつかない点への指摘を受け、とりわけ自分の朗読の悪い癖を自覚し修正することを目的としていた。同じポルトガル語とはいえ、先生と先輩は別個の人間であるから、教え方にも違いがあった。先生とのマンツーマン練習では、主に個人的に行った発声練習や発音の練習や先輩に直していただいた発音やアクセント、個性の出し方を見ていただいた。先輩との練習では、朗読する時にどうすれ

ばオリジナリティーを表現できるかを試行錯誤し、単語ひとつひとつの意味、それを踏まえて重要な単語に抑揚を着ける、のような読む際の悩み、と言った細かな差があった。そこから自分の欠点を見直し、気づかなかった点や見落としていた重要な点に注目しながら、本番に向けて練習をした。

次に行ったのは、個人での練習だ。今年の詩は単調で非常に覚えやすい詩だったこともあり、私は早いうちに自分なりの一秒も時間を無駄にしないように覚えたところを延々と暗唱し続けるという練習方法を編み出した。入浴中や食後の時間、果てには通学中の電車内、およそ自分ひとりの時間というものは全て練習の場になった。そのこともあり発音自体で何度も直されることはなかった。だが、先述したように我流の練習方法だったため、抑揚のつけ方を知らず、重要な単語すら無視した読み方をしてしまっていた。それを修正するのに最も苦労した。しかも、どのように練習しても、その練習量が自信に直接つながったことはほとんどない。それどころか、本番はこのようにスムーズに読むことはできるのか。もっと上手い人がいるかもしれない。オリジナリティーをどこで発揮すれば良いのか。こうした不安がいくつもいくつも浮かんできた。もしこのような状態に陥った場合、解決策は「聞ける人にすぐに聞くこと」、これに尽きる。例えば、FLSSC の TA さん、出場する言語の先生、前年度の出場者。誰でもいいからすぐに聞き、その場で解決することが先決だ。

以上が私の行ってきた練習方法である。こうした練習を行い、本番までにいくつものことを学んだ。中でも最も感慨深いと思ったのは人間関係だ。先述した人々の他にも、関わった人々がたくさんいる。FLSSC で練習する際には、同じ学科の先輩や同じ言語を専攻する先輩、といった今まで話しかける勇気がなく繋がりを持てなかった先輩とようやく繋がりを持つことができた。こういった人とのつながりは自分が一歩踏み出せば手に入るものだったのに踏み出せないことを他のことのせいにしてきたツケだと考える。この大会をきっかけにして私は今までよりも積極的になれた。レシテーション大会はただの大会ではない。自分をより良く成長させてくれる重要な機会なのである。

韓国語レベルⅠ 1位

後悔するならやってから

19122090 望月 咲良

初めての状況、たくさんの視線、これらは誰しもが怖いと思うだろう。私もそのうちの一人である。自信がなく内気な性格の私は、積極的には目立ちたくはない。失敗して後悔をしたくないのだ。CG 学科の一大イベントであるレシテーション大会を、私は常葉大学に入るまで存在すら知らなかった。もちろんどんなものかも想像もつかなかった。つまりは、私にとっては避けたいイベントなのである。今回のレシテーション大会も、当初は出るつもりはなかった。

しかしながら、今振り返ってみると、参加しないという選択肢は私にとってのひとつの甘えだったのかもしれない。私は幼いころから負けず嫌いで、完璧主義である。一度決めたことには最後までやり尽くし、自分の求める最高の状態に到達したいと思う。しかしもう一方で、自分の限界まで努力して、その結果が自分への期待にそぐわなかったら、と想像すると怖い。参加への迷いは、出場しなければ失敗も後悔もないし、傷つくこともないという逃げ道を選んでしまいたい自分の迷いだったのだろう。

「迷ってるなら、参加してみたら？」という先輩からの一言で思い出したのは、母の言葉だった。「後悔するならやってから。」私が選択に迫られたとき、いつも母はこの言葉をかけてくれる。

「何事も始まっていないのに最初からやらないで後悔するよりも、全力でやってから後悔したほうが学ぶことは多いと思うよ。迷うんだったらとりあえずやってみればいいじゃない。」

この言葉に、私は今まで何度も背中を押された。クラシックギター部の定期演奏会でソロパートを任されたとき、大学受験、韓国語学研修への参加を決めたとき、そして今回のレシテーション大会も、最後はこの言葉に押されて参加を決めた。こうして私のレシテーション大会への挑戦が始まる。やるからには生半可な気持ちではやりたくない。本番 45 秒に自分のできるすべてを尽くそうと思った。まず、詩の暗記に専念した。書いては読み、聞いては読み、時間を見つけたらぶ

つぶつと呪文のように唱えていた。ただ音だけを聞いて丸暗記するのではなく、韓国語を書き、文章として覚えることを意識した。

次に、詩の情景や心情を表現することに重点を置き、練習した。詩の意味を日本語にして書き出し、それを口に出して読むことで詩の背景や心情のイメージを膨らめた。

最後に、発音である。韓国語独特のパッチムの発音の練習に時間を費やした。韓国のドラマや映画で韓国人が実際に韓国語を話しているのを見たり、全高香先生に指導を仰いだりして、口の動き方や音の残り方を研究した。

そして大会当日、自分の発表が近づくにつれて緊張は高まる。しかし、自分の名前が呼ばれた瞬間、そのような緊張はすぐに消える。大きくひとつ息を吸った時、そこには自分の思い描いた詩の情景が広がった。この詩に出会って感じた思いを、詩に乗せて会場の一人一人に伝えていく。あんなに怖かったたくさんの視線があるのに、不安はなにひとつない。たくさんの人が私を見ている。この詩への思いが伝わってほしい。届いてほしい。ただそれだけだった。

後悔はなかった。終わって残ったのは、やり切ったすがすがしさとやって良かったという思いだった。もしあの時、私が参加しないという選択肢を選んでいたら、私は観客席で後悔していただろう。たくさんの人の前で堂々と詩の朗読をする挑戦者の姿を見て。たった数十秒の中で、あんなにも強く訴えかけるように朗読する参加者たちの熱い思いと努力は美しいのだから。

韓国語レベルⅡ 1 位

3 度目の正直

18122005 伊川 亜祐菜

「3 度目の正直」—最初の 2 回は失敗したりしてあてにならなくても 3 回目はどうまくいくこと。(『大辞林』三省堂、2006 年)

私にとって、今回の第 6 回常葉大学レシテーション大会はまさに「3 度目の正直」だった。というのも高校生が参加できるようになった第 3 回大会、昨年の第 5 回

IV. 2. 多言語レシテーション大会

大会、そして今年行われた第6回大会に韓国語の部で出場してきたからである。

私は小学生の頃から韓国語の勉強を始めた。高校生になったときには韓国語を学んで約7年になっていた。普通に生活しているだけでは自身の韓国語を試したり、使う機会はほぼない。そのような中、常葉大学が多言語レシテーション大会を開催すると聞く。私は自分の実力を試すことのできるとても貴重な機会がやってきたと思い、第3回大会に出場することを決めた。

結果は、審査員奨励賞。大会が終わった後、あまりの悔しさに家までの帰り道、人目もはばからず泣きながら歩いた。「悔しい」と感じたのは、現実と直直面したからである。今までの学習を通して持っていた自信が崩れ、自分の取り組んできたことが通用せず、自分の韓国語の運用能力がまだまだなのだと知った。

2年後の第5回大会、韓国語部門第2位。次こそは、と意気込んで臨んだ大会であり、自分でも満足できる発表ができた。しかし、結果は望んでいたものにはならなかった。

そして3度目の正直だという気概で臨んだ今年が多言語レシテーション大会。私は練習を一か月前から始めた。韓国語の先生に発音を聞いて直してもらったり、自分の発表を録音しては改善できるところはないか考えたり、友人にも遅くまで発表を聞いてもらった。また、携帯の画面を今回の課題文の詩歌にして暇があれば口に出して練習をした。加えて、自分に自信がつくように本番で使用するような大教室でマイクを使って、本番さながらに何度も練習を重ねた。しかし過去2回の経験を思い出し、練習しても練習しても不安な気持ちはなくなる。それでも、今年こそは必ず1位になる、自分ならきっとできる。そう強く思って壇上に上がった。今回の課題文である「花」(召喚(金春洙 1922~2004)の作品)という詩歌で私が共感した部分—私たちはみな何かになりたい、私はあなたに、あなたは私に忘れられぬひとつの意味になりたい—という言葉に力を込めて観衆の人たちにも共感してもらえるように。そう思いながら発表をした。結果、ついに韓国語部門で第1位を受賞することができた。

多言語レシテーション大会に出場し、得たことは多い。それは冒頭の「3度目の正直」という言葉の通り、悔しい思いを何度味わっても、あきらめず成功するまで挑戦し続けると必ず結果を得ることができるということ。この経験は確かに自分の大きな自信になる。常葉大学多言語レシテーション大会は、約60秒の短

い詩歌を単に暗唱するだけの大会ではない。参加者は詩歌の朗唱を通して詩歌の作者を知り、その心に寄り添うことができる。さらに、発音から表現まで、あるべき姿を自ら思索し、自分自身の取り組みを改めて見返し振り返ることができる。こうした貴重な機会であるレシテーション大会に、私は来年もまた挑戦し続けたい。そして、レシテーション大会で得た挑戦することの大切さと自信を、韓国への長期留学や韓国語関連の試験（ハングル能力試験・韓国語能力試験 (TOPIK)）につなげていきたい。

中国語レベルⅡ 2位

一線を超えて得たもの

18122087 林 倖多

2019年12月、第6回多言語レシテーション大会に私は出場した。スペイン語および中国語のいずれもレベル2での出場である。結果は悔しいものになった。本稿ではこの大会を通して私が「得たもの」について述べよう。話は今年の同大会での私にさかのぼる。

昨年（2018年）の私は、観客席にいた。同級生たちと共に、出場する友人たちの暗唱を観ていた。日頃から顔を合わせる仲間たちが、四つの外国語の出場者としてそれぞれ壇上で堂々と暗唱する。友人たちをはじめ出場者の勇姿を、私はただ観客席から眺めているだけであった。多言語レシテーション大会は、高校生から大学4年生までというように参加者の年齢層が幅広く、毎年見所が多い。

全ての出場者が暗唱を終え、私は「学習経験のある先輩が入賞するのだろう」そう思い込んでいた。確かに出場していた友人たちが入賞することはもちろん喜ばしいものの、「入賞はやはり厳しい」と考えていた。しかしながら、私の予想は大きく外れ、友人たちは入賞するどころか、優勝を成し遂げたのだ。表彰式の最中、私は友人たちに対して「おめでとう」と言葉を贈る。しかしその一方で、「私はなぜ出場しなかったのか」という後悔や、「なぜ友人は優勝できたのか」という嫉妬があった。そして、「一年後、友人たちに勝とう」という気持ちが私の中に芽生えた。

IV. 2. 多言語レシテーション大会

それから時は経ち、2019年11月に私は2018年の悔しさを晴らすために出場を決めた。しかし、迷いがあった。その背景には、観客として観ていた昨年の大会のレベルの高さや、人前で暗唱すること自体への不安があったからだ。観客と出場者とは、大会当日の「気持ち」が全く異なる。慣れない外国語で話すことは、入学して1年にも満たない昨年の私にはできなかった。しかし、友人たちは私ができないと感じていたこの「一線」を超え、素晴らしい結果を収めた。今振り返ると、「2度も悔しい思いをしたのか」という気持ちが、当時の私を突き動かしたのだろう。

そして、出場を決意した私は、2つのことを自分に課した。1つ目は、昨年の友人たちと同じレベルで出場すること。2つ目は、学習してきたスペイン語と中国語の両言語に出場すること。この2つを行えば昨年の状態から、私は成長できるに違いないと考え、一線を超えてみることにしたのだ。

だが、この2つの課題は想像以上に大変なものであった。まず課題文を暗記すること、そしてレシテーション（暗唱）して他者に伝えるということの難しさに、それぞれ直面した。この難しさを出場者になって初めて実感したのである。同じく難しさといっても、日頃の外国語学習で感じる難しさとはまた異なった。

まず暗記に関しては、私は自分の部屋の壁に課題文を貼り付け、毎日それに目を通した。さらに、携帯電話の待ち受け画面に課題文を表示することで、課題文に毎日必ず目を通すように習慣づけた。

次に暗唱については、中国語の授業中に大会の2、3週間前から予行演習をする機会を得、そこで先生や学生からアドバイスを受けた。アドバイスをメモし、それをまた部屋の壁に貼り、暗記と暗唱に関する注意点を同時に把握できる環境を作った。

私はこのような方法で大会を常に意識し、課題文の詩歌を熟読し、詩歌に込められた意味や作者の思いを感じるとともに、なにをどのように伝えれば良いのかについて考えた。すると、詠み上げる一つ一つの言葉に注意を払うことができた。特に環境づくりということは、外国語学習の上でも非常に重要である。日頃、日本語に囲まれた生活の中に工夫して外国語を取り入れることで、自分自身の生活が少しずつ変化していくことに気づくに至った。

本稿において、私は自分自身がその時々感じたことをありのままに書いてき

た。一個人の感情や経験を書いたのであるから、読者の中には、「話を誇張しているのではないか」などと疑う人もいるかもしれない。だが、レシテーション大会に出場する意義は、大会当日までに努力を積み重ね、外国語への関心を強め、外国語学習のあり方を大きく変えるところにある。単なる暗唱大会ではない。

中国語レベルⅡ 3位

継続は力なり

17122067 宮本 智華

私は毎年レシテーション大会に出場し、今年で3回目となります。昨年の大会では、中国語レベル1での入賞を目標に掲げましたが、入賞には至りませんでした。その敗因は、自分との闘いに負けてしまったことであると思っています。おかげで、レシテーション大会とは結果がすべてではなく、「自分との闘い」であることを学びました。その学びを無駄にしないために、私は昨年とは違った態度で今年の大会に挑む決意をしました。その結果、中国語レベル2での入賞が叶いました。今回の大会から、くじけずに努力を続ければいつかは必ず報われること、すなわち「継続は力なり」ということを学びました。これから、大会当日までに取り組んだ全力の闘いを皆さんにお伝えします。

まず、私は練習する前に、心掛けるべき3つのルールを作りました。1つ目は、ネガティブな発言は言わないということです。昨年の失敗から、メンタル面の強化も大会で勝つために必要であることを学びました。そこで、自分に不利になるような「出来ない」や、やる気をなくしてしまう「無理だ」といった発言は、口に出さないように気を付けました。

2つ目は、感謝することです。私は今までレシテーション大会に出場者として出場するだけで、今まで何も貢献してきませんでした。レシテーション大会という大会にも感謝したことがなかったのです。そこで、大会当日のボランティアを務めることによってレシテーション大会をこれまでと違った目線でながめ、大会に感謝しようと思いました。

3つ目は、熱意を持って練習に取り組むことです。レシテーション大会は入賞

IV. 2. 多言語レシテーション大会

することだけがすべてではなく、大会までに取り組んだ練習にも価値があります。ですから、5つの練習方法を定め、自分と闘うことに決めました。第1は、詩の内容を理解することです。これまでの練習と順序を入れ替え、大会ホームページ上のモデル音声を聴く前に、詩の内容理解から始めました。第2は、CDを何度も聴き、発音を真似ることです。中国語の埋田先生から辛棄疾のCDを貸していただきました。そのCDを何度も聴き、CDの発音と同じになるように聴いては真似をするという練習を繰り返しました。第3は、発音の強弱を意識することです。詩の内容に基づき声を強くすべきところは強く、小さくすべきところは小さくし、詩の情景を意識しました。第4は、口の形です。若松先生や盧思先生に見ていただいた際に、口の形を注意するように、何度も指導を受けました。先生の指導を踏まえ発音する際に口の形を意識して練習しました。第5は、前日の練習です。大会前日に、空き教室で友人と共に本番を想定した練習を行いました。

3つのルールを持ち5つの取り組みを踏まえ、本番を迎えました。しかし、本番当日でも発音が気になります。さらに、緊張のために言葉が出てこなかったらどうしようというような不安も積もります。自宅から大学に行くまでの時間に、音声を聴きながら発音の調整を行いました。また、昨年、私は過度の緊張のために大会まで努力して練習してきたことを無駄にしてしまいました。そこで、自分を緊張させないために、ボランティアとして受付での仕事に力を注ぎました。その結果、他の出場者と自分を比較することなく、堂々と発表でき、ゆっくりとした発音で練習の成果を発揮することができました。

今回、初めての入賞が叶いととてもうれしいものの、何よりも緊張してしまう自分との闘いに勝つことができたのが最もうれしく、まさに継続は力なりということを実感できました。今回の大会に挑む前は、自分自身の中国語力のなさから、外国語の勉強に対して諦めの気持ちを持っていました。しかし、中国語レベル2での入賞をきっかけに、「2言語を学び、地域に貢献する」という入学目的があったことを再度確認することができました。この目的を達成するためには、語学力を上げる必要があります。ですので、中国語検定を取得し、中国人と積極的に会話し、語彙力を高めたいと思います。これらを行うことによって、サポートしてもらう側ではなくサポートする側に立て、自分なりの地域貢献ができます。さらには、学外のスピーチコンテストに出場し、人前で話せるようになりたいと考え

ています。昨年も『とこはことのは』で宣言したものの、未だに達成できていません。2020 年度は必ず行い、継続は力なりであることを証明します。最後に、今回私が入賞できたのは、先生方や友人といった周囲のサポートがあったからです。この恩を忘れずに、これからは私が人の役に立てるようにサポートしていきたいです。

出場者より

中国語への意識の変化

19122055 高橋 南海

大学へ入学して中国語を選んだのは、どんどん経済発展を遂げる中国が注目されているから、中国語が話せたらカッコいいからというぼんやりした理由だった。このたび多言語レシテーション大会に出場したのも、成績に加点してもらえからというぼんやりした理由である。しかし朗読を繰り返して練習するうちに、中国語に対するぼんやりした私の意識は確かに変化した。最終的には先生方をはじめ、友人たちや外国語学習支援センターの T A さん、先輩などの多くの人に支えられ、自分なりの魯迅『故郷』を詠い上げることができた。本番では今までで一番良い朗読ができた。しかし、入賞できない結果となり、とても悔しい思いをした。後に悔しいと思えるほど中国語に懸命に向き合った時間は、私を中国語学習に熱中させるきっかけとなったのだから、とても大切なものである。今は、自らの意志で中国語を学んでいる、と胸を張って言える。

中国語を好きになったおかげで、レシテーション大会自体も楽しむことができた。出場者の『故郷』の数だけ、さまざまな朗誦が登場する。一番伝えたいところや感情の入れ方を聞き比べするのがおもしろく、参考になったところはとても多い。日本語とは異なる中国語の響きやリズムや強弱を意識し、じっくり向き合った。こうして、中国語の発音の基本が身についた。

中国語はとにかく発音が難しい。日本語にはない音や声調など、発音の基本を修得するまでにはとても時間がかかり、嫌になることもあった。苦しみながらも、中国語に慣れるために毎日ひたすら声に出して練習をした。繰り返し練習するう

IV. 2. 多言語レシテーション大会

ちに、私はふと小学生の頃に百人一首を覚えるため、何度も声に出して練習したのを思い出す。ほかにも中学校で必死になって覚えた春暁や平家物語などを思い出し、自然と覚える作業を楽しむようになった。レシテーション大会を終えた今、魯迅の『故郷』は、日本人なら誰もが覚えたであろう「古池や…」や「ちはやふる…」のように、私の口からすっと出てくるようになっている。これは中国人の根底にある文化観や情緒を理解するのに重要な感覚へつながるのだろう。レシテーション大会への参加を通じ、やはりただただ文法を学ぶだけでは外国語を習得しえないと思った。

リベンジとして、次こそは入賞を狙う。こういう気持ちはもちろんある。だが、詩歌を通じて中国語への理解をさらに深めるためにも、来年またレシテーション大会に参加したい。

3. キャリア開発

キャリアガイダンス 2019 についての一考察

谷口 茂謙

2019 年度は、キャリアガイダンスが各学科で独自の企画として行われた。これまで、キャリアサポート委員会とキャリア支援課が中心となって、すべての学部 の 3 年生に向けて行われていた。3 年生までの学習で身につけた知識・技能には、学科ごとの特色がある。それらの知識・技能を活かした就職を目指す学生が多いことは当然である。就職活動をするにあたって、すべての学生に共通する心構えや準備が多いことも事実である。その一方で、例えば、外国語の知識・技能を活かした就職を考える場合と、経営学の知識・技能を活かした就職を考える場合とでは、準備の仕方に違いが出てくる。従来のキャリアサポート委員会とキャリア支援課による行事の重要性に何ら変わりはない。それらに加えて、各学科の特色を踏まえた就職支援の行事として、学科ごとにキャリアガイダンスを行う今年度の試みは、新たな発展の一步であり、大きな意義のある行事となった。しかし、その裏側には、予想された問題があり、それを解決するための対策が必要であった。この小論では、その問題点を明らかにするとともに、解決のための工夫とその効果について考察する。

就職支援の行事が抱える大きな問題は、参加する学生たちの数が少ないことである。それらの行事は授業ではない。学生たちが自主的に参加するものである。就職に対する意識の高い学生は自主的に参加してくれる。そのような学生たちは、実は支援を必要としないほど自分で活動できる。本当に支援を必要とする学生たちは、自主的には参加してこない。就職活動に対して積極的ではないため、遅れを取る恐れがあることに気づかない。キャリアサポート委員会でも、様々な行事に学生の意識を向けさせることが大きな課題となっている。

グローバルコミュニケーション学科 (GC 学科) では、専門科目としてキャリア開発科目群が設けられており、他の学科に比べて就職に対する意識の高い学生を育てる環境が整っている。それでも、授業外の時間に自主的な参加を促す形の行事では、多くの学生が参加するとは考えにくいと予測された。キャリアガイダ

IV. 3. キャリア開発

ンスは、就職活動に対する準備の機会であり、自分の就職に直結するようなメリットは期待できないからである。授業として単位を取ることができるインターンシップに参加する学生は多いものの、授業ではない就職関連の行事に自主的に参加する学生はやはり少ない。

この問題を踏まえて、GC 学科では、3 年次の専門科目であるビジネス実務の授業の一環にキャリアガイダンスを組み入れた。ビジネス実務は3年生の約9割に当たる70名弱の学生が履修している。その授業の1回を当てたのである。これによって、学科の大多数の学生を参加させることはできた。しかし、履修していない学生はやはり参加しなかった。授業の一環ではあるが、履修していない学生に参加を促す告知をしたものの、参加した学生は履修者のみであった。参加しなかった学生たちが、大学による就職支援が必要ないほど自主的に活動できる学生であるかは疑わしい。むしろ積極的な支援が必要だと思われる。履修していない学生の参加を促すことはできず、問題は残ったが、授業の一環とすることで、大多数の学生を参加させることができたことには大きな効果があった。

さらに、学生の参加意欲を高めさせることを狙いとして、ガイダンスの内容も工夫した。入社3～4年目の卒業生を招いてお話を聞く機会としたのである。本学の教職員による講話ではなく、世代の近い先輩たちの生の声を聞くことができれば、学生たちも積極的に参加してくれるものと期待した。実際の企画内容は次のとおりである。

日時・場所：11月25日（月）13:15～14:45 草薙キャンパスB棟307教室

卒業生：2016年卒 谷本大輔様（株式会社コーエイ）

2016年卒 横山理帆様（静岡県警察）

2017年卒 佐藤敦子様（オークラアクトシティホテルマネジメント株式会社）

2017年卒 柴田かりん様（株式会社静鉄ストア）

内 容：13:15～13:20 卒業生の皆様のご紹介と予定の説明

13:20～14:20 各卒業生のお話（一人15分で次の4点を伺った）

1. 在学中の準備(将来をどう考え何に力を入れたか)
2. 現在の会社・団体を選んだ理由（一番の決め手）

3. 現在の仕事内容 (辛い時とやりがいを感じる時)

4. 今後のキャリア (仕事と仕事以外の人生設計)

14:20 ~ 14:40 在学生からの質問に対するお答え

14:40 ~ 14:45 在学生への激励 (一言ずつ激励の言葉を頂いた)

製造、公務員、サービス、流通の各業界で活躍する先輩方が協力して下さった。いずれも地元静岡の経済・社会を支える有名な企業・団体であり、そこで活躍する先輩たちは、3年生たちが現実的な目標としてあこがれを感じることができる存在である。

企画にあたって、できる限り幅広い業界から卒業生を招くことと、学生たちにとって現実的に参考となる内容を語ってもらうことを心がけた。そのため、事前にお話し頂く内容を具体的に4点に絞り、予め卒業生に伝えて時間内にまとめてもらうよう依頼した。さすがに卒業生たちは、持ち時間を十分に使いつつ、決して超過せず、わかりやすいお話をして下さいました。おかげで予定どおりの進行の中で、学生たちにとってわかりやすく、心に響くお話を聞くことができた。

実は、学生たちの参加率に加えて、もう1つ予想された問題があった。それは、卒業生に対する質問である。社会人になる準備をさせるキャリア教育の中で、特に訓練すべき力の1つに質問する力がある。質問するためには、相手の話に対して興味を持ち、積極的に話を傾聴し、自分の考えと照らし合わせて比較検討する必要がある。その結果として、浮かび上がる疑問を投げかけることが質問である。つまり、質問するためには、予め自分なりの考えをしっかりと持っていることと、相手の話をしっかりと理解することが不可欠である。現在の3年生たちが、卒業生のお話を聞いてその場で質問することは難しいと思われた。

この問題への対策として、学生たちに予め質問を考えさせた。卒業生に話してもらう内容を伝え、それに関連する質問や各自で尋ねてみたい質問を募集し、指定したウェブページに登録するよう促した。結果として、当日の質問の時間に無駄な沈黙はなかった。その点では、この対策の効果が確かに認められた。しかし、先に述べた自主的な参加が少なくなることと関わる問題がここでも現れた。

学生たちには、「君たちの質問を予め先輩方にお伝えしてお答えを準備してもらう。当日の時間内にお答えいただけなかった質問には、後日、メールでご返事

IV. 3. キャリア開発

をいただくので、疑問に思っていることは何でも積極的に質問してほしい」と呼びかけた。募集期間は2週間もあった。ところが、質問を寄せた学生はわずか8人であった。3年生の大多数は、2年次に現代の産業を履修している。この授業では企業や団体から招いた講師による特別講義がある。その前週に、予習として質問を考えさせ、提出させている。その時の質問は、彼らなりに一生懸命に考えて、ほとんどの学生が提出する。中には的を射た素晴らしい質問が含まれていることもある。授業の単位が関わっていればしっかり取り組み、結果を出す力のある学生たちである。それにもかかわらず、授業ではないガイダンスでは、気を楽しんで尋ねられる先輩への質問でさえ、約8割の学生が取り組まなかった。

多忙の中で協力してくれた卒業生に対して、お話を聞いた学生たちの感想ぐらいいはお伝えしなければ失礼である。3年生には、質問と同様に、指定したウェブページに感想を登録するよう指示した。その際に、感想の提出をもって出席の確認とすると告げた。感想は全員が提出した。期限に遅れた者は、別に詫言のメールをよこしてまで受理してくれるよう依頼してきた。単位が関わればしっかりできる学生たちなのである。

単位という実利が直接に関わらないとしっかり取り組まないという現実、今の学生たちばかりではなく、世代を超えて一般的なことであるとも考えられる。キャリア開発科目を1年次から積み上げているGC学科の学生は、他学科に比べて就職に対する意識が高いと考えられる。GC学科の学生でさえこの状態であれば、他学科の学生の意識に対して、キャリアサポート委員会やキャリア支援課が危機感を持つことは十分に理解できる。だからといって、キャリアガイダンスをはじめとする就職支援の行事を、すべて学科のカリキュラムに含めて、授業の一環として行うべきであろうか。

筆者は、キャリア教育の立場からそれには賛同できない。社会では、現在の自分にとって直接に利益がないことであっても、将来の自分のために知っておくべきこと、学んでおくべきことがいろいろと出てくる。その機会に出会った時に、すぐに利益に結び付かないからといって、学ぶことを敬遠していると、「あの時やっておけばよかった」と後悔することが多くなる。それが人生の現実である。大学で与えられる教育の内容は、単位に関わらないとしても、自分の将来に関すること、長い目で見て自分のためになることばかりである。無駄なことは決して

教えていない。その典型的な例がキャリアガイダンスである。その意義に気づいて、自主的に取り組む必要があることを、学生たちに理解させる必要がある。

キャリアガイダンスは、3年生たちの目の前の実利に結び付いてはいない。しかし、就職活動を控えた学生たちの直近の将来に大きな影響を及ぼす。ガイダンスを受けて与えられた課題に真剣に取り組む、自分の就職についてより深く考えることで、就職活動をより有利に進めることができ、より理想に近い進路を見つけることにつながるはずである。キャリアガイダンスを授業の一環とすることで、自分の進路について考えさせる貴重な機会に参加する学生を増やすことはできた。事前に質問を募集することで、貴重な機会に沈黙を存在させることなく時間を有効に活用できた。学生たちの自主的な参加が期待できないという問題に対する対策としては、十分に効果があったと考えられる。

その一方で、目先の利益に直結しないことであっても、それを与えられた機会に学ぶこと、貴重な機会を積極的に活用することの意義を理解させることはできなかった。学生たちの参加意欲をかき立てる内容にする工夫はもちろん必要である。だが、そのような機会の意義を、単位という目先の利益に結び付けるのではなく、教職員がねばり強く学生たちに説いてゆく努力、学生たちの心に響く教え方をする努力が最も重要に違いない。キャリア教育の立場から、そのことを改めて肝に銘じたい。

4. 臨地実習

臨地実習の概要

戸田 裕司

グローバルコミュニケーション学科は、2018 年度以降入学生を対象とするカリキュラムを改訂するに伴い、2018 年 4 月に「臨地実習 A・B・C」という新たな科目を 3 つ開設した。「臨地実習」の 3 科目はいずれも、学生たちが主体的かつ積極的に学外での行事に参加し、目標や課題を自覚するという機会に位置付けている。まさにグローバルコミュニケーション学科での学びを統合的に運用する場である。

(1) 臨地実習 A

担当者：増井実子

時間：2019 年 11 月 24 日（日）

場所：焼津市焼津文化会館

参加者数：10 名

内容：「はあとふる Yaizu 2019」の企画運営に携わる。さらには、本誌「(GC) 学内外での教職員や学生の取り組み」に所収の概要や体験記を参照してほしい。

(2) 臨地実習 B

担当者：清ルミ

時間：2019 年 6 月 6 日（木）～6 月 11 日（火）

場所：米国ハワイ

参加者数：5 名

内容：「まつりインハワイ」でのインターンシップに参加する。さらには、下記の概要や体験記を参照してほしい。

(3) 臨地実習 C

担当者：戸田裕司

時間：2019 年 3 月 19 日（火）～ 3 月 28 日（木）

場所：中国福建省漳州市

参加者数：11 名

内容：閩南師範大学日本語学科において授業や課外活動へ参与する。さらには、
下記の概要や体験記を参照してほしい。

臨地実習 B の概要

清 ルミ

臨地実習 B は、近畿日本ツーリストが企画した海外インターンシップであり、6 月にハワイで行われる文化イベント「まつりインハワイ」の企画運営に参画する研修である。参加学生は他大学からの参加者と共に近畿日本ツーリストで 5 回の事前研修を行った後、6 日間ハワイに渡航し、3 日間開催されるイベントにスタッフの一員として参画するものである。

2019 年度はグローバルコミュニケーション学科から 4 名、英米語学科から 1 名、計 5 名が参加した。今年度は 6 月 6 日～ 6 月 11 日にハワイへ渡航してインターンシップを行った。学生たちは積極的に運営に取り組んだ様子で、指導にあたってくださった旅行会社のスタッフの方々からお褒めの言葉を頂いた。実習後、参加学生のプレゼンテーション能力の向上がめざましく、この実習を経たことで英語圏への留学を本格的に考える学生もあり、実習参加が各々の学生にとり効果的な起爆剤となったことがうかがえた。

ハワイインターンで見たこと感じたこと

18122001 青島 朋輝

2019 年の 6 月に近畿日本ツーリストのキャリアデザインプログラムに参加し

IV. 4. 臨地実習

ました。ハワイのオアフ島で開催される“まつりインハワイ”の運営スタッフとしてです。今年で40回を迎えたイベントです。毎年何千人もの人が参加し、国際親善と理解の促進、友好関係の助成、そして多様性の受容を目標に開催されています。

今回私を含め参加したのは、常葉大学から5名、他大学から6名の計11名でした。事前セミナーは東京メインで、スカイプを通して、静岡と関西に配信されました。週一回のセミナーとはいえ回数を重ねるごとに渡航に近づくのでそれぞれがすごく緊張していたと思います。空港ではセンディング業務の体験をしました。実際の添乗員さんの指導を受け、搭乗前の添乗員側とお客様側のやりとりを体験し、そこで自分はしっかりインターンに参加しているのだと実感しました。

いよいよハワイでのインターンが始まります。初日はバスでアラモアナショッピングセンターに移動し、ステージやその周辺の下見をしました。ステージ参加者を案内するルートの確認が主でした。そこからまたバスで宿泊するホテルに移動し、全体運営会議に出席しました。2日目は2グループに分かれてアラモアナショッピングセンターやワイキキビーチウォークで主にステージ参加者様の誘導・案内をしました。3日目は事前セミナーで体験したツアープランニングを検証しました。そして4日目、イベント最終日を飾るのは、スタッフやステージ参加者たちが一同に参加する“ワイキキ総踊り隊”によるパレードです。このパレードは今回から始まったもので、大通りを一時間以上かけて歩くものでした。このパレードによってこのイベントがどれだけハワイの人たちに長く親しまれていたか感じることができました。この4日間で一番楽しく記憶に残る時間でした。

総括します。キャリアデザインプログラムはインターンです。近畿日本ツーリストにインターンができるとも貴重な機会だと思います。今回のプログラムではオプションで旅程管理主任者の受験資格が得られます。添乗するには必須の資格で、旅行会社に勤務する人はほとんどの方が持っています。イベント運営の現場を体験できたり、同年代の仲間と協力したことはかけがえのない経験になったと思います。今回参加した人のほとんどが観光業に就きたいと考えているので、そういう方向に興味がある人は説明会に参加することをお勧めします。

2018 年度「臨地実習 C」実施報告

—2019 年 3 月・中国福建実地研修の概要—

戸田 裕司

1. 「臨地実習 C」の開設

グローバルコミュニケーション学科では、2018 年度以降入学生を対象とするカリキュラム改訂で、「臨地実習 A・B・C」の 3 つの科目が開設された。

この「臨地実習」3 科目は、学生たちが、「学外で実施されるプログラムへ主体的・積極的に参与することを通じて、到達点と課題を自ら明確にし、グローバルコミュニケーション学科での学びを統合的に運用する場」と位置付けられており、とりわけ「臨地実習 C」では、学生たちが「海外での活動・体験とその事前・事後の学習・作業とを通じて、異文化の中でも主体的・積極的に活動し、成果と課題を確認し教訓化する力を獲得する」ことをもくろんでいる。

我々としてもこの新しい科目が学生たちに受け入れてもらえるか、若干の不安を感じつつ開設初年度である 2018 年度を迎えた。実際の参加者は、正課として参加（履修）できるのは 1 年生 7 名のみであったが、正課外活動として（単位と無関係に）参加した 2 年生 4 名と併せて計 11 名に上った。学生たちは草薙ではなかなか見せてくれない活き活きとした笑顔で、中国でのタスクや活動・交流を満喫し、怪我や病気もなく帰国することができた。

2. 授業の概要

「臨地実習 C」は、海外実地研修（臨地活動）の部分が注目されがちである。しかしこの科目は全体として、(1) 臨地活動を企画・準備し、加えて現地事情・安全情報を学ぶ「事前活動」、(2) 海外での活動・体験そのものである「臨地活動」、(3) 海外での活動・経験を総括し、成果を公表し伝達する「事後活動」の 3 つの部分から構成されている。

2018 年度の臨地活動は、中国福建省漳州市に位置する閩南師範大学の日本語学科において授業・課外活動への参与することであった。したがって、事前活動では現地でのタスクの企画・準備を、事後活動ではその成果をプレゼン・レポー

IV. 4. 臨地実習

トとして形にする事が主な活動となった。以下は授業の実施記録である。¹

(1) 事前活動—2018 年度後期に実施

10 月 23 日	事前説明会	授業の概要、参加費用、教務上の注意など
11 月 13 日	第 0 回授業	参加確認、必要書類の配布と作成指導、授業日程協議
12 月 4 日	第 1 回授業	現地・帰国後タスクの検討、臨地活動注意事項
12 月 19 日	第 2 回授業	企画旅行会社 (JTB) 説明、安全対策・安全情報・現地事情講義
1 月 15 日	第 3 回授業	タスク分担・作業工程協議
1 月 30 日	第 4 回授業	現地プレゼン確定・分担・作業工程、旅行事務連絡
3 月 11 日	第 5 回・ 第 6 回授業	旅行事務・新年度当初手続等連絡、実習簿説明、現地タスク進行確認、帰国後タスク分担・調整

(2) 臨地活動—2018 年度春休みに実施

1	3 月 19 日(火)	成田空港に集合、東京成田空港より厦門航空 MF816 便で出国、厦門市内で宿泊
2	3 月 20 日(水)	厦門市より漳州市・閩南師範大学へ専用車で移動キャンパス見学★、歓迎交流会
3	3 月 21 日(木)	「聴力課 (リスニング)」(1 年生) の聴講および受講生との交流、漳州市旧市街歴史文化景観参観★
4	3 月 22 日(金)	漳州矢崎汽车配件有限公司 (矢崎総業現地法人) 工場見学★、漳州市内・郊外参観★
5	3 月 23 日(土)	帰国後タスク「漳州街歩きガイド」制作のための参観・取材★
6	3 月 24 日(日)	共同料理 (企画・買出し・調理・試食・片付け) ★

¹ 具体的なタスクの紹介と総括、および授業科目としての評価などについては、紙幅の関係で、別稿を期す。

7	3 月 25 日(月)	「視聴説課 (総合運用)」(3 年生)でのプレゼン実施および受講生との交流、文学部にて古箏サークル参観・茶文化講座★
8	3 月 26 日(火)	「日本概況課」(2 年生)でプレゼン実施および日本語での質疑応答、帰国後タスクのための市内参観・取材★、歓送会
9	3 月 27 日(水)	漳州市・閩南師範大学から廈門市へ専用車で移動(車中で引率教員が「在学生ガイダンス」を実施)、廈門市内参観・廈門市内で宿泊
10	3 月 28 日(木)	廈門高崎空港より廈門航空 MF815 便で帰国、成田空港で通関後解散

(★印は、閩南師範大学日本語学科学生とともに実施された項目である。)

(3) 事後活動—2019 年度前期に実施

4 月 4 日	第 7 回授業	臨地活動体験総括、帰国後タスク確認、授業日程協議
6 月 10 日	第 8 回授業	帰国後タスク中間集約
7 月 8 日	第 9 回授業	帰国後タスク原案確認、体験報告プレゼン予行演習
7 月 17 日	第 10 回授業	「教養セミナー」(1 年)において体験報告プレゼン・質疑応答の実施
7 月 24 日	第 11 回授業	帰国後タスク完成確認、授業全体総括・講評

3. 所 感

学外での活動を主眼とする PBL 型授業、とりわけ“語学研修ではない海外実習”を科目として設置することの必要性は、グローバルコミュニケーション学科で早くから認識されていた。戸田は 2016 年度に「臨地実習 C」の担当教員予定者とされ、臨地活動の実施場所などの選定・交渉などに当たってきた。以来、学科の同僚の支援や事務局の理解を得つつ、2018 年度によりやく上記の通り実施の運びとなった。

また前年度の 2018 年 3 月に、学科学生有志 6 名²の参加を得て、全行程 7 日

² このたび卒業となる及川舞優・高橋葵・森谷みなみ・山下祐布子の 5 名と現 3 年生の小野寺悠夏の 6 名がこのテスト・ラン(通称「モルモット・ツアー」)に参加してくれた。

IV. 4. 臨地実習

間のテスト・ランを行った。ここで、想定していたタスクを施行し、また実際に学生と共に行動・活動することで、旅程や実施手順を実践的に調整・改善することができた。先の展開が見えない中、過密なタスクをこなしてくれた当時の参加者には感謝の言葉もない。このテスト・ランの経験があったため、本番の授業は思いのほかスムーズに進めることができた。

また、当然ながら、テスト・ランも含めて、この授業の受入機関となってくださった閩南師範大学の海外教育学院(国際交流部)および外国語学部教職員のご配慮、日本語学科学生の皆さんのご協力がなければ、常葉の学生にかくも良好な学びの場を与えることはできなかった。

ここまでの私は、多くの皆さんのご厚意を受け取ることばかりが多かったが、すでに事前活動がはじまっている 2019 年度臨地実習 C を、双方の大学にとってより有意義なものにすることで、少しでもお返しができればと考えている次第である。

本稿では、臨地活動や事後活動の詳細に触れることはできなかったが、本誌に収録されている風岡花菜さんの参加レポート(帰国後タスクの 1 つ)から、学びの成果は十分感じるができるものと思う。

中国を肌で感じる

—体験して分かった中国人学生の生活—

17122022 風岡 花菜

〈目次〉

1. 食事・買い物で見た中国人学生
2. 中国人学生のアルバイト事情
3. 料理対決での出来事

はじめに

私は大学二年生の春休み、3月19日から3月28日まで行われた「臨地実習C」

に参加し、中国福建省漳州市にある閩南師範大学を訪れた。この研修は語学学習が主ではなく、日本語学科の授業への参加や学生との交流活動がメインであり、私たち二年生にとっては半分「思い出作り」のような研修であると思われた。

しかし、実際はこの 10 日間という短い時間の中で、自分が想像していた以上の収穫があった。その中で最も印象的だったのが、日本の学生と中国の学生の違いである。今回、中国の学生と交流をする中で、自分自身が想像していた中国人学生像と違った部分がいくつかあり、驚くこともあった。これらの事柄は、中国に行ったことのない多くの日本人も知らず、想像や思い込みで中国人像を描いているはずであると考えた。

そこで私は、この実習で明らかになった中国人に対する思い込みや、日中両国の学生生活での違いを、1. 食事・買い物での出来事、2. アルバイト事情、3. 料理対決での出来事という 3 つの体験に分け、紹介しよう。

1. 食事・買い物で見た中国人学生

①食事について

まず、中国人学生と交流する中で多かったシーンが食事である。大学の学食や大学周辺のお店など、彼女たちが普段食べている料理と一緒に食べた。学食では 10 元（約 160 円）で牛肉ラーメンを食べることができ、日本よりも格段に安かった。当初は量や味に若干不安を感じたものの、結果はお腹も心も大満足の料理ばかりだった。

このように食事に行くと、ほぼ毎回中国人の学生たちが費用を支払う。日本では友達と食事に行くと「割り勘」をすることが多い。だが、彼女たちは違った。誰か一人（もしくは二人）がまとめて会計をしていたのである。

私は、実習に行く前の事前指導で、中国人は割り勘をしないことはあらかじめ聞いていた。日本では友達と食事に行ったとき、自分が食べたものは自分が払う。合計金額を人数で割ったり、個別に会計をしたりする光景はよく見られる。そうしないと、「自分だけお金を払っていない」という罪悪感のような気持ちすら感じることもある。

そういった意味では日本人はお金に細かく、“金銭の貸し借り”の意識が強いように考えることもできる。さらに貸しをなるべく作らないことや、対等な価値

を支払うことで、人間関係を構築しているのだろう。

一方中国では、一度の会計を分割するのではなく、基本的に誘った方が一括で支払うことが一般的となっている。誘われた側は、次回食事に誘うことで公平に支払いができる。こういった「おごり、おごられ」の関係は長期間で行われるため、人間関係を深めることができると考えられている。

私はこの中国の習慣を理解していたつもりではいた。だが、実際そのような場面に直面すると、「毎回お金を払ってもらって申し訳ない」という日本特有の気持ち強く感じた。

②買い物について

食事をしながら彼女たちの生活について聞いていたところ、日本とは少し違った面白い中国の買い物事情をうかがえた。

ワンダー（万達広場）というショッピングモールに連れて行かれ、日本にもある「ユニクロ」や「H&M」だけでなく、日本ではあまり見ないスタイルのお店がいくつもあった。

私は彼女たちに、普段もワンダーで買い物をするのかと聞いたところ、あまり買い物に来ることはないと答えた。衣服だけでなく、食べ物や本などはもっぱらインターネットで購入しているそうだ。その理由は二つある。一つ目は、店舗よりもインターネットの方が安く買い物ができるからであり、二つ目は、買い物にかかる時間が大幅に短縮できるからだという。

この二つの理由から、中国人は合理的な思考を持っているといえる。インターネット通販が「買い物をするなら安く手軽に済ませたい」という考えにぴったりはまったようである。彼女たちは高校生の頃からこのような買い物をしていたようで、受験勉強や学校の課題など勉学に勤しむ学生たちにとって、インターネットでの買い物は非常に便利である。日本でも、インターネット通販を利用する人が増加しているものの、それ以上に中国ではインターネットでの買い物が日常生活に浸透しているように感じた。

2. 中国人学生のアルバイト事情

先程も述べたように、中国の大学は寮生活が主流である。よって、大学の敷地

内には学生寮が建ち並んでおり、その周辺にはコンビニや理髪店、診療所などもある。必要最低限の生活は、大学の敷地内で完結してしまう。

中国人学生がこのような寮生活を送っていることについて、事前指導で聞いていた。だから私は、学生たちが大学の敷地内またはその周辺でアルバイトをしていると想像していた。しかし、実際は違った。中国人学生の多くはアルバイトをしていなかったのである。なかには、以前までドリンクスタンドで働いていた人もいたが、今はもう働いていないそうだ。

私は、彼女たちに生活費をどのようにして確保しているのかと聞いてみたところ、親から仕送りをしてもらっていると言う。日本の大学生はほとんどの場合、アルバイトで確保している。日中の学生生活の違いにはどういった背景があるのだろうか。中国の大学生が一つに寮生活をしていて、二つに学業が大変であるのが関係しそうである。

日本では、学生は一人暮らしか実家暮らしかのどちらかが多く、どちらも生活に縛りがなく、自由な時間を取ることが出来る。とりわけ実家に暮らしていれば、金銭的にも生活面でも余裕が生まれる。また、家から学校までの行動できる範囲も広く、アルバイトし易い環境がある。

一方、中国では、寮生活でみんながまとまって暮らしているため、行動範囲も大学の敷地内からその周辺までというふうに限定的であり、さらに学歴社会である中国では学業が忙しいために、学生が自分で働いてお金を稼ぐという意識は少ないようだ。

私は、中国人はアルバイトを掛け持ちして、よく働くのだと思い込んでいたのだ、驚いた。

3. 料理対決での出来事

実習 6 日目、私たちはグループに分かれ、料理対決をすることになった。まずはグループで作りたいものを決め、それから各自買い出しに行く。買い出しが終わると、アパートの一室のような場所で料理をすることになった。

オムライスや巻き寿司を作るグループが野菜を切ろうとしたとき、中国人学生がまな板を使わず宙で人参を切ろうとする。気づいた日本人学生がすかさず止めに入ったが、彼女はそれでも「大丈夫」と言って切り続けようとした。

IV. 4. 臨地実習

また、あるグループが揚げ団子を作るために鍋に油を入れ、調理をした。私たちはその油の処理について、先生に相談をしようと思った。そのとき、ある中国人学生がおもむろにその鍋を持ち出し、流しに油を捨て始めたのである。火を消したばかりで高熱の油が流れ、流しから「バチバチバチッ」という音が響く。まさかと思い振り向くと、その時にはすべての油が流しに捨てられてしまっていた。「水道管がつまってしまわないか」、「環境に悪いことをしてしまったが大丈夫なのか」という焦りを感じた。だが、彼女は「大丈夫です」と笑顔で答えてくれた。私にとってかなりの衝撃であった。このような行為に及んだのは彼女の環境意識が低いからではなく、どうやら単に料理をする経験がなかったからだと考えられる。

私たち日本人の多くは、学生の間も家族と暮らし、親が料理をする姿を見ている。時には手伝いもする。また、一人暮らしの中で自炊したり、アルバイトで調理を経験したりする。

しかし、中国では若いうちから実家を離れ、学校の学食を食べて生活する。寮には共同の料理スペースがあるものの、ほとんど料理する機会はない。このような環境にいれば、「油は流しに流さない」というような基本的な知識を必ずしも持っているとは限らない。私は「中国人はみんな包丁さばきが上手く、フライパンを振って豪快に料理しているのだろう」というイメージを勝手に抱いていた。このような思い込みのゆえに、今回の出来事には非常に驚いた。

まとめ

私は、臨時実習に行く前に「中国はこうだろう。中国人はこうだろう」という思い込みをいくつも持っていた。しかし、実際はこのような考えが的外れだった。交流した学生たちは日本語学科で日本語を勉強し、日本に興味を持っている人たちである。そのため、文化の違いにも嫌な顔をせず、ときには「なるほど!」と興味を示した。しかし、大学から街へ出て、多くの中国人と交流しようと思うなら、これらの思い込みはコミュニケーションの妨げになってしまうかもしれない。中国に行って中国人と仲良くなるためには、自分の想像する中国人の生活と実際の中国人の生活が違うことを知っておかなければならない。そのためには事前に調べたり、実際の状況下で臨機応変に対応したりして、自他を理解することが求

められる。

これは、中国語だけでなく、中国や台湾という地域について学ぶ際にも言える。教科書やメディアだけで中国について判断するのは、「やはり中国だから」、「どうせ中国人だから」という偏った見方を持ってしまう。日本で見聞きする中国の姿だけを鵜呑みにするのではなく、様々な情報を集めたり、実際に中国を訪れたりして、いろいろな角度から吟味検討する態度を持つことが大切である。こうすることによって、新たな一面が見え、探究心が更に強まる。

そもそもこのたびの実習は 10 日間ととても短く、福建省漳州市を見ただけである。中国という国を理解するには、もっと多くの地域を訪ねることが必要である。とはいえ、実習に行く前と行った後では、自身の中国理解がガラッと変わった。「旅行では味わうことのできない貴重な体験」を今後の学習に活かしていきたい。

5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

歓迎聆聴：2019 年度公開講演を実施して

若松 大祐

2019 年度は、自身の授業の一環として合計 8 回の公開講演を実施しました。いずれの講演も、授業担当者である若松の不足を補って余る内容でした。講演終了後にアンケートを取ったところ、受講者は講演を通じて新たな知識を得たり、何か物事について考えるきっかけを得たようです。

アンケートでは、受講者に次の 3 点の記入を求め、要点を把握する力や批判（≠ 批難）する力の涵養を図っています。

- (1) 講演の主旨：講演の「主旨」（＝伝えたいこと）は何か。
- (2) アカデミックな感想：今回の講演を聞いて、新たに知ったこと、もしくは意外だったことは何か。
- (3) アカデミックな批判：講演の主旨を踏まえれば踏まえるほど、言及がなかったり、矛盾していたりすると感じたことは何か。

講演は公開しており、本来の授業の受講者のみならず、他の学生や教職員、時には学外からも聴講する人々がありました。とはいえ、授業の受講者以外の参加者はまだまだ数なく、残念です。2020 年度も引き続き公開講演を実施しますので、この記事を読んだあなたもお越しになりませんか！

なお、ゲストスピーカーを招聘するにあたり、常葉大学教材費の支援を受けました。改めてお礼申し上げます。（残念ながら、予算の関係で来年度からは、授業を使っの公開講演会は 1 年間に 2 回だけの開催になります。）

< 公開講演の一覧 >

ほとんどが 60 分の講演、20 分の質疑応答です。

- (1) 7/16(火) 16:45-18:15、教室 A427（授業名：世界の宗教と民族）

小川了 (OGAWA, Ryo)、東京外国語大学・名誉教授

「民族とは？そして民族紛争を考える」

本講演では民族という概念について、アフリカを事例にしながら解説した。人々

の民族意識や宗教意識は、人々のアイデンティティ（自分という意識）に関わる
繊細、かつ重要な問題である。政治的権力を持つ人々はこの意識を利用してきた
と言える。

(2) 7/17(水) 13:15-14:45、教室 B408 (授業名：世界と日本)

小川了 (OGAWA, Ryo)、東京外国語大学・名誉教授

「日本からアフリカを見る、アフリカから日本を見る」

本講演では、アフリカの社会とわれわれ社会の非常に異なって見える側面に、
特に結婚制度に着目した。他方で、アフリカ人の考え方と日本人の考え方に共通
点があることも見た。相違点や共通点を通して、そこにどのような理由、根拠が
あるのかを考えることが大切であると言えよう。なお、本講演は、「日本語教授法」
(清ルミ) と合同で実施している。

(3) 7/25(木) 16:45-18:15、教室 A520 (授業名：国際関係論 A)

紺屋あかり (KONYA, Akari)、お茶の水女子大学・特任講師

「近代国家パラオにおける政治と seiji」

国際関係論を学ぶ上で、主権国家という概念の把握が不可欠である。しかし、
本講演ではあえて主権国家とは言い難い地域の一例としてパラオを取り上げ、主
権国家とはそもそも何か、その特長について考えた。

(4) 8/7(水) 13:30-16:30、教室 A525 (授業名：海外中国語研修事前・事後指導)

赤松美和子 (AKAMATSU, Miwako)、大妻女子大学・准教授

「台湾を楽しくサバイバルするための安全指導」

赤松美和子、若松大祐 (編著)『台湾を知るための 60 章』(東京：明石書店、
2016 年)を使いながら、台湾に渡航するに際しての基礎知識に始まり、台湾の
歴史や文学について話題が及んだ。

(5) 10/17(木) 16:45-18:15、教室 A520 (授業名：国際関係論 B)

薛化元 (HSUEH Hua Yuan)、(台湾) 国立政治大学文学院長・政治大学台湾史
研究所教授、二二八事件紀念基金会董事長

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

「國際社會與台灣民主發展」

(國際社会と、台湾における民主的發展)

本講演は、1945 年以來の國際社会の展開を念頭に置きながら、現代台湾の民主主義の歩みを意味づけた。「国家とは何か」という問いについて再考する機会になったにちがいない。講師には『戦後台湾歴史閲覧』(台北:五南、2010 年)、『台湾歴史年表』(台北:業強出版社、1993-1998 年)といった重要な研究成果が多数ある。また、赤松美和子、若松大祐(編著)『台湾を知るための 60 章』(東京:明石書店、2016 年)にも寄稿している。なお、講演は中国語で行われ、若松が日本語へ通訳している。

(6) 11/8(金) 9:00-10:30、教室 A520 (授業名:中国語会話 IB)

王韶君 (ONG, Siao-kun)、(台湾)財団法人呉三連台湾史料基金会助理研究員

「從語言認識台灣:兼介拙著《「中國」作為工具》」

(言語から見た台湾:拙著『手段としての「中国」』の紹介を兼ねて)

本講演では、言語から台湾という地域の特徴を論じた。台湾では人々は中国語を使う。同時に、別の言葉も使う。一体、台湾の言語状況はどのようになっているのか。こういった疑問について、解説した。また、新著『日治時期「中國」作為工具的台灣身分思索:以謝雪漁、李逸濤、魏清德為研究對象』(台北:稻鄉、2019 年)の紹介も兼ねてた。なお、講演は中国語で行われ、若松が日本語へ通訳している。

(7) 11/27(水) 13:15-14:45、教室 A520 (授業名:人間力セミナー)

下嶋篤 (SHIMOJIMA, Atsushi)、同志社大学文化情報学部・教授

「論理的思考とはなにか」

論理的に考える能力の重要性は、最近とくに指摘されることが多い。しかし、そもそも論理的思考とはどういうものをいうのか。本講義では「論証」の概念をもとに、この問いに答えた。受講者は事前に下記のビデオ(計約 35 分)を視聴し、クイズに答えた上で本講演に参加した。反転授業としての実施である

(8) 1/9(木) 10:45-12:15、教室 A520 (授業名: 中国語会話入門)

小川 快之 (OGAWA, Yoshiyuki)、国士舘大学 文学部史学地理学科・特任教授

「流行歌から考える中国語の世界：近現代の流行歌とその背景」

中国語の流行歌は、C-POP などとも呼ばれ、海外の流行歌や中国の伝統文化の影響も受けながら、大きな発展をとげてきた。しかし、日本ではあまり知られていない。そこで本講演では、近現代の中国語の流行歌の歩みとその背景について、実際に音楽を鑑賞しながら解説しつつ、流行歌という視点から中華圏の言語や文化を論じてみた。なお、本講演は、「中国語会話入門」(戸田裕司)と合同で実施している。

お茶で世界と繋がる

19122092 望月 結萌

大学に入ってからサークルにも所属せず、何か突出した才能や趣味があるわけでも無かった私は、怠けて過ごすことが多かった。そんな自分に嫌気がさしていた頃、友人に誘われたのが、2019 年 11 月 7 日～10 日に静岡市で開催された「世界お茶まつり」だった。様々な国の文化に触れることができるということで、外国語学習の良い刺激になるのではないかと考え、参加することにした。世界お茶まつりは毎年、春と秋にグランシップで開催され、ボランティアを募っている。私が 11 月 9 日に参加した「世界の路上茶屋体験」というブースには、韓国留学生 2 名を含む 10 人前後の学生がボランティアとして集まった。このブースでの仕事は、イベント終了までひたすら 7 か国のお茶を作っては、来場者に運ぶという内容である。来場者のみならず、ブースのスタッフの方々など、たくさんの人々と交流をすることができた。ここでは、このたびのボランティアに参加して、気付いた 2 つのことを述べたい。

まず、私は他国の文化について知ったつもりでも、実は全く知らなかったということに気付かされた。大学に入学してからの半年間、嫌というほど他国の文化を学んできたつもりだった。授業で学んだ国々の文化についての知識は、入学前より格段に上がったからだ。私の所属するグローバルコミュニケーション学科で

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

は、一年生の前期に毎週四時間を使って文化入門という授業で、4か国の文化について学習する。しかし、静岡と繋がっている国は4か国だけではない。例えばマレーシア人が甘党であることや、緑茶がウズベキスタンで飲まれていることなど、大学の授業では習うことのない食文化もあり、ボランティアを通じて初めて知った。私はこのボランティアに参加したことで、新しい目標に出会えた。外国語学習に対し、今まで以上に意欲的に取り組み、多くの国々の人々と交流して、その国々の文化を知り、もっと自分の視野を広げたいと思うようになったのである。

次に、お茶を通じて世界と繋がれるという静岡の長所を再発見できた。私は日常生活の中で、お茶について深く考えることは今まで一度も無かった。静岡でお茶がたくさん生産されているのは、当たり前ことだと考えていたからだ。「世界お茶まつり」は、お茶のまちである静岡だからこその行事である。言い換えれば、静岡にしかない形の国際交流である。私はこの国際交流にボランティアとして参加し、大学の授業とは違う方法で多様な文化に触れることができた。そして、今後の外国語学習に対し、モチベーションアップにも繋がった。

来年もまたボランティアとして参加し、新しい自分に会いたい。

多文化共生への道

16122043 仲宗根 エイミ

外国語学部グローバルコミュニケーション学科では、焼津市役所市民協働課と協力し、一昨年から多文化共生事業に参加している。この事業では、焼津市で暮らしている様々な国籍の外国人と交流し、日本人と多文化共生ができるように手助けをしている。事業の目的は、近年、焼津市の外国人居住の増加に伴い、地域における多文化共生の対応について、学生ならではの視点で考え、解決策を提案することである。ここでは、事業の内容、問題点・結果、解決策などを挙げ、今後の取り組みの参考にしてほしいと考える。

1. 郵送によるアンケート調査

平成30年11月10日～平成30年12月28日まで常葉大学と焼津市役所市民協

働課でフィリピン、ブラジル、中国、ベトナム、ペルーの 5 か国の 18 歳以上の男女を対象とし、無作為で抽出した家庭に郵送しアンケート調査を行った。日本語の調査票を元にスペイン語、ポルトガル語の翻訳は学生同士で手分けをして作成した。調査項目は、主に 4 つに分けられ、年齢・性別・国籍・世帯人数・仕事などの基本的な情報、地域行事参加の有無・近所付き合い・日本語能力などの日常生活に関すること、子供の進学状況や将来についてなど子育て・教育に関することを調査した。対象者数は 400 名で、回答者数は 81 名 (回答率 20.6%) だった。

① アンケート調査の結果

アンケート調査を行ったことにより、外国人が抱える問題が浮き彫りとなった。生活面では、地域の行事 (お祭りやスポーツ) などに参加している人がいる一方、参加していない人のアンケートを見ると、「町内会・自治会」のことについてよく分からないと回答している者が多く、情報の共有がうまくできていないことが分かった。また、行政サービスに望むこととして、「無料の日本語教室を開いてほしい」、「市役所などの窓口の多言語通訳を充実してほしい」、「緊急時の防災情報を多言語で放送してほしい」などの要望が多数あった。教育面では、「将来の進路」、「教育費」が不安と回答している者が多い結果となった。

② 解決策

アンケート調査では、生活面では、情報の共有不足・多言語化の対応の少なさ、教育面では、基本的な知識の不足 (日本の教育システム) が問題の要因であることが分かった。これらのことを踏まえ、学生からは様々な提案が述べられた。一部を紹介する。

「幼稚園・保育園・小学校の子どもを持つ母親を対象にママ友会を開催」、「地域の防災訓練、避難訓練に通訳をつける」、「日本人学生と同年代の外国籍学生の交流機会の創出」、「病院の問診票の多言語対応化や無料検診会」、「日本語教育のボランティアの育成」などが挙げられた。

2. 聞き取り調査

焼津市内在住外国人の現状を聞くため、フィリピン、ブラジル、中国、ベトナム、ペルーの 5 ヶ国の市民に対してヒヤリング調査を数回に渡り実施した。学生

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

同士で2～3名のグループを組み、それぞれが学習している言語でのヒヤリング調査に挑戦し、実際に外国人の生の声を聴くことができた。

①聞き取り調査の結果

日本に対しては「治安が良い」、「便利」、「清潔」、「日本人は親切」、「交通ルールがしっかりしている」など、便利で生活しやすいと感じている人が多かったが、子育て・教育面に関しては、「進学するための準備が分からない」、「子どもが日本の学校に通っているため、母語で話すことが困難である」、「教育費についてよく分からない」、「将来、子どもを日本に進学させるか、母国で教育を受けさせるか」など悩んでいる親子が多数見受けられた。

私たちが思っているほど、日常生活で困っている人はそれほど多くなかったが、数回のヒヤリング調査で、子育て・教育面で苦勞している親子が沢山いることが分かった。

②解決策

学生側の意見として、「定期的に日本人親子と外国人親子が集まれるような会をつくる」、「進学するための講演会を開き、日本の教育のシステムについて理解してもらう」、「基本的な学校制度を理解してもらうため、多言語で書かれた冊子を配る」などが挙げられた。それに対し、焼津市役所市民協働課からは、今回の提案を参考に、市内に在住する外国人が生活者として、地域コミュニティ活動に参加・協力しやすくする仕組みを検討したいと述べてくれた。

3. 親子体操教室・交流会

親子の交流を深めるとともに今後の進学の準備に必要なことを理解してもらうため、令和元年12月7日に焼津すみれ団地にて交流イベントが開催された。前半は、「3B体操」を実施し、音楽に合わせて体を動かしたり、親子間でのコミュニケーションを楽しんだりと楽しいひと時を過ごすことができた。

・親子体操教室・交流会に参加して

実際に子供と母親がコミュニケーションを取っている姿、子供たちの元気な姿

を目の当たりにし、「3B体操」の名がもっと全国的に普及すれば、マタニティブルーや子育てで悩んでいるお母さんたちにとっては、親子間でコミュニケーションを取る良いきっかけになるのではないかと思った。また、外国籍の親子が日本人親子と情報を共有できる場に成りうるとも感じた。そして、子どもたちも新しい友達と出会うことができるため、人見知りなどの性格が少しは改善されるのではないかとも思った。人に慣れるためには、いろいろな人と接し、コミュニケーションを取らなければならない。そういった意味で、この3B体操教室の開催は、親子間にとって沢山のメリットがあるものだったと思った。

交流会では、実際に自分が経験してきたことと日本の教育の仕組みを説明した。日本の学校は、ランドセルや体操着、防災頭巾など共通して使うものが多いため、小学校一年生から多くの出費がある。そのため、入学の準備だけでも六万から多い方で十万円を用意する必要がある。日本人なら、この仕組みはある程度分かるが、外国で暮らしてきた或いは異なった文化を持つ親子にとって、紙一枚渡されただけでは、日本の教育の仕組みを完全に理解することは難しいと実際に交流してみても分かった。また、日本で暮らしが長くなると、子どもは自国のアイデンティティを忘れ、親子間でのコミュニケーションが困難になってくるということも改めて分かった。

3. 多文化共生事業での経験

私は、外国語学部グローバルコミュニケーション学科に入学したからには、自分の母語であるスペイン語や大学で学習している中国語・ポルトガル語を使用し、異文化交流に参加したいと強く思っていた。二年前、教育の一環として、焼津市役所市民協働課と常葉大学グローバルコミュニケーション学科が協力して「多文化共生事業」が始動した。私の家庭は日系ペルーであり、幼い頃に日本とペルーを何度も行き来している。自分の経験を多くの外国人に伝え、少しでも希望を与えたいと思い、このプロジェクトに参加した。私自身、小学校時代は、三年ずつ両国で暮らしてきているため、外国人生徒の悩みに共感できる部分が多々ある。幸いにも私が転入した日本の小学校には、外国籍の子どもが多く、自分だけが異なるという「孤独」な気持ちが生じることはなかった。しかし、仮に自分だけが「異国の入」という状況であったのならば、状況は異なっていたのかもしれない。

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

もしかしたら、自分のアイデンティティを押し殺して、日本の社会に溶け込もうと無理をしていたのかもしれないと今では考えている。多文化共生事業では、多くの場面で、自分のエピソードを紹介してきた。もっとも聞かれたこととして、「子供が日本語でしか受け答えをしてくれなくなったが、どうすれば良いか」という質問である。私は、必ずこう答えるようにした。「子どもたちにはしっかりと自分たちのアイデンティティを教えること」、「家庭内言語は必ず母語にすること」。自分たちの文化を愛することができなくなったら、必ず親子間で衝突してしまうと考える。私は、実際に衝突した例を何件も見えてきた。自分たちの文化もそうだが、他の文化も理解し、愛することがより「多文化共生」への道が開けるのではないかと約二年間の事業を通して改めて感じることができた。

最後になるが、興味深い書籍を見つけたため、一部紹介する。

佐藤郡衛『多文化社会に生きる子供の教育』（東京：明石書店、2019）。

外国人の子どもの実態と外国人の子どもの教育について把握できる書籍となっている。本書は、「文化間移動と教育」、「外国人の子どもの増加と多国籍化の歩み」、「外国人の子どもの教育」、「多文化共生の教育」、「外国人の子どもの人権と教育」、「海外で学ぶ日本の子ども」、「グローバル人材育成と国際バカロレア」、「現場生成型研究」の八つの章に分けられる。ここでは、「文化間移動と教育」について紹介する。

外国人の子どもたちが母国から日本に來たり、日本から母国に戻ったりすることを、「文化間移動」と呼ぶ。母国から日本に來た子どもの場合、親の都合によって移動を余儀なくされた場合がほとんどであり、日本の文化に慣れるまで時間がかかり、大人以上に葛藤を伴うという。母国で築き上げた友人関係とは別に一から友情関係を構築する必要がある。また、「日本」という異文化に上手く適用するには、親や家族によってサポートが必要不可欠である。長期的な視点で生活設定を行っているかいないかによって、子どもの将来が大きく変わってくると著者は言う。多くの外国人の家族は設定ができていないことが多い。

教育の現場では、異文化適応の過程に積極的に教師が介入し、子どもの「アイデンティティの交渉」が可能な環境を作り出すことが、今後の課題になってくるという。例えば、学校や教室の掲示物に子どもたちの母語を使ったり、母語で作

文を書かせたり、彼らの文化を教師が尊重してあげる必要がある。そうすれば、子どもたち自身も孤独にならず、認められていると感じる。日本の教育現場では、こうした「アイデンティティの交渉」がまだまだ足りていない、と著者は語った。

本書を読み、私は共感できる部分が多々あった。「あの子は変だ」「あの子の家庭は違う」と否定的な考えを持ったり、教えたりするのではなく、「あの子のこの文化は素晴らしい」、「互いの文化を共有し合おう」という考え方を全ての人に持ってほしいと思った。

聞き取り調査



親子体操教室

やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu 2019」

ボランティア活動報告

「はあとふる Yaizu」は、焼津市役所と焼津市国際交流協会が主催して、地域の外国籍住民と日本人住民がふれあう機会を提供する国際交流事業であり、年に一回開催されている。26回目を数える今年は、11月24日（日）に焼津文化会館で開催された。

今年の「はあとふる Yaizu」には外国語学部生 GC 学科生 10 名が実行委員として加わり、各国のダンスや音楽の披露、各国料理の販売や民族衣装の試着、常大ブースの設置（フォトスポット、外国語表記のネームカード作りなど）といったさまざまなアトラクションの企画・準備・実施に主体的に関わった。また当日は 35 名の常大生ボランティアが参加し、スタッフとしてイベントを支えた。

GC 学科のカリキュラム改定により、2018 年度から学外での活動に学内での事前・事後指導を組み合わせる単位認定する「臨地実習」科目が新設された。「はあとふる Yaizu の実行委員活動」は「臨地実習 A」における指定の臨地活動であるため、従事した学生は単位を認定される。このような仕組みによって、GC 学科生の学外活動がますます活性化することを期待している。

学生の活動を温かい目で見守りサポートくださった焼津市役所市民協働課担当者堀内さん、進藤さん、清水さん、そして実行委員長のマハラジャン・ナレスさんにはこの場を借りて心からお礼を申し上げたい。

以下に、実行委員の氏名と役割分担、実行委員 2 名の手記を紹介し、今年度の報告とさせていただきます。（増井実子）



はあとふる Yaizu 2019 実行委員 (いずれも外国語学部 GC 学科生)

2 年	伊川 亜祐菜 (2 回目)	常大ブース、各国料理店事前取材
2 年	佐々木 なな子	常大ブース、各国料理店事前取材
2 年	寺田 純香	舞台司会・進行、各国料理店事前取材
2 年	西川 莞人	副実行委員長、舞台司会・進行
2 年	望月 里緒菜	副実行委員長、舞台司会・進行、ラジオ広報出演
1 年	植田 貴久	フォトスポット制作、ケーブルテレビリポーター
1 年	大石 健太郎	外部協賛店開拓 (茶業)、各国民族衣装ブース
1 年	杉本 楓	常大ブース、外部団体チラシ配布
1 年	鈴木 悠人	スタンプラリー、各国料理店事前取材
1 年	村田 圭花	フォトスポット制作、各国料理店事前取材

はあとふる Yaizu 2019 実行委員手記

2 回目のはあとふる Yaizu

18122005 伊川 亜祐菜

「はあとふる Yaizu」は焼津市国際友好協会と焼津市役所が主催する国際交流イベントです。静岡・焼津市に住む外国籍住民と日本人、又外国籍住民同士が交流することで相互理解のきっかけになることを目的としています。私の所属するグローバルコミュニケーション学科では実行委員活動を一つの科目として認定をしており、この科目を通じて、チームで働く力や多文化共生社会構築に持続的・能動的に取り組む力を身につけることを目指しています。

私は昨年に引き続き今年も実行委員を務めました。この国際交流イベントに加わろうと思った理由は、たくさんの人と交流しながらイベントを一から作り上げるという経験をしたかったからです。小学生の頃から韓国語の勉強を始め、高校時代は国際科に通っていたということもあり、大学に入学する以前から海外の方と交流することに興味がありました。現在大学で学んでいる中国語やスペイン語といった言語、また協働研究セミナーで学んでいるグループワークもこのイベン

トで生かすことができると考えました。

2年間の実行委員活動を通して自分が成長した点は3つあります。1つ目は多様な人とコミュニケーションをとること、2つ目は人をまとめること、そして3つ目は状況に合わせて物事を見ることです。1年生で参加した昨年は、先輩や市役所の方との打ち合わせや中高生の当日ボランティアとの活動を通じて、初対面の人でも積極的に話しかけて仕事ができる力が自然と身につきました。また2度目の今年、実行委員の中に先輩方がおらず、私たち2年生が責任を持って活動しなければならなかったため、委員同士でアイデアを出すときのまとめ役をしたり、常葉大学生が任されたブースの企画の進行具合の確認をすることで、ファシリテーターとして人をまとめる役割の大切さを学ぶことができました。加えて、企画を作る際に焼津市で開催するイベントであることを考え、焼津市にはどこの国籍の方が住んでいるのかなど事前調査を行いました。外国籍住民の皆さんに焼津を知るきっかけを作るといふ、イベントの主旨を理解して企画を行う大切さも考えるようになりました。

はあとふるの実行委員活動を通じ、改めて外国の方だけでなく様々な年代の人と交流することの楽しさを感じることができました。私にとって大きな力となったと感じています。

裏方の美学—はあとふる Yaizu2019 実行委員に加わって

19122018 大石 健太郎

今回ははあとふる Yaizu の実行委員として意識したのは、「裏方としてイベントを支えること」である。その中で特に2つ活動に力を注いだ。

1つ目はイベントへ出店してくださる会社を誘致する活動である。当初、昨年度の反省として日本の魅力を伝える出店が不足していたという意見があり、市役所の方が県内のいずれかのお茶屋さんに出店を依頼したいとおっしゃっていた。そこで私の知人が勤めている焼津市にある製茶会社に声をかけた。アポイントメントが取れたので、市役所の方と一緒に会社を訪問し、イベントをアピールした上で企画の説明や出店の提案を行った。その結果、当日会場に出店して頂くこと

ができた。自分としては達成感があったが、会社訪問の際の立ち振る舞いを思い出すと、まだまだ甘かったと感じている。これからは G C 学科の社会人基礎力養成科目をしっかり受講し、学外の人としっかり交渉できる力を身につけたい。

迎えた当日。その日は気温が高かったこともあり、出店してくださった製茶会社のカフェ部門の商品（タピオカ抹茶ミルクと白玉パフェ）が開始 1 時間で完売した。さらに日本茶の試飲部門も好評だったと聞いた。後日会社から連絡があり、「職員共々楽しくイベントに関わらせて頂いて光栄です。また機会がありましたら宜しくお願い致します」という嬉しいコメントを頂いた。改めて誘致が成功してよかったと感じた。正にイベントを陰で盛り上げることが出来た。

2 つ目の活動は実行委員として当日のイベントを支えることである。当日、私は主に民族衣装体験ブースで活動していた。そのブースはメイン会場とは別の少し人目につきにくい場所にあったため、自分も着物を着用し、兼任していたメイン会場での保安係の任務を和服姿で行い、ブースのアピールを行った。さらに男性着物の着付けも手伝った。外国の方に着物は好評で、和服姿の私と 2 ショット写真を撮ってほしいという要望も頂いた。そういったやりとりを通じて、中国やブラジルの方と交流ができた。その方たちは日本語を流暢に話したので今回は日本語で話したが、次回は私が学んでいる言語で話したいと強く思った。語学の勉強への意欲が高まったと感じている。

和服や他国の民族衣装は取り扱いが難しく、畳んだり片付けたりに労力を費やした。そんな中、メイン会場の舞台は華やかなグラนด์フィナーレの時間となっていた。だが私はフロアに残り撤収作業を続けた。自分のブースだけでなく、他の場所の片付けにも協力した。一緒に片付けを行っていた一般の方が、メイン会場のフィナーレを見なくていいのかと言葉をかけてくださったが、僕は遠くから観覧するだけで十分だと応えた。それより後に片付けをする人が少しでも楽になってくれれば、という気持ちの方が勝っていた。それこそが今回の「はあとふる Yaizu」における私のできる貢献だと考えた。その後、市役所の方に頼まれて屋外の交通整理の作業も行ったが、終わって会場に戻った時には、ボランティアスタッフの集合写真撮影も終わっていた。つまり、今年の記念写真の中に私はいないということになる。

だが私は考える。華やかなスポットライトが当たる場所には必ず影が存在する。

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

私はその影の仕事、つまり裏方を全うできた。どんなイベントでもどんな組織でも、裏方の貢献は必要不可欠である。私のいない集合写真こそが、私にとって秘かな誇りでもある。ただ一方で、イベントを最前列で支えた先輩や友人の奮闘ぶりも間近で見ていた。大変な仕事を全うしてくれたみんなにも心からの賛辞を贈りたい。

貴重な経験と自信を与えてくれたはあとふる Yaizu に感謝しつつ、私の報告を終わりたい。

〔写真〕 はあとふる YAIZU2019 当日の様子



V 各言語圏での活動

1. 英語圏 (長期)

The importance of studying abroad

18121011 Risa Ikeda

‘Are you looking forward to study abroad?’ Many of my friends asked me this question. I answered ‘I’m looking for it, but also I feel anxiety.’ To be honest, I was not sure about my feeling because I thought staying in Canada for seven months was such a long stay. Since I came here, I’ve experienced lots of situations which I consider to be important, and I feel different kinds of emotions in each situation.

First, we may get great experience through studying abroad. For example, I enjoyed experiencing holidays such as Halloween and Christmas. On Halloween day, I did trick or treating for the first time. On Christmas day, I opened presents from Santa Claus with my host family and ate a huge Christmas dinner such as turkey, mashed potato and so on. When I was in Japan, I didn’t spend time like that, so those were great opportunities to learn traditional Western holidays. In addition, I did a presentation and bake sale to let people know about Ryan’s Well Foundation. RWF is one of the foundations which has been helping many countries to access clean water by building wells or teaching hygiene education. Before preparing the presentation, I didn’t know about this foundation. However, I researched a lot, I learned new vocabulary and I realized how important water is. Also, my class did bake sale. Students baked cookies at home and sold them in some places on campus. It was a kind of fund-raising, so we wrote ‘The cost is up to you.’ on the poster. On the bake sale day, when someone walked in front of us, we introduced RWF and encouraged them to participate in our activity. Fortunately, many students and teachers helped us. We succeeded in our bake sale to provide aid people needing clean water. We sent all the money we earned to RWF. I hope that money would be effective to build

wells or promote hygiene education. Through these experiences, I realized that it is possible to help someone by our effort and other people's cooperation. We have seen fund-raising in our lives, but this time, we did the presentation to inform other students about RWF and did bake sale by ourselves. I felt glad that many students or teachers have empathy to help people who suffer from dirty water.

Secondly, I realized the reason why I could study abroad is because there are lots of people who are supporting me such as my family, friends, coworkers in my part-time job and teachers. Needless to say, it costs a lot to go overseas for seven months. In fact, both of my brother and sister have entrance exams of university and high school. It means my parents need money for them too. Regardless of such a situation, they agreed with my desire. Before I came here, I hung out with friends. When one of my friends and I were talking outside at night, suddenly she didn't say anything. Outside was dark, so I couldn't see her face well. When I asked if she was OK, she was crying and she said she had already missed me and felt sad that she couldn't hang out with me for seven months. My coworkers in my part-time job had held a party to encourage me before I came here. Many of them gave me letters, presents and some words to cheer me up. From these experiences, I felt more lonely, but I was glad at the same time because I could notice that I have lots of people who need me and support me. I'm tremendously grateful for the people around me. Without them, I couldn't come here and continue studying, so they are precious for me.

Third, through studying abroad, we are able to meet new friends who come from different countries and we can get lots of chances to speak English. Since I came here, I met new Japanese friends, my host family, and got along with Korean and Chinese friends too. Let me talk about the time when I hung out with my Korean friends. Before I came to Victoria, there were no Korean friends around me and I did not have knowledge of Korean culture. They talked about Korean culture, social problems, famous things

V. 1. 英語圏（長期）

and so on. I also told them about Japan. Likewise, if we have friends who are different nationalities, we are able to learn other country's culture and we can notice the good points or bad points in our country. At first, I hesitated to speak English in front of people or new friends because I was afraid of making mistakes. It is possible to learn English in Japan too, but we don't have enough chances to "speak" English. Since I started staying in Victoria, I have had lots of chances to use English. For example, I can communicate with my host family during dinner, talk about our lives and social news with my host father, or playing with my host brother and sister. I sometimes cook dinner or make sweets with my host mother. She teaches me techniques of cooking. I realized that these moments are good practice to speak English. From these experiences, I'm happy to meet new friends who come from other countries and speaking English is one of my joys now.

In a nutshell, I noticed there are important points for study abroad through studying English in Victoria. My experiences will be precious, awesome and unforgettable memories. I hope my essay can encourage you to study abroad.

Thank you.

価値観の変化

18121069 中島 摩保

私が留学を経験して一番皆さんに伝えたいことは、留学は価値観を変えるということです。なぜ価値観を変えるのか、私がカナダで経験して感じたことを書きたいと思います。皆さんが知るように、留学することは英語力を高められる良い機会です。間違いありません。私は小学生の頃にアメリカから来た留学生と仲良くなったことをきっかけに海外に興味を持ち始め、留学したいと今まで思ってきました。やっと叶えることができた大学二年生、絶対に大きく成長して帰ってこよう、過去に留学したカッコいい先輩のようになって帰ってこようという目標を

持ち、英語だけで生活するという縛りを自分の中で強く決めてカナダに飛び立ちました。最初は友達と共通言語の日本語を使わずにつたない英語で会話することに恥ずかしさを感じ、ためらっていました。同時に、一言発するたびに躊躇し、勇気が必要としました。なぜかというと考え過ぎていたからです。例えば、もし自分の発音が正確でないために伝わらなかったら、聞き返されたら嫌だ、恥ずかしい、または簡単な会話しかできない私たちを見て周りはどう思うのだろう、など。今思い返せば余計なことばかり気にして、挑戦するチャンスを自ら減らしてしまっていたなと感じます。ですが最終的にはそんな日々を乗り越え、やりたいことを英語で楽しむことに重点を置きながら生活するようになりました。ここで気が付いたことは、何よりも続けるためには楽しさが必要で、楽しかったことは記憶に残りやすいということです。

私が伝えたい英語以外に関することは、三つあります。一つ目はこの留学を通し初対面のときにとっても積極的になりました。今までは初めての人と会うことをとても恐れていました。会話が弾まなかったらどうしようと考えたり、自分はシャイなのだと思い込んでいました。しかしカナダにきて約四か月間多くの人と出会い、それぞれの人の個性を知る楽しさを知れたおかげでいつの間に新しい人と会うことがとても好きになりました。二つ目は、世界にはいろいろな人がいて、人と比べずに自分を大切にすることがいかに大切かを知りました。これは自分に自信を持つことにつながります。私は今まで人と比べて自分がいろいろな点で怠っていると感じてしまうことが多くありました。しかし、何が自分に足りないのかではなく、何が好きで何が得意かなど、会話の中でポジティブな質問に多く答えていくうちに、今まで持っていた焦点が変わり、“私は”を強く持つことができるようになりました。三つ目は、何よりたくさんの友達を世界中に持つことができたということです。人と知り合い友達を作ることは沢山のメリットがあります。それぞれの人間性を知り自分の考えを広げられます。いろいろな国出身の友達が教えてくれることの多くはとても興味深いものです。知識をお互いに共有できる友人を持てることに感謝しています。

このように新しい場所に飛び込み、今までにない経験をする中で様々な刺激を受け、考え方を考えるのだと思います。私は留学する前と比べ、大きく広がったように感じます。簡単なことばかりではありませんが、間違いなくこの経験は

価値があると言えます。留学することを強く勧めたいです。ぜひ、迷っている人がいるのなら、積極的に経験者に話を伺ってほしいと思います。私がそのうちの一人であったように、この経験をここに書き、人に読んでもらうことで一人でも多くの人の背中を押せたらいいなと思っています。

Better ways to study English

18121097 Saki Mizuno

How do you study English every day? Through my classes and life in Victoria, I realized that there are way better ways to improve my English than what I did in Japan before I came to Canada. Especially, they are about listening, vocabulary, and speaking.

The first is about listening. In Japan, I studied it in listening classes. Also, I studied it for TOEIC and TOEFL by myself and watched many videos which English native speakers are talking in English on YouTube, but I didn't know if my listening skills were improving. However, my teacher at the University of Victoria told us how English pronunciation works. For example, he wrote some sentences on the white board and connected each word to explain how English native speakers speak frequently. He also gave every one of us a chance to practice saying the sentences. I also learned that native speakers drop their "H" sound when they speak. This was particularly useful for me. I had a listening class in a computer lab once a week, and in that class, our teacher gave us a fill-in-the-blank paper about dropping the "H". It was a good practice and I think after I learned it, I could better understand what native speakers were saying. Moreover, the topic of my listening textbook was the story about daily life of two people like us, which was easy to understand. It gave me a lot of motivation to study.

Next, when I was in Japan, I always tried to remember new words by writing and checking the vocabulary book many times. In contrast, in my

classes in Victoria, my teacher gave us many kinds of vocabulary games. The most effective game for me to remember new words was a gesture game. Our teacher made six groups of three students and wrote a new word which we learned the day before on the board. All we had to do was two of the group members explain it by using only gestures to the third student who could not see the word. With this game, we could remember with our eyes, bodies, and ears. Another useful way to remember new words was to explain the word to our classmates. For this exercise, our teacher formed a group of two and gave us two different worksheets. We had to explain the meaning of our words to each other. I realized that to teach someone is the best way to re-study and to remember new words. Another good way to learn new vocabulary was to do something related to them. For example, before we went on a field trip to see the salmon run, our teacher explained some difficult words about the life of the salmon. On the trip, we saw the salmon run and read some explanations about salmon. Having learned the new words the day before really enhanced our understanding and experience.

With regards to speaking, I only had the chance to speak English in my English classes in Japan. However, here in Victoria, most of my classmates and friends are from different countries, so English is the only way for us to communicate. To talk to each other, to ask questions or to get advice, and to go to restaurants, we must use it. Even with our Japanese classmates, we speak English. Then I realized the circumstance which I can use English is very important. Japanese people don't like to be embarrassed by making mistakes, which makes us more nervous. In contrast, people in Victoria are so kind and thoughtful. They give me good atmosphere to speak English and help me. When I was waiting for the bus, I talked with a mother from Jordan. Even though we first met at that time, we talked about the difference between Victoria and our home countries, our background, and many things. In other case, in the café or at the cashier in the shopping mall, everyone asks each other how their lives are going. Of course, my host

family and their friends and relatives too. All the people I know in Victoria always welcome me and help me to speak English. I have realized that we should not be afraid of making mistakes.

In conclusion, in my life in Victoria, I learned not just English, but also how to study English. It is better to relate English to daily life, to teach someone with games and interactions, and not to be afraid of making mistakes. Based on these things, I would like to give my future students a lot of fun ways to enjoy studying English.

覆された私の価値観

18121105 森崎 桃香

カナダに留学に来る前、私のカナダのイメージは、自然が豊かで、多民族国家で、人々が穏やかで優しいという漠然としたものでした。しかし、カナダに来て数日経ち、ダウンタウンに行ってみると、私のカナダのイメージは大きく覆されました。なぜなら、多くのホームレスの人たちがいたからです。何時間も土下座をしてお金を貰おうとしている人、泣き叫びながら道を行ったり来たりしている人、路上で絵を描いて売っている人、大声で騒ぎながら歩いている人、薬をやっている人。カナダは、世界で最も住みやすい国ナンバーワン、留学生におススメの国ナンバーワン、などと言われていますが、日本にいては目にすることのない光景を間近で見て、私はカナダの裏の顔を見たような気がしました。

私がカナダ留学で強く感じたことは、カナダはストレスフリーの国だということです。特に衝撃的だったのは、先生の休む回数です。私の先生は普通の授業だけでなく、一番大事なテスト前最後の授業とテスト当日、別の先生は最後のお別れパーティーにも欠席しました。他のクラスの先生も3ヵ月のうちに風邪で5回程休み、代わりに他の先生が来て、授業の埋め合わせをしてくれたそうです。日本では先生が普通の風邪で休むというのはほぼありません。自分のためだけでなく、生徒のため、他の先生の迷惑にならないようにするために、無理をしてまでも授業を行ってくれます。体調が優れない時は大事を取る、これがカナダの人た

ちの考え方だそうです。教師だけではなく、他の職業を見てもストレスフリーだと感じました。例えば、バスの運転手。私は学校やダウンタウンへ行くのに毎回バスを使っていたのですが、運転手さんが飲み物を飲みながら、鼻歌を歌いながら運転するというのはカナダでは当たり前のことでした。私が特に驚いたのは、仕事中でも関わらず、運転手さんが乗客をバスに残し、コーヒーを買いにバスを降りたことです。他にも、発車時刻まで待つのに、新聞を読み始める運転手さんや、乗客がバスに乗るまでの間、同僚と世間話をする運転手さんもいました。また、スキー場でアルバイトをしていた学生は、「眠い、眠い。」と言いながらあくびをし、「今日何時に終わるの？」などと、他のアルバイト仲間と話しながらお客さんに接客していました。どこにいてもカナダは本当に自由な国だなと感じます。日本ではアルバイトでさえも、ピアスやネックレスなどのアクセサリやネイルは禁止、メイクは控えめ、髪の毛の色は黒か茶色、などと会社によって様々な規定があります。接客業に関しては、特に厳しいです。しかし、カナダには特に容姿のルールなどありません。接客業であっても露出が多い服装、タトゥー、ピアスは普通のことです。このようなことを目の当たりにすると、会社が定めるルールや方針に従い、秩序を守る、人に対する気の遣いや丁寧さといった部分は日本人の良いところだと強く感じました。しかし、こういった真面目な日本人の性格が時としてストレスに繋がってしまいます。カナダの人たちのように何からにも縛られず、自由に仕事をすれば、日本人も仕事によるストレスは軽減されるのではないかと考えました。

私はカナダ留学を通して、英語だけでなく、色んな人の考え方を学ぶことができました。日本では考えられないことが、カナダでは当たり前のこと。同じ人間なのに考え方が 180 度違うカナダの人々が羨ましくなりました。カナダで生活出来るのも残り 3 ヶ月。目の前の人との関わりを大切に、新しい発見が出来るよう、一日一日を精一杯過ごしていきます。

Changing Me

18121125 Kaoru Warashina

Living in Canada for four months has changed my perspective on life. There are two main things that I have learned while living in a different country.

First, the idea of making mistakes has changed. When I was in Japan, I thought I could speak English a little bit better than most ELPI students, so I was planning to speak English so much that I could overwhelm them. I was so confident. Once I came here, however, people were speaking English so fast that I wasn't able to keep up. I frequently smiled and was pretending to understand them. Also, there were way more English learners than I had expected who could speak English better than I. I was upset at the weakness of my English abilities. Not only my listening skills, but I was also struggling with my speaking skills. I talked to myself before I talked to someone else. For example, I asked "Is my English right? Is this expression okay? Is this grammatically correct?" I sometimes hesitated to say something because I was too afraid to make a mistake. What I was thinking at that moment was that making mistakes was embarrassing. However, when I made a mistake, my teacher told me that was not correct but that it was a good try, not just saying I was wrong. My teachers respect what I said. "There are so many people who can only speak their own language. There aren't so many people who can speak as well as you guys. You left your family, your friends, and your country, coming to a different country alone to study English. You guys are great. I'm so proud of you all," my favorite teacher said to the class. At that time, I realized that I should not be afraid of making mistakes. In addition, there is my favorite word. It is "YOLO". It stands for You Only Live Once. I got an opportunity to come to Canada and talk to many people in English. It's not easy but life is short. I

don't want to waste my precious time left in Canada, so I started to think I should just try to tell and explain what I want to say. I have changed to try anything I want and I always remember "YOLO" and what my teacher said when I hesitate to do something.

Second, I've improved my self-confidence. When I was in Japan, I was afraid of expressing myself. I felt uncomfortable to be seen because I assumed that everyone thought I was ugly or fatty. I wasn't confident about myself, especially my looks. I always wanted to wear certain clothes, but I cared about what other people thought of me, so I was wearing clothes that hide the shape of my body. Whenever I bought a short skirt, I never wore it in Japan. The skirt spent a whole life in my cabinets in Japan. My friend once told me that he was offended that I was showing off my body on my Instagram. It happened a lot more when I was in high school. Since there were many people like him who think narcissism is bad in Japan, it was difficult to express myself. However, coming to Canada, I met many kinds of people who are confident. I learned that beauty comes from confidence. They are beautiful the way they are. They love themselves. As Mama Ru says, "If you cannot love yourself, how the hell are you gonna love somebody else?" Now I'm confident about myself. There are some parts of my body that I don't like but this is me and I love who I am. Only after loving myself, do we love others.

In these past four months, I have learned so much about myself. Thanks to my encouraging teachers and fellow students, I have learned that making mistakes is okay and necessary to improve my English skills. I have also learned to love myself more and to be more confident. Seeing other people loving themselves has made me realize that self-confidence is important. I have grown a lot thanks to this program and hope to learn even more about myself in the next months to come.

2. 英語圏（短期）

What I felt in UE

17121022 Yoshino Ueda

It has been more than six months since I came back to Japan from the United States. Whenever I see the photos I took there, I miss my second hometown and I feel like going back there again. I studied at University of Evansville (UE) located in Indiana, the US. I saw wild rabbits and squirrels, walking to classes from my dormitory every day. Such heartful sceneries always brought me warm feelings. People in UE were so kind and wonderful. That is definitely the best memory during this short term studying abroad program.

I felt kindness of people in UE from the beginning. A week after arriving at UE, I was sick for a week because of bacterial infection, and I lost my voice. I found it when I got up, and I thought “What should I do? I have to give a presentation today.” However, I didn’t have to worry about it at all. When I gave a presentation in the listening and speaking class, the professor and the classmates listened to my presentation even though they could barely hear my voice. Furthermore, she gave me a good evaluation. In addition, I had to take a couple more classes on that day, but when I tried to answer the questions, the professors said “Oh you cannot speak today? OK, you don’t have to say anything,” with a kind smile. After school, when I was in my room resting, my roommate came back and noticed that I lost my voice. She said “I have some tea which is really good to warm up your throat. My professor gave it to me when I lost my voice like you. You can have it if you want. You can also have these candies.” I already knew how kind she was since the first day showing me around the campus, but I felt her kindness again. I felt the kindness of people in UE.

As I said, everyone in UE was kind and so were my roommate’s family,

and I noticed the difference of the way to express their love between in the U.S. and in Japan especially when I visited my roommate's house during the holiday. We had the seven-day spring break in March. During that time, every facility, such as the dining hall and the gym, including professors' offices, was all closed. Therefore, most American students usually go back to their hometown. However, I had no place to go and it was not financially wise to go back to Japan, so I was going to stay on campus during the break. But my roommate asked me if I wanted to come with her going back to her house then. She said her father would pick us up and drive us to their house. When I responded in a polite Japanese manner saying "If you and your parents really don't mind me going with you, I would like to go. I'm afraid that I may not be able to make myself understood in English well, so I worry that I might be troublesome for your family." Then she said "Don't worry. My parents really don't care about it and welcome you. It's all up to you." I thanked her and decided to visit her place. At first, we stayed at her grandparents' house in Iowa for two days. As I expected, I was not able to join their conversation at all because they all spoke at the same time and too fast for me to follow them. However, they tried to listen to me when I say something. Furthermore, I was surprised that they were interested in Japan, and asked me about my country. I was glad that they talked to me, and I thought they were so kind. After that, I stayed at my roommate's house in Michigan for four days. While I stayed at her house, her mother said to me "You are our family, I will show you where the food is, how to use our washing machine, and so on. You can do whatever you want. Please help yourself." True to her words, they treated me as their family member, and I could spend wonderful time with them. Before I left her house, her family gave me some clothes, wonderful messages, and big hugs. They expressed their warm feelings clearly with words and showed me their love with their physical contacts, which is totally different from Japanese people. I liked the American ways so much. Thanks to them, I experienced the wonderfulness

of family in the U.S.

In the final month of my stay in UE, a big trouble occurred to my family in Japan. My mother suddenly called me on the phone. And then she cried and said “I tried not to tell you about this while you are in UE, but I couldn’t keep my feeling myself. Your grandfather has been hospitalized for two weeks. He had a cerebral infarction, so his behavior has completely changed like another person. I can’t stand it. I needed to tell you about it” I was shocked to hear that, and I felt sorry for her to hold such painful news to herself. We contacted much more often after that, so my rhythm of daily life got used to Japan time. I couldn’t sleep at night in the U.S. time at all, so that I couldn’t keep a good sleeping habit anymore. I really needed to talk to someone, so I told my reading professor about it, and then she said “Oh, I’m so sorry to hear that and I’m sorry for your mother, too. She is a good mother, and she works hard. You are a good girl, too, so don’t worry. I believe your grandfather is going to be better and he will be okay. You should sleep when you can sleep.” I talked and cried, and I was not able to explain it to her well enough, but she listened to me, gave me kind words, and cheered me up. Furthermore, she cared about me every day and checked one me. Thanks to her, I could relax little by little. I really appreciate her love and kindness.

I met a lot of wonderful people in UE, and I felt a lot of love and kindness. I’ve never thought the way to express feelings is so different from that of Japanese people. Based on this experience, I want to be a person who has warm heart to everyone and who can tell their love to their family and friends, and who cherishes people who are around them.

有限だからこそ気づける当たり前で大切なこと

17121120 松本 双葉

私がオーストラリアに留学して学んだことの中には、帰国した今だからわかることもあると、この文章を書きながら感じています。私たちが過ごす日々は、有限なのです。だからこそ多くのものを、大切にしなければならないのです。

自分も含め、私はすべての人に聞きたいのです。「毎日が愛おしく、その日1日1日が終わってしまうことを寂しく思うことはありますか。」「毎日一緒に過ごす友達と別れることを想像したことはありますか。」「日常の中で見る景色を、もう見ることはできないかもしれないから目に焼き付けておこうと思うことはありますか。」「いつでもできるからいいや。ではなく、もうできないことかもしれないからなんでも挑戦してみたい、チャンスを逃したくないと考えることはありますか。」

私はオーストラリアに行くまで、そのようなことを考えたことはありませんでした。そして現在、この原稿を書くまで、忘れかけていたことでもあります。今日という日は、二度と戻ってこないし、友達もいつまで一緒にいられるかわかりません。いつまでもこの景色が、ずっと見られるとも言えないし、挑戦できるのは今だけかもしれません。私はこれらの感情を、留学という目に見える限られた時間だからこそ知ることができました。しかし、日本に居てもそれは全く同じだとわかりました。つまり、私たちの人生は有限であり、今のこの生活が一生続くわけではありません。そんな風に日々を大切に思えるきっかけとなったこの留学に協力してくれた家族、先生、友達に多大なる感謝を申し上げます。そしてこの留学を通して学んだことを「友達」、「景色」、「挑戦」という3つの観点から綴りたいと思います。

私はオーストラリアで様々な友達に出会いました。中でも印象的な友達が3人居ます。1人目は韓国で警察官をしている年齢秘密の女性です。仕事で貯めたお金を使い、夫と2人で英語を学びにオーストラリアに来ていました。そのような道もあるのだと知り、生き方には決まりがなく、何歳になってもやりたいことをやってみようと思えました。2人目はドバイで警察官をしているお金持ちの男性

V. 2. 英語圏（短期）

です。宗教について話したり、お金、仕事についての考えを聞かせてくれたりしました。私が今までに聞いたことのない話が多く、違いにばかり目は行ってしまいましたが、共通する部分も確かにありました。国籍や文化、性別などが異なっている、それは悪いことではありません。違いも個性であると、改めて感じさせてくれる友達でした。そのような経験からか、私は必要以上に人と自分を比べることもなくなり、相手のことも自分のことも大切にできるようになりました。3人目は奈良県出身の日本人の男の子です。彼は英語を学ぶというよりも、サッカー選手になるために、サッカーを学びにオーストラリアに留学をしていて、クラブチームに入ってプレーをしていました。彼の意識の高さには本当に驚かされました。普段の生活も、全てがサッカーに結びついているようでした。本当にサッカーが好きなんだと感じられる彼の姿を見て、自分が本当にやりたいことは何かと考えさせられました。そして、そのために努力をすれば何でもきくのではないかと励まされました。他にも数多くの友達に出会い、彼らと話をすることで、多くのことを学びました。彼らの話をもっともっと聞きたいと思えたのも、彼らを大切に思えたのも、彼らと過ごせる時間が限られているとわかっていたからです。今後、私の人生で彼らともう一度出会えることは限りなくゼロに近いでしょう。一期一会とはこのことかと、人との出会いというのは本当に奇跡のようなものなのだとか感じました。オーストラリアで出会った「友達」のおかげで、帰国してから、人との関わりをより一層大切に思えるようになったのです。

私はオーストラリアでたくさんの景色を見ました。それはカメラに映りきらないほどの大きな滝や、二重にかかった空一面の虹、広大で透き通った青い海というような、今まで見たこともないような景色です。しかしそれだけではなく、路面電車の中から見える夕焼けや、緑の木々が茂る田舎道、学校に行く時間の眩しい太陽、公園でバスケットをした後の帰り道に見える夜空の星など、当たり前にあるような景色もたくさんありました。しかし、留学という限られた時間の中で、もう一度その景色を見られるかどうかはわかりませんでした。だからこそ、一つ一つの景色が大切に、ずっと目に焼き付けようと眺めたり、写真を撮ったりしました。帰国後、日本の自分の住んでいる町一つでさえも様々な変化があることに気づきました。あったはずの建物がなくなっていたり、家のそばを流れる川が少し埋め立てられたりもしていました。当たり前のようにそこにあった景色は

いつ消えてしまうかわかりません。そう思うと家の周りの茶畑や、学校から見える富士山、夜空の星などといった身近な景色も、より一層大切に綺麗に感じられました。

最後に「挑戦」として、私は今しかできないという理由から、想像もしなかった初めてのことに数多く挑みました。例えば、現地の人も並ばない筒状の「真下落下型ウォータースライダー」や、「6 km 4 5 分間ダッシュ」で会場に向かったサッカー観戦、日の出を見るために早起きしてからの「1 3 km 日の出ハイキング」、自称海上ヤンキーのホストファザーが乗せてくれた「高速ジェットスキー」、現地の友達の家を訪れた「フィリピンの文化体感」、そして上空 4, 5 7 2 m からの「スカイダイビング」など挙げればきりがありません。特にスカイダイビングは一生忘れられない挑戦になりました。最初に友達に誘われた時には、「絶対にやりたくない」と思っていました。しかし、この機会を逃したら、私は人生で一度もスカイダイビングを経験しないだろうと思い、挑戦することを決めました。一緒に過ごした友達も含め、誰しもが今だからできること、今しかできないことに貪欲に挑戦していました。この自分のアグレッシブさはどこから来るのかと考えてみると、やはり「今しかできないから」と限りがあるからこそ、普段できないようなことにも挑戦できていたように思います。

帰国した今、私にできること、今しかできないことはなんだろうと、それについて考えることを、この原稿を執筆するまで、忘れていたように思います。今一度、私たちの過ごすこの時は有限であるということ、それを再認識しなければいけないと思いました。そうすることで、私が本当にやりたいことに挑戦し、今この時を大切にしていこうと胸に誓うようにしなければいけないと感じられました。この文章を読んでくださった方も、当たり前のようにある“大切”が有限であることを改めて感じ、大事にしてもらえることを願います。

留学という夢

17121008 池田 亜未

私は、春休みを利用してカナダのビクトリア大学 (University of Victoria: UVic) へ短期留学をしました。私が英語を学びたいと思ったきっかけは約7年前のことです。親の勧めで静岡県プログラムの応募し、カナダのバンクーバーに観光へ行きました。静岡県内の各地からの参加者は、同年代の小学生と中学生だけで、家族は同行しませんでした。当時の私の英語は初級レベルで、現地の人の話を聞くのも精一杯でした。現地でのホームステイは3泊だけでしたが、初めての海外生活で文化に触れ感動したのと同時に、ホストファミリーに英語で気持ちをうまく伝えられなくて困ったことを覚えています。この時、将来はもう一度海外に行きたいと考えていたので、大学生になって迷わず留学することを決めました。

留学に行く前の私は、留学という形でカナダへ行けば、毎日英語漬けの生活で、その環境に身を置けば英語が話せるようになっていました。しかし、もちろんそれほど簡単ではなく、思い通りになることばかりではありませんでした。出国前の留学準備段階で先生方から「自分の英語力をできるだけ上げておくこと、授業後などの空いた時間をどう使うのか考えておくこと」とアドバイスをいただいていた。そこで、多読をしたり、英語の動画を見たりと、自分なりの準備をして行きましたが、十分ではありませんでした。

楽しみにしていた現地での授業の2月のクラスは、15人ほどで構成され、半分が日本人で、チリや中国からの留学生がいました。3月のクラスには、韓国やブラジルからの留学生もいました。クラスメイトも先生もとても人柄が良く、授業も興味深い内容で授業を楽しむことができました。ただ、クラスメイトは、ほぼ同年代の人達であるにも関わらず、いざ話してみると私とは比べ物にならないくらい流暢に英語を話す姿を見て、レベルの高さを感じました。そして話す速さや各国のアクセントに理解が追いつかず、自分の英語もうまく伝わらず、とても悩まされました。

そんなある日、仕事でしばらく家を空けていたホストマザーが帰ってきて、ふ

と学校での様子について話をした時、マザーはこう言いました。「みんな英語を話せるようになりたいから UVic に来ていて、最初から話せるなら、わざわざ来ないでしょ。わからなければ正直にいえばいいし、間違えるのも当然だよ。」この言葉は、自分と周りを比較して、英語で話すことに躊躇しがちになっていた私を奮い立たせてくれました。

それからは、授業と同じ建物内にある English Language Center に通うようにしました。私の目標はスピーキング力を伸ばすことだったので、週一回のお昼の発音クラスに加えて、できるだけ毎日放課後に English Language Center に通い、現地の英会話ボランティアの方々と話すようにしました。ボランティアの方々は、地元在住の多くは退職している方々で、私の拙い英語でも親身になって話を聞いてくれました。毎回 20 分程ではありますが、カナダ文化の話や、職業、人生の話まで様々なジャンルの話を聞くことができるとも貴重な時間でした。

英語力以外にも多くのことを学びました。ある授業内のディスカッションは、特に私にとってとても大切な思い出です。いつも英語を話すときに躊躇してしまう私が、内面から鍛えられる場面だったからです。その授業では、グループ内で賛成派、反対派に分かれ、ゲーム形式で行われました。場面に応じて使える英語のカードをディスカッション中に使うと、使用枚数分ポイントがもらえるという仕組みでした。例えば、ある文化や法律・制度などのテーマについて話し合うのですが、どのテーマかを知る前に賛成か反対かを選ばないといけなかったので、自分の意見とは沿わない場合もあるのです。それでも、黙らずに自分の意見を言わなければならないため、自分を奮い立たせて英語で意見を述べる機会をもらえました。クラスメイトの意見を聞くことも勉強になりましたし、主張したいときにどんな表現を使えばいいのかをカードで学ぶこともできました。また別の場面では、自国の文化について議論し共有する時間もありました。その時、私は、自分が母国である日本のことでも理解していない側面があることに気づかされました。この授業を通して、他国を学ぶ以前に、自国である日本についてもっと理解すること、自分の意見を持ち自分の言葉で表現することの大切さを学びました。

学外で過ごした時間には、数え切れない思い出があります。留学した 1 か月目の 2 月に、中国からのクラスメイトたちの寮の部屋でパーティーをすることになりました。彼らは、簡単にできる中華料理を教えてくれたので、日本人である私

V. 2. 英語圏（短期）

たちは手巻き寿司を彼らに教えながら一緒に食べました。英語で会話をしながら、カナダ以外の国に関する異文化交流ができる機会が、カナダで得られるなんて思ってもいませんでした。

また、UVicの学外アクティビティに参加したり、現地のイベントに参加したり、お店の人や観光地にいた人に声をかけてみたり、私の小さな挑戦の数々も忘れられない思い出です。例えば、アイスホッケーの試合を見に行った時に近くの人に「一人で来ているのですか」と話しかけてみました。それから対戦チームのことを尋ねたところ、快く答えてくれました。初めましての人でもちょっとした会話が弾んだことがとても嬉しかったのを覚えています。

最後に、昔から叶えたかった「海外留学」という夢を大学生で実現することができて、とても嬉しく感じています。過ごす時間が長くなるにつれて、内面から積極的になれたと感じています。思い通りにいかないことも多かったのですが、異文化について学ぶことができたり、様々な国からの友達を作ることができたり、毎日が充実していて、多くのことを得ることができました。カナダの短期留学は2か月ですが、一日があっという間に過ぎてしまいました。振り返れば、できることがもっとあったと痛感しています。マザーが教えてくれたように誰も最初から完璧ではありません。私は留学で学んだ経験から、これから留学を考えている人には、「失敗を恐れずなんでも挑戦してほしい」と思います。私はたくさんの人に支えられて過ごしたカナダでの2か月間を忘れることはないでしょう。この思い出を原動力に、今後の学業に励んでいきたいと思います。

ターニングポイント

17121020 岩田 彩花

私は、大学2年生の春休み約2ヶ月を使い、カナダのビクトリア大学に短期留学をしました。私にとっては、その短期留学が初めての海外経験となりました。初めての出入国審査、初めてのスーツケース、初めての親元を離れる機会など、全てが初めてに埋め尽くされていました。そのため、離陸前は緊張や不安に押し潰され、既にホームシック状態に陥っていました。そんな気分で乗った飛行機で

はゆっくり休めるわけもなく、飛行機に乗っている約 15 時間にしていたことは、カナダ入国後に英語が聞き取れるようにひたすら洋画を見続けたことでした。しかしながら、そんな寸前になって始めた努力は言うまでもなく儂く散り、入国後に合流したホストマザーとの会話は英語学習者として情けないものでした。そんな最悪なスタートで迎えた短期留学でも、私は少しずつ楽しさを見出していき、多くの事を学ぶことが出来ました。滅多に人前で何かをするタイプではない私ですが、今回のこの貴重な機会を使って私が短期留学で学んだ事を伝えたと共に自分の恵まれた環境への感謝の意を述べたいと思います。

まず、親元を離れて感じたことは「親の偉大さ」でした。私のホームステイ先では、朝食と昼食は自分で用意し、洗濯や掃除も自分で行うことがルールでした。長年、実家暮らしだった私は、異国の地でこの生活を送ることに大変な苦勞をしました。毎朝、起きれば朝食が準備されていて、洗濯や自室以外の掃除を気にすることもなかった実家暮らしとは大違いの生活でした。また、日本と生活サイクルが違うカナダではホストファミリーやルームメイトに合わせた生活を送る必要がありました。私のホームステイ先は 1 階と地下室で階が分かれており、1 階でホストファミリー、地下室で留学生が生活していました。私が短期留学をした時は、中国人と韓国人の留学生が他に居ました。22 時以降は入浴不可な上に、静かに過ごすことがルールであったホームステイ先で時間内に洗濯や入浴を済ませることも、ルームメイトへの気遣いが必要で大変なことでした。このような生活サイクルの中で過ごした 2 ヶ月間で、自分がどれほど親に甘えてきたかを痛感しました。それと共に、毎朝誰よりも早く起き、家事や仕事に励む両親の有難さも知りました。

2 つ目に、私が学んでいる「英語」というもので世界中の人と繋がることができるという魅力に気づきました。私が短期留学に行くまでに英語で会話をしたことがあった他国出身の方は、学内の外国人の先生方のみでした。また、学内の先生方とも授業内で英語を使用して会話はするものの、授業外で会話をすることは無いに等しいものでした。そんな全く英語を実用的に使用する機会も積極性も無かった私が、今では英語を話す機会を求めるようになりました。そう思えるようになったきっかけというのもこの短期留学でした。ビクトリア大学で英語を学ぶにあたり、英語力ごとにクラス分けをされました。組み分けられたクラスの中に

V. 2. 英語圏（短期）

は、中国人、韓国人、台湾人やブラジル人など様々な国籍の生徒が居ました。そんな友人達と意思疎通をはかったり、プレゼンテーションを準備したり、ダウンタウンに遊びに行ったりするためには、英語で意志を伝えるしか道はありませんでした。最初は自分の英語力に自信がありませんでした。しかし、身振り手振りで意志を伝えていくうちに、自分の話す英語が伝わることの嬉しさともっと上手く伝える力が欲しいという欲が増していきました。そして、最初は日本語に逃げがちだった1ヶ月目から、2ヶ月目には「英語以外話さない」というルールを自分自身で決め、楽しみながら実行している自分の姿がありました。元々、私にとって「英語」というものは教員になるための単なる「道具」に過ぎないものだった気がします。しかし、私は、この短期留学中に英語が秘める可能性と多様性にどんどん魅了されていきました。英語を話せるだけで、異なった文化を持つ人達と意思疎通が出来るだけでなく、自分達の文化や考え方を共有することが出来るのです。私が勧めた日本食や日本文化を友人達が楽しんでいる姿や、私が発信した意見に友人達が耳を傾け、取り入れようとしてくれている姿を見ると、自分が学んできた「英語」というものに改めて誇りを持つことが出来ました。また、こんな感慨深い経験が出来た私は、この先、英語教員や英語学習者として「英語」の魅力を広く伝えていく義務があるとも感じました。私をここまで魅了した英語を毎日学習出来ている私は、本当に幸せ者だと感じます。

3つ目に、失敗を恐れずに挑戦することの大切さです。私が短期留学をして気付いたことは、多くの日本人が自分の自信の無さから挑戦する機会を自ら手放しているということでした。私も、1ヶ月目はそれに近い人間でした。しかし、1ヶ月目も終わりに差し掛かった頃、私にとって大きな転機が訪れました。私のクラスには、半年間ビクトリア大学で英語を学び、英語以外話さないように努め続けた日本人の友人が居ました。その友人の言葉で、私は酷く後悔し、大きく変わることを決意しました。彼は、常日頃から私に他の国から学びに来ている友人を紹介しようとしてくれたり、日本語でも会話が出来るのに英語で話しかけてくれたりと、常に私に気を遣ってくれていました。なぜ、彼がそれほど私の留学生生活を気にかけてくれているのかはわからないまま、彼が帰国する修了パーティーの日を迎えました。そしてその前日、彼はその理由を明かしてくれました。彼もカナダ留学した1か月目は、私と同じように日本人の割合が比較的多い環境で、行動

を起こさなかったため、英語に触れるという点で最適な環境に身を置くことができなかったのです。だからこそ、日本語を話し続けて 1 ヶ月を無駄にするようなことを私にはして欲しくなかったと彼は言いました。その言葉を聞いて、私がいかに 1 ヶ月という貴重な時間に自分を守ることに費やして、無駄にしてきたかを実感しました。理解出来なかった事を理解出来たふりをして何も学ぶ努力をしなかった上に、他国の友人と英語で話せる機会も最大限に生かすことをしなかった自分を恥ずかしく思いました。そして、その日から私は挑戦することを決意しました。それまでは途中で集中力が欠けてしまうほど難しくて聞き取れなかったホストファミリーの話に耳を傾け続け、質問を投げかけて、理解出来ているかを確認するように努めました。また、書店の店員に積極的に話しかけてみたり、他国の友人と話すように心がけたり、地元の方と会話出来るスペースに通い続けたりと大きく生活を変えていきました。最初は、自分が理解出来ないことに何度も心を痛め、恥もかきました。しかし、その痛みや恥よりも、何もせずに日本に帰ることの方が、自分には大きな傷のように思えました。留学費を支援してくれた親のためにも、この短期留学を絶対に有意義なものにして、何倍も成長して帰りたいと感じました。その結果、今私は、短期留学中に続けた挑戦のおかげで、大きな成長が出来たと感じ自分の英語力にも自信を持つことが出来ています。

最後に、私が学んだことは「的を射た努力は実る」ということです。飛行機内での直前の努力は、儚く散りました。それは、努力の量や集中力の度合いが問題だったわけではありません。先を見据えて、的を絞ってしていた努力ではなかったからです。元来の私は、ひたすらに努力を続けて、常に全力で物事に取り組めば、必ず結果はついてくると思っていました。しかし、ただ時間をかけて勉強をすれば、成績が上がるわけではないのだと今回学びました。日本に帰る約 1 週間前に、常葉大学での翌年の新クラス分けが発表されました。そこで、私は前年よりも下位のクラスに組み分けられていました。その日の夜、私はあまりの悔しさに泣きながら勉強をしました。クラス分けで考慮される TOEIC の点数で全く高得点を取れていなかったのは事実で、その結果をそのまま放置していたのも事実でした。そこで、次の TOEIC では自分が満足出来る点を取れるように勉強をしようと決意しました。その日から、TOEIC に焦点を当てて、TOEIC 用の単語を勉強し始めました。また、ネイティブの先生方に分からない単語の違いを尋ねることも始

めました。とにもかくにも、TOEIC の点数を上げることを考え、突き詰めた勉強を続けました。それは、帰国後も継続しました。その結果、私は目標以上の点数を取ることが出来たのです。この努力の実は、短期留学中に学んだ「目的意識を持って挑戦し続けることの重要性」、「的を絞った」学習の成果であったと信じています。

このようにカナダの短期留学を通して、自らの生き方や学んでいる「英語」に誇りを持てる自分に大きく変わったと感じています。沢山悩み、沢山苦しんだ短期留学だったかもしれませんが、その分、沢山楽しみ、沢山幸せを感じ、沢山成長出来たと思っています。私に短期留学という貴重な機会を与えてくれた両親、友人、先生方にとっても感謝しています。この経験や学んだことを糧に、将来は教員として教壇に立ち、それらを還元出来るように頑張りたいと思います。

自分を成長させてくれたカナダ短期留学

17121032 大塚 瞳

2019 年春、私はカナダへ 2 ヶ月間の短期留学をしました。小学生の頃から 9 年間英会話スクールへ通っていたこともあり、外国の方と英語で話すことや海外の文化に昔から興味を持っていました。中学生の頃からは、いつか留学に挑戦したいと思うようになりました。しかし、海外の知らないところで生活したり、学校生活を送ったりすることを想像すると、正直に言って不安の方が大きく、なかなか留学をする決意ができませんでした。

大学 2 年生の春、カナダへ長期留学をしていた知り合いの先輩が帰国し、お話を伺う機会がありました。その先輩は留学をする前はどちらかというと物静かで発言も控えめなタイプだったのですが、留学から帰ってきた先輩は発言力も行動力も格段に上がっていて、表情も明るくキラキラと輝いていて、まるで別人のようになっていました。「留学を通してかけがえのないたくさんの経験をして、自分を変えることができて楽しかった。」と先輩が笑顔で言うのを聞いて、「人生で一度きりかもしれないこの留学のチャンスを手放したら後悔するかもしれない…」、「挑戦しないであれこれ不安に思っているのはもったいないし、私も先輩の

ように留学を通して自分を成長させたい」と思い、留学をする決意をしました。

2ヶ月間のカナダへ留学では、ホストファミリーをはじめ、日本だけでなく、世界中からビクトリア大学に学びにきた同じ仲間達と毎日楽しく充実した日々を送ることができました。滞在中はカナダの雄大で美しい自然をたくさん感じ、カナダの人達の優しさにもたくさん触れることができました。また同時に日本の素晴らしさにも気づくことができました。2ヶ月間の滞在でたくさんの大切な友達もできて、素晴らしい先生方にも出会えて、美味しい料理もたくさん食べられて、素敵な景色もたくさん見ることができました。

この留学体験のおかげで何事にも挑戦する勇気を身に付けることができたと感じています。自分を成長させるため、また自分の視野を広げるためにも留学へ行って良かったと心から思っています。この留学は私の人生の中で最高の思い出であり、最高の経験となりました。

留学に行くかどうかは簡単に決意できるものではありません。不安や迷いも抱くものだと思います。しかし、留学をして損をすることはありません。素敵な出会いや発見がたくさんあり、とても良い刺激をたくさん受けることができます。1人でも多くの人に留学を通してかけがえのない経験をしてもらえたらと思います。

目標を実現～自分で掴んだカナダ留学～

17121060 鹿内 和咲

“Seize the day, seize the moment.” これはショート留学前に、認証式で一言先生から送られた言葉である。私の留学生活はこの言葉の大切さを強く感じさせるものとなった。

私がこのカナダへのショート留学を決意したのは大学1年生の春のことだった。そもそも留学を決めた理由とは何かを改めて思い出すと、1つ目の理由は、単に海外へ行きたいという純粹な思いからであった。まだ日本から出たことなかった私にとって海外へ行くことは幼い頃からの憧れであり、高校時代からの私の目標であった。そして、私にとってより重要な意味を持つ2つ目の理由は、叶

V. 2. 英語圏（短期）

えたい夢のためにであった。私には幼い頃から抱いてきた夢がある。それを叶えるためには高校時代に苦手だった英語力を上げることと、自国の文化に限らず他国の文化を知ることが必要だった。そのため、外国語学部がある大学を志望し、入学したら必ず留学へ行くということを決めていた。

カナダ、アメリカ、オーストラリアなど様々な留学先がある中で、カナダを留学先に選んだのは、滞在が寮ではなくホームステイと決まっている留学先であること、これまで学習してきた英語とかけ離れていない英語が話されている国であること、移民や留学生を受け入れることに肯定的な国であることからであった。また、長期留学ではなくショート留学を選んだのは、自分の留学だから親を頼りたくない、自分の留学だから全て自分でやることに意味があるという思いから、経済的にも自分で費用が用意できる期間だったからである。

本格的に留学を決意した大学1年生の春、当時はまだ留学できるだけの貯金もなく、英語力も十分ではなかった。そんな私が留学へ行くという目標を達成するためには、様々な努力が必要だった。1年生の春からアルバイトでお金をコツコツと貯め、無駄なものは買わない、大学では家から持参の弁当や水筒でお金を節約し、お金を貯める努力をした。さらに、GPAとTOEICのスコアの基準で給付される留学奨学金制度があることを知り、日々の大学での授業を大切にした。また、英語力を上げるためには、英語の多読に力を入れ、毎日洋楽や英語のニュースを聞くなどでTOEICの点数を上げる努力をし、見える結果で自信をつけていった。

私は、昔から努力することを惜しまない人生を歩んできた。これは小学校1年生から続けている陸上という競技を通して培ったものである。常に心に置いている大切な言葉は、「努力の天才になれ。」という言葉で、これは、高校時代にケガに苦しんだ際、陸上部の恩師から頂いた言葉である。私は恩師から、「叶えたいものは自分の努力と行動次第で変えられる」という大切なことを教わった。そこで培った信念が大学生活の私にも生きているのだと思う。この言葉を大切に留学準備中の日々を過ごし、自分の手で目標としていた留学を叶えることができたと思っている。

留学前から勉強とは別に2つのことを、現地でやりたいと決めていた。1つは、海外でランニングをすることである。陸上が好きで私にとって、海外でランニン

グをするということは昔からの夢でもあった。そのため、この留学でも自分の荷物の中にランニングシューズを持っていった。カナダでスポーツ好きのホストファミリーがとても良いランニングコースがあると家の近くのゴルフ場を教えてください、一緒に散歩をしに行ったのは大切な思い出である。私は、またそこへ行き、憧れだった「海外でランニングをする」という夢を実現することができたのだ。

もう1つは、それは「オススメの本」を現地の人に尋ねて、現地で買った本を日本に持って帰って読むことである。大学の授業で経験した多読を通して、本を読む大切さを学んだ私は、自分のモチベーションを上げるためにカナダで本を買って帰ることを決めていた。私のホストファミリーのホストマザーとホストシスターは、幸運にも読書が大好きだった。そのため、「オススメの本」を聞き、本屋さんへ足を運ばせた。今でも現地で買った本は私が持つどんな本よりも特別で、それを見るたびに当時のことを思い出す大切な本となっている。お別れの時、娘さんから頂いた本は難しく、まだ読むことができていないが、いつかそれを読むことが今の私の目標であり、楽しみとなっている。

様々な努力によってやっと手にした目標のカナダ留学ではあるが、この留学で得たことは語学力だけではない。私は、現地では何か目的をもって生活をしようと心掛けた。自分がそこで何をし、いかに自分のものとして吸収し、行動するかで全く違った留学になると考えていたからである。せっかくの留学であるからこそ、旅行ではできないことがたくさんあるのではないかと考えた。その中で、私は、特に現地で「人との関わり」を大切にすることにした。そう心掛けたことで、私は初めて日本人以外の友達をつくることができたのである。カナダでのクラスの構成は、ほとんどが日本人であったが、中国人や韓国人、サウジアラビア人のクラスメイトもいた。私はそのような様々な国からのクラスメイトとの交流を大切にした。休み時間に自分から声をかけてみたり、休日に一緒に買い物や食事をしたりして、積極的にコミュニケーションをとる時間を取り、カナダにいなが様々な国の文化を学んだ。私は中国語を勉強していたので、中国人の友達から中国語を教えてもらったりもした。そのような友達は今でも SNS 等を通して交流が来ている大切な友達である。

現地での交流を通して学んだことは、リンガ・フランカとして使われる「英語」という共通言語の素晴らしさとその大切さを改めて実感したことである。日本人

同士が他の言語を話す人の前で、日本語だけで会話をすると相手の気分は良くないだろう。同じ空間で誰か1人でも違う言語を話す人がいたら、皆が共通して理解できる「英語」を使うことが大切であるということを留学前に柴田先生から教えて頂き、現地ではそれを忘れず日本人同士でも英語を使って話すように心掛けた。

二度とない貴重な経験が、留学であると思い、私は毎日の出来事を英語で日記に記してきた。いつか振り返ってその時の気持ちを忘れないように、限られた時間だからこそ、どのようにその日、その時を過ごしたかを記しておきたかった。当たり前のことだけれど、今こうしている時間も風のように過ぎていく。二度と戻らないこの時間だからこそ、その時何を選択するかが大切である。どう行動すべきかで未来は変わっていくのだからこそ私たちはその日、その時間を大切にしなければならないのだと思う。

最後に、私にとって留学に至るまでの道のりは長く、準備で大変なこともたくさんあった。実家暮らしの私にとって、親元を離れて海外で生活するのは初めてのことだった。留学中はどんな壁にぶつかっても全て自分で解決しなければならない。そんな時、今まで自分がどれだけ家族に支えられてきたかを実感した。困った時、私を支えてくれたのは一緒に留学をしていた仲間や現地での友人、先生やホストファミリーの存在だった。多くの人の支えによって乗り越えることができたこの留学であるから、関わってくださった全ての人に感謝を伝えたい。今、振り返ってみると、そんな苦労も忘れるくらいのあっという間の日々と忘れられない2ヵ月間だった。これは私にとって叶えたい夢のための通過点である。この留学で学んだことを大切に。

“Seize the day, seize the moment.”

残り少ない大学生活、これからの人生を、悔いのないよう過ごしていきたい。

ハプニングと学び溢れる留学

17121073 鈴木 千広

大学2年の夏頃、私は「留学、楽しそう！」という印象を持っていました。

これは、恐らく先輩の留学報告会でのお話や事前のガイダンスの情報に魅力を感じていたからです。特にホストファミリーや現地の友達と笑顔で映っている写真や、見たこともない程の綺麗な景色、大きな大学と全てが輝いて見えました。その反面、「留学は大変だろう」という思いも同時に抱いていました。その理由は、経済的な側面、文化や言語の違いの困惑等があると思っていたからです。それでも私は留学への憧れが止められず、カナダ留学を決意しました。

そして 2018 年 10 月、カナダへの留学を決意し、準備を始め、2019 年 2 月、待ちに待ったカナダ留学が始まりました。当時、留学へ行くという実感はまだあまり湧いていませんでしたが、空港の外に広がる一面の雪を見て、「遂に来たか…」と身が引き締まる思いがしたのを覚えています。

カナダに到着し、まず私を待ち受けていたのは、思わぬハプニングでした。飛行機と一緒に運ばれてくるはずだったスーツケースの行方が分からなくなってしまったのです。日本では考えられない出来事に、とても驚きました。迎えに来てくれたホストマザーに事情を説明し、空港のカウンターへ行行ったものの、その日にスーツケースが届くことはありませんでした。スーツケースの中には、歯ブラシや石鹸などの日用品から衣類まで、ほとんどすべての物が入っていたので、とても困りました。初日にも関わらず、マザーにヒョウ柄のパジャマを借り、次の日から始まる学校のために洋服も借りました。迷惑をかけてしまったという申し訳なさ、これからの留学への不安が急に募りました。それと同時に、とても親切なマザーの対応にホッとしたのを覚えています。

留学にも慣れてきた 2 月中旬にも、事件が起きました。ホストマザーと喧嘩をしてしまったのです。喧嘩の発端は本当に些細なものでした。「週一回と決められていた洗濯機を使う日を、私が守っていない！」と責められたのです。ただ、私は、実際には約束通り、週一回しか洗濯を回していませんでした。それにも関わらず、決めつけたように強く言われ、納得いかず言い返しました。今思えば、私とマザーの性格がよく似ていたのだと思います。物をはっきりいうところや、頑固なところがお互いに本当によく似ていたのだと思います。その結果、言い合いになってしまい、素直に謝れなかったのだと思います。日本で、もし日本人とこのようなことが起きたとしても、お互いの言い分を聞き合い、感情的になることは無かったと思います。しかし言葉もうまく通じない文化の違う環境であった

V. 2. 英語圏（短期）

ため、このようなことが起こってしまったのだと思いました。この経験は、負けず嫌いの私に火をつけ、「もっと英語が喋れるようになりたい」、「どうしたら私の思いは伝わるのだろう」と考えるきっかけになりました。（結局、マザーが「夜ご飯なに食べたい？」と聞いてくれて、私の大好きなピザが食卓に並んだことで仲直りができました！）

そして2か月間のカナダ留学の折り返し地点である3月にも、また事件が起きました。私は、2月の授業のプログラムと3月の授業のプログラムの間の休暇を使って、友達とアメリカ旅行に行きました。アメリカへ入国するためには、ビザが必要であることは分かっていたので、友達と日本で取得をしておきました。そして空港へ着き、入国審査を受けると、私達だけがレッドカードを出され、各々別室へ連れて行かれました。理由は分かりませんでしたが、恐らく、ビザの取得がうまく行っていなかったのだと思います。訳もわからないまま、「バックを出せ。何も触るな。」と言われ、頭の中は真っ白になりました。ドラマや映画で見ると、どのくらい時間が経ったのかは分かりませんが、全ての手荷物チェックが済み、留学証明書を見せたことで、何とか入国することができました。こんなハプニングスタートのアメリカ旅行ですが、それも含めてとても素敵な旅が出来ました。

2か月間の私の留学は多くのハプニングがありました。今、私が言えることは、「留学は大変だけれど、最高に楽しい」ということです。「大変」と一言と言っても日本では起こることがないような、自分の想像を遥かに超える出来事が起こるからこそ、大変なのです。しかし、だからこそ、楽しいのです。日本では感じることもない刺激、文化や言語の違いをたくさん感じることができました。そして私自身、とても逞しくなったと同時に、心が豊かになりました。勉強面だけでなく、ホームスティや友達と過ごす時間中で、文化の違いや言語の違い、そしてその面白さを知りました。学生のうちに広い世界へ出て、知らない世界を見ることが出来た私は、本当に恵まれていました。この経験を無駄にすることが無いよう、今後の英語学習や、将来にも生かしていこうと思います。

留学から帰ってきてからが新しいスタート

17121074 鈴木 剛司

8 週間のカナダ留学を終えて私の人生は大きく変わりました。英語力はもちろんのこと現地で生活、その中で出会ったホストファミリー、友達、また大学で受けた授業、これらのすべてが私を大きく成長させてくれたと感じています。いままで一度も渡航経験がなく、生の英語に触れる機会がなかった私は、現地についた瞬間は、緊張と興奮で落ち着かなかったのを覚えています。

現地に着くと、留学生の名前の書かれたプラカードを掲げたホストファミリーがすでに私たちを待っていていました。私のホストファミリーは、日本で教員をしていた経験や過去に何人もの留学生を迎え入れた経験があるということもあり、何一つ不自由なく生活をすることができました。皆でディナーの支度をする、クイズ番組を一緒に見るなど、家族の一員として接してくれる優しさが嬉しく、とても安心できる空間を提供してくれました。私の留學生活が、とても楽しく、素晴らしい思い出となったのは、まさに、彼らのおかげだと思います。

大学の授業は初日のプレイスメントテストによってレベル分けされ、授業としては、主にグループディスカッションが行われ、母語を使用することは禁止されていました。全て英語で発言することが求められるため、最初は周りのクラスメイトのようにすらすらと話せないストレスを感じることもありました。しかし、他国の文化に触れる楽しさと同時に自分の文化に対する無知を実感させられることも数多くあり、多くのことを学ぶことができました。今でも現地で出会った友達と連絡を取ることもあり、新たな出会いがあるということも留学ならではの醍醐味だと言えます。

この機会にこれから留学を考えている後輩に私が留学を通して学んだことを伝えたいと思います。よく先輩からのアドバイスで「留学に行くと英語力が伸びます!」という感想を聞くことが多くあると思います。正直に言って、留学に行っても英語力が伸びないなんてことはありません。目にするもの、耳にするものすべてが英語であるために、嫌でも英語力は伸びます。しかし大金を費やして海外留学をしてただ「英語力を伸ばしたい」というなら、日本の英会話教室に通った方

V. 2. 英語圏（短期）

が安価で英語を上達させることができますと思います。留学して、周りの環境に頼ってはいけません。本来伸ばさざるべき英語力はさほど伸びないままの留学になってしまいます。季節によっては日本人の留学生が多く、つい日本人同士で集まって落ち着く空間を作ってしまうがちです。先ほども述べた通り、自分の身を母語が使えないストレスに置くことで英語力はさらに向上させることができます。私も幾度となく英語での表現に困ることがあり、話せないことに悔しさを感じることもありました。しかしそれでも何とか自分の知っている知識で表現することで、相手がわかりやすく表現し直してくれることもあり、さらに言えば、持っている知識内で表現することができる力も身に着けることができたのです。現地にいる間も知らない単語をリストアップして覚えること、毎日英語のニュースを見てリスニング力を鍛えること、留学しているからいいかという考えではなく、留学しているからこそ、より勉強しなければならないということを忘れないでください。もちろん学習面だけではなく、生活面でも自らいろいろなことにチャレンジしてください。日本にいてだけでは、経験することのできないもの、現地の人の優しさに触れること、実際に生活をして感じる、人それぞれ感じ方は違うかもしれませんがどれも刺激的で自分の視野を広げる良いきっかけになると思います。そして私が一番大切だと感じたことは、「留学から帰ってきてからが新しいスタート」だということです。言い換えると、留学での学習は自分の英語力の基礎作りであると言えます。日本に帰ってきてからの学習の継続が、これからの自分の英語力に繋がっていきます。題名にも示した通り、「新たなスタート」という意識が大切だと思います。留学から帰ってきた時には、今まで挑戦してこなかったことに、たくさん挑戦してみてください、応援しています。留学を通して得た力をこれからは、自分の武器として生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

留学を通して出会えた仲間達

17121110 増田 茜

留学に行くとした私が2ヶ月間という限られた時間を過ごすにあたって目標にしていた事がひとつあります。それは留学先で最高の仲間を作る事です。この

目標を掲げたおかげで私は留学を通して多くの素晴らしい仲間達に出会う事が出来ました。

私が参加したカナダへのショート留学はマンスリープログラムであったため、現地に滞在していた2月と3月とでクラスのメンバーが変わりました。留学生は主にアジア圏の学生が占めており、全体を通し、一番多かったのは日本人留学生でした。

私が所属していた2月のクラス編成は、中国人留学生1名を除き全員が日本人でした。ほぼ日本人のクラスの難しい所は、気が緩むと日本語が出てしまう所です。最初は気を張っているのも、皆が英語で話す事を意識していましたが、授業に慣れてくると少しずつ日本語を話してしまう学生が増えていきました。慣れない環境で英語に拘束された生活が彼らにとって苦痛だったという事は私も理解していました。しかし日本語を話さないように努力していた私にとって、周りが日本語を話し始めた環境は居心地が良いものではありませんでした。そんな時、私の心を救ってくれたのはクラスで唯一の中国人留学生の存在でした。日本語を話したくなかった私は、毎日彼女と話していました。学校で話す事はもちろん、休日に一緒に街へ出かけ、食事をしたり、買い物をしたりしました。私が大学二年生の時、第二外国語で中国語を学んでいたこともあり、私の拙い中国語で会話をしたり、お互いの国の文化を紹介したりして楽しみました。彼女と友達になれたからこそ、私は留学に対するモチベーションを下げることなく、1ヶ月を過ごす事が出来ました。彼女には本当に感謝しています。

3月になるとまたクラスの雰囲気が一変しました。今度は韓国人留学生が多く、またマンスリープログラムの授業を取っている学生の他に長期間滞在予定の学生が多かったので2月のクラスに比べて全体的に士気が高いように感じました。担当教員も変わり授業の内容もレベルアップしていました。自分自身が苦手意識を持っていた数字に関する英語学習や、個人またはペアでのプレゼンテーションの経験は、日本に戻ってからの自分の自信に繋がる内容だと思いました。3月のクラス編成は台湾人が1名、韓国人が数名、残りが日本人でした。3月のクラスは2月よりも国際色豊かになったクラスで、毎日、自然に英語が飛び交っていました。また、韓国や台湾についてあまりよく知らなかった私は韓国人のクラスメイトから日常会話で使える表現を教えてもらったり台湾人のクラスメイトにお勧め

のタピオカドリンクを教えてもらったりしてコミュニケーションを取っていました。3月のクラスメイトの中で特に仲良くしてくれたのが、ある韓国人の女の子でした。彼女は私より少し年上で誰にでも優しく出来る人でした。またどんな時も自分の芯をしっかり持っていて、私にとって彼女は憧れの存在でした。私は彼女とゆっくり話がしたいと思い、休日に一緒に街へ出かけました。その日は3月の終わり頃で、私のカナダ生活ももうすぐ終わりを迎える時期でした。残された時間を無駄にしないよう、時間が許す限り話し続けました。クラスでの思い出話やこれから挑戦したい事、不安に思っていること事や将来の目標など、様々な事を語り合いました。彼女と過ごした時間は、私にとって本当に特別な時間でした。

カナダへのショート留学を通して、私はたくさんの人に出会いました。この出会いから私が学んだ事は、「人と人との繋がりは国境を超える」という事です。生まれた場所が違っていても、生活してきた環境が違っていても、広い世界の中でカナダのヴィクトリア大学の留学生として同じ想いを抱いている同士であれば心は繋がる事が出来ると私は思いました。困難ももちろんありましたが、今私が思う事は、「留学に行く決断をして本当に良かった」という事です。一度きりの人生、後悔の無い選択が出来た事を誇りに思います。

挑戦は一生の財産

17121133 森田 実奈

私がショート留学に行くことを決意したのは、大学1年の春でした。大学に入って様々な事にチャレンジしたいと思ったときに、外国語支援センター（FLSSC）の先輩方が留学体験談を楽しそうに語ってくださったことがきっかけでした。しかし、留学したいと決意したものの私には越えられない壁がありました。それは、留学条件の一つである TOEIC スコアのボーダーラインでした。英語力が低かった当初、私にとってはかなり大きな壁でした。留学に行くという目標を掲げ、自分なりに1年間勉強に励みましたが、スコアは思うように伸びませんでした。そこで私は、ある先生に英語学習のサポートをお願いしました。週に1回、時間を割いていただき、先生から出された課題をこなしました。正直、とても大変でし

た。大変な中にも、英語の文法や使い方が分かった時は、とても嬉しかったのを覚えています。そして、英語学習が楽しいと感じることもできました。そして、2 年次にやっとスコアがボーダーラインを越えました。条件をクリアした安心感とこれから留学に向けて頑張ろうという前向きな気持ちでいっぱいになりました。

留学先をカナダに決めたのは、ホームステイに魅力を感じたということと、他の 2 か国（アメリカ、オーストラリア）に比べ、カナダのことをあまり知らない自分に気がついたからです。現地に行ってもっとカナダのことを知りたいと思いました。人生に 1 度しかないこのチャンスを自分のものにしようと私は留学前に大きな目標と、これから挑戦したいことをノートに書き留めました。

まずは、「たくさんの国の文化や人の価値観・宗教観・夢を聞き、体験し、繋がりを持つこと」です。大学入学前から、異文化にとっても興味があったので、この目標を設定しました。この目標を達成するためには、異国の地で多くの人と自分からコミュニケーションをとらなければなりません。また、私自身も慣れない英語で話す勇気が必要です。次に挑戦したいことをここに挙げようと思いましたが、実は、12 個もあるので抜粋して 5 つ挙げようと思います。「1 人映画に行くこと」、「スーパーで店員さんと会話をする事」、「分からないことがあったら、すぐにググらず（Google で検索すること）人に聞いてみる事」、「教会に行くこと」、「宗教について教えてもらうこと」です。これらを念頭に置き、私の留学生活が始まりました。初めて 2 か月間も家を空けるので、緊張と不安と寂しさでいっぱいでしたが、その反面やりたいことが自由にできるこの 2 か月間にワクワクしていました。

空港に着くと事前にやり取りをしていたホストマザーが迎えてくれました。車に乗り込み、家に向かう道中、たくさん話しかけてくれました。でも正直に言って、緊張していたのと 10 時間のフライトの疲れで全く話した内容を覚えていません。「普段聞きなれていないネイティブが話す英語のスピードに早すぎてついていけない・・・」と感じたことだけは鮮明に覚えています。家に着くと、陽気なホストファザーとフサフサな毛並みが特徴の大きな犬が温かく出迎えてくれました。

学校が始まり、新しい友達ができ、毎日楽しい日々を過ごしました。その中で

V. 2. 英語圏（短期）

も印象に残っているのは、2人の新しくできた友達存在です。1人は私が初めて勇気を出して声をかけた中国人の女の子です。彼女とは、すぐに打ち解けたくさんの話をしました。休みの日に一緒に遊びに行ったりもしました。日本料理が好きということで私は、彼女に対し何かできることはないかと考えた結果、「日本のカレーを食べてもらおう」と決めました。スーパーに食材を一緒に買いに行き、彼女とその友達にカレーを振舞いました。日本語で「おいしい」と言って食べてくれたことがとても嬉しかったです。彼女とは、今でも繋がりがあり連絡を取っていますが、日本のことをとても好きになってくれて、日本語を猛勉強中だそうです。またいつか会う機会があれば思い出話をたくさんしたいです。もう1人は長期留学中の日本人の男の子です。彼の第一印象は、「体育会系のガツガツ男子」でした。英語が流暢に話せて、友達も多い彼を見て、私は彼のようにになりたいと思いました。威圧感が強く、私にとってはかなり近寄り難い存在でしたが、彼と話すようになってから、彼の考え方や辛い過去を乗り越えていることに尊敬の念を抱きました。彼は決して最初から英語力が高かったわけではなく、当初は簡単な文法すら分からなかったそうです。しかし、「日本語を話さない」という自分だけのルールを作って、頑なに守っていたことから大きな成果を得られたのです。他にも彼なりのルールや目標、思いがあって、自信満々に英語を流暢に話す彼の存在が、私に「留学前に決めた目標を絶対に達成する」という強い気持ちを持たせてくれました。その他多くの新しい出会いがあり、1度だけしか話すことができなかった人もいれば、深い話をできた人もいました。様々な出会いがありましたが、それぞれが異なる考えを持っていて、納得すること、改めて考えさせられることなどが数多くありました。出会いとは本当に素敵なもので、面白いと強く感じました。

カナダで生活していて、日本とは異なる良い点に気づかされたことは幾度となくありました。最大の点は、私がカナダで出会った人たちの人柄です。「人柄の良さは満点」といっても過言ではないほど、本当に心の広い方ばかりでした。バスの運転手に必ず“Thank you.”ということ、横断歩道を渡るために待っていると必ず車両が一旦停止をしてくれること、バス停で待っていたら知らない人でも会話が弾むことなど、カナダの人々の習慣の素晴らしさを感じました。また、私のホストファザーも、とても陽気で、頼もしい方でした。私が一番頼りにでき

て、自分のことをたくさん話すことができたのは彼の人の人柄のおかげだと思います。お互いに、笑いのツボにハマってしまい、笑いが止まらなかったことを覚えています。夕食後に、彼と話す時間はとても充実していて、忘れられない思い出です。反対に、日本の良さに改めて気づくこともありました。日本の文化の良さに気づいたのは、お風呂と日本食のありがたみです。カナダには湯船につかる習慣がありません。疲れて帰ってきてもお風呂にゆっくりつかれないのは、想像以上に悲しかったです。また、バランスが良く健康に良いと言われる日本食は、とても恋しかったです。特に白米が食べられないことが、これほど辛いとは想像していませんでした。

また、目標のひとつである宗教観を知りたいという思いは、幸運なことにすぐに叶いました。私のホストファミリーの宗教がキリスト教だったので、毎週日曜日には教会へ行き、キリスト教の教えを受けました。日本では馴染みがなかった私にとって、すべてが初めての体験でした。讃美歌を歌ったり、パンをひとかけら食べ、カップ一杯の水を飲んだり、お話を伺ったり、意見交換をしたりと多くのことを経験することができました。教会では、同い年の子たちがたくさん話しかけてくれ、キリスト教のことを詳しく教えてくれました。そこで出会った2人の女の子は、留学中に、イベントに誘ってくれたり、私が抱いていた宗教の疑問を答えてくれたりと、とても親切にしてくれました。今でも繋がりがあり、近況報告をしたり連絡を取りあったりしています。

私が留学中に挑戦したいこと12個と大きく掲げた目標は達成できたと、今胸を張って言えます。2ヶ月という、とても短い留学が充実しており、人生に1度きりのこの機会を1日たりとも無駄なく過ごせたと感じるからです。友達とのシアトル旅行、アクティビティへの参加、大学のサークル、日本で待つ家族や友達へのポストカード、毎日1頁の英語日記、バルへ行くことなど留学中にしかできないことをたくさん経験しました。こんなにも自由にやりたいことをやらせてくれたのは、私の留学を全力で応援してくれた祖母や家族、友達、先輩、そして私の英語学習にお忙しい中付き合ってくださった柴田先生のおかげだと思います。心から感謝しています。本当にありがとうございます。

この留学をきっかけにまた新たに挑戦したいことができ、私は、今再出発している最中です。留学は自分を変えるきっかけになったと感じています。これから

V. 2. 英語圏（短期）

留学を考えている人はもちろん、長期休みに何をすべきかわからない人がいたら、ぜひ海外へ行くことをおすすめします。きっと新たな発見や考え方・価値観の変化が生まれると思います。私が経験したように、挑戦して何かを得ることは一生の財産になるはずだと思います。私自身、挑戦し続けて行きたいと思います。

私のホストファミリー



日本のカレーを作りました



3. スペイン語圏（長期、短期、語学研修、その他）

2018 年度春期スペイン語学研修

【概要】

実施期間：2019 年 2 月 2 日～3 月 5 日

実施国・機関：スペイン・アリカンテ大学語学教育センター

参加者：グローバルコミュニケーション学科生 11 名

目的：スペイン語運用能力の向上、スペインの歴史・文化に関する理解の深化

実施内容：事前の on-line テストの結果に従い、アリカンテ大学語学教育センターにてレベル別に分かれてスペイン語コースを受講した。また、現地企業の見学、アリカンテ大学生との交流、グラナダとバルセロナへのショートトリップも行った。

実施責任者：増井 実子

担当旅行会社：スパニッシュコミュニケーションズ

語学研修課題レポート

絵に込められた思い

ープラド美術館で学ぶスペインの歴史ー

17122019 長田 萌実

はじめに

スペインの歴史に興味があり、絵画を通してそこからスペインの歴史を学ぼうと考えた。絵画にはその絵が描かれた歴史的背景があるためだ。また、絵画を描いた作者や美術館の歴史にも注目してスペインの歴史に関する知識を深めていきたい。スペインの首都、マドリードにあるプラド美術館の作品を通してレポートを進めていこうと思う。

1. スペインの歴史とプラド美術館



マドリッド / プラド美術館

絵画の考察に入る前に、まずはプラド美術館の歴史に触れたい。プラド美術館は国王フェルナンド7世の発意と出資により、1819年11月19日に「王立絵画美術館」として創立された。1809年、マドリッドの絵画美術館設立の設立プロジェクトが発案された。

1811年、フアン・デ・ビリャヌエバが設計したプラド・デ・サン・ヘロニモの建物を絵画美術館として活用することになった。後に建物の名前に由来して「プラド美術館」と呼ばれるようになった。スペイン独立戦争が終結し、1814年5月にはフェルナンド7世がマドリッドに戻って即位した。美術館の構想はさらに積極的に推進された。

スペイン独立戦争とは1808年～14年にかけて起こった戦争でスペインの民衆がフランスのナポレオンの支配に抗して行った戦争だ。本レポートの3章で触れるゴヤの作品は、この戦争の発端となった蜂起である。

1793年に開館したルーブル美術館を参考にして、プラド美術館も一般公開の美術館として絵画が公開された。しかし、ルーブル美術館と異なる点は、王室コレクションを中核としているところにある。よって、プラド美術館は世界中の全ての時代、国籍、流派、芸術運動などを網羅したものにはなっていない。プラド美術館は15世紀以降のスペインを統治した歴代王の美術に対する熱意がこもっていて、濃密さに秀でた美術館だ。

プラド美術館は開設当初、スペイン人画家が描いた311点を展示していたが、国王自らが私財を投じることで1827年には4000点を越える作品が所蔵されていた。

1936年にスペイン市民戦争(スペイン内戦ともいう)が勃発した。それにより、一時プラド美術館は封鎖せざるを得ない状況になった。スペイン内戦は、モロッコにあるスペインの飛び領地メリーリャで反乱軍が蜂起し、フランコがクーデターを宣言したことにより始まった。内戦は次第に他の国を巻き込んで戦争となった。フランコがドイツとイタリアの協力を得たためだった。スペイン政府は反乱軍を鎮圧するべくフランスやイギリスに協力を依頼したが、協力を得ること

はできなかった。戦争が激しくなると、美術品を保護するために戦争終結まで作品を移管していた。

2. 宮廷画家ベラスケス

次に、画家のベラスケスについて述べる。ベラスケスは17世紀、フェリペ4世の時期に宮廷画家として活躍した画家だ。プラド美術館で有名な「ラス・メニーナス(女官たち)」の作者でもある。ベラスケスの作品であると判明している約120点のうち、プラド美術館には50点がある。



(左) フェリペ4世 (右) オリバーレス公伯爵

中でもまずは「フェリペ4世」「オリバーレス公伯爵ガスパール・デ・グスマーン騎馬像」の2つの作品に注目して、スペインの歴史と絡めていきたい。

フェリペ4世は以上で説明した通り、ベラスケスが宮廷画家となった際の国王である。フェリペ4世は宰相オリバーレスに政治を任せ、自信は乗馬や狩猟、美術や文学の保護など趣味に没頭していたという説話が残っている。しかしこの絵にはそれを否定するかのごとく王としての責務を表すシンボルが散りばめられている。正義を表現した帽子が置かれている事務机、行政を意味する右手の文書、国防を表す剣などである。後でベラスケスが絵の修正を加えたことが判明している。この絵はフェリペ4世が在位して7年目に描いた絵である。

次にオリバーレス公伯爵の絵に移る。オリバーレスの絵は1636年頃に描かれたとされている。ちょうど、スペインがオーストリアに味方して、三十年戦争に参加した頃だ。馬が後ろ足で立っている姿勢を描くことで躍動感、そして威厳と尊大さを表している。この構図は政治・軍事の最高責任者である王のみ許される

ものであった。ここに、オリバーレスが政治を任されていたという事実が現れているように思う。中央にオリバーレスのみを配置し、指揮棒を進行方向に向けることで、先頭で軍を率いている様子が表されている。光を利用して馬の毛並みのよさが表現されており、さらに金色で彩られた装飾を多く用いることで、オリバーレスの権力の強さを表しているようにも感じられる。



槍 (ブレダ開場)

また、ペラスケスの作品で「槍 (ブレダ開場)」という作品がある。これは 1625 年 6 月 5 日にアンブロシオ・スピノラが率いるスペイン軍がオランダの要衝ブレダの町を包囲して陥落させた時の様子を描いた作品だ。劇作家カルデロン・デ・ラ・バルカの戯曲「ブレダの開場」にインスピレーションを得てこの作品を制作したらしい。戦勝を取り扱ったテーマではあるが、それ

を祝う表現はなりをひそめ、スペイン軍の寛容さと仁徳が主題として強調されている。よく見るとスペインの兵たちは頬を緩めるだけで、手をあげたり小躍りしたりせずに密かに自分たちの勝利を喜んでいるように見える。敗北した軍の将ユスティヌスはスピノラにひざまずこうとする。しかしスピノラは下馬してユスティヌスと対等の地面に立ち、それを止めた。この時の様子を描いたのがこの絵である。スペイン側の背景には軍事力と統率を象徴する槍が立ち並ぶ。また、背景にはまだ煙がくすぶっている場所もあり、つい今しがたまで行われていた戦闘の名残を表現している。周囲の人たちはスピノラたちのいる方を向いている人もいれば、こちらに目を向けている人、下を向いている人などがいることから、まるで自分が実際に彼らを見ているかのような、リアルを感じる絵である。

3. ゴヤと独立戦争

最後に、ブラド美術館にあるゴヤの作品に注目したい。ゴヤは 18 世紀後半、カルロス 4 世の即位とともに国王の専属画家に任命された。15 年間宮廷に仕えてやっと専属画家になれた。ゴヤは「1808 年 5 月 2 日、エジプト人親衛隊との

戦闘」と「1808年5月3日の銃殺」という連作をそれぞれ1814年の春から秋にかけて制作した。1章でも説明したように、この作品のテーマとなる民衆の蜂起がきっかけでスペイン独立戦争が起こる。スペインはイギリスと協力してフランス軍を一掃し、独立することができた。

「1808年5月2日、エジプト人親衛隊との戦闘」は、フランス軍の占領に対するマドリード市民の蜂起を描いたものだ。愛国者たちが、馬に乗っている人を囲んで襲撃をしている。馬に乗っているのは、ナポレオンの皇帝親衛隊に編入されたエジプト人兵士たちと、最後の王子ドン・フランシスコ・デ・パウラを王宮から追放する任を負った竜騎兵隊である。マドリード市民は、短剣をそれぞれ片手に持ち、彼らに攻撃をしている。その表情は抑えきれない憎しみを爆発させているようである。中央より少し左にいるマドリード市民は、刺した男が既に死んでいるにもかかわらず、さらに剣を振りかざしている。人が密集し、押し合っている様子からそれが激しいぶつかり合いであることを想像させる。背景を茶色でぼんやりと描くことにより、目の前で繰り広げられる戦闘に目が行くような構図になっている。

一方、「1808年5月3日の銃殺」は、フランス軍が反乱に加担した多くの者をマドリードの各所で銃殺をした様子を描いている。午前中にフランス軍を襲った民衆は今は銃殺される側となってしまった。既に処刑されてしまった者、処刑を待つ人びと、今まさに処刑されようとしている人。3つの状況下にいる人びとを同時に描くことで、リアリティーのある悲惨な状況が表現されている。処刑されたものは乱暴に積み重ねられ、地面は大量の血によって赤く染められている。ど



1808年5月2日エジプト人親衛隊との戦闘



1808年5月3日の銃殺

V. 3. スペイン語圏

れだけ多くの犠牲者が出たのか想像もできないほどの悲惨な場景が描かれている。また、処刑しているフランス軍の顔は見えない構図になっている。そこから、マドリード市民の感情表現に終点を当てて、スペインの立場から描いていることが分かる。この絵が描かれた舞台は、奥に見える塔がサンタ・マリア・ラ・レアル教会やサン・ニコラス教会のものと考えられるため、マドリードの外周門ペエルタ・デ・ラ・ペガ付近であるとされている。

終わりに

プラド美術館やそこに飾られている絵画について調べることで、スペインで過去に起こったことを知ることができた。人物の関係性や歴史の流れと美術作品とが結び付き、歴史や絵画に関する興味が高まった。実際にプラド美術館に足を運んで、自分の目で絵画を見ると写真とは違い、スケールの違いや絵の具の塗り方等見ることができて良かった。

【参考文献】

María Dolores Jiménez – Blanco (2016)「プラド美術館ガイドブック」国立プラド美術館

【ウェブサイト】

スペイン内戦／スペイン戦争：

<https://www.y-history.net/appendix/wh1504-112.html>

フェリペ4世とは コトバンク：

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%AA%E3%83%9A%E4%B8%96-123247>

スペイン独立戦争とは コトバンク：

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E7%8B%AC%E7%AB%8B%E6%88%A6%E4%BA%89-845582>

スペイン語学研修で使える！ ～スペイン語集～

2018 年度スペイン語学研修チーム

◎ Ya me voy. 意味：私はもう行きます。

→その場から立ち去る、という意味なので行き先を明示しなくて大丈夫。ホームステイ先で、自分の部屋に戻るときなどに使える。



◎ Voy a ducharme. / ¿Puedo duchar?

意味：シャワーを浴びてきます。／シャワーを浴びていいですか？

→ホームステイ先でシャワーを浴びに行く前に使用した。黙ってシャワーを浴びに行くのは失礼だと思うので、「お風呂入ってくるね」というニュアンスを含めて毎日言っていた。



◎ Estoy con lleno/llena. 意味：お腹一杯。

→ご飯を食べ終わったあとに、このワードを使った方がお互い気持ちが良いと思う。また、ホストマザーもこっちが満足したか気になるので、かなり使える。※男性が言う場合→ lleno 女性が言う場合→ llena

◎ Ya está. 意味：これでよし、もう出来ました

→アリカンテ大学での授業中に練習問題に取り組み、先生が終わったか確認する際によく「ya está! (できました!)」と答えていた。

またホームステイ先での食事中、お腹がいっぱいになると、ホストマザーがもういらない？と聞いてくれるので「ya está. (食事がおわりました。)」と答えていた。



V. 3. スペイン語圏

◎ Estaba bueno. 意味：良かった、おいしかった

→ Estaba は estar の線過去表現。ホストマザーにお弁当はおいしかった？と聞かれた時に「estaba bueno! (おいしかったよ!)」と伝えたり、大学の授業はどう？と聞かれた際に「estaba bueno! (たのしかった!)」と伝えていた。

◎ Me gusta ～. / No me gusta ～.

意味：～が好き。／～が好きではない。

→自己紹介をする時やホストファミリーとの会話で大切。また、ホストファミリーの食事で自分の口に合わないものが出されたときには、スペイン人ははっきりした答えを求めるため、No me gusta. と遠慮なく素直に伝えることが大事である。



◎ ¿Podrías hacer Bocadillo? 意味：ボカディージョを作ってもらえますか？

→ボカディージョはフランスパンに生ハムやチーズを挟んだサンドイッチのような食べ物。研修旅行に参加するときなど、『お弁当』が必要なときに使った。

◎ Vale. 意味：わかった。了解。

→授業ではもちろん、ホームステイ先でも会話でよく使える 1 番簡単なフレーズ。



◎ Claro. 意味：もちろん。

◎ ¡Qué bien! 意味：いいね！ よかった！

→どんな場面でも使える感嘆文。相手の話を聞いてそれに反応する時や感想を求められた時など様々な場面で使った。

◎ No lo sé. 意味：知らない、分からない

→ホストファミリーと過ごす中で多く使った。相手の話す内容が分からない時や、聞かれたことに対して分からないことが



あったときに使える。

◎ Quiero + 動詞の原型 意味：私は～したいです。

→何をしたいか伝えることはコミュニケーションを取る上で重要。そういう場面や状況で、Quiero を使うだけで自分がしたい事を伝えることができ、とても役に立った。

例えば… Quiero ir al Museo del Prado.

意味：プラド美術館に行きたいです

◎ Voy a + 動詞の原型 意味：私は～するつもりです。

→ホストマザーに予定を伝える時に使えるフレーズ。一緒に生活する上で大切。

例えば… Mañana, voy a comer en restaurante.

意味：明日、レストランでお昼ご飯を食べます。

◎ ¿Puedo + 動詞の原型？ 意味：私は～できますか？

→授業が終わるとよくホームステイ先の近くのデパートに行き服を選んでいた。店内で気になる商品を見つけては店員さんに「¿Puedo probar este? (これ試着できますか?)」を決まり文句のように伝えていた。

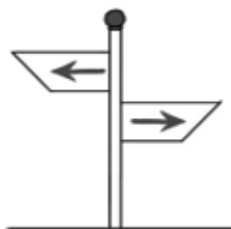


◎ ¿Dónde está ~? 意味：～はどこですか？

→買い物に行くときによく使った。街の人やお店の人に聞くと会話のきっかけになってコミュニケーションが取れた。

◎ Izquierda/Derecho 意味：左 / 右

→なれない土地で迷子になったときなど、道を訪ねたい時に知っていると便利！



◎ Otra vez por favor. 意味：もう 1 回言ってください。

→1 度で聞き取れなかった時に、使えるフレーズ

V. 3. スペイン語圏

◎ ¿Qué? 意味：何？え？



◎ Recarga por favor.

意味：補充してください。

→トラムやバスの回数券を購入するときによく使った。

◎ Voy ～. 意味：私は～に行きます。

→ホストマザーや学校の先生とのおしゃべりに。

例えば… Voy al mercado. 意味：メルカド(市場)に行きます。

Voy en (el) autobús. 意味：バスで行きます。

◎ Me duele ～.

意味：～が痛いです。

→風邪をひいて、～が痛いという時に使えるフレーズ

◎ Después/ Antes 意味：～の後に / ～の前に

→ Después も Antes も時間の流れに沿って話がしたいときに便利。



◎ Para ～ 意味：～から、～のために

→理由付けしたいときに使える！

◎数字は必須！ Un millón (100万) までは覚えていくほうがいい。

4. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

2018 年度 ポルトガル語学研修報告

実施責任者：江口 佳子

2019 年 2 月 9 日～3 月 3 日に第 2 回目のポルトガル語研修がリスボン大学ポルトガル言語文化センターで実施された。当初の予想を上回る 8 名（GC 学科 2 年生 6 名、1 年生 2 名）の参加があった。

語学学校のポルトガル語の授業で、普段の授業より進んだ範囲を学ぶことを考慮し、4 回の事前研修の他に、ポルトガル語の補講を 3 回ほど行った。

リスボンに到着後、初日にレベル分けテスト（筆記とインタビュー）が実施され、毎日 4 時間の授業が行われた。研修期間中、リスボン大学日本語学科のポルトガル人学生との交流会が実施された。また、週末には旅行会社により、市内にあるジェロニモス修道院や、近郊の町シントラ等への遠足もあった。

すべてポルトガル語で行われる授業はなかなか理解することができず、午後遅くまで、皆で一緒に宿題に取り組んだと帰国後に報告を受けた。研修は大変だったようであるが、帰国後、文法力や発音には、著しい向上が見られ、勉強の成果は実を結んでいる。参加者の大半が研修後もホームスティ先のポルトガル人家族と連絡を取っており、良い滞在をしたのではないだろうか。ポルトガル語やポルトガルへの関心を一層高めてくれると嬉しい。

語学研修課題レポート

リスボンと日本の自転車事情を比較

17122026 川村 味奈美

1. はじめに

私は小さい頃から、自転車移動が多かった。今でも 30 分ほど MY 自転車で、通学している。また、日本で通勤・通学に自転車を利用する人も、ほぼ MY 自転

車だ。しかし、リスボンで1か月間生活する中で、「MY自転車に乗っている人が少ない。」ということに気付いた。通勤・通学で自転車を使用する人が少ないというわけではない。かなり多くの人がシェアサイクリングを利用していたのだ。さらに、レンタル電動スクーターも存在した。「自転車」という万国共通の道具1つ取っても、これほど国ごとで文化が違うのか、と驚いた。

自分が知らないだけで、日本にもリスボンと似たようなシェアサイクリングのシステムがあるのではないか。日本とリスボンのシェアサイクリングサービスの特徴は何か。いくつも疑問が浮かんできたため、リスボンと日本のシェアサイクリングについての比較調査を今回の語学研修のレポートテーマに設定する。

2. リスボンのシェアサイクリングについて

現地で見かけたシェアサイクリング、電動スクーターの管理会社である「GIRA.」「Lime」の違いを以下の表にまとめた。

	GIRA.	Lime
貸出品	①自転車 ②電動自転車	①自転車 ②電動自転車 ③電動スクーター ④車
使用方法	アプリ（Android、iOS 対応）	アプリ（Android、iOS 対応）
展開規模	リスボン市内	全世界（主に、欧米諸国）（ポルトガルでは、リスボンとコインブラにある。）
プラン	①年パス ②月パス ③1日パス	30分毎
電動タイプの充電方法	指定の駐輪場で充電される。	現地スタッフと Lime Juicers（アルバイトのような存在）により、電池残量の少ない物は回収され、バッテリーの充電が行われる。
その他の違い	・使用後、目的地近くの駐輪場所を探し、停めなければならない。	・使用後、乗り捨てが可能である。

この表からわかるように、ひとえにシェアサイクリングといっても、いくつも違いがある。1番大きな違いは、使用後の返却方法だ。「GIRA」は、自社の駐輪場

が設置されており、そこから借りたり、返したりする。上の写真は、大学近くの駐輪場だ。次に、「Lime」は乗り捨てができる。自転車で乗り捨てを見かけることは少なかったが、電動スクーターはよく見かけた。普通の歩道や、看板の近く、駅周辺やショッピングセンター周辺など、いたるところで乗り捨てされていた。中には、倒れたまま放置されているものもあり、乱雑に乗り捨てされていた。違いはあるが、どちらも利用客は、学生からサラリーマンまで様々だ。電動スクーターで、スマートに通勤・通学する姿も多かった。



3. 日本のシェアサイクリングについて

帰国してから、意識してシェアサイクリングを探すようにした。すると、意外と見つけることができた。沼津駅近く、三島の街中、友達の家近く（千葉県）、出かけ先の大磯の街中だ。大磯で見つけたシェアサイクリングは「モバイク」というサービスだった。他3つは「HELLO CYCLING」というサービスだった。

まず、「モバイク」について。2018年3月27日発行の静岡新聞の記事で、そのサービスについて取り上げられていた。元々、モバイクは中国のシェアサイクリング大手で、2018年ごろに本格的に日本市場の開拓に乗り出したようだ。20都市に進出し、3万台の自転車を投入予定と書かれている。このサービスの特徴は、コンビニ大手や外食チェーンなど元から駐輪場を持っている企業と連携し、そこにモバイク専用駐輪場を設置してもらうという点だ。このようにすることで、モバイク側は新たに駐輪場を設置する必要がなく、また企業側は来店客増加の可能性が高くなり、両者にメリットがある。

次に、「HELLO CYCLING」について。2016年11月に設立されたOpenStreet株式会社が管理している、全国展開のシェアサイクリングサービス

だ。地域ごとにサービス名が異なり、千葉県で見かけたものは、「HELLO CYCLING」だったが、三島で見かけたものは「ハレノヒサイクル」という名前だった。地域に合ったサービス名やロゴ、看板にでき、自転車（スマートキー装着必須）と駐輪場を準備できる地域・企業があれば、そのシステムに登録でき、管理・運営が可能だ。また、地域ごとに料金が少し異なる。今回、沼津駅近くでハレノヒサイクル利用者を見かけたため、声をかけてみた。利用者は、埼玉から来たラブライバーだ。あまり他の利用者を見かけたことはない、とのことだった。「沼津のようにバスやタクシーで周りにくい地域では、シェアサイクリングはとても便利だ」と話してくれた。また、1日最大1,500円で、クレジットでも支払える点も利用したくなるポイントの1つようだ。しかし、どちらのサービスもまだまだ有効活用されていない。埋もれたままの便利道具といったところか…。



↑ HELLO CYCLING（千葉）



↑ ハレノヒサイクル

4. リスボンと日本のシェアサイクリングを比較して

まずどちらの国も、アプリを利用するという点は共通している。現代人には、アプリ内で予約から開錠、支払いの全てが完結できるのはかなり魅力的だろう。また、料金もとても良心的だ。しかし、異なる点の方が多く挙げられる。まず、乗り捨て可能なものがあるという点だ。日本は専用駐輪場に必ず返却しなければいけないため、目的地近くの駐輪場が埋まっていた場合、他の場所を探さなければいけない面倒な点がある。そして、1番の大きな違いは、利用者層だろう。リスボンでは日常生活にかなり馴染んでいて、通勤・通学の手段の1つになっていた。しかし、日本では全く馴染んでいない。観光客が使うイメージが強く、そもそも利用している人自体が少ないように思われる。

シェアサイクリングサービスが有効活用できているリスボンとできていない日

本。マネするだけでなく、国ごとに何かしらの工夫が必要ということだろうか。

5. おわりに

自分が知らないだけで、日本にも多くのシェアサイクリングサービスが存在した。しかし、そのサービスが存在するだけでは意味がない。どうすればリスボンのように、もっと地元の人の生活の一部として利用してもらえるのか。もっとスポットを増やし、それを管理する体制を整えば、より広まるだろう。とも思ったが、そんな簡単なことではないだろう。ちょっとした買い物、駅まで…など、バスやタクシー、電車のような交通手段の 1 つとして、日本でもシェアサイクリングが活用されるといいな、と思いながらこのレポートを締めようと思う。

〈参考文献〉

1. <https://www.gira-bicicletasdelisboa.pt/> (2019/06/09)
2. <https://www.li.me/pt/> (2019/06/09)
3. <https://www.hellocycling.jp/> (2019/06/09)

全日本学生ポルトガル語弁論大会について

江口 佳子

京都外国語大学で開催される全日本学生ポルトガル語弁論大会は、2019 年第 37 回目の歴史ある大会である。今回は 11 月 23 日に行われ、7 つの大学（京都外国語大学、天理大学、神田外国語大学、大阪大学、同志社大学、関西学院大学、常葉大学）から 21 名が出場した。本学からはグローバルコミュニケーション学科 3 年生の 2 名が参加した。

発表の演題は自由であり、約 5 分間のスピーチを行う。出場者 21 名のテーマは、ポルトガル語の言語に関すること、ポルトガルやブラジルの文化、大学生活、他者との関係、夢や将来、社会貢献等、様々であった。

川村味奈美さんは「外国人と暮らすこと」(Viver com os estrangeiros) というタイトルで、「多文化共生」に関わる活動の経験について発表し、横山結花さんは「ポルトガルの民謡音楽」(Música folclórica portuguesa) と題してポルトガ

ルの国民的民衆歌謡であるファドについて発表を行った。そして、川村味奈美さんが、その内容と適切な表現力が評価され、第2位となり、「京都外国語大学総長杯」を見事受賞した。

本学は前回に引き続き、2度目の参加であるが、この大会に出場しようという



出場者の意欲を称えたい。大勢の聴衆を前に、ポルトガル語でスピーチをするためには、テーマ設定、内容の構成、日本語からポルトガル語への翻訳、原稿の暗記、発音や表現力の工夫など、数か月の準備が必要であったであろう。

大会終了後には、懇親会が催される。他大学でポルトガル語

を学ぶ学生同士の交流は貴重な機会である。京都外国語大学の先生方の温かなご配慮に感謝を申し上げたい。

大きな挑戦に飛び込もう！

17122078 横山 結花

「全日本学生ポルトガル語弁論大会」、この全日本という大規模な弁論大会が存在しているのは1年生の時から知っていた。外国語大学からの学生がほとんどで、きっとみんな上手。外国語学部でポルトガル語をすこし勉強しているだけの私には縁のない話だろうな、そう思ってポスターを見ていた。それから2年後、3年生になった私は第37回全日本学生ポルトガル語弁論大会に出場した。

今から1年間ほど前、第5回多言語レシテーション大会の交流タイムで衝撃を受けた。1つ上のGC学科の先輩である、亀井李佳さんが出場したという全日本ポルトガル語弁論大会でのスピーチの一部を聴いた時だ。「かっこいい」。自分

の伝えたいことをポルトガル語で自由に弁論している李佳さんがとてもかっこよかった。そのスピーチを聞き終えた瞬間、「来年私も同じ大会に出場しよう」、そう決めた。

私には、弁論をしようと決めていた内容があった。ポルトガルの民謡音楽 FADO（ファド）についてだ。2年生の3月にポルトガルへ語学研修に行った。音楽が大好きだったため、ポルトガルに行くからには民謡音楽の FADO を聴いて帰ろうと決めていたのだ。実際に FADO を聴いた時の感情や FADO そのものについて伝えたい、そう思っていた。伝えたいことをそのまま殴り書きをし、日本語に要約、その後ポルトガル語へと翻訳。大会に出るのは、当然のごとく簡単なものではなかった。原稿を暗記するのにも時間がかかるが、そもそも原稿を完成させるまでの道のりは非常に長いものだった。それでも、出たいという気持ちは揺るがなかった。必ず「全日本ポルトガル語弁論大会」という大きな舞台で弁論をしたいという気持ちが強かったのだ。

大会当日、緊張感が漂う会場で何度も何度も原稿を読み返す出場者をみても不安になった。自分らしく弁論できたらそれでいい、そう思い大会へと臨んだ。自分で納得のいく弁論ができた。頑張ってよかった、そう思えた。

この文章を読んでくださった皆さんは、自分の中で大きな挑戦をしたことがありますか？まだしたことが無い、しようとしているが勇気が出ないという方は、先のことは考えずにとりあえず飛び込んでみてください。大変なこと辛いことも沢山ありますが、必ずそれ以上の何かを得ることができます。私もポルトガルに留学をしたこと、弁論大会に出たことで、多くのものを得られました。是非皆さんにもそれを感じていただきたいです。

最後になりますが、この弁論大会に出場するにあたって、応援してくださった方々、親身になって練習に付き合ってくださいました方々、一緒に大会出場した川村さん。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

5. 中国語圏（長期、短期、語学研修、その他）

2019 年度の中国語圏での研修の実施報告

若松 大祐

(1) 台北語学研修（海外中国語研修）

中国語語学研修は、2019 年度も協定校である台湾（台北市）の銘伝大学にて、3 週間実施された。参加者 8 名（グローバルコミュニケーション学科 3 年生 4 名、2 年生 4 名）は、8 月 11 日（日）に東京羽田空港から出発し、8 月 31 日（土）に全員無事帰国した。

中国語は発音のハードルが比較的高い言語である。学習に際して、中国語の現場に身を置きつつ、適切な会話指導を受けるメリットは計り知れない。3 週間という限られた期間ではありながらも、例年、参加学生には聴解力の向上や発話のスピードの面で大きな躍進が見られる。

さらに、参加者は全員が簡単なレポート執筆に取り組む。レポート執筆のために、参加者は文献読解と臨地調査に基づき、台湾に関する問いを解明しようと試みる。こうして台湾をはじめとする中国語圏の文化や社会への理解を深めるところに、語学研修の目的がある。

(2) 長期留学

中国語長期留学は、協定校である台湾（台北市）の銘伝大学にて実施している。2019 年度は 2 年ぶりの実施になり、2 名の学生（いずれもグローバルコミュニケーション学科 3 年生）が 9 月 24 日（火）に台北へ赴く。9 月 30 日（月）から授業が始まり、3 月下旬まで 6 か月間続く。毎月 15 日に届く報告書（本学外国語学習支援センターのブログで随時公開。<https://www.tokoha-u.ac.jp/blog/flssc-b/>）からは、学生が単に中国語の授業を教室で受けるだけでなく、台湾という場所で中国語を通じて人生について試行錯誤しているのが伝わってくる。

(3) 交流活動

2020 年 2 月 5 日(水)に台湾から高校生が本学を訪ね、本学学生と交流した。

長期留学レポート

どのように留学先の人と知り合うのか

17122030 小柳 直人

言語習得の一番の近道は、学習したことを実際に使って話してみることでしょう。会話をする相手は、その言語を母語としている人が最も適しています。海外留学をすれば、一見するとその機会はいくらでもあるようです。しかし、語学留学では、意外にも留学先の人と知り合う機会というのは多くありません。結論から言えば、自ら進んで行動することが大切です。ここでは、留学先の人と知り合う難しさの理由と解決策について、私の経験に基づき書きましょう。

私は現在、台湾の銘傳大学附属の華語訓練センターにて語学留学中です。留学開始から3か月が経過しました。しかしながら、台湾人と知り合うことに難しさを感じています。その理由はクラスの中あるいはセンター内に台湾人が、教員を除くと存在しないからです。考えてみれば、中国語を学びにやって来る人は中国語が話せないあるいは学びたい人ばかりです。そこに中国語を既にマスターしている台湾人が来るはずはありません。当然のことながら、見落としやすいことです。さらに、同じクラスの学生は私自身と同じレベルの中国語しか話せません。そのため、中国語学習をリードしてもらうことも難しいわけです。これは、語学留学に特有の事情と言えるでしょう。一般的な留学や交換留学等であれば、台湾人も外国人も同じ教室で講義を受けるわけですから、同世代の台湾人と知り合う機会も多いにちがいありません。ところが、語学留学においては学校の外に出なければ、会話の練習相手になってくれるような相手は見つからないのです。

では、学外ではどうでしょうか。台湾にいるのだから日常生活で中国語を使う機会は当然多いです。しかし、日常生活で使う語彙は限られており、そうした語彙がいったん身につくと、それ以上の能力向上にはつながらないでしょう。

実は、こういった経験を大学入学以前のカナダでの1年間のワーキングホリデーの際にしていました。当時、私は最初の6か月間、英語を学ぶために語学学校に通っていました。学校にはカナダ人が先生以外おらず、カナダ人の知り合いを作るのは難しいことでした。今回の台湾でも同様です。語学留学において留学

先の人と知り合うのは、やはり難しいことなのです。

そこで、ここからは私が現在、実践している3つの解決策について説明します。1つ目は、言語交換（ランゲージ・エクスチェンジ）や交流会への参加です。台北では様々な交流会が開かれており、インターネットやSNSで検索すると、いくつも出てきます。私が参加した交流会は幅広い年齢層の参加者がおり、自己紹介から始まります。台湾や日本についての話をしたり、お互いに日本語と中国語を教え合ったりしました。メリットとしては、既に交流の場が設けられているために参加しやすくて、日本に関心のある台湾人が来るために話題に困らないことなどがあります。デメリットとしては、年齢層が幅広いことや参加者が毎回一定ではないことから、往々にしてその場限りの関係で終わってしまうことです。

2つ目は銘傳大学の「小老師制度」の利用です。「小老師」とはいわゆるスタディパディのことで、銘傳大学の学生が中国語の勉強を手伝ったり、会話の練習相手になったりする制度です。週に1、2回の頻度で実際に会ったり、あるいはビデオ通話を使って会話したりします。また、夜市や観光地などに連れて行ってもらえたりもします。メリットには、年齢が近く、学生であるため、気軽に質問できる点、話題や趣味が合うことが多いためにスムーズに会話ができる点があります。デメリットは、学生によって取り組みへの熱意がまちまちです。

3つ目は自らの趣味、関心による解決です。私はサイクリングが趣味です。台湾の自転車産業は世界トップクラスということもあり、私は台湾で自転車を購入しました。自転車を購入した店では、毎週日曜日の朝にグループライドを主催しています。私はそのグループライドに参加することで台湾人の知り合うことができました。メリットとしては、関心のあることが共通しているために会話が弾みます。デメリットとしては、特殊な例であるために、実際にこういったグループに誰でも参加できるかどうかは確実でないことです。

ここまで、3点の解決策を説明しました。私がその中で最も良い方法だと考えるのは、3つ目の趣味、関心による解決です。なぜなら、自らの趣味、関心に関することであれば、知り合った人と会話や議論する際に、自分の言いたいことをどのように中国語で伝えるか考えたり、調べたりといった行動を、自ら進んで行いやすいからです。1つ目と2つ目の解決策に比べ、受け身でなく自ら行動を起こす必要があり、3つ目を実践するのは難しいことでしょう。しかし、そういっ

たコミュニティに参加すること、あるいはそうして友人を作ることが、留学生生活をさらに充実させます。留学先の人々との深い交流は言語習得にも大きく影響します。要するに、語学留学において留学先の人と知り合うことは難しいものの、受け身にならず自ら進んで行動することが大切です。

長期留学レポート

2020 年中華民国総統選挙

17122038 杉山 瑞貴

はじめに

2020 年 1 月 11 日、第 15 期の総統を選出する選挙が行われた。1988 年に総統になった李登輝により、民主化の道を歩むことになった台湾。しかし、一つの国とは認められていない台湾。この台湾の総統選挙が私の留学中に行われることは貴重である。ここでは、実際の台湾人の意見や関心、選挙結果、台湾の選挙運動について留学を生かした調査し、考察していく。以下、中国政府との関係を簡潔にするために、特に国民党と民進党に注目しよう。

1. 今回の総統選挙の争点

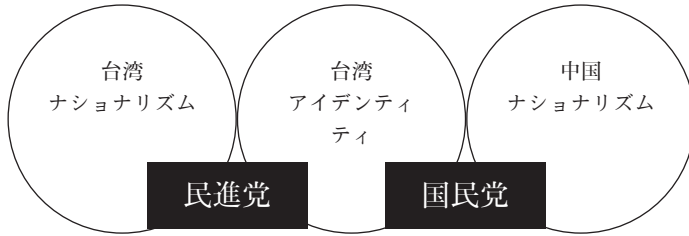
簡潔にいうと韓国瑜（国民党）の主張は、「中国と協力し経済を発展させる」であり、蔡英文（民進党）の主張は、『『一国二制度』で統一を図ろうとする中国から台湾の自由と民主を守る』である¹。両政党は、互いに台湾アイデンティティを持ちながら、「中国政府との関わり」について考え方がそれぞれ異なる²。それが今回の選挙の焦点となった。「一国二制度」の導入されている香港の状況が世界中に伝わったことで、中国政府に不満を持つ人が多くいる。しかし同時に、中国と協力して経済を発展させ、豊かな生活を送りたいと考える人も多くいる。こ

¹ 「台湾大選 2020：年輕人捍衛台灣及未來之戰」(<https://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese-news-51031941>) [2020 年 1 月 13 日確認]

² 台湾アイデンティティとは、台湾への愛着、台湾主体性意識、台湾人意識を指す。小笠原欣幸『台湾総統選挙』（京都：晃洋書房、2019）、p.17。

の状況の中で行われた選挙は今後の台湾にとって、とても重要な選挙だった。選挙の結果によって、台湾と周りの国の関係が一変する。とても興味深い選挙なのである。

【図表 1】台湾のイデオロギー・政治的立場と二大政党の支持構造³



2. 台湾人の選挙に対する意見

この留学中に知り合った台湾人に誰を支持するのか、またその理由について質問した。その結果が以下である。

蔡英文

蔡英文の方が台湾のアイデンティティを守ってくれそう。(30代男性) / 台湾の主権を守ってくれる。(大学生男性) / 彼女は台湾人がしなければいけないこと、必要なものを理解している。しかし、私は政治に対してあまり興味ない。(大学生女性) / 台湾の主権を保有し、自由で民主的な社会になってほしい。(教師)

韓国瑜

私はオーストラリアに3年間留学し、台湾に戻り仕事をした。しかし、台湾の経済はあまり改善していなかった。また現在、販売業界で働いているが、給料も少し下がり、節約する生活を送っている。台湾と中国の緊張関係は台湾の地元企業の発展に影響する。民主主義ではない方が、良い生活が送れると思う。(20代男性)

どちらも支持しない

蔡英文も韓国瑜も支持できない。韓国瑜は特に言葉に重みが無く、信頼できない。(大学生女性)

³ 小笠原欣幸『台湾総統選挙』p.18。

3. 選挙結果

現職の与党・民進党の蔡英文総統が、過去最多となる 800 万を超える票を獲得、得票率およそ 57.1% で再選した⁴。

【図表 2】 総統直接選挙

	歴代総統	政党	全体の投票率
1996 年	李登輝	国民党	76.0%
2000 年	陳水扁	民進党	82.7%
2004 年	陳水扁	民進党	80.3%
2008 年	馬英九	国民党	76.3%
2012 年	馬英九	国民党	74.3%
2016 年	蔡英文	民進党	66.2%
2020 年	蔡英文	民進党	74.9%

日本の国政選挙は全体の投票率が 50% を切っている。台湾の選挙は図表 2 を見ると投票率がかなり高い。これは、台湾をより良くしたいという国民の気持ち強いのと、盛大な選挙活動のおかげだと思われる。また、選挙の結果によって今後の国民の生活が決まってくるからであろう。

また、台湾は選挙をしていくたびに、政治的勢力が変化していく。徐々に中国ナショナリズムは小さくなっている。ここに支持基盤を置いて過半数を制することは難しくなっている。台湾ナショナリズムは徐々に拡大してきてはいるが、過半数には届かない。最も層が厚いのは「台湾アイデンティティ」である。候補者はこの票を取りに行く。⁵ 今回、蔡英文は「台湾アイデンティティ」と「台湾ナショナリズム」の票を取ることができたのが勝因だと思われる。これはとても面白い現象だと思う。将来の台湾総統選挙がどのような図になるのか楽しみだ。

⁴ 「台湾総統選挙 2020：蔡英文以破紀錄得票數獲勝連任」(<https://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese-news-51075228>) [2020 年 1 月 13 日確認]。

⁵ 小笠原欣幸『台湾総統選挙』pp.318-323。

4. 台湾の選挙活動⁶

台湾の選挙活動は日本と比べるとかなり違う部分があることに驚いた。まずは、候補者と国民の距離の近さである。候補者はいろいろな地域に出向き、国民とコ



ミュニケーションをとる。例えば、韓国瑜は士林夜市の近くの廟に出向き、演説をし、お祈りをした。蔡英文も様々な地域へ出向き、国民と握手をしたり、写真撮影をしたりした。候補者と国民の距離の近さには驚いた。そして、台湾の選挙ポスターはかなり大きい、また、日本では禁止されているが、ティッシュに広告

を入れて配ったりもしている。また、バイクに支持者の旗をつけて走っている光景をよく目にする。選挙が近づいてくると、テレビがついている店に行くと、放送されているのはほとんど選挙についての番組である。高雄市で大規模なデモも行われた。それは、約 85 万人による韓国瑜高雄市長の擁護派と反対派によるデモである。台湾の国民は政治に対してとても関心があることがわかる。

おわりに

私はこの選挙について調べたことで、台湾人の自分たちの国、生活に対する気持ちを理解できた。また、海外の選挙や国民の選挙への関心を知り、それに関連づけて日本の政治に興味を持つことが大切だと思った。台湾総統選挙の歴史を見ると、選挙のたびに政府の勢力図が徐々に変化している現象に驚いた。小笠原欣幸『台湾総統選挙』という本はおすすめである。歴史から見た台湾人のアイデンティティや選挙のデータが載っていて、とても理解しやすい。2020 年の台湾総統選挙は終わったばかりなので、今後の台湾のいく未来が国民にとって良い未来になることを期待したい。

⁶ 「「台湾の選挙」はハンコで投票 日本との違いを台湾在住のライターが解説」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakamiho/20200110-00157837>) [2020 年 1 月 15 日確認]。

台湾台中市立忠明高級中学の高校生との交流会

16122043 仲宗根 エイミ

令和2年2月5日に台湾台中市立忠明高級中学の高校生(27名)を本学草薙キャンパスに迎え、日台の学生交流会を開催しました。これは、一般社団法人地域振興交流協会(静岡県観光協会)の主催する静岡県訪日教育旅行受入事業です。交流会は本学の国際交流委員会、外国語学習支援センター、学生課、さらに本学で中国語を履修している学生、国際交流に関心ある学生が企画しました。校内案内、パワーポイントを使った発表、フリートークなどの内容があり、交流会は大いに盛り上がります。

校内案内では、本学の学生2-3名に対し、台湾からの高校生5名という小グループを作り、それぞれが大教室、パソコン室、図書室、学生食堂、外国語支援センターなどの施設を周りました。施設案内の際は、なるべく中国語でコミュニケーションを取るように心掛けました。全てを聞き取ることは困難であったものの、自分たちがこれまでに学んできた中国語を駆使し、上手く会話のキャッチボールが出来たと言えます。例えば、「你們幾次來過日本?」(あなたたちは何回日本に来たことがありますか)という質問に対し、ほとんどの学生が、「兩次」(2回)や「三次」(3回)、中には「五次」(5回)と答える学生もいました。「協働研究セミナー」という授業でも学んだように、訪日する台湾人の大多数がリピーターであることを改めて知ることになります。日本が好きな台湾人(親日家の台湾人)が沢山いるのだと分かり、非常に温かい気持ちになりました。

本学学生による発表では、それぞれが原稿を準備して中国語で発表しました。(中国語を履修していない学生は、英語で発表を行いました。)初めに、台湾に長期留学していた金沢さん(4年生)が中国語で挨拶をします。非常に流暢な中国語であったため、日本側からだけでなく、台湾側からも大きな歓声と拍手が巻き起こります。金沢さんの挨拶の後、日本側の学生がそれぞれの担当する部分を中国語で発表していきます。なお、司会進行ももちろん中国語です。

私は、2019年度レシテーション大会で発表した辛弃疾「青玉案 元夕」の漢詩を、披露しました。大勢のネイティブを前に発表したのは初めてのことで緊張

V. 5. 中国語圏

したものの、皆さんが真剣に耳を傾け、最後には一緒に詩を口ずさんでくれます。この瞬間、レシテーション大会に向けて真摯に取り組んで良かったと改めて感じました。皆さんの前で発表でき、交流会が盛り上がったことに大変うれしく思った次第です。

フリートークでは、校内案内の際に作ったグループに再び分かれ、日本側の学生2～3名、台湾側の学生5名で車座になって会話を楽します。台湾での流行り、生活スタイル、好きなアイドルなど、様々な話題で盛り上がりました。どうしても中国語が通じない、聞き取れないという際には、英語を使ったり、スマートフォンの辞書を用いたりして、コミュニケーションを図っています。私は台湾の高校生が話す中国語を、7割ほど聞き取れたため、この4年間、中国語を学習してきて良かったと感じました。社会人になっても中国語を使用する機会がたくさんあるでしょうから、もっと円滑にコミュニケーションを図れるように引き続き中国語を勉強していく所存です。



6. 韓国語圏（長期、短期、語学研修、その他）

2019 年度韓国語学研修

概要

実施期間：2019 年 8 月 31 日～9 月 26 日

実施国・機関：韓国・キョンヒ大学国際教育院

参加者：外国語学部グローバルコミュニケーション学科生 18 名。

授業内容：

＜韓国語の授業＞月～金：9：00～13：00（スピーキング、聞き取り、文法／作文・読解の授業は希望者によって文化授業の代わりに受講。）

＜文化授業＞月・水：14：00～16：00（韓国の礼儀・遊び・歌・ドラマ等）

＜現地学習＞1 日×2 日（利川陶芸村、民俗村、キョンヒ大学国際キャンパス訪問、国立博物館、ロッテワールド、N ソウルタワーなど）

実施責任者：福島 みのり

韓国で広がる日流ブーム

18122058 鈴木 小麦

はじめに

私は今まで何度か韓国を訪れたことがある。韓国の街を歩いていると、意外にも日本食のお店、日本の企業や商品等、日本を感じられるものが多く見られるということに気付いた。それほど韓国で日本のものに対しての需要があるのかと私は興味を持った。そこで今回、韓国語学研修に参加するにあたり、韓国で流行している日本文化は何か、日本文化がどれくらい浸透しているのかを調査したいと思った。日本文化といってもたくさん分野があるため、私と同じくらいの年齢の韓国人複数人に聞き取り調査した結果、反応の多かった食文化、小説・漫画について主に考察していきたいと思う。

1. 食文化

ソウルの街のどこを歩いても目にすることが多いのは、やはり日本食のお店である。滞在中にもとんかつ、ラーメン、寿司、うどんなど様々な日本食のお店を目にした。それらの店のほとんどはいつも賑わっており、韓国人に人気があるということが感じられた。

ではなぜ日本食が韓国で流行するようになったのか。韓国で最初に日本食が定着したのは1980年代後半だと言われている。当時は私たちが普段食べているような庶民向けの日本食というよりは、繊細で美しい見た目や深い味わいが特徴的ないわば高級な日本料理を会食や接待等の席で使用する目的が大多数であった。その為、日本食＝高級な料理という認識が強かったと考えられる。

しかし現在韓国で流行している日本食の多くはそのような高級なものではなく、大衆向けの比較的安価なものである。大衆向けの日本食が広まったのは2000年頃からである。韓国で日本酒が販売され始めたことをきっかけに、それらの日本酒を楽しめる場として日本風の居酒屋が広まっていった。これによって大衆料理としての日本食が認知され始めていった。



参照1『孤独のグルメ』の韓国放送の広告

日本食の人気は、この後さらに大きくなるが、これにはテレビ番組が大きく影響している。「孤独のグルメ」というテレビドラマを知っているだろうか。原作は久住昌之と谷口ジローによる日本のグルメ漫画である。2012年から日

本での放送が開始され、現在season8まで放送されており、韓国でもこのドラマが放送されている（参照1）。主人公が仕事終わりに立ち寄った店で一人で食事を楽しむ様を描いた内容で、このドラマが日本はもちろん韓国でも大きな人気を博しているのだ。このドラマの流行を後押しした背景として“お一人様ブーム”がある。元々、韓国料理は大人数でシェアして食べるものが多く、一人で食事をしている人は、友達がいなかったか変わっている人だと冷ややかな目で見られる風潮だった。しかし、最近は一人世帯や二世帯というような小規模な世帯が多くなり、食事を一人で取るという

ことに抵抗が無くなってきていたのだ。そんな社会が変化している時期にこのドラマが重なり、一人で気軽にゆったりと食事している姿に韓国人が共感したのだろう。また、日本食の多くは韓国料理とは違い、一人分のものが多い。一人で無理なく食べきれる量も日本食の人気に繋がったと思われる（注 1）。

このようにして流行となった日本食。韓国では、個人営業の和食店以外にも、「さぼてん」「丸亀製麺」「かつや」「COCO 壺番屋」「モスバーガー」といった日本国内でも有名なチェーン店を見かけた。私は、そのうちの一つの「さぼてん」に訪れ、日本店舗との違いがあるのか調べた。店舗外観・内装ともにハングル（またはローマ字）表記にはなっているものの日本の店舗とほとんど変わらなかった（参照 2）。

しかし、メニューには少しだけ違いが見られた。定番のロースかつやひれかつなどのメニューは変わらないが、日本店舗ではあまり見かけないチーズかつの種類が韓国の店舗では豊富にあった。韓国ではチーズが流行しているため、「さぼてん」も韓国人のニーズに合わせて、好まれやすいメニューを作ったのだろう。



参照 2 さぼてん COEX 店

日本の企業だからと全てをそのまま押し付けてしまうのではなく、上手く韓国人の好みやニーズを織り交ぜていることが韓国での日本企業のあり方としてよく考えられていると感心した。

2. 小説・漫画

韓国の大型書店に行くと、必ずと言っていいほどあるのは日本の小説、エッセイ、詩集などを多数揃える日本の書籍のコーナーである。もちろん大型書店であるから、世界中の国の書籍を取り揃えている。しかし、他国の書籍は外国書籍のコーナーにまとめて並べられているのに対し、日本の書籍はそれとは別に日本の書籍だけのためのコーナーが設置されているのだ（参照 3）。扱われている冊数も明らかに他国より多く、ベストセラー入りする日本の小説もある。なかでも韓



参照3 書店内の日本小説のコーナー

国人に絶大な人気を誇るのは村上春樹と東野圭吾だ。私が韓国滞在中、何人かの韓国人に日本の書籍で人気があるもの、読んだことがあるものを聞いてみたところ、この二人の作品は多く名前が挙がっていた。特に東野圭吾の作品はドラマや映画に映像化されることが多いため、より認知度が高まっているようだ。

このように日本文学が広まった背景として、韓国社会の変化が考えられる。韓国は約30年の独裁政権の時代があり、様々なことが制限されていた。その後民主化が起こり、1990年代に大衆文化が形作られてきた。1998年からは日本文

化の開放政策が始まり、だんだんと日本文学が韓国にも浸透したのだと考えられる(注2)。日本文学は当時の韓国人にとって、今までにない表現や展開があり新鮮だと感じられたのではないかと私は考えた。

日本の書籍が多く陳列されるのはそれだけ韓国人に広く受け入れられているからだろう。韓国では年間約900点もの日本文学が翻訳されており、その人気が窺える。それに比べ、日本での韓国文学の翻訳数は少ないが、近年、韓国文学の注目度が高まってきている。特に、昨年12月に日本で発売されたチョ・ナムジュ氏の小説『82年生まれ、キム・ジヨン』、今年3月に発売されたキム・スヒョン氏のエッセイ本『私は私のままで生きることにした』はベストセラーとなっている(注3)。その背景には近年関心が高まっているフェミニズムが影響している。韓国ではフェミニズム文学と位置付けられる作品が多く、前述した2作品もそれにあたる。世界経済フォーラムによる各国の男女格差の度合いを示すジェンダー・ギャップ指数の順位では、149か国のうち、日本は110位、韓国は115位となっており、どちらの国も男女格差が大きく、男女の賃金格差や家事育児の不平等さ、出産後の社会復帰など、社会構造が似ている部分がある(注4)。このことから、日本人が、「女性が生きづらい社会」についての疑問を呈した韓国のフェミニズ

ム文学に対し、共感を得たことで注目が高まっていると考えられる。

日本の漫画も小説と同じくらい人気がある。日本でも人気のある「ワンピース」「ナルト」「名探偵コナン」「スラムダンク」等に代表されるような有名漫画のほとんどが韓国語に翻訳されているといっても過言ではない。なかには韓国漫画のコーナーよりも大きい売り場面積を持っている店舗もあった（参照



参照 4 韓国翻訳された漫画『ワンピース』

4)。私は K-POP アイドルが好きなこともあり、よく韓国のテレビ番組を見たり、アイドルのコンサートに行ったりするが、彼らはよく日本漫画の登場人物の真似をしてふざけたり、漫画の中の一場面について熱く語ったりしていた。そのような光景からも、韓国人に日本の漫画が人気であることが伝わってくる。主に若者に人気がある日本漫画であるが、漫画に出てくる場所やもの、食を求めて日本を訪れる韓国人や、漫画をきっかけに日本文化に興味を持ち、日本語を学び始める韓国人が増えているというような良い影響を日本にもたらしている。

おわりに

韓国では、私が思っていたより日本文化が浸透してきているということが分かった。食文化や文学に限らずとも、音楽やアニメなど他にも人気のあるジャンルは多くある。それらに共通して言えることは、韓国人は日本文化を日本の政治や歴史問題とは別にして、純粹に楽しんで受け入れる考え方が強いということではないだろうか。日韓の相手国に対する印象の世論調査の結果に興味深いものを見つけた（注 5）。両国とも相手国に良くない印象を持っている人はおよそ 50% でほとんど差はなかったが、良くない印象にした理由に違いが見られた。日本人の韓国に対する良くない印象の理由の上位は、韓国人の言動や考え方が理解できないから、言動が感情的だからといったような韓国人への偏見も混ざっていると思われるものが多かった。一方、韓国人の日本に対する良くない印象の上位は、

政治・歴史問題が多数を占め、日本人そのものに対しては批判的な意見は無く、むしろ好意的な意見もみられた。私は、日本人は表面的な情報だけで、韓国に偏見を持ちすぎているのではないかと感じる。政治と文化を一緒にして考え、韓国だから嫌だとか決めつけてしまっているように思う。まず韓国の良さを見つけるためにも偏見の目を捨てて、純粋に韓国に触れてほしい。そうすれば、自ずと良いところが出てくると思う。現在、政治問題で日韓関係が悪化しているが、日本文化が韓国で人気があるように、日本でも韓国文化がもっと広がり、文化を通じて日韓の距離が縮まってほしいと思う。

〈参考資料〉

- (注1) 佐々木和義『『孤独のグルメ』が広がる韓国～変わる韓国の日本食ブーム』
Newsweek 日本版 (最終閲覧日: 2019 年 11 月 23 日)
<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2018/05/post-10189.php>
- (注2) 新城道彦、浅羽祐樹、金香男、春木育美『知りたくなる韓国』有斐閣、
2019 年, p253
- (注3) 阿古真理「日韓不和なのに空前の『韓国文学ブーム』のなぜ」東洋経済
オンライン (最終閲覧日: 2019 年 12 月 11 日)
<https://toyokeizai.net/articles/-/301306?page=3>
- (注4) 「韓国のベストセラー小説、日本でも異例ヒット『女性の生きづらさ』
に共通項」産経ニュース (最終閲覧日: 2019 年 12 月 11 日)
<https://www.sankei.com/premium/news/190206/prm1902060003-n3.html>
- (注5) 「第7回日韓共同世論調査 日韓世論比較結果」特定非営利活動法人言
論 NPO (最終閲覧日: 2019 年 12 月 11 日)
<http://www.genron-npo.net/world/archives/7250.html>

日本で内定を求める韓国人大学生が抱えている不満と悩み

17122065 松本 彩香

私は、韓国語の実力を向上させる目標を達成させるためには集中的に学べる環境が必要だと考え、大学3年の9月から2月までの半年間韓国のキョンヒ大学に留学を決意した。また、留学と並行して、韓国の就職難について研究を進めた。韓国が就職難だということは、日本のメディアで頻繁に取り上げられているため誰もが知っている事実だ。しかし、実際に苦しんでいる韓国人大学生の就職活動の不安や悩みについて取り上げられる事を見たことがない。そこで、私は実際に就職を控えている韓国人大学生達がどのような考えを持っているのか興味が湧き、調査に至った。厚生労働省が出す「外国人雇用状況」の届け出状況まとめ（平成30年10月現在）によると、外国人労働者は約146万人で前年の約128万人と比べると、約20万人増えている。その中でも韓国人は、62,516人で前年よりも11.8%増加している。そこで、日本に留学経験をした韓国人大学生を対象にインタビュー調査とアンケート調査を実施した。その結果、将来への大きな期待と同時に、日本に対する不満や悩みの声を聞くことも多数あった。それらの声を共有することで、少しでも多くの日本人学生に韓国人大学生の真の声（現状・不満）を知ってほしいと考えた。

現地調査は3回にわたり実施した。1回目の調査では、日本の企業から内定を獲得した学生2人とワーキングホリデーをしに日本に訪れている学生1人を対象にインタビュー調査を実施した。なぜなら、近年、外国人労働者の中でも韓国人が急激に増加しているため、どのような期待を抱いて日本に訪れたのか、そして日本という他国に暮らし、働き始める上でどのような悩みを抱えているのか疑問に思ったからだ。2回目の調査では、日本企業での就職を目指す韓国人大学生4人が開催する勉強会に参加した。韓国には、同じ目標を持った人々が集い、知識を共有し合う勉強会という文化がある。日本での選考準備を目的にした勉強会を通し、日韓の大学生の就職活動や採用基準の共通点と相違点について調査した。3回目の調査では、就職について韓国の女子学生8人を対象にアンケート調査を実施した。なぜなら、今までの調査対象の男女比率が偏っていたため韓国人

大学生全体の意見として主張できないことと勉強会での会話で「女子学生よりも男子学生の方が日本に就職する学生が多い」という発言があったからだ。

3回の現地調査を通して、日本で内定を求める韓国人大学生は不満と悩みを抱いていることが分かった。それは、大きく3点に区別することができる。1点目は、留学時に実用的な日本語を学べないという不満である。2点目は、日本の環境に対しての悩みである。3点目は、日本の社会に対しての悩みである。これら3点を1点ずつ具体例とともに、説明していきたい。

1. 実用的な日本語を学べないという不満

調査対象者の全員が日本の大学に留学をしたという経験を持っていた。しかし、彼らの多くが自分の願っていたような日本語が習得できなかったと述べている。特に、就活の面談・面接や人事の方との会話は、日常会話とは異なり、慣れることに時間がかかるということを主張する学生が多くみられた。例えば、日本で企業のインターンを受けた時に、そこで新たに学ぶ敬語が多かったと述べた学生がいる。これはキム・ユンギョンさんの実体験で、特に電話対応の際に使用する謙譲語と尊敬語で苦労したと答えた。

また、これに加え、教科書と実際の会話で異なる点を摘んでいた。例えば、教科書では「あなた」という言葉が頻繁に使用されるが、実際の会話ではあまり用いられないという点である。外国人同士で自己紹介をする時、多くの場合、出身を尋ねるのが一般的だが、教科書では「あなたの出身はどこですか。」と「あなた」が使われている。しかし、実際には「出身どこですか」と「あなた」を使用せずに尋ねることが主であるため、実用的な日本語を学んでいるとは言えないと指摘していた。このことから、彼らが留学で得られる日本語学習は就職活動において問題点が多いことが分かる。

2. 日本の環境に対する悩み

日本で就職する上で、まず日本と韓国での環境の違いに関する問題が挙げられる。特に両国を比べると、日本は島国であることと地理的な要因で特有の災害が生じる。最も代表的な災害の一つである地震は、留学生を不安にさせる要因にもなっている。長崎大学に半年間留学したペ・ヘリンさんは、韓国では滅多に地震

が起こらないため、地震が発生した時にどういった行動をとるべきなのか不安で仕方がなかったと述べていた。彼女本人だけでなく、彼女の両親も地震が起っていないか不安でしばしば安否確認をしていたようだ。以上のことから、日本の環境、特に災害については、日本で働きたいと思っている韓国人をはじめとした外国人向けの災害情報や対策を今後提供していかなければならないといえる。

3. 日本での就職活動に対する悩み

私自身、就職活動で企業から内定を獲得するにはどうしたらいいのかと尋ねられたら明確に答えられないように、彼らも日本での就職活動に疑問が多いと考えている。日本は、個人の可能性を重視した選考を行う。それに対し、韓国は資格やインターン経験の数、結果など実力を重視した選考を行う。そのため、彼らは企業が求める人物像を理解した上で就職活動の準備をすることが求められる。また、日本は外国人差別や女性差別が残っていることで知られている。そのため、女性が就職先を決意する際の不安要素になる。しかし、留学先では、留学生を対象にした就職活動や人権差別をテーマにした講義がないため、これらの疑問や不安を完全に理解・解決することが難しい。以上のことから、留学先での言語学習だけでは就職活動で役立つ日本の社会の仕組みを詳しく把握できないことが分かる。

これまで私は、留学経験は言語の向上を図れるだけでなく、現地の生活習慣を経験することができるため、留学以前に抱いていた不安や悩みを解決できる有効的な手段だと考えていた。しかし、今回のインタビューやアンケート調査を通して、留学を経験しただけでは全ての不安や悩みが解消されるわけではないことが分かった。なぜなら、留学先で日本の社会や環境について専門的な知識を養う機会が設けられていなかったり教科書だけを使用した言語学習では実用的な言語を習得する上で問題があったりすると答えたからだ。今回は、対象者が少人数であったため、一部の学生への言及に留まったが、今後もインタビュー調査を行い、幅広い韓国人大学生の声を聞いていきたい。

Now or ever

18122033 木村 楓野

皆さんはこのタイトルの意味を知ってますか? 「今こそ好機」私がこのタイトルにした理由は韓国に行くのは今しかないと思ったからです。

私が韓国へ研修へ行ったのは2019年3月。当時は徴用工問題が要因となり、日韓関係に非常に大きいヒビが入っていました。まず徴用工問題とは第二次世界大戦中に、日本の統治下にあった朝鮮や中国の人々を奴隷の様に扱い、労働者として日本の企業で働かせることです。無理やり労働者として働かされた方々は心身共に傷を覆い、韓国では最高裁判所にあたる大法院が日本企業に4億円の損害賠償を命ずるという出来事をありました。

テレビやSNSなどの多くの媒体で韓国人が在韓日本領事館の前でデモを行っている様子が見受けられました。そのため友人や家族から韓国行きは諦めた方がいいのではないかと何度も言われました。しかしそれでは実際のことは分からない、自分の目で確かめたいと思った私は、韓国行きは諦めませんでした。むしろ自分の目で確かめるからこそ今回の訪韓は意味があると思いました。

そして、実際に韓国へ行くと驚くことばかりでした。まずたまたまかかもしれませんが、デモ活動をしている人を見ることがありませんでした。一体私たちがニュースで見ているのは何だったのか不思議に思いました。またショッピングをしても日本人だからと毛嫌いされることがや嫌がらせを受けることはなかったです。皆さん暖かく迎えてくださりました。日本人学生であると告げると「この時期によく来てくれた」とサービスもたくさんしてくれました。日本人だから嫌いなのではなく、日本の一部の政治家に対して嫌悪感を抱いているのだと改めて感じました。

訪韓を終えて思ったことは、日本人があれ程韓国人をバッシングしている姿がとても恥ずかしいと思いました。実際に韓国人と接していないにも関わらず、液晶越しでの情報を鵜呑みにして判断するのは間違っています。SNS世代である私たちに必要なことは、真実を見極める力と自分の目で見ることです。SNSが当たり前になっている世の中だからこそ、実際に自分の目で確認したものに価値

があります。ネットの情報だけで判断するのではなく、実際に肌で感じる事が、今の日韓関係修復の最短の糸口ではないのでしょうか。

日韓関係と地域活性化について学んだ私の訪韓研修体験記

18122082 野崎 杏佳

私は令和元年8月28日から9月4日にかけて、財団法人水原市国際交流センター静岡市国際交流協会主催の、令和1年度静岡市大学生訪韓研修に参加した。これは静岡市の大学生代表団の一人として韓国の水原に行き、クリエイター体験を通して、韓国の歴史・文化を感じながら静岡市の地域活性化について自分たちなりに考えるという目的がある。

応募時に、地域の活性化に関し、静岡市と水原市はどのような協力ができるかをテーマに作文を書く。私の場合、祭りのようなイベントを定期的に各地で開催する案と、外国人受け入れの際、静岡の企業にも協力を要請し見学や体験ができる機会を設けるという案を提案した。これが一次審査の書類となり、通過した人が作文のテーマに沿ったディスカッションを行い最終的に選ばれた10人で静岡市の代表として韓国へ向かった。後日、審査を通った理由を伺うとディスカッションでどれだけ発言していたか、またどれだけ聞き役に徹していたか、と全体のバランスを見て10人が選ばれたと聞いた。

前半三日間では、水原や韓国の歴史について、韓国の世界遺産である水原華城や伝統文化館などで学んだ。3日目には、現地学生と共に、水原華城をテーマに動画コンテンツ作成をしたが、その技術力の高さに圧倒された。

4日目は、KBS 水原センター見学後、ホストファミリーと対面し各自の家庭に分かれ、5日目の夜まで過ごした。私のホストファミリーは本当に温かく私を家族のように迎え入れてくれた。最後にくれた手紙には、「私たちの日本の可愛い娘になってくれてありがとう」と書いてあり本当に感動した。また、お母さんとは日韓情勢に関する話もした。このとき日韓情勢は最悪だと言われているが報道はごく一部の事でしかなく、互いに誤解していることに気がついた。

6日目は、サムスンイノベーションミュージアム見学と韓国民俗村見学をし、

7 日目は、AR.VR 体験後、もう一つのメインである、京畿大学へ訪問し、互いの地域の問題点やその改善策について日本語チームと韓国語チームに分かれてディスカッションをした。私たちグループでは、静岡市と水原市は互いに比較的大都市近くに位置することから若者の流出や、目立った特徴が無いことが問題として挙げられ、その改善策として地域イベントを開催することと、SNS を活用し地元の芸能人をはじめとする発信力のある人物やローカル番組などに協力を要請し静岡について知ってもらうという案が挙がった。

最終日には、アクションプランを行い今回の研修を通して、自分なりに考えた目的の為に、今後どのように過ごすかの 3 カ年計画を立て発表した。私の場合、日韓交流の場を設けるために自身の語学力と異国文化理解を深めた後、大学や市に掛け合ってまずは学生同士の交流を行える場を作るという計画を立て現在は実現するために、検定の取得に向け勉学に励んでいる。

このように多くの考えを持つきっかけを与えてくれた事に感謝する。

【「対日理解促進交流プログラム」JENESYS2019 静岡県朝鮮通信使友好交流事業】

日韓学生交流会 (第 1 部交流会) 報告

開催概要

外務省の「対日理解促進交流プログラム JENESYS2019」の一環として、韓国の忠清南道より大学生 10 名が 10 日間の日程 (1 月 6 日～1 月 15 日) で静岡を訪問し、14 日 (火) には本学外国語学部の学生との交流会が開催されました。

第 1 部の交流会では、3 年次の履修科目「韓国研究」の授業実践の報告とディスカッションを行いました。

第 1 部交流会のテーマ：「日韓関係と若者『現代の朝鮮通信使』としての若者の役割とは」

第 1 部 自己紹介

第 2 部 『韓国研究』での授業実践報告 (日韓関係と若者)

- ・ 韓国の新聞記事の講読 (日韓関係悪化をメディアはどのように報道したのか : 日韓メディアの比較)
- ・ Facebook での日韓学生交流会 (常葉大学×弘益大学)

《ディスカッション 1》

「これまでの歴史、政治問題に関する日韓関係の悪化、不買運動についてあなたはどのように考えますか。私たち世代は政治問題にどう関わるべきだと思いますか」

第 3 部 : 日韓共通課題としての若者問題

- ・ 韓国のベストセラー本『90 年生まれが来る (90 년생이 온다)』
- ・ 日本と諸外国の若者意識に関する調査 (内閣府)

《ディスカッション 2》

「身近に感じている生きづらさ、社会への不満はありますか。90 年生まれの私たちが望む社会とは」

講師・ファシリテータ : 外国語学部 福島みのり 准教授

学生 : 韓国大学生 10 名、本学学生 25 名 (『韓国研究』履修者等)

教室 : B303 教室

＜学生実行委員メンバー＞

三田風紗、石貝真美、井上梨穂

青木丈委、安達斗颯、大石陽菜、高津梢、福本海有



【第 1 部交流会の様子】

私達が踏み出す民間交流からの第一歩

17122006 石貝 真実

私達は「日韓関係と若者『現代の朝鮮通信使』としての若者の役割とは?」というテーマでディスカッションを行った。

はじめに、歴史問題や日韓関係の悪化に伴い、私たちは政治にどう関わるべきかについて議論した。今韓国で起きている不買運動は、私達民間人には正直どうすることもできない問題だ。そこで私達にできることは民間交流だということを話し合った。交流をすることでお互いのことをよく知ることができ、結果、良いところや好きなところもたくさん出てくるだろう。このような交流を続けていけば、不買運動のような問題は徐々に解決し、日韓関係も改善されると考えた。

次に、韓国研究で学んだ若者問題や韓国のベストセラー本『90年生まれが来る』をもとに、私達が今どんな将来を望んでいるかという議論をした。私達が今一番悩んでいることは就職関係だ。日本でも韓国でも自分の入りたい会社に就職できることが最大の目標だ。しかし、韓国では就職が難しく、自分の望む会社に入ることはもっと難しいようだ。そんな中、望まないところに就職して、仕事も厳しく良い給料も貰えない、転職したくてもできないという現実が辛くなり自殺してしまう人もいるようだ。このような現状から、日本でも韓国でも職場内の環境づくりが大切だという結果になった。多少仕事が辛くても給料が低くても、お互いに支え合ってアドバイスをし、職場の雰囲気がよくなれば自殺や心の病にかかるという最悪の結果にはならないと思う。環境づくりは気持ちを安定させる為にも大切だと思った。

私は、「韓国研究」で具体的な日韓関係の問題について学ぶ前は、日韓関係が悪化していることをあまり感じなかった。まわりには韓国語を勉強して、K-POP が好きな友達がいって、私と同じように韓国が好きな人ばかりだった。しかし、新聞を読んで学習をし、韓国の学生と交流をする中で、自分が思っていたよりも悪い状況になっていることがわかった。交流してくれた学生は、日本が好きで不買運動に参加せず日本に旅行に来てくれるような方だったのでとても快く話してくれた。しかし、友達が日本に旅行に行くことをキャンセルしたり、自分

が日本に旅行に行ったことを友達に話そうとすると悪い雰囲気になってしまったり、まわりの友達是不買運動に参加していて、不買運動はだんだん激しくなっているという厳しい現状を聞いた。自分が考えていた韓国の現状より悪く、とても悲しい気持ちになった。

私は 10 月にソウルへ旅行に行ったが、明洞や弘大などの観光地では日本人は商売相手だからかウェルカムな感じてあったが、ホテルやコンサート会場など少し観光地から外れたところでも、多少こちらを外国人だという意識的に見るくらいで悪い印象は受けなかった。また、Facebook で韓国の学生と交流する際に載せる記事を探した時に、韓国人は日本の政府に怒っているということを強く実感した。だからこそ個人、民間のレベルでは仲良くできるという記事がとても多かった。

しかし個人といっても影響力が強い人がいる。それは芸能人だ。私は韓国のアイドルが好きで、Twitter や Instagram など SNS で韓国の芸能人をフォローしているが、今年の夏が始まる前くらいまでは日本でイベントがあったら日本語で文章を SNS にあげてくれていた。しかし 8 月と 11 月に日本にコンサートをしに来てくれた時は、SNS に日本語をあげることは一切なかった。彼らは芸能人で世界的にも有名なのでとても影響力が大きく、また事務所の力も強い為、関係が悪化してからは日本語すらも載せることが許されないのだろうかと思い、とても寂しく思った。それと同時に、私 1 人の力はとても弱いものだと感じた。

でも私と同じように感じている人は多いはずだ。特に今の若者は韓国が好きで K-POP が好きな人が多い。その点で、もし日韓関係の改善を積極的に行う政治家がいたら、韓国好きで k-pop ファンの若者はその人に投票したいと思うだろう。今回の日韓関係の悪化をきっかけに、若者はもっと政治に関心をもつべきだと思った。正直、私は政治についてまだよくわからないことが多いが、投票には毎回行っている。これからの日本を担う若者は、日本社会の変化を待つのではなく、自らが主体的に日本の政治を変えるくらいの気持ちをもっていかなければならないと考える。

日韓の歴史問題とこれから

17122049 長岡 未都

私たちは秋学期、「韓国研究」の授業にて、弘益(ホンイク)大学の学生と Facebook を通じて日韓交流を行った。日韓関係が悪化の一途を辿る中で、若者が考える日韓関係・交流に関する望ましい記事を提示し、載せた記事に対して選んだ理由、自分の考えを Facebook のコメント機能を使って伝え、お互いにコメントした。私が選んだ記事は、「nippon.com」から出ている「若い世代の相互理解促進に期待：日韓交流の現場から」(2019年10月30日付)というものである。記事は東京の日比谷公園で行われた日韓交流おまつりについてである。そのおまつりに参加した若者は、「日本が好きな人が多くいて驚いた、テレビの報道とは全然違う」とコメントしている。交流の成果はすぐ目に見えなくてもたくさん種をまき続ければ実りはない。だからこれからも続けていくべきだという内容である。現在、日韓関係によって不買運動、相互往来や自治体に負の影響が出ている。互いの国の文化を尊重し合い、本質的なところを見て理解を深めていかなければならない。こういった状況だからこそ交流会が大切だと感じた。

そして、今回の朝鮮通信使友好事業ではこうした韓国研究の授業内容を報告し、①これまでの歴史、政治問題に関する日韓関係の悪化、私たちはどのように政治に関わるべきか、②90年代生まれの私たちが望んでいる社会、身近で感じる生きづらさ」の2つについてディスカッションを行った。①では、もっと政治に関心や興味を持ち、正しい歴史教育をお互いの国で知ったうえで意見を言うべきとの意見が多かった。②では、親がいう「給料がいい安定した仕事」より自分がやりたい仕事、会社選びでは給料よりも育休や産休など福利厚生が充実していることを重要視する学生がとても多く、中には恋愛や結婚を諦め日々の生活に生きづらさを感じている学生もいた。

私は、この夏休みに韓国の語学研修に参加し、約1か月韓国で生活した。韓国での生活を通して1番強く思ったことは、「韓国人は日本人のことが嫌いではないということ」である。日本に住んでいると、韓国に関するニュースは韓国の国民すべてが日本の国民すべてを批判しているように伝えられているような気がす

る。しかし、実際そうではないと身を持って感じた。「韓国研究」では、Facebook を通じて常葉大学と弘益大学の学生とで日韓交流を行った。そこで弘益大のチョ・テヒョンさんは「韓国人は日本政府の外交政策に不満を持っているのであって、日本国民に不満があるわけではない。」と話していた。K-POP やアニメ、漫画など日韓ともに大衆文化は受け入れているため、すべての国民が反日、反韓ではないということがわかる。しかし、誤解している人も多くいるため、私たちのように韓国について学んでいる大学生が韓国の人の意見や現状をもっと日本に伝えたほうが、現実味があるのではないかと思う。研修中、買い物に行った時、弘大(ホンデ)の店員さんに日本と韓国は政府同士が仲悪いだけであって国民は関係ないからと力説された。それを聞いて私はとても嬉しく思った。この話を日本人にもっと聞いてほしい、こういう意見をもっとメディアは取り上げるべきだと感じた。

帰国後、私が韓国に行った際に撮った写真を SNS に載せたところ、近所の友人から「韓国にいくとか頭おかしくなるぞ」とコメントが来た。私はこの言葉にすごく腹が立った。好きなことを否定されたということ、その友人がメディアの情報だけを信じて自分で見たことを元に意見を言っていないと思ったからである。

今回韓国からきた学生との日韓交流会では、歴史、政治関係に関する日韓関係の悪化をもとに、私たちはどのように政治に関わるかについてディスカッションをした。もっと政治に関心や興味を持ち、正しい歴史教育をお互いの国で知ったうえで意見を言うべきとの意見が多かった。1 番印象に残っている言葉は、「相手に対する無知は悪いイメージになる時がありますよね」である。私の友人とのエピソードはこの言葉と繋がってくると思う。世界から見て、日本の若者は政治に対して自分の意見を持っていない、政治についての知識が足りないと言われていた。実際私も「韓国研究」の授業を受ける前はなぜ韓国人が不買運動を行っているのか理解していなかった。ディカッションの際も、韓国の学生に選挙に行かないと伝えたところとても驚かれた。日本人の政治に対しての無関心さに驚いたのだろうか。不満はあるけど選挙には参加しない。自分たちが生きていく世の中に不満があるならなぜそうなのかを考え、自分たちの意見を示さないといけない。私たちはこれから日本を変えてくれるような政治家を自分たちで選ばなければな

らない。そのために若い人たちがもっと選挙にする必要があると考えている。最後に韓国人は日本人が嫌いなわけではない。メディアの情報を信じて韓国のことを誤解している日本人にはぜひ韓国に一度行ってみたいと感じている。今回の日韓交流会で、お互いの国でメディアが事実とは異なることを伝えているということ知った学生が多くいた。交流会を行わなければわからなかったこと、両国について誤解していたこともあった。私たちは多方面からの情報を集め、今回のような交流会を継続的に行う必要がある。このような活動が今後も繋がっていき、少しずつ日韓関係が改善されるように願っている。

参考文献

<https://www.nippon.com/ja/in-depth/a06401/>

(若い世代の相互理解促進に期待：日韓交流の現場から / 2019 年 10 月 30 日 / 最終閲覧 2020 年 1 月 18 日)

私たちにできる日韓交流

17122066 三田 風紗

私たちは今回「日韓関係と若者・現代の朝鮮通信使として若者の役割とは？」というテーマで韓国の学生と交流会をしました。この交流会に私は企画から参加させていただきました。日韓関係があまり良くない現状で、このような交流会を行えることはとても貴重な機会だと思っていたので、有意義な会にしたいという思いが強かったです。そこで私たちはディスカッションのテーマを2つに分けて意見交換をしました。私は「韓国研究」という授業で、日本側のニュースだけでなく、韓国の新聞記事を講読し、内容を把握したり、日本のメディアで報道されている内容と比較したりしてきました。その中でも日本のメディアでも大きく取り上げられている不買運動について関心を持ったので、一つ目のディスカッションテーマを、私たちは日韓関係の政治にどう関わるべきかという視点から意見交換をしました。そこであらためて民間交流の必要性を実感しました。政治問題を直接解決することはできないが、このように私たちにできる民間交流はとても重

要な役割を持っているという意見は両国の学生が同じでした。メディアで報道される韓国、日本だけで互いの国を悪くしてしまう人があることは日本も韓国も同じ状況です。もっと互いの国を知ることが必要だと思いました。私たち世代がもっと民間交流の輪を広げていくことで、互いの国を知るきっかけを作っていけるのではないかと思います。

私たちは新聞記事のほかに韓国でベストセラー本となった『90年生まれが来る』を講読しました。本を通じて、互いに生活環境や文化は違っていても日本と韓国の若者の抱える不安が同じであることが分かりました。そこで2つ目のディスカッションテーマとして、「私たち世代が望む社会とは？」というテーマで、若者の悩みについてディスカッションをしました。日本の学生も韓国の学生も同じように就職の不安を抱えており、特に女性は結婚や妊娠をしても続けられる仕事を選びたいという考えが両国同じであることに驚きました。私は韓国の学生と具体的な夢がないという点で共通点があり、打ち解けて話すことができました。

この交流を終えて、あらためてとても貴重な機会だったと実感しています。政治問題という難しい内容について深く意見交換をできたことが、自分の中で一番のやりがいを感じられる部分でした。両国の学生が、民間交流の大切さを実感できる交流会となりました。言語が異なるため、PPTを二言語で作り、韓国の学生にも伝わるようにプレゼン内容を考える部分では、難しく大変なこともありました。当日も通訳の入る発表は初めての経験で、時間配分などとても不安ではありましたが、限られた時間の中でも有意義な時間になったと思います。自分の言語能力の足りなさを実感し、これからの学習のモチベーションアップにもつながりました。この交流が日韓関係の明るい方向に進むきっかけに少しでもなったらうれしいです。今回貴重な交流会に参加させていただいて、本当にありがとうございました。

7. 上記 5 言語以外の言語圏（長期、短期、語学研修、その他）

第 5 回 GC 学科学生海外活動報告会

江口 佳子

本報告会は GC 学科の学生が、海外でのインターンシップや学外公的機関の海外派遣事業、国内のイベントでの活動を発表するために、毎年 1 月に GC 学科で行われている。学生たちは、大学のプログラム（海外語学研修、ショート・長期留学）以外のプログラムや事業に応募して、さらなる活動の場を広げ、貴重な経験を積んでいる。

ここ数年、学科のカリキュラムの柱である四言語、日本語教育、協働研究セミナーで学んだ総合力を活かして、国内外で多文化共生社会に繋がる取り組みをする学生が増えている。また、発表者の体験を聞き、それを共有することが、GC 学科全体に向上心をもたらしている。聴衆の中には、「新しいことに挑戦することは今しかできない」、「さまざまな国へ積極的に行って全く違う文化に直接触れることの大切さを改めて感じた」と、こうした活動に自分もチャレンジしたいとコメントしている学生がいた。報告会の実施は、グローバルな視野を培う好機となっている。

【当日の報告等】

（ ）内は学年

1	インターンシップ（日本語指導）－ベトナム ハノイ（2019/3～4）	岡田彩香(3)、安達颯斗(3)武藤 星奈海(3)、川島由愛(3)
2	JENESYS2018「大学生訪韓団」－韓国 ソウル市（2019/3/19～28）	木村楓野(2)
3	令和元年度「静岡市大学生訪韓研修」－韓国 水原市（2019/8/28～2019/9/4）	野崎杏佳(2)、小池茉衣(1)
4	やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu2019」 ボランティア活動報告 焼津市（2019/6～2019/12）	伊川亜祐菜(2)、佐々木なな子 (2)、寺田純香(2)、西川莞人(2)、 望月里緒菜(2)、植田貴久(1)、 大石健太郎(1)、杉本楓(1)、鈴 木悠人(1)、村田圭花(1)
5	まつり I N ハワイ 2019－米国 ハワイ（2019/6/6～2019/6/11）	久門千夏(2)、望月里緒菜(2)、 守屋祐里(2)、青島朋輝(2)

6	2020 年度まつり IN ハワイについて	近畿日本ツーリスト 静岡支店 大久保功氏
7	静岡・水原学生フォーラム (2020/2/16 ~ 19) について	静岡市国際交流協会 多々良真衣氏

ベトナム日本語ボランティアを経て

17122068 武藤 星奈海

私は 2 月 11 日から 3 月 1 日の 19 日間、ベトナムハノイにある日本語学校の Hizashi で、学生たちに日本語を指導するボランティアに参加した。

この活動は昨年から行われているもので、所属している多文化交流サークルで募集しており初海外、初ボランティアとしていい経験になるだろうと考え参加した。これを通して様々な面で刺激を受け学んだことが 2 つある。

1 つ目は七転八起である。私は大学一年次から日本語教育要請課程を履修しており今まで学んだ知識を現地で活かそうと思った。

Hizashi では 18 歳 ~ 25 歳の 1 クラス 20 人前後でレベル別にクラス分けがされている。60 分 × 2 コマの授業を日本人学生 2 人で担当した。出発当日までこれまで授業で配布されたプリントや日本語教員の先生に提案された資料などに目を通していた。しかし、日本語でお互いの文化について説明し合うことができるクラスもあれば、ジェスチャーやインターネットの画像検索を利用しながらゆっくり進めていくクラスもあり臨機応変に対応する必要があり現地では思うように指導できなかった。ひょっとしたら“指導員”という立場にこだわり過ぎていたのかもしれない。学生と歳が近いこともあり考え方を改めた。

そこで、今年の 4 月から静岡の専門学校に通う学生が全体の 5 分の 1 程居たこともあり、静岡の魅力や電車の乗り方、マナー、接客方法、ファストファッションなどが知りたいことをピックアップして私たちにしかできない授業を行った。当初考えていた授業プランを急速変更するのに戸惑う部分や言語の壁を感じる苦労もあったが、日々模索した分大きな反応があったときのやりがいは想像以上にあった。

2 つ目は一歩踏み出す勇気である。約 3 週間学生たちと交流する中で驚かされ

V. 7. 上記 5 言語以外の言語圏

たことがいくつかあった。中でも印象的なのは歓迎会で学生たちが声を合わせて某ケータイショップの CM でお馴染みの桐谷健太の「海の声」を披露してくれたことだ。日本でも流行した曲が海を渡り 1 つのコミュニケーションツールとして機能し一気に親近感が湧いた。

ベトナム人は陽気な人が多く夜の寮ではカラオケ大会がほぼ毎晩開催されていてとても賑やかだった。一方で人見知りの学生や勤勉な学生もいた。個々の性格は違えど今回の交流を通してベトナム人はとても親切であり暖かく人懐っこい印象を受けた。

今回思い切ってこのボランティアに参加していなかったら初の海外経験はこんなに濃いものにはならなかっただろう。私は交流を終えて帰国すると日本の外国人労働についてのニュースに自然と耳を傾けるようになった。海外に行くと視野が広がるとはこういう事なんだろうと実感した。以前の私は頭の中で考えることはできてもなかなか行動に移せなかった。今回のボランティアは私に視野を広げる切り口となった。多角的な見方ができる視点を持ち、グローバルコミュニケーション学科の名に適した人材になりたい。



VI 卒業生

卒業生

卒業生の声を聞く

若松 大祐

外国語学部言語文化研究会は、機関誌『とこはことのは』を発行している。目的は、外国語学部に所属する教職員と学生が、1年間の活動を振り返り、考えていることや感じていることを自由に披露するところにある。実は卒業生も構成員に含まれているのに、これまで卒業生が機関誌に登場することはなかった。そこで、今年度から卒業生の声を収録する。

近いうちに、『とこはことのは』の全文を web 公開し、また、『Albion』と『Retama』の歴年の総目次を公開できるように計画している。教職員や在学生のみならず、卒業生や高校生、さらには常葉大学外国語学部に関心を持つ人々に向けて、『とこはことのは』をいっそう開いていきたい。

【年表】機関誌『とこはことのは』の沿革

1988 年 3 月	『Albion』（常葉学園大学英語・英文学会）を創刊する。外国語学部英米語学科の機関誌である。
1985 年 3 月	『Retama』（常葉学園大学イスパノ・アメリカ文化研究会）を創刊する。外国語学部スペイン語学科の機関誌である。
2013 年 3 月	『Albion』26 号が『Retama』を吸収合併し、外国語学部全体の機関紙となる。
2017 年 3 月	『Albion』が 29 号で ISSN（International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号）を取得する。ISSN: 2432-8111
2018 年 3 月	30 号から改名して、『とこはことのは』になる。
2019 年 3 月	外国語学部言語文化研究会の事業内容を整理し、規約を策定する。これに伴い、31 号から目次を刷新する。また、投稿方法が指名制から志願制へ変わる。
2020 年 3 月	32 号から卒業生に投稿を募る。

一步踏み出す

2017 年 3 月卒 渡邊 美路

大学卒業時に掲げた目標が二つある。一つは、年に一度海外旅行に行くこと。もう一つは、生活の拠点を一度海外に移すことである。

年に一度海外旅行に行くという目標は、今のところ順調に達成できている。そして、もう一つの目標である生活の拠点を一度海外に移すという目標は、実現可能なところまできた。

今、私は静岡県にある日本語学校で日本語教師として働いている。高校生の時からの夢である日本語教師という仕事に就けたことは、とても嬉しく、大変なこともあるものの、充実した毎日を送っている。しかし、大学を卒業してからのこの三年間、常に外国への興味は尽きず、また大学時代に学んだ中国語への学習意欲も向上するばかりであった。目標に掲げただけではなく、気持ちも確実に日本の外へと向いているのである。

だから、一年前に、三年間きちんと働いて退職するということを決めた。現在勤めている学校を辞めることに未練が全くないわけではない。だが、それ以上に二十五歳という年齢の今、外国で仕事をすることは自分自身にとって大きな財産になると思えた。多くの方にご協力いただいたこともあり、中国河北省にある大学への就職が決まりそうだ。今後は査証申請などの渡航準備をしていく予定である。

この文章を書いている今の気持ちを率直に言うと、不安の一言に尽きる。もう本当に不安しかない。でも、諦められなかった。だから、どんなに不安でも、怖くても、私は中国に行く。進学でも、就職でも新しいことを始めるときは、誰しもが不安な気持ちを抱えていると思う。その気持ちを抱えながら踏み出す一步は、将来自分が踏み出す新たな一步の支えになることを信じて、いろいろなことに挑戦していく人生にしたい。

「はじめて」と駆け抜けた大学時代

2018年3月卒 齋藤 楓佳

今、大学時代を振り返り思うことは、自分に費やすことができる時間が有り余っていたということ。やっておけばよかったと思うこともあります。常葉で過ごした4年間に後悔はありません。なぜなら、大学時代の私は、何でもやってみなければ分からないという気持ちで全力だったからです。そして、個性溢れる先生方、友人との出会いが、私を支え成長させてくれました。

6年前、夢も無い私は“「はじめて」を沢山経験しよう”これだけを目標とし、入学しました。様々な「はじめて」の中で、私の大学時代を濃いものにした中国語と出会い、そこからは怒涛の「はじめて」ラッシュが打ち寄せたのです。もっと計画的に時間を使っていたら、ここで魅力的なエッセイが書けていたかもしれません。そうは言っても、大学時代の私は目の前のことに全力でした。

「はじめて」は心が躍り、新鮮で楽しいものです。しかし、新しいことに挑戦するとき、不安や失敗も同様に抱えなければなりません。私が「はじめて」を全力で経験できたのは、背中を押してくれた家族、サポートして温かく見守ってくださった先生方、アドバイスや刺激をくれた友人のおかげです。全力で駆け抜けた大学時代は、今の自分へ自信を与え、「はじめて」に挑戦する楽しさを教えてくれました。

編集後記～～編集子からのひとこと～～

ひび過ごしていて、なかなか行うことがない編集作業という貴重な体験をしました。皆さんの作品を読んで、その時々の光景が思い出され、私自身も常葉大学の魅力を今まで以上に感じています。『とこはことのは』が読んでくださった皆さんにとっての心の 1 冊になれば幸いです。

(村田優花)

とこは大学に入学し、1 年が経ちました。『とこはことのは』の編集をすることにより、私がまだ知らなかった常葉大学を知ることができました。『とこはことのは』を読めば、常葉大学外国語学部を深く知ることができます。先生や学生の気持ちのこもった文章を、私自身も気持ちをこめて読み、編集しました。『とこはことのは』の編集に携われてよかったです。

(辻村希実)

このたび、『とこはことのは』の編集作業を通じ、先生だけでなく、同じ学部で共に学ぶ学生の見えない努力や熱い気持ちを知ることができました。『とこはことのは』を読むことで、外国語学部の先生や学生の努力が 1 人でも多くの人に伝わってほしいと願います。

(永島綾乃)

とても疲れた、というのが率直な感想だ。『とこはことのは』の編集は、思っていたよりも多大な時間と労力を費やした。しかし、誤字や脱字を探していると、自然と文章に引き込まれて読み入ってしまい、一冊の小説を読み切ったような気持ちになった。どれも素敵な作品ばかりで、先生や学生のみなさんの貴重な経験や外国語学習への熱意が伝わってくる。私自身には留学経験がないものの、生の声を聞くことで外国語を使った生活に興味を持ち、意欲が高まった。編集作業は有意義な時間だったといえる。

(中西希天)

かん謝を込めて、『とこはことのは』第 33 号をお届けいたします。『アルビオン』から『とこはことのは』へと、編集担当 6 年目となりますが、外国語学部の先生方、学生さんからの投稿を読ませていただき、編集の作業を学生たちと一緒に行うのは、大変勉強になると同時に大変楽しい時間です。外国語学部の 1 年の歩み

編集後記

をまとめた『とこはことのは』には、学生たちの活動の内容、それに対する心構えや熱い思いがたくさん詰まっています。春の一日、ゆっくりと時間をとって読んでいただけると嬉しく思います。

(幸田明子)

ん～、やはり原稿を誰よりも先に読めるのが編集委員の特権！学生たちの様々な活躍ぶりが手に取るようにわかり、「頑張っている学生が多いなあ」と感嘆。学外の、一人でも多くの人の目に触れますように。

(清ルミ)

しかしながら、本来、『とこはことのは』第33号は、記念号というふうに銘打つはずだった。折句で小細工したので、何を記念するのかを、読者にはぜひ読み解いていただきたい。ところで、庚子の年の春節に前後して、武漢肺炎が世界的な課題となり、中国という地域の独自性を浮き彫りにした。これからどのように生きていくべきか。疫病が一人一人の論理学を試す。我々が生き抜く術は、『とこはことのは』に潜んでいるかもしれない。そんな雑誌にしたいものだ。

(若松大祐)

やはり、ひとこと言わせてください。このように言うために、私も編集後記に書くこととなりました。『とこはことのは』の編集は大変な仕事であるものの、完成した時の喜びはひとしおです。このたび卒業する学生の皆様、ぜひとも「ひかり輝け」という言葉のように、充実した人生を歩んでください。外国語学部の1年間の集大成とも言える『とこはことのは』の作成に携わることができ、うれしく存じます。最後に、一言先生の長年にわたる勤務に、改めて感謝申し上げます。

(篠原印刷所 篠原剛)



2月12日（水）午後に『とこはことのは』33号の編集作業を行った。

とこはことのは

第 33 号

2020 年 3 月 10 日

発 行：常葉大学 外国語学部 言語文化研究会

代 表：戸田裕司

編集委員：若松大祐（委員長）、幸田明子、清ルミ

連 絡 先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号

常葉大学外国語学部『とこはことのは』編集委員会

TEL (054) 297-6100 [代表], FAX (054) 297-6101 [代表]

ISSN: 2432-8111

印刷製本 株式会社 篠原印刷所

〒 422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 - 5

TEL (054) 286-5141

旧 題

Albion



ドーヴァーの白壁

題字は諏訪卓三（元学長）による。扉絵の作者は不明。